遊戯王　カオス

sasami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　カオス

【Ｎコード】
Ｎ４０４７Ｓ

【作者名】
ｓａｓａｍｉ

【あらすじ】
Ｄホイールで走っている最中に神様とか名乗っている奴が現れた。とりあえず、言われたとおりにデュエルアカデミアに通うことにした。
主人公のデッキはオリカばかりです。若干チート気味です。
（リアルファイトは多分あります。）作者は文才が微塵もありません。

とくにないよ。（前書き）

ダメ作者が描いた駄文ですが、どうか温かい目で見守ってください。

とくにないよ。

とりあえず、今俺はDホイールで走っている。
どこを走っているかって?細かいことは気にするな。
とりあえず自己紹介を・・・・ん?
キィィィッ!
「ど~も~、私一応神様やっているサロッゴと言います。はじめまして、紫藤時雨くん。」
・・・そう。俺の名前は紫藤時雨。なんで知らない奴が俺の名前を知っている?神様とか言っているがとりあえず気にしないでおこう。
「とりあえず話を『じゃあなー。』ちょっと待てーーー!!!!」
「なんだよ・・」
「君、人が話をしようとしているときになんでどっか行こうとするんだ・・・。」
「知らない奴と話すことはない。」
「ちゃんと聞いてよ、すぐ終わるから・・・」
「はいはい、じゃあ聞きますよ。」
「じゃあ言うね。君にはデュエルアカデミアに入学してもらう。」
「理由は?」
「ないよ。」
「はっ?」
「だって君さ、友達いなくない?友達作ったほうが多分いいと思うよ~。」
「初対面の人物に向かって失礼だな。しかも、それなら普通の学校でもいいだろ。」
「試験内容が筆記とデュエルだけだから楽だと思うし。」
「・・・まあ、いいか。」
「本当!?」
「前からデュエルアカデミアには興味があったし。」

「じゃあ頑張ってね～。」
「ああ。」
ポン！
「・・・消えた。本当に神様だったのか・・・ま、いっか。」

とくにないよ。（後書き）

ダメ出しなどもお願いいたします。

入試（前書き）

タイトルに「カオス」という風に付けているのは、内容がカオスになりそうだからです。すみません。あとチートになりそうなのは、多分切り札だと思いますが、しばらく出せそうにありません。ごめんなさい。

入試

今、試験デュエルの会場にいる。筆記はどうしたかって？余裕だったよ。受験番号は４番。
まあ、次はおれの番なので。
「次！４番！」
「はい」
まあ、大丈夫でしょ。
「「デュエル！！」」
「俺のターン。モンスターをセット。さらに手札をすべてセットしてターンエンド。」
「私のターン！手札からハリケーンを発動！」
「カウンター罠、魔宮の賄賂、発動。ハリケーンを無効にし破壊。あなたはドローしてください。
そして永続罠、便乗を3枚発動。あなたがドローフェイズ以外でドローした時、俺はデッキから2枚ドローします。」
「ならゴブリン突撃部隊を召喚！」
ゴブリン突撃部隊　ＡＴＫ２３００
「さらにカードを二枚伏せてバトル！ゴブリン突撃部隊でモンスターに攻撃！」
「メタモルポッドの効果発動。お互いに手札を全て捨て、手札が五枚になるようにドローする。」
「くっ！」
「そして便乗の効果を発動。俺はさらに６枚ドローします。」
「ゴブリン突撃部隊はバトルフェイズ終了時に守備表示になる。私は手札から魔法石の採掘を発動！手札を2枚捨て墓地のハリケーンを手札に加える！そしてハリケーンを発動！」
「カウンター罠、リターン・カウンターを発動。相手はカードを１枚ドローして、自分は墓地のカウンター罠の効果を発動します。あ

なたがドローしたことにより便乗の効果で６枚ドロー。リターン・カウンターの効果で墓地の魔宮の賄賂の効果を発動。ハリケーンを無効にし破壊。そしてあなたがドローしたことにより、便乗の効果で６枚ドロー。」

「手札が２３枚!?くそっ!カードを二枚伏せてターンエンド!」

「俺のターン。」

このターンで終わらせよう。

「罠発動!最終突撃命令!フィールドのモンスターを全て攻撃表示にする!」

「無駄ですよ。手札からハリケーンを発動。フィールドの魔法、罠カードを全て持ち主の手札に戻す。」

フィールドにはゴブリン突撃部隊しかいなくなった。

「さらにこのモンスターは手札が２５枚以上ある場合特殊召喚することができる。チューナーモンスター、オメガ・コアを特殊召喚。」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「なんだそのモンスターは?」

「オメガ・コアの効果発動。このカードの効果で特殊召喚した時、手札またはデッキからレベル１０のモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効となり、攻撃力、守備力は０になる。絶対服従魔人を特殊召喚。」

絶対服従魔人　ＡＴＫ３５００→０

「レベル１０の絶対服従魔人に、レベル２のオメガ・コアをチューニング!

シンクロ召喚!現れろ!オメガ・ドラゴン!」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「なんだそのモンスターは?」

「さらに俺はライトニングボルテックスを発動!手札を１枚捨てあなたの表側表示モンスターを全て破壊します。」

「モンスターが!」

「オメガ・ドラゴンで止め。」

「うぉおおおおおおおおっ！！」
試験官　ＬＰ４０００→０
「ありがとうございました。」
これなら合格できるだろ…
デュエルが終わった後、他の受験生のデュエルを見ていたが、やはりすごかったのは、
１２６番が、ハイトマン教頭に勝っていたことだ。見たこともないカードで。
「強いな、あいつ・・・」
その後、俺は無事入学した。

入試（後書き）

通りすがりのデュエリストさんすみません。勝手にくっつけさせてもらいました。
いづれは会わせてみたいな的な感じですみません。駄文ですみませんでした。
次回も頑張ります。

デュエルアカデミア（前書き）

どうも、3話目です。
始まる前に「すみません」と言うのはどうかと思ったので、
あまり言わないことにしました。ｍ（＿＿）ｍ

デュエルアカデミア

デュエルアカデミアの入学式の日、入学式が終わった後に携帯を見てみると、
「入学おめでと～。学園生活頑張ってね～～～。」
と、前に出会った神様とか言ってたやつからメールが来た。（名前は忘れた。）
「・・・なんでアドレス知ってんだ？」
まあ、そんなこともあったが、ってか神様って携帯とか持ってんのか？
入学式は何ともなかったが、あの１２６番の名前が未だにわからない。
しかし、いづれわかるだろうと思うからあまり探らないことにした。
それから数日後、授業でデュエルをすることになった。
デュエルアカデミアだから当然なんだけどな。
「「デュエル！！」」
「俺のターン。」
あれ？この手札入試の時と同じじゃないか。まあ、いいか。
「モンスターをセット。カードを五枚セットしてターンエンド。」
「俺のターン！俺はカードを一枚伏せてダブル・サイクロンを発動！自分と相手の魔法・罠を１枚ずつ破壊する！」
「カウンター罠発動。魔宮の賄賂。ダブル・サイクロンの発動を無効にし破壊。そして相手は１枚ドローする。そして永続罠、便乗を３枚発動。」
「なら手札からサイクロンを発動！フィールド上の魔法・罠を破壊する！俺が破壊するのは、俺の伏せカード！黄金の邪神像は破壊された時、邪神トークンを特殊召喚する。」
リリースするつもりか？
「邪神トークンをリリースして、エメラルドドラゴンをアドバンス

召喚！さらに手札からニ重召喚を発動！」
エメラルドドラゴン　ＡＴＫ２４００
何を出すつもりだ？
「エメラルドドラゴンをリリースして、偉大魔獣ガーゼットをアドバンス召喚！ガーゼットの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の倍になる！」
偉大魔獣ガーゼット　ＡＴＫ０→４８００
「バトル！ガーゼットでモンスターを攻撃！！」
「メタモルポッドの効果発動。お互いに手札を全て捨て、デッキから５枚ドローする。
そして便乗の効果を発動。デッキから６枚ドローする。」
「俺は手札から２枚目のサイクロンを発動！」
「カウンター罠、リターン・カウンターを発動。相手は１枚ドローし、俺は墓地のカウンター罠の効果を発動する。便乗の効果で６枚ドロー。さらにリターン・カウンターの効果で墓地の魔宮の賄賂の効果を発動。サイクロンを無効にし破壊。相手は１枚ドローして便乗の効果で俺は６枚ドロー。」
「くそっ！俺はカードを３枚伏せてターンエンド。」
「俺のターン。」
手札にハリケーンもライトニングボルテックスもない・・・だが。
「手札からマジック・プランターを発動。便乗を墓地へ送って２枚ドロー。
俺の手札が２５枚以上ある時、オメガ・コアを特殊召喚できる。オメガ・コアを特殊召喚。」
オメガ・コア　ＡＴＫ０
「オメガ・コアの効果発動。このカードの効果で特殊召喚に成功した時、手札またはデッキからレベル１０のモンスターを特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり攻撃力・守備力は０になる。絶対服従魔人を特殊召喚。」
絶対服従魔人　ＡＴＫ３５００→０

「レベル１０の絶対服従魔人に、レベル２のオメガ・コアをチューニング！
シンクロ召喚！現れろ！オメガ・ドラゴン！」
オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００
「さらにこのカードはシンクロ召喚に成功した時に特殊召喚できる。チューナーモンスター、アスタリスク・コアを特殊召喚。」
アスタリスク・コア　ＡＴＫ０
「自分フィールド上にアスタリスクと名のついたモンスターが存在する時、このモンスターは特殊召喚ができる。アスタリスク・ソルジャー２体を特殊召喚。」
アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００
「レベル２、チューナーモンスター、アスタリスク・コアにレベル３アスタリスク・ソルジャー２体をチューニング！現れろ！アスタリスク・ドラゴン！」
アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００
「バトル！オメガ・ドラゴンでガーゼットに攻撃！」
「罠発動！聖なるバリアーミラーフォース！相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」
「アスタリスク・ドラゴンがフィールドに存在する時、お互いに破壊する効果を発動できない！」
「何ッ！？うぉっ！！」
アカデミア生徒　ＬＰ３８００→８００
「アスタリスク・ドラゴンでダイレクトアタック！！」
「くっ！」
アカデミア生徒　ＬＰ８００→３８００
「さらに俺は魔法カード、トラップボンバーを発動！自分フィールドの永続罠を全て墓地に送り、
１枚につき４００ポイントのダメージを与える！俺のフィールドにある永続罠は２枚！よって、
８００ポイントのダメージを与える！」

「うぉぉぉぉっ！！」
アカデミア生徒　ＬＰ８００→０

無事実技は終了っと。
「そんなとこで何をしてるんだ？」
「ん？」
誰だこいつ？
「俺、川田俊！よろしくな！」
「あ、ああ・・・」
その後、俊と友達になった。

デュエルアカデミア（後書き）

いかがでしたでしょうか？
駄文ですが頑張って続けていきます。

主人公設定（前書き）

どうも。ｓａｓａｍｉです。
感想いただけてうれしかったです！！
さて、今回は主人公の設定を紹介させていただきます。

主人公設定

名前　紫藤　時雨

年齢　１５歳

身長　１７５ｃｍ

容姿　少し長めの黒髪

性格　冷静だが、感情表現が下手

この小説の主人公。中学時代は、口数が少なかったためか、友達がいなかった。技術面は優れているほうで、Ｄホイールは自作。Ｄホイールで走っている最中に、サロッゴにアカデミアに行くよう言われて、
入学した。状況を把握するのが早い。

使用デッキ　オメガ主体デッキ・？

Ｄホイール　白と黒と赤のデザインになっている。風の影響をあまり受けないよう設計されている。

このようなものでどうでしょうか。
次回はオリカの効果などをやります。

主人公設定（後書き）

「ところで作者。」
どうしたんだい時雨くん。
「俺の名前ってどうやって決めたんだ？」
ごめん。1話目描いてる最中に適当に決めた。
「・・・」
他のキャラの名前も…。
「「「・・・・・。」」」
というわけで次回もよろしくお願いします。
「いやダメだろ！？」

オリカ設定（前書き）

オリカの設定のほうも行きます。

オリカ設定

リターン・カウンター
カウンター罠
自分の墓地にカウンター罠が存在し、相手が魔法・罠・モンスター効果を発動してきた時、発動できる。相手はカードを一枚ドローする。自分は墓地のカウンター罠1枚を選択し、その効果を発動する。

オメガ・コア
光属性　機械族　チューナーモンスター　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分の手札が２５枚以上ある場合、このモンスターは特殊召喚できる。
この効果で特殊召喚に成功した時、手札またはデッキから、レベル１０のモンスターを特殊召喚できる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力・守備力は０になる。

イメージ　白い球体にいろいろな装飾と真中にΩというマークが付いている。

オメガ・ドラゴン
光属性　ドラゴン族　シンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ１０００
オメガ・コア＋レベル１０モンスター
このモンスターの攻撃力は、バトルフェイズが終了する時、１０００ポイント下がる。
このモンスターの攻撃力を１０００ポイント下げることで、そのターンのバトルフェイズ終了時まで、
相手は罠カードを発動できない。

イメージ　デュエマのボルメテウスを黒と赤と白のメタリックにした感じ。

アスタリスク・コア
光属性　機械族　チューナーモンスター　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
シンクロ召喚に成功した時、このカードを特殊召喚できる。

イメージ　水色の球体にいろいろな装飾と真中に＊のマークが付いている。

アスタリスク・ソルジャー
水属性　戦士族　効果モンスター　レベル３　ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ１０００
自分フィールド上に「アスタリスク」と名のついたモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる。

イメージ　鎧の真ん中と肩に＊のマークが付いている。

アスタリスク・ドラゴン
光属性　ドラゴン族　シンクロ・効果　レベル８　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ２８００
アスタリスク・コア＋チューナー以外のモンスター2体以上
このカードがフィールド上に存在する間、すべてのプレイヤーは「カードを破壊する効果」を発動できない。

イメージ　青と白と水色の龍

トラップボンバー

通常魔法
自分フィールド上の永続罠を全て墓地に送り、１枚につき４００ポイントのダメージを与える。

ちなみに、チート効果になりそうな切り札は、オメガ・ドラゴンの進化形みたいなものです。

オリカ設定（後書き）

いかがでしたでしょうか？
まだまだオリカはたくさん出すつもりなのでお楽しみに！

友人の実力（前書き）

今回主人公のデュエルはありません。
川田俊くんのデュエルですが、すぐに終わってしまいそうです。
あと、葦切さん、勝手にキャラの名前を出させていただきます。
申し訳ございません。

友人の実力

この学年には有名人がたくさんいるらしい。

エンジェルパーミッションの真川紅刃、氷結界を使う波星月沙、入学試験でハイトマン教頭を倒した１２６番の海条遊騎、「カイザー」と呼ばれている鈴鹿智則、

そしてもう一人は・・・

１位　竹内澪

「よ～！紫藤、お前テストどうだったかーーー！」

「・・・」

４位　紫藤時雨

「４位かよ！！」

「そういうお前はどうなんだよ・・」

え

８位　川田俊

「８位だぜ！」

「そこまでテンションあげなくてもいいだろう・・」

「ところでお前のカード、どこで手に入れたんだ？オメガってのもアスタリスクってのも聞いたことないけど・・・」

「言っても信じはしないだろ…」

「勝手に決め付けんなよ！信じるか信じないかは聞かせてくれてからでもいいだろ？」

「じゃあ言うが・・・デュエルモンスターズの世界で手に入れた。」

「はっ！？」

「俺がまだ小さい頃に森に入ったらデュエルモンスターズの世界に迷い込んでてな、進んで行ったらこのカードたちが置いてあった。それでそのあと、カードの精霊が見えたんだ。オメガ・ドラゴンのな。
それ以来カードの精霊が見えるようになってな。まあこいつしか見たことはないんだが・・・
なっ、信じられないだろ？」

「いや！面白いから信じる！！」

「面白かったらなんでも信じるのかよ・・・」

「友達まで信じられなかったらどうするんだよ？」

「お前みたいなやつは初めてだ…」

「ところで、そいつっていまでてこられるのか？」

「いや無理だ…」

「どうしてだ？」

「でかすぎるんだよ・・・」

「どんぐらい？」

「この前の不動遊星とジャック・アトラスのデュエルで出てきたドラゴンいるだろ？あれと同じぐらいだ・」

「でっか！！」

「まあ、こんな話を信じてくれたのはお前が初めてだ。ありがとう。」

「どういたしまして！」

それから数日後・・・

実技で俊がデュエルすることになった。

「よーし！俺の番！！！」

対戦相手は、この前のテストで9位だった牧原ってやつ。

「ふん。この前のテストでたまたま8位になったからっていい気になるなよ！」

「たまたま8位になったのは認めるけどいい気にはなってないよ。」

「「デュエル！！」」

俊の先攻でデュエルが始まる。

「俺のターン！・・・ごめん。このデュエル俺の勝ちだ。」

はあ？

「何言ってやがる？このターンで決着がつけられるわけねえだろ！！」

「手札から悪夢の拷問部屋を発動！！さらに火炎地獄を発動！！俺は５００ダメージ、お前は１０００ダメージを受ける！」

牧原　ＬＰ４０００→３０００

俊　ＬＰ４０００→３５００

「くっ！」

「さらに悪夢の拷問部屋の効果で３００ポイントのダメージを受けてもらう！」

牧原　ＬＰ３０００→２７００

「うぉっ！？」

さらにカードを2枚伏せてターンエンド！！」

「はっ！あんなこと言ってたのにもう終わりか！俺のターン！」

「トラップ発動！仕込みマシンガン！！相手のフィールドと手札の

合計×２００ポイントのダメージを与える！さらにもう1枚仕込みマシンガンを発動！！計２４００のダメージを受けてもらう！！」

「うわぁぁっ！！」

牧原　ＬＰ２７００→３００

「そして悪夢の拷問部屋の効果で終わり！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

牧原　ＬＰ３００→０

俊のデッキはバーンだった。しかも相手に何もさせないで・・・

「なんでバーンデッキなんだ？」

「だって、バーンって響がなんかいいじゃん！！」

「・・・一つ聞いていいか？」

「どーぞ～。」

「お前テストの時、手抜いてたか？」

「手は抜いてないけど、途中で寝てた！！」

「・・・やっぱお前すげえや。」

新たな出会い（前書き）

今回は新キャラを出します。
書いてる最中にトラブルがたくさん起きて更新が遅れました。

新たな出会い

前に言った海条遊騎が、この前のテストで1位だった竹内澪に負けたらしい。
あんな奴を勝てるやつがいたなんて・・・強すぎだろ・・・

「おーい、紫藤ーーー！！！」

「俊か、どうした。」

「いや～さ～、お前に会いたいって奴がいてさー。」

「俺に？」

「そいつにお前のこと強いって言ったら、会ってみたいって言ってさー。」

「・・・まあ、いいか。」

「よしいこうぜー！」

「どうもはじめまして、吉野由紀と言います。」

「こちらこそ、紫藤時雨だ。」

「入試の時、試験官を瞬殺してましたよね？」

「おぼえてるのか？」

「今思い出しました。なにせ、あの後古代の機械巨人が3体同時に倒されましたからね。」

「確かにあれはすごかった。」

「まあそんなことよりデュエルしません？」

「そんなことって・・・まあいいか。」

「「デュエル！！」」

「私のターン！モンスターをセットしてカードを二枚セット。ターンエンド。」

先攻は取られたか。

「俺のターン。オメガ・コアを召喚。」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「普通に召喚？」

「さらに俺は魔法カード、１０オーダーを発動。コイントスを１０回行い、６回以上表が出れば、デッキからレベル１０のモンスターを特殊召喚できる。」

「６回！？無理でしょ？」

「コイントスってのは、力の加え加減で表か裏か操作できるだろう。

１回目、表だ。」

「できるのか？」

「２回目、表。３回目、表。４回目、表。５回目、表。６回目、表。これで条件はそろったが、ここからは、俺の記録に挑戦させてもらうぞ。」

「記録？」

「今までの記録は９回だ。７回目、表。８回目、表。９回目、表。１０回目…表だ。」

「１０回連続で表！？」

「効果により絶対服従魔人を特殊召喚。」

絶対服従魔人　ＡＴＫ３５００

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０の絶対服従魔人をチューニング！！

シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「オメガ・ドラゴンの効果発動。攻撃力を１０００ポイント下げて、このターン相手は罠を発動できない。」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「そして魔法カード、罠収集を発動。デッキから罠カードを3枚まで手札に加える。俺は便乗を3枚手札に加える。カードを4枚セットしてバトル。オメガドラゴンで、モンスターを攻撃。」

「キラー・トマトの効果発動。デッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスターを特殊召喚する。
私はクリッターを特殊召喚。」

クリッター　ATK1000

「バトルフェイズ終了時、オメガ・ドラゴンの攻撃力は1000ポイント下がる。ターンエンド。」

オメガ・ドラゴン　4000→3000

「私のターン。デルタフライを召喚。」

デルタフライ　ATK1500

「レベル3のデルタフライに、レベル3のクリッターをチューニング！！
シンクロ召喚！大地の騎士ガイアナイト！」

大地の騎士ガイアナイト　ATK2600

「クリッターの効果でキラー・トマトを手札に加える。そして地割れを発動。オメガ・ドラゴンを破壊！」

「カウンター罠、魔宮の賄賂発動。地割れを無効にして、相手は1枚ドローする。

そして便乗を３枚発動。」

「私はデーモンの斧をガイアナイトに装備。そして伏せカードオープン。血の代償。５００ライフポイントを払ってモンスターをセット。そしてバトル！ガイアナイトでオメガ・ドラゴンを攻撃！」

由紀　ＬＰ４０００→３５００

大地の騎士ガイアナイト　ＡＴＫ２６００→３６００

「くっ！」

時雨　ＬＰ４０００→３６００

「カードを２枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。死者蘇生を発動。オメガ・ドラゴンを特殊召喚。」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「特別にオメガ・ドラゴンの次の姿を見せてやる。オメガ・ドラゴンの効果発動。攻撃力を１０００ポイント下げて、このターン相手は罠を発動できない。そして天よりの宝札を発動。お互いに手札が６枚になるようドローする。そして便乗の効果発動。さらに６枚ドローする。」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「一気に手札が１２枚！？」

「バニシング・コアを召喚。」

バニシング・コア　ＡＴＫ０

「新しいコア？」

「そしてフィールド魔法、バニシング・ワールドを発動。さらにフィールドに「バニシング」と名のつくモンスターがいる時、このモンスターは特殊召喚できる。バニシング・ギアを特殊召喚。」

バニシング・ギア　ＡＴＫ０

「バニシング・コアの効果発動。１ターンに一度、相手の墓地に存在するモンスターを１体除外する。キラー・トマトを除外。さらにバニシング・ワールドの効果発動。相手のモンスターが除外された時、そのモンスターのレベル×１００ポイントのダメージを与える。」

「くぅっ！！」

由紀　ＬＰ３５００→３１００

「レベル２のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・ギアをチューニング！！
シンクロ召喚！！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「シンクロモンスターのチューナー！？」

「バニシング・ドラゴンの効果発動。墓地にいる「バニシング」と名のつくモンスターを任意の数だけ除外して、同じ数だけ相手の墓地に存在するモンスターを除外する。バニシング・ギアとバニシング・コアを除外して、お前の墓地のクリッターとデルタフライを除外する。そしてバニシング・ワールドの効果で、合計６００ポイントのダメージを受けてもらう。」

「きゃあ！！」

由紀　ＬＰ３１００→２５００

「さらにバニシング・ドラゴンのもう一つの効果を発動。自分フィールドに存在する、シンクロモンスターのレベルをこのモンスターと同じにする。オメガ・ドラゴンのレベルを６に変更。レベル６となったオメガ・ドラゴンにレベル６シンクロチューナー、バニシング・ドラゴンをチューニング！！アクセルシンクロ！！殲滅せよ！バニシング・オメガ・ドラゴン！！」

バニシング・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「バトル！！バニシング・オメガ・ドラゴンで、ガイアナイトを攻撃！バニシング・」

「きゃあああ！！」

由紀　ＬＰ２５００→１１００

「バニシング・オメガ・ドラゴンの効果発動！戦闘で破壊したモンスターは除外され、そのモンスターのレベル×１００ポイントのダ

メージを与える。さらにバニシング・ワールドの効果で６００ポイントのダメージを与える。」

「きゃあああああああ！！」

由紀　ＬＰ１１００→０

「俺の勝ちだな。」

「やっぱり強いね。デュエルアカデミアでも強いほうなんじゃない？」

「さすがにそこまではいかないだろ。」

「そう？」

「海条遊騎とか竹内澪とか真川紅刃とか波星月沙とか鈴鹿智則とかいるだろ。」

「その人たちは別格でしょ。」

「確かにな。」

「これからよろしく。」

「こちらこそ。」

「あの～～、俺は？」

「「あっ・・・」」

それから俺と吉野は俊の慰めに1時間費やした。

新たな出会い（後書き）

一応女キャラ登場です。
オメガ・ドラゴンの進化バージョンの1個目登場です。
書き直しで9時間ぐらいかかりました。

オリカ紹介2（前書き）

前回出てきたオリカです。
この時点でチートな気がしてきました。

オリカ紹介2

１０オーダー
魔法カード
コイントスを１０回行い、６回以上表が出た場合、デッキから、レベル１０のモンスターを特殊召喚する。

罠収集
魔法カード
デッキから、罠カードを3枚手札に加える。

バニシング・コア
闇属性　機械族　チューナー・効果　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
１ターンに1度、相手の墓地に存在するモンスターを除外する。

バニシング・ワールド
フィールド魔法
相手のモンスターがゲームから除外された時、相手にそのモンスターのレベル×１００ポイントのダメージを与える。

バニシング・ギア
闇属性　機械族　効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードは、自分フィールドに「バニシング」と名のついたモンスターが存在するとき、特殊召喚できる。

バニシング・ドラゴン
闇属性　ドラゴン族　シンクロ・チューナー・効果　レベル６　ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ０
「バニシング・コア」＋「バニシング」と名のついたモンスター１

体以上
墓地に存在する「バニシング」と名のついたモンスターを任意の数だけ除外する。そのあと、同じ数だけ相手の墓地に存在するモンスターを除外する。１ターンに１度、自分フィールド上のシンクロモンスターのレベルを、このモンスターと同じにする。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をすることができる。

バニシング・オメガ・ドラゴン
闇属性　ドラゴン族　アクセルシンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ０
「バニシング・ドラゴン」＋「オメガ・ドラゴン」
このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターを除外して、そのモンスターのレベル×１００ポイントのダメージを与える。このカードが攻撃対象に選択された時、このカードをゲームから除外することで、そのモンスターの攻撃を無効にする。エンドフェイズ時、この効果で除外されたこのカードを特殊召喚する。

キャラ紹介（前書き）

今度はオリキャラの紹介です。

キャラ紹介

名前　サロッゴ

身長　１９８ｃｍ

容姿　青髪・普通体型

性格　気楽

一応神様。時雨にデュエルアカデミアに行くように言った。（理由はただのおせっかい）
神様の地位としては、真ん中より１つ下ら辺。

名前　川田　俊

年齢　１５歳

身長　１６４ｃｍ

容姿　黒髪

性格　明るく純粋

時雨がアカデミアに入ってから最初にできた友人。優しいが、フルバーンを使う。使っている理由は、
父親に渡してもらったデッキの名前を聞いた時、「バーン」という響きが気に入ったため。テストの順位は８位だったが、テストの間

ほとんど寝ていたため、実力は不明。

使用デッキ　フルバーン

名前　吉野　由紀

年齢　１５歳

身長　１５８ｃｍ

容姿　黒髪ショート

性格　律義

本作品の女キャラ。特に目立った特徴はない。デュエルの実力は強いほう。強い人の話を聞くと、その人とデュエルしたくなる。主人公の入試のデュエルを唯一思い出した人。

使用デッキ　ビートダウンに近い

キャラ紹介（後書き）

由紀の使用デッキのところを適当に書いてしまってすいません。

番外編　談話（前書き）

やっと１０話目です。
今回は、主人公のある挑戦です。
デュエルはありません。

番外編　談話

今は一人で歩いている。とくに理由はない。

歩いてる途中で、海条遊騎たちを見かけた。なぜかヤンキーもどきたちに絡まれていた。

デュエルが始まりそうだったから、少し離れていたところで見ていた。

ヤンキー達が弱かったのか、それとも海条遊騎達が強すぎたのか１キルパレードが行われていた。

途中禁止カードばっか使うやつもいたが、やっぱ負けていた。

そこらへんで移動して俊たちと話をしていた。

「へぇ～～～。いまどきヤンキーなんているんだ。」

「時代遅れじゃないですか？」

「てか、禁止カード使うのはダメだろ。」

「しかも使って負けてるって、その人どんだけ弱いんですか？」

とまあ、ここまでは、ごくよわヤンキー達の話。

「ところで、なんでお前コイントス狙って出せるんだ？」

「あ、それ私も気になってました。」

なぜかここから、俺のコイントスの話になった。

「なんでって言われてもな、単にコイントスの時に力を加減してるだけだが？」

「いや、普通できねえから。」

「ちょっとどこまで狙って出せるかやって見せてくださいよ。」

「分かった。」

というわけでどこまで連続で出せるかやることになった。

～３０分後～

「今何回目だ？」

俺は聞いてみた。

「３２７回目です。」

「ほんとどこまでいくんだろーな。」

～2時間後～

「意外と疲れてくるな・・・今何回目だ?」

「・・・ちょうど1600回です。」

「・・・やりすぎじゃね?」

～2時間後～

「はあ・・・はあ・・・今、何回目だ?」

「日が暮れてきたぞ?」

「これはいきすぎじゃないですか?・・・5622回です。」

「「「・・・・・・。」」」

さすがに時間が遅いので今日はこの辺で終わりになった。

次の日、続きをやったが、その日も終わらずついに20000回を超えた。

その翌日、ついに終わりが来た。その回数は…

「・・・20457回です。」

その時俺の指は、真っ赤に染まっていた。

その後数日間、俺の右手の親指は、包帯を巻かれ、しばらくコイントス禁止と言われた。

番外編　触れてなかったこと（前書き）

今回は主人公が負傷中の為、次話までデュエルはなしで。
一応主人公精霊が見える設定だったのに全く触れてなかったので、
ここで触れようと思います。

番外編　触れてなかったこと

※人語訳です。

「自分、時雨の精霊のオメガ・ドラゴンである。今回は時雨が負傷中であるからして自分ひとりで今回はつなげてゆく。」

「まず、なぜ自分が一切出てこないのか。作中でも時雨が言った通り、でかすぎて出ることができない。寮の中などもっての外。部屋が狭すぎる。サイズを縮小することはできないのか自分でも思っていたが、やはり無理だった。」

「あまり気にしたくはないのだが、ここにきてから、時雨はDホイールに乗っていない。時雨のDホイールのデザインは、自分をモチーフにしている。少しうれしいものだな。」

「話す内容がなくなったから今回はここまでにしておこう。それでは読者の諸君。幸運を祈る。」

精霊界（前書き）

今回、久しぶりに俊がデュエルします。
あと主人公はデュエルモンスターズの世界に行きます。

やっと指の包帯が取れたころに、あの神様ことサニーゴ…じゃなくサロッゴからメールが来た。

「ちょっと寮の前まで来てね～～。」

「・・・で、来たわけだが。」

「いやあ～ねえ～。ちょっとデュエルモンスターズの世界にいってきてね～。」

「唐突だな。理由を聞かせてもらおう。」

「君のデッキってオメガってカードだよね。」

「そうだが・・・」

「向こうの遺跡にオメガのカードがあるってことがわかったから、一応君に伝えたわけ。」

「で、どうやって行くんだ?」

「ぼくがつれてくから。」

「・・・それじゃあ頼むぞ。」

その頃俊は…

「ああ～～～

「とりあえずついたわけだが・・・」

「取りに行ったら？」

「そうするさ。」

「瞬殺してやるよマジで。」

なんかものすごく簡単に勝てそうな気がしてきた・・・

「「デュエル！！」」

「僕のターン！」

あっ、終わった。

「手札から、悪夢の拷問部屋を発動！さらにデス・メテオ発動！１０００ポイントのダメージを与える！悪夢の拷問部屋で３００ポイントのダメージを受けてもらう！」

「うあっち！」

チャラ男　ＬＰ４０００→２７００

「さらにカードを3枚伏せて、ターンエンド！」

「俺っちのターン！」

「罠発動！仕込みマシンガン！３枚発動して悪夢の拷問部屋の効果と合わせて合計４５００ポイントのダメージを与える！」

「ちょっ待てよ、俺っちまだなにもやってねぇーーーーーーーーーーー！！」

チャラ男　ＬＰ２７００→０

「お疲れー。」

「これが新しいオメガのカード・・・７枚のうち、１枚以外何も書かれていない。」

ただ、これだけはわかる。このうち５枚はシンクロだ。

「クロニクル・コア・・・これは効果だけ書かれていない・・・このシンクロモンスターに必要なカードなのか？」

「じゃ～ね～。」

サロッゴは帰って行った・・・なんでメールアドレス知っているのか聞くのを忘れた。

「・・・あなたのデッキに勝てる気がしないわ…」

「そーか～。」

精霊界（後書き）

ついに最終形態に必要なカードを出せました。
クロニクル・コアの効果は多分チートに近いものです。自分で判断ができないので。

闇の決闘（前書き）

今回は、ダークシグナーの部下みたいなやつが出てきます。
オメガ・ドラゴンの進化形態2体目も出ます。

闇の決闘

俺はいつも通りぶらぶら歩いている。

そしたら、変な奴がアカデミアに入ろうとしていた。明らかに不審者だ。

この人眼がやたら黒いし、病気か？

「ちょっとあんた、ここは無断に入っちゃいけないぞ。」

「うるさい。」

「いや、だから無断で入っちゃだめなんだって。あんた明らかに生徒でも教師でもないだろ？」

「ここにいる海条遊騎をとらえに来た。」

この人絶っっっっっっっっっ対不審者だ！！

「あー、とりあえずあんたのこと、通報しとくぞ・・・」

「貴様、邪魔をする気か？」

「いや、そりゃ誘拐予告を堂々と宣言されて通報しない人の方がおかしいだろ。」

「ならばデュエルで勝負だ。」

「話のこじつけ方がおかしいだろ。」

「デュエルディスクを構えろ…」

こっちの話は無視かよ・・・まあいい。

「「デュエル！！」」

「俺のターン。」

とりあえず今の最高の手札だ。

「チューナーモンスター、オメガ・コアを召喚！そして俺は１０オーダーを発動！

・・・全部表だ。デッキから絶対服従魔人を特殊召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０　絶対服従魔人　ＡＴＫ３５００

「全部表だと！？」

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０の絶対服従魔人をチューニング！！

シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「いきなり攻撃力５０００だと！？」

「まだだ！魔法カード、罠収集発動！デッキから便乗を３枚手札に加える！

そして魔法カード、早とちりを発動！このターン、罠カードは伏せ

たターンに発動できる！
便乗を３枚伏せて天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようドローする！
さらに便乗を３枚発動！さらにカードを１枚伏せて、今伏せた強欲な贈り物を発動する！
あんたは２枚ドローし便乗の効果で６枚ドロー！さらにもう１枚強欲な贈り物発動して、
あんたは２枚、俺は６枚ドローする！無限の手札を発動してカードをセット。ターンエンド。」

「私のターン。私は手札からライトニング・ボルテックスを発動！手札を１枚捨て、貴様のモンスターを破壊する！」

「カウンター罠、魔宮の賄賂！ライトニング・ボルテックスの発動を無効にし、あんたは１枚ドローする！俺は便乗の効果で６枚ドロー！」

「くっ・・・ふはははは！いいカードを引いたぞ！死者蘇生を発動！墓地のＤＴカタストローグを特殊召喚する！」

ＤＴ！？何なんだ、あのカードは？

ＤＴカタストローグ　ＡＴＫ０

「さらに私は、デス・フットを召喚！」

デス・フット　ＡＴＫ７００

「レベル３のデス・フットに、レベル８のＤＴカタストローグをダークチューニング！！

闇と闇重なりしとき、冥府の扉は開かれる。光なき世界へ！ダークシンクロ！いでよ、繁殖のグルド！」

繁殖のグルド　ＡＴＫ２４００

「ダークシンクロだと！？」

「ＤＴカタストローグの効果発動！このカードがダークシンクロの素材となり墓地に送られた時、相手フィールドのカードを１枚破壊する！オメガ・ドラゴンを破壊！」

「くっ！」

「グルドでダイレクトアタック！」

「ぐあぁぁぁっ！」

時雨　ＬＰ４０００→１６００

何だ？今体に衝撃が走ったぞ？

「闇のデュエルでのダメージは本物となる。グルドの効果発動！私のモンスターが貴様にダメージを与えた時、パンデミックトークンを特殊召喚する。」

パンデミックトークン　ＡＴＫ２００

「パンデミックトークンでダイレクトアタック！」

「ぐっ！」

時雨　ＬＰ１６００→１４００

「グルドの効果で、２体目のパンデミックトークンを特殊召喚。そしてダイレクトアタック！」

時雨　ＬＰ１４００→１２００

「ぐあっ！」

「３体目のパンデミックトークンを特殊召喚。ダイレクトアタック！」

「がはっ！」

時雨　ＬＰ１２００→１０００

「４体目のパンデミックトークンを特殊召喚。ダイレクトアタック！」

「ぐはっ！」

時雨　ＬＰ１０００→８００

「私はカードを３枚伏せて、ターンエンド。言い忘れていたが、グルドがいる限り、貴様はグルドしか攻撃できない。そしてパンデミックトークンは直接攻撃をすることができる。言っている意味がわかるな？」

くそっ！このターンで決めなきゃ負けってことかよ！

「俺のターン！」

来た！

「俺は死者蘇生を発動！甦れ、オメガ・ドラゴン！」

「そんなカードで何ができる？」

「俺のフィールドにシンクロモンスターがいる時、このモンスターは特殊召喚できる！ステラ・コアを特殊召喚！」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

「オメガ・ドラゴンの効果発動！このモンスターの攻撃力を１０００ポイント下げることで、このターンあんたは罠を発動することはできない！」

「わるあがきを・・・」

「俺は、ステラ・ピースを召喚！」

ステラ・ピース　ＡＴＫ０

「ステラ・ピースの効果発動！デッキからフィールド魔法を手札に加える！そして、フィールド魔法、
ステラ・ギャラクシーを発動！このカードがフィールドにある限り、
「ステラ」と名のつくモンスターがフィールドを離れるたびに、相手は墓地のモンスター１体をデッキの一番下に戻す！」

「そんなカードが何になる！」

「レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ピースをチューニング！！
シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「シンクロチューナーだと！？」

「ステラ・ギャラクシーの効果でお前の墓地のライトニング・ボルテックスと、死者蘇生をデッキの１番下に戻す！そしてステラ・ドラゴンの効果発動！相手のデッキにカードが戻るたびに相手の手札を墓地に送る！」

「くっ！」

「ステラ・ドラゴンのもう１つの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルをこのモンスターと同じにする！」

「まさか！」

「行くぞ！！レベル６になったオメガ・ドラゴンに、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴンをチューニング！！アクセルシンクロ！
照らし出せ、ステラ・オメガ・ドラゴン！」

ステラ・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「そんなモンスターがどうした？」

「ステラ・ギャラクシーの効果で、デス・フットをデッキの一番下に戻す！そして、ステラ・オメガ・ドラゴンの効果発動！相手のデッキにカードが戻るたびに相手フィールドの魔法・罠ゾーンのカードを一枚墓地に送る！」

「だからどうした？」

「ステラ・オメガ・ドラゴンで、グルドに攻撃！」

「ぐうぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！・・・ははははははははは、これで貴様の敗北が決定したぁ！」

「まだだ！」

「何を言っている？お前のモンスターの攻撃は終わった！」

「ステラ・オメガ・ドラゴンはモンスターを破壊した時、その戦闘ダメージを０にすることで、続けて攻撃することができる！」

「なんだとぉっ！」

「ステラ・オメガ・ドラゴンでパンデミックトークンに攻撃！１発目！」

「ぐっ！」

「２発目！」

「ぐあ！」

「3発目！」

「ぐふっ！」

「これでおわりだ！4発目ぇぇぇぇぇ！」

「ぐうぁあああああああああああ！！」

不審者　LP4000→0

「さあ、通報させてもらうぞ。」

「ふふふ・・・。」

「何笑ってんだよ？」

「今回は邪魔されたが、次はこうはいかんぞ…。」

「あ、おい！逃げんなよ！」

・・・もういねえ。

なんで海条遊騎を狙ってたんだあいつ。

あの不審者、次見つけたら必ず通報してやる！

・・・とりあえず、疲れたから部屋に戻ろう。

闇の決闘（後書き）

ダークシグナーみたいな人出してみました。

ステラ・オメガ・ドラゴン、効果がチートみたいな気がしてきた・・・

異変（前書き）

今回も主人公はほっつき歩いています。

異変

今回も同じような始まり方だ。
今日は休日で、歩いていたら、なぜか、アルカディア・ムーブメントの前にきてしまった。

「なんでこんなところ来たんだ。」

アルカディア・ムーブメントにはあまりいい印象を持てない。変なうわさなどがあるからだ。

すぐにその場から離れた。何か別のことでも考えてみよう。

「て言うかもうすでに周りが暗い。帰るか。」

「待ちな!」

「ん?」

「てめえ、この前俺達の邪魔してくれたそうじゃないか。邪魔な奴には消えてもらおう!」

なんかこいつも目が黒い。なんかはやってんのか?変な病気?カラコンか?なんかいきなり殴りかかってきたから・・・

~5秒後~

「つ、つええ・・・」

返り討ちにしてやった。

「じゃあな。」

しばらく歩いて、寮に帰ろうとしたところ、なにか、大きな音がした。

アルカディア・ムーブメントのほうだ。

「なんだ、あれ?」

見てみると、アルカディア・ムーブメントのビルに、巨大な鳥と、トカゲがついていた。

「さっきまであんなのなかったぞ?」

俺は、アルカディア・ムーブメントのほうに向かった。

ついた時にはすでに、鳥もトカゲもおらず、アルカディア・ムーブメントは崩れていた・・・

それよりも不可解なのは、さっきまでここにいた人たちが1人もいないことだ。

「どうなってんだ?」

「くっくっ・・・よかったなー。離れていて、ここにいたら、お前も巻き添えだったぜ?」

さっきの男がいた。

「・・・ところで、なんでお前、下敷きになってるんだ?」

「・・・そこには触れないでくれ。」

「分かった、じゃあな。」

「ちょっと待て!・・・助けてくれ。」

「触れないでほしかったんじゃないのか?」

「ごめんなさい、アルカディア・ムーブメントに潜入して十六夜アキを倒すつもりが、いきなりビルが崩れてこのざまです。助けてください。」

十六夜アキ?・・・ああ、フォーチュンカップで不動遊星に負けたやつか。

「わかった。ちょっと待ってろ。」

~10分後~

「じゃあ、さっさと帰れよー。」

「出れたー!よし、デュエルだ!」

「帰れって言ってんだろ。」

「なんで戦闘態勢なんだよ!?・わかったよ、じゃあな!」

「帰ったか。」

あ、あいつあの不審者の仲間だったのか。居場所聞きだせばよかった…

異変（後書き）

今回デュエルはありませんでした。
また新しい下っ端出てきましたが、気にしないでください。

忘れてたオリカ紹介（前書き）

繁殖のグルドは感想のほうに効果が書いてありますので、
こちらではスルーさせてもらいます。

忘れてたオリカ紹介

早とちり
魔法カード
このターン、罠カードを伏せたターンに発動できる。

ステラ・コア
光属性　機械族　チューナー・効果　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分フィールド上に、シンクロモンスターがいる時、このカードは特殊召喚できる。

ステラ・ピース
光属性　岩石族　効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
１ターンに１度、デッキからフィールド魔法を手札に加える。

ステラ・ギャラクシー
フィールド魔法
「ステラ」と名のつくモンスターがフィールドを離れた時、相手の墓地のカードをデッキの１番下に戻す。

ステラ・ドラゴン
光属性　ドラゴン族　シンクロ・チューナー・効果　レベル６　ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ２５００
「ステラ・コア」＋チューナー以外の「ステラ」と名のついたモンスター１体以上
相手のカードがデッキに戻るたびに、相手の手札１枚を墓地に送る。
１ターンに１度、自分フィールド上のシンクロモンスターのレベルを、このモンスターと同じにする。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材

としてシンクロ召喚することができる。

ステラ・オメガ・ドラゴン
光属性　ドラゴン族　アクセルシンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ２０００
「ステラ・ドラゴン」＋「オメガ・ドラゴン」
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、発生したダメージを０にすることで、続けて攻撃ができる。このモンスターは、相手フィールドにモンスターが存在しない場合、攻撃宣言ができない。相手のカードがデッキに戻るたびに、相手の魔法・罠ゾーンのカード１枚を墓地に送る。相手のカード効果が発動した時、このカードをゲームから除外して、その効果を無効にする。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

忘れてたオリカ紹介（後書き）

すっかり忘れてました。

情報（前書き）

前回の下っ端とデュエルです。

情報

俺は疑問に思っていた。目が黒い奴ら、巨大なトカゲと鳥、失踪した人々、そして、ダークシンクロ。
おそらく失踪した人々は巨大なトカゲと鳥と何かしら関係があるのだろう。

「目が黒い奴らが使っているのがダークシンクロで、おそらくそれも鳥とトカゲに関係してる・・・。」

確か、レベル一、だったな…。シンクロの逆か。

「待ちな!」

またか・・・。

「今日こそはお前を八つ裂きにしてやる!」

~5秒後~

「・・・。」

こいつ返り討ちにされてるの何回目だ・・・

「あー、チクショー!こうなりゃデュエルで勝負だ!」

「今頃か…前来た奴みたいに最初からそうやれよ。」

「「デュエル!!」」

「俺のターン。アスタリスク・ガンナーを召喚。さらにアスタリスク・ソルジャーを特殊召喚。そして、アスタリスク・ガンナーの効果発動。コイントスを行い、表か裏を選択する。当たった場合、デッキから、「アスタリスク」と名のつくモンスターを特殊召喚する。俺は表を選択する。・・・表だ。デッキから、アスタリスク・コアを特殊召喚する。」

アスタリスク・ガンナー　ＡＴＫ１４００

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

「レベル３のアスタリスク・ガンナーとアスタリスク・ソルジャーにレベル２のアスタリスク・コアをチューニング！！シンクロ召喚！現れろ、アスタリスク・ドラゴン！」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「さらに罠収集を発動！デッキから便乗を３枚手札に加える。カードを４枚伏せて、ターンエンド。」

「オレのターン！」

「オレは、ダーク・ダイスを発動！サイコロを振り、出た目の数だけデッキの上を確認してその中に闇属性モンスターがいた場合、１体選択して特殊召喚する！出た目は６！よって、デッキから６枚を確認！オレは、ＤＴブルーブラッドを特殊召喚！」

またＤＴ！？

ＤＴブルーブラッド　ＡＴＫ０

「オレは、アスワンの亡霊を召喚！」

アスワンの亡霊　ＡＴＫ５００

「レベル３のアスワンの亡霊に、レベル９のＤＴブルーブラッドを、ダークチューニング！
闇と闇重なりしとき、冥府の扉は開かれる。光なき世界へ！ダークシンクロ！いでよ、僻みのゼムザ！」

僻みのゼムザ　ＡＴＫ１５００

「出やがった…。それにしても攻撃力が低い。まさか直接攻撃…」

「その通り！ゼムザは相手モンスターがフィールドにいる時、戦闘では破壊されず、直接攻撃ができる！」

「破壊耐性もかよ！？」

「さらに手札からサイクロンを発動！・・・なんで発動しない？」

「アスタリスク・ドラゴンがフィールドにいる時、お互いのプレイヤーは破壊する効果を発動できない。」

「ならハリケーンを・・・」

「カウンター罠、魔宮の賄賂。ハリケーンを無効。お前は１枚ドロ

ー。さらに便乗を3枚発動。」

「僻みのゼムザでダイレクトアタック！」

「ぐはっ！」

時雨　ＬＰ４０００→２５００

「手札から、ニ重召喚を発動！モンスターをセットしてカードをセット。ターンエンド！」

これもダメージが現実になるのかよ…

「俺のターン。」

あの伏せカードが気になるが・・。

「カードを1枚伏せて、天よりの宝札を発動。互いに手札が6枚になるようにドローする。そして便乗の効果で6枚ドロー。」

手札は増えた。あとは・・・

「手札から、無限の手札を発動。さらに、ステラ・コアを特殊召喚。ステラ・ピースを召喚。」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

ステラ・ピース　ＡＴＫ０

「ステラ・ピースの効果で、デッキからステラ・ギャラクシーを手

札に加える。ステラ・ギャラクシーを発動。レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ピースをチューニング！！
シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「バトル！アスタリスク・ドラゴンで僻みのゼムザに攻撃！戦闘破壊はできなくても、ダメージは通るだろ！」

「罠発動！和睦の使者！」

「くそ！ターンエンド！」

「ドロー。どうやらお前は運がいい。だが、次のターンで終わりだ！闇の仮面の効果発動！墓地の和睦の使者を手札に加える。カードを１枚伏せて、僻みのゼムザでダイレクトアタック！」

「がっ！」

時雨　ＬＰ２５００→１０００

「罠発動。強欲な送り物お前は２枚ドローする。便乗の効果で６枚ドロー。」

「ありがとな！月の書を発動！闇の仮面を裏側にしてターンエンド！」

「俺の・・ターン。」

手札は１６枚・・・。これで大丈夫だ。

「このモンスターは、シンクロモンスターが2体以上いるときに特殊召喚できる。ガーネット・コアを特殊召喚。」

ガーネット・コア　ＡＴＫ５００

「ガーネット・コアがフィールドにいる時、このモンスターは特殊召喚できる。クリムゾン・ビースト2体を特殊召喚。」

クリムゾン・ビースト　ＡＴＫ１５００

「レベル2のガーネット・コアに、レベル5のクリムゾン・ビーストをチューニング!!
シンクロ召喚!紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コア!」

クリムゾン・コア　ＤＥＦ４０００

「クリムゾン・コアの効果発動!デッキから、オメガ・コアを手札に加える!そして、オメガ・コアを召喚。さらに１０オーダーを発動。・・・全部表だ。デッキからオメガ・フェニックスを特殊召喚!」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

オメガ・フェニックス　ＡＴＫ３０００

「レベル2のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・フェニックスをチューニング!!
シンクロ召喚!現れろ、オメガ・ドラゴン!」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「効果を発動される前に、罠発動！和睦の使者！」

「ターンエンド！！」

「オレのターン！！これで俺の勝ちは決まった！」

「それはどうかな？」

「なんだと？」

「クリムゾン・コアがフィールドにいる時、相手モンスターは直接攻撃ができない！」

「なんだと！？」

「さらにクリムゾン・コアの効果発動！自分フィールドのシンクロモンスターを任意の数選択して、
その数だけこのモンスターのレベルを下げ、選択したモンスターのレベルを１にする！オメガ・ドラゴンと、アスタリスク・ドラゴンを選択！」

「闇の仮面の効果で、墓地の和睦の使者を手札に加える。カードをセットして、ターンエンド。」

「エンドフェイズ時にレベル１０となったクリムゾン・コアに、レベル１となったオメガ・ドラゴン、アスタリスク・ドラゴンをチューニング！！」

「シンクロモンスター3体だと!?」

「小さな真紅の星が、今ここに力を示す!デルタアクセルシンクロ!!!紅く輝け、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊!」

クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊　ＡＴＫ５０００

「俺のターン!クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊でゼムザに攻撃!」

「罠発動!和睦の使者!」

「クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊の効果発動!1ターンに1度、相手のカードの効果の発動を無効にし墓地に送る!」

「なんだと!?ぐはぁぁっ!!」

下っ端　ＬＰ４０００→５００

「ステラ・ドラゴンでゼムザに攻撃!」

「うわあああああああああああ!!」

下っ端　ＬＰ５００→０

「さて、お前たちの目的と海条遊騎を狙う理由を教えてもらうぞ。」

「誰が言うか!」

～1分後～

「すみません・・・話します。」

「さっさと言え。」

「はい・・・。海条遊騎ってやつを狙う理由は、下っ端なので知りませんが、目的は世界を滅ぼすことです。」

「じゃあ、この前の鳥とトカゲは何だ?」

「あれも知りません…」

「それじゃ、お前らの本拠地はどこにある?」

「サテライトの旧モーメントです…。」

「そうか。じゃあな。」

俺はこの時、一つの決意をした。

こいつらの目的を叩き潰す!!

情報（後書き）

デルタまでやっちゃいました。

今度は忘れなかったオリカ紹介（前書き）

結構出てます。

今度は忘れなかったオリカ紹介

アスタリスク・ガンナー
水属性　戦士族　効果　レベル３　ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１４００
１ターンに１度、コイントスを行う。表か裏かを宣言して当たった場合、デッキから、「アスタリスク」と名のつくモンスターを特殊召喚する。外れた場合、このモンスターを破壊する。

ダーク・ダイス
魔法カード
サイコロを振り、出た目の数だけ山札をめくる。その中に闇属性モンスターがいた場合、１体を選択して特殊召喚する。

ＤＴブルーブラッド
闇属性　悪魔族　ダークチューナー・効果　レベル９　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このモンスターが戦闘で破壊された場合、そのターン自分が受けるダメージは０になる。

僻みのゼムザ
闇属性　悪魔族　ダークシンクロ・効果　レベル－６　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ０
チューナー以外のモンスター－ダークチューナー
相手フィールドにモンスターがいる場合、このカードは戦闘では破壊されず、相手に直接攻撃をすることができる。

ガーネット・コア
炎属性　機械族　チューナー・効果　レベル２　ＡＴＫ５００　ＤＥＦ１０００

自分フィールド上にシンクロモンスターが2体以上存在するとき、このカードは特殊召喚できる。

クリムゾン・ビースト
炎属性　獣族　効果　レベル５　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ０
自分フィールドにガーネット・コアが存在するときこのモンスターは特殊召喚ができる。

クリムゾン・コア
炎属性　機械族　シンクロ・チューナー・効果　レベル１２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ４０００
「ガーネット・コア」＋チューナー以外のモンスター2体以上
このモンスターの特殊召喚に成功した時、デッキからオメガ・コアを手札に加える。このカードがフィールドに存在する場合、相手は直接攻撃ができない。１ターンに１度、自分フィールド上のシンクロモンスターを任意の数だけ選択して発動する。選択したモンスターのレベルを１にして、選択したモンスターの数だけこのモンスターのレベルを下げる。この効果は相手ターンでも使える。また、相手ターン中、自分フィールド上に表側表示で存在するこのモンスターをシンクロ素材としてシンクロ召喚することができる。

オメガ・フェニックス
光属性　鳥獣族　効果　レベル１０　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ１００
このモンスターが攻撃表示の時に戦闘で破壊された場合、デッキからカードを１枚捨てて特殊召喚することができる。

クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊
炎属性　ドラゴン族　デルタアクセルシンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ３０００
「クリムゾン・コア」＋「オメガ・ドラゴン」＋「アスタリスク・

ドラゴン」
1ターンに1度、相手がカードを発動した時、その発動を無効にして墓地に送る。このカードがフィールドに存在するとき、他の自分のモンスターは効果では破壊されない。このカードが墓地に送られた場合、墓地のオメガ・ドラゴンを特殊召喚する。

今度は忘れなかったオリカ紹介（後書き）

執筆中に思うことがあるんですが、本当にカオスって名前のモンスターが出てきそうです。

出陣（前書き）

今回はデュエルなしでサテライトに向かいます。
ギャグもあると思います。

出陣

俺は校長に休学届を出した。１週間ほど休学するつもりだ。すぐには終わりそうにないからな。

「紫藤！」

「俊か。」

「なんで休学するんだ？」

「やらなきゃいけないことがあると思ってな。１週間ほど休ませてもらう。」

「んじゃあ、そのやらなきゃいけないことをさっさと終わらせてすぐに帰ってこい！」

「ああ、じゃあな。」

俺は自宅に帰った。久しぶりにＤホイールに乗る時が来た。多少強引だが、サテライトには歩いて行けないからこうするしかない。

シティーサテライト側の海岸に着いた。Ｄホイールも少し改造してある。

「よし。」

そう言って俺は、Ｄホイールで、

海に飛んだ。

※危険ですので絶対に真似しないでください。

Ｄホイールの改造した部分から、

片栗粉が噴射した。

※実際にこんなことができるわけではないので絶対に真似しないでください。

なぜ片栗粉なのかと言うと、この前ＴＶで片栗粉がたっぷり入った水槽の上で人が駆け足すると沈まないということがあったからだ。噴射するのは少量だが、車はすごいスピードで走れば、バイクでも水上を走れるらしい。俺のＤホイールの限界速度は、時速６００ｋｍ。これぐらいのスピードなら大丈夫だろ。

※あくまで作者の偏見です。絶対に真似しないでください。

そうして１５分後、俺は、無事サテライトについた。

「ここがサテライト・・・。」

工場みたいなところが多く、所々ボロボロだ。

「それじゃ、中心部に向かうか。」

戦闘（前書き）

サテライトにはきましたが、原作介入はしません。

戦闘

俺はDホイールに乗ってサテライトを走っている。（片栗粉噴射するものは到着時に外した）

ここも人があまりいなかったが、さっき空に浮かんだ地上絵が消えたらたくさん人が出てきた。

そして俺は、サテライト中心部に着いた。空に浮かんでいた蜘蛛の地上絵が消えた。

「ここか。」

「何者だ?」

また眼が黒い奴が出てきた。

「貴様、もしやシグナーの仲間か?」

やっぱ流行ってるのか?それに何だ、シグナーって?

「そうならば、われらダークシグナーの力で葬ってくれる!」

「ちょっと待て、さっきから何を言ってるんだ?シグナーとかダークシグナーとか、何のことだ?」

「貴様、まさか、関係ないのか?」

「・・・関係ないとは言えない。現に俺の同級生が狙われたからな。

あまり話したことはないが、身近にいるやつを傷つけられるのは、気に食わないんだよ。それに世界滅亡だっけ?そんなの聞かされたら黙って見過ごすわけにはいかないだろ。」

「ほう、あくまでわれらの目的を邪魔する気か。だが、冥界の王が復活すれば、世界は滅びる。」

「さっさと準備しろ。」

「よかろう。葬ってくれる。」

「「デュエル!!」」

俺はデッキに、クロニクル・コアを入れた。あの後、６枚のうち１枚がフィールド魔法だということが分かった。ワールド・オブ・クロニクル。これも効果がわからない。

「俺のターン!オメガ・コアを召喚!さらに１０オーダーを発動。・・・全部表だ。オメガ・フェニックスを特殊召喚。」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

オメガ・フェニックス　ＡＴＫ３０００

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・フェニックスをチューニング!!
シンクロ召喚!現れろ、オメガ・ドラゴン!」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「罠収集を発動。便乗を3枚手札に加える。そして早とちりを発動。カードを4枚伏せて、天よりの宝札を発動。お互いに手札が6枚になるようドローする。そして便乗を発動。」

「1ターン目で罠を発動だと!?」

「早とちりの効果で、伏せた罠は伏せたターンに発動できる。さっき伏せた強欲な贈り物を発動。
お前は2枚ドロー。便乗の効果で6枚ドロー。アスタリスク・コアを特殊召喚。アスタリスク・ソルジャーを2体特殊召喚。」

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００

「レベル2のアスタリスク・コアに、レベル3のアスタリスク・ソルジャー2体をチューニング!!
シンクロ召喚!現れろ、アスタリスク・ドラゴン!」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「もう1枚の強欲な贈り物を発動。お前は2枚ドロー。便乗で6枚ドロー。ガーネット・コアを特殊召喚。クリムゾン・ビーストを2体特殊召喚。」

ガーネット・コア　ＡＴＫ５００

クリムゾン・ビースト　ＡＴＫ１５００

「レベル2のガーネット・コアに、レベル5のクリムゾン・ビース

ト2体をチューニング！！
シンクロ召喚！紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コア！」

クリムゾン・コア　ＤＥＦ４０００

「俺はハリケーンを発動。そして無限の手札を発動。カードを４枚伏せて、ターンエンド。」

「シンクロモンスターが3体か。だが、冥界の力には及ばぬわ！！私のターン！」

こいつはおそらく、今までのやつより強い。どんなモンスターを出してくる？

「私は、記憶破壊者を召喚！さらに魔法カード、ダーク・ウェーブを発動する！記憶破壊者のレベルをマイナス3にする！自分フィールドにレベル一のモンスターが存在するとき、このカードは特殊召喚できる。ＤＴダーティ・ヘルを特殊召喚！」

記憶破壊者　ＡＴＫ１０００

ＤＴダーティ・ヘル　ＡＴＫ０

「レベル一3となった記憶破壊者に、レベル9のＤＴダーティ・ヘルをダークチューニング！！
冥府よりいでし闇の化物、光を闇で塗りつぶせ！ダークシンクロ！
冥界のデグバルダ！」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ０

「レベル－１２だと！？」

「デグバルダでオメガ・ドラゴンを攻撃！」

「なっ！？自滅する気か！？」

「デグバルダの効果、このモンスターが攻撃宣言した場合、その攻撃を無効にして、このモンスターの攻撃力を攻撃対象にしたモンスターの２倍にすることができる！」

「なんだと！？」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ０→１００００

「攻撃力１００００だと！？」

「カードを５枚伏せて、エンドフェイズ時、デグバルダの攻撃力は倍になる！」

「まだ上がるのか！？」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ１００００→２００００

「この効果に限界はない！ターンエンド！」

俺のデッキにあのモンスターを倒せるモンスターはいない、どうすれば！？

戦闘（後書き）

次回、クロニクル・コアの効果が発動します。

番外編　あの下っ端は・・・・・（前書き）

今回は、時雨にやられた後の下っ端が俊にデュエルを挑みます。
結果は・・・多分予想どおりですよね。

番外編　あの下っ端は・・・・

「くっそ～！」

あいつまた邪魔しやがって。今度こそぶっ潰す！

「あの～。すいません、ここは部外者立入禁止なんだけど。」

「ああ、わりぃ。ところで、あいつ知らねえか？」

「あいつって言われても、誰のことかわからないんですけど。」

あ～。あいつ名前なんだっけ？まあいい、こいつを人質にしておびき寄せれば・・・

「デュエルだ！」

「いいですよ！」

即答！？まあいい。

「「デュエル！！」」

「俺のターン！！」

すぐにけりをつけてやる。

「悪夢の拷問部屋を発動！デス・メテオと火炎地獄２枚を発動！！」

「バーンだったのか！？ぐわぁぁぁ！！」

下っ端　ＬＰ４０００→１００

俊　ＬＰ４０００→３０００

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

少し驚いたぜ。だがすぐ巻き返してやる！

「オレのターン！」

「罠発動！仕込みマシンガン！」

「おい！？ちょっと待て！俺まだ何もうぁあああああああああああああ！！」

下っ端　ＬＰ１００→０

「楽しかったですよ♪ってあれ？」

もうかかわるのやめよう…。

番外編　あの下っ端は・・・・（後書き）

終わるの早すぎました。
やっぱり怖いです、フルバーン。

決着・・・そして・・・（前書き）

短かったですが、今回でダークシグナーは終了です。
クロニクル・コアの効果は多分チートに入ります。

決着・・・そして・・・

「俺のターン！」

攻撃力であれにかなうやつはいない。なら効果で！

「俺は伏せカード、地割れを発動！」

「ダーティ・ヘルの効果でデグバルダは効果では破壊されない。」

「何！？」

じゃあどうやって倒せって言うんだよ！？

「バニシング・コアを召喚。バニシング・ギアを特殊召喚。」

バニシング・コア　ＡＴＫ０

バニシング・ギア　ＡＴＫ０

今はこれしかできねえか。

「レベル２のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・ギアをチューニング！！

シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「バニシング・ドラゴンの効果で、オメガ・ドラゴンのレベルを６にする！
レベル６のバニシング・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！
アクセルシンクロ！！殲滅せよ、バニシング・オメガ・ドラゴン！」

バニシング・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「ステラ・コアを特殊召喚。伏せカード、ニ重召喚を発動。ステラ・ピースを召喚。」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

ステラ・ピース　ＡＴＫ０

「ステラ・ピースの効果で、デッキからワールド・オブ・クロニクルを手札に加える。
レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ピースをチューニング！！
シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「伏せカード、死者蘇生を発動。オメガ・ドラゴンを特殊召喚。ステラ・ドラゴンの効果でオメガ・ドラゴンのレベルを６にする。
レベル６のステラ・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！
アクセルシンクロ！照らし出せ、ステラ・オメガ・ドラゴン！」

ステラ・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「伏せカードオープン！リビングデッドの呼び声！オメガ・ドラゴンを特殊召喚。
クリムゾン・コアの効果で、このモンスターのレベルを2下げて、オメガ・ドラゴンとアスタリスク・ドラゴンのレベルを1にする！
レベル1となったアスタリスク・ドラゴンとオメガ・ドラゴンにレベル１０のクリムゾン・コアをチューニング！！小さな真紅の星が、今ここに力を示す！デルタアクセルシンクロ！！！
紅く輝け、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊！」

クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊　ＡＴＫ５０００

「マジック・プランターを発動。リビングデッドを墓地に送り、２枚ドロー。打ち出の小槌を発動して手札を3枚デッキに戻しシャッフル、３枚ドロー。カードを４枚伏せて、ターンエンド。」

「エンドフェイズ時、デグバルダの攻撃力は倍になる！」

「俺のターンでもかよ！？」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ２０００００→４０００００

「私のターン、デグバルダでバニシング・オメガ・ドラゴンを攻撃！」

「永続罠、強制終了！ステラ・オメガ・ドラゴンを墓地に送り、バトルフェイズを終了させる。」

「エンドフェイズ、デグバルダの攻撃力は倍になる。ターンエンド。」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ４０００００→８００００

「俺のターン！」

「永続罠発動、無視できぬ戦い。相手は直接攻撃ができない！」

「クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊の効果で無効！」

「もう１枚無視できぬ戦い発動！」

「ターンエンド。」

「エンドフェイズ、デグバルダの攻撃力は倍になる。」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ８００００→１６００００

「私のターン、デグバルダでクリムゾン・オメガ・ドラゴン＊を攻撃！」

「強制終了でクリムゾン・オメガ・ドラゴン＊を墓地へ！」

「エンドフェイズ、デグバルダの攻撃力は倍になる！ターンエンド。」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ１６００００→３２００００

「俺のターン！」

もう攻撃力が３２万、奴を倒すにはどうすればいい！？

（あわてるな時雨。）

（オメガ・ドラゴン！？）

（お前は何のために戦っている？）

（俺は・・・守るべき仲間の為に戦う！！そのために、力がほしい！！）

（力を手に入れて、その先に新たな試練が待ち構えていようともか？）

（ああ！！）

（なら我の力を引き出すがいい！！）

「ドロー！！」

クロニクル・コア！！効果がわかる！

「俺は、フィールド魔法、ワールド・オブ・クロニクルを発動！！そして、伏せカード、オメガ・チェンジを発動！フィールドのバニシング・オメガ・ドラゴンを墓地に送り、オメガ・ドラゴンを特殊召喚！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「今更そんな雑魚で何ができる？」

「オメガ・ドラゴンの効果、攻撃力を１０００ポイント下げて、このターン、相手は罠を発動できない！そして、クロニクル・コアの効果発動！手札を１枚墓地に送り、このカードを墓地に送る。」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「墓地に送って何になる！」

「クロニクル・コアの効果発動！！このカードと素材となるモンスターを手札に戻し、シンクロ召喚をすることができる！！」

「墓地からシンクロだと！？」

「レベル２のクロニクル・コアに、レベル２のアスタリスク・コアをチューニング！！
シンクロ召喚！守護せよ、シンクロチューナー、アスタリスク・クロニクル・コア！」

アスタリスク・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「アスタリスク・クロニクル・コアの効果、オメガドラゴンがフィールドに存在するとき、オメガ・ドラゴンのレベルを１下げ、このモンスターのレベルを１にする。もう一度クロニクル・コアの効果発動！アスタリスク・コアを墓地に送り、このカードを墓地に送る。レベル２のクロニクル・コアに、レベル２のバニシング・コアをチューニング！！
シンクロ召喚！破壊せよ、シンクロチューナー、バニシング・クロニクル・コア！」

バニシング・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「バニシング・クロニクル・コアの効果で、オメガ・ドラゴンのレベルを1下げて、このモンスターのレベルを1にする。もう一度クロニクル・コアの効果でバニシング・コアとこのカードを墓地に送る！
レベル2のクロニクル・コアに、レベル2のステラ・コアをチューニング！！
シンクロ召喚！照明せよ、シンクロチューナー、ステラ・クロニクル・コア！」

ステラ・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「ステラ・クロニクル・コアのレベルを1にして、オメガ・ドラゴンのレベルを1下げる。
ステラ・コアとクロニクル・コアを墓地へ。
レベル2のクロニクル・コアに、レベル2のガーネット・コアをチューニング！！
シンクロ召喚！炎上せよ、シンクロチューナー、ガーネット・クロニクル・コア！」

ガーネット・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「シンクロモンスターが5体だと！？だが、それでもデグバルダにはかなうまい！！」

「ガーネット・クロニクル・コアの効果で、オメガ・ドラゴンのレベルを1下げて、このモンスターのレベルを1にする。いくぞ！！
レベル1となったガーネット・クロニクル・コア、アスタリスク・クロニクル・コア、ステラ・クロニクル・コア、バニシング・クロニクル・コアに、レベル8となったオメガ・ドラゴンをチューニン

グ!!時空の力を得た神龍よ、今無限の力をここに解き放て!!オメガアクセルシンクロ!!!!!!
超越せよ、オメガ・クロニクル・ドラゴン!!」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「・・・ははは!!どこにそんなモンスターがいる?どこにもいないではないか!!」

「上を見てみろ。」

「上だと?・・・な、何だあれは!?」

雲が渦巻いている。その中から、空を覆い尽くすほど巨大な龍が出てきた。

「オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果発動!1ターンに1度、墓地に存在するモンスターを可能な限り特殊召喚する!!蘇れ、オメガ・ドラゴン、ステラ・オメガ・ドラゴン、バニシング・オメガ・ドラゴン、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊!!」

「今更そんなモンスターを揃えたところで何ができる!!」

「オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果発動!!自分フィールド上のこのモンスター以外のモンスターを全てリリースし、リリースしたモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力をアップする!!」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５０００

「だがその程度…」

「ワールド・オブ・クロニクルの効果発動!!オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果でリリースされたモンスターを特殊召喚する!!」

「なに!?」

「そして再びオメガ・クロニクル・ドラゴンの効果とワールド・オブ・クロニクルの効果を繰り返し発動!!」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ２５０００↓４５０００↓６５０００↓８５０００・・・・・・

「なんだと!?」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ∞

「これでおわりだ!!オメガ・クロニクル・ドラゴンで攻撃!!クロニクル・ブレイザー!!!」

「うぁあああああああああああああ!!!!!!!!」

ダークシグナー　ＬＰ４０００↓０

「勝ったか…」

あいつはいつの間にかどこかに消えていた。

そしてそのあと、冥界の王は倒され、無事平和が戻った。

「これで終わったのか。・・・なんだ?この痣?」

俺の右手の甲に×が二つ重なったような痣があった。

（それがさっき言った試練の印だ。）

「試練？」

「そこから先は僕が説明するよ。」

「サロッゴ・・・」

深刻な顔でサロッゴが現れた。

「それはオメガ・クロニクル・ドラゴンを使ったため付けられた、いわば時の呪いさ。」

「時の・・・呪い？」

「オメガ・クロニクル・ドラゴンは、そのカード自体が神の力を持つ強力すぎる力を持つカード。だから使うとその痣がつけられる。それをつけられたものは、７日後に死ぬ。」

「！！」

「だから封印されてたんだよ。君がそのカードたちを手に入れた、森と遺跡にね。まあ、呪いを解く方法は、あるっちゃあるけどね。」

「なんだその方法は？」

「オメガっていうのは、ギリシャ文字でしょ。だから、ギリシャ神

話の最高神、ゼウスとデュエルして、認められることだよ。」

「ゼウス…」

「まあ、君なら大丈夫だって信じてるよ。準備が整ったら、言ってね。」

そう言ってサロッゴは消えた。

「ついに神様相手にするのか・・・」

そう思いながら、俺はシティに戻った。来た時と同じルートで。

決着・・・そして・・・（後書き）

かなり早く終わってしまいました。
次は、オリカ紹介で。

オリカ紹介　ほぼチート（前書き）

数回目のオリカ紹介です。
やっと切り札出せました。

オリカ紹介　ほぼチート

ＤＴダーティ・ヘル
闇属性　悪魔族　ダークチューナー・効果　レベル９　ＡＴＫ０
ＤＥＦ０
自分フィールドに、レベル一のモンスターがいる時、このモンスターは特殊召喚することができる。このカードをシンクロ素材にしたダークシンクロモンスターは、効果では破壊されない。

容姿　フードと汚れた黒いマント

冥界のデグバルダ
闇属性　悪魔族　ダークシンクロ・効果　レベル一１２　ＡＴＫ０
ＤＥＦ０
レベル一のチューナー以外のモンスター一ダークチューナー
このカードが相手モンスターに攻撃した時、その攻撃を無効にして、このモンスターの攻撃力をそのモンスターの２倍にする。エンドフェイズ毎に、このモンスターの攻撃力を倍にする。このモンスターがフィールドに存在する間、自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚を行うことができない。

容姿　黒く巨大なキメラみたいなもの

無視できぬ戦い
永続罠
このカードがフィールドに存在する限り、相手は直接攻撃ができない。

ワールド・オブ・クロニクル

フィールド魔法
オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果で、モンスターがリリースされた時、リリースされたモンスターを全て特殊召喚することができる。このカードを墓地に送ることで、墓地に存在するオメガ・クロニクル・ドラゴンを特殊召喚することができる。

オメガ・チェンジ
通常魔法
自分フィールドの「オメガ」と名のつくモンスターを墓地に送り、「オメガ・ドラゴン」もしくは、「オメガ・ドラゴン」を素材とするシンクロモンスターを特殊召喚する。

クロニクル・コア
神属性　機械族　効果　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
手札を１枚墓地に送り発動する。このカードを手札から、墓地に送る。このカードは、墓地に指定されたシンクロ素材となるモンスターが存在するとき、そのモンスターとこのカードを手札に戻して、シンクロ召喚することができる。

容姿　中央の球体を包む金の装飾

アスタリスク・クロニクル・コア
神属性　機械族　シンクロチューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
「アスタリスク・コア」＋「クロニクル・コア」
１ターンに１度、オメガ・ドラゴンのレベルを１下げ、このモンスターのレベルは１にする。このカードがフィールドに存在する限り、オメガ・ドラゴンを効果で破壊することはできない。

容姿　水色に金の装飾

バニシング・クロニクル・コア
神属性　機械族　シンクロチューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
「バニシング・コア」＋「クロニクル・コア」
１ターンに１度、オメガ・ドラゴンのレベルを１下げ、このモンスターのレベルを１にする。このカードがフィールドに存在する限り、互いにカードを除外できない。

容姿　黒に金の装飾

ステラ・クロニクル・コア
神属性　機械族　シンクロチューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
「ステラ・コア」＋「クロニクル・コア」
１ターンに１度、オメガ・ドラゴンのレベルを１下げ、このモンスターのレベルを１にする。このカードがフィールドに存在する限り、互いにデッキにカードを戻すことができない。

容姿　橙色に金の装飾

ガーネット・クロニクル・コア
神属性　機械族　シンクロチューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
「ガーネット・コア」＋「クロニクル・コア」
１ターンに１度、オメガ・ドラゴンのレベルを１下げ、このモンスターのレベルを１にする。このカードがフィールドに存在する限り、効果ダメージは発生しない。

容姿　紅い核に金の装飾

次の奴だけ解説みたいの付けます。

オメガ・クロニクル・ドラゴン
神属性　ドラゴン族　オメガアクセルシンクロ・効果　レベル１２
　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ５０００
「アスタリスク・クロニクル・コア」＋「バニシング・クロニクル・コア」＋「ステラ・クロニクル・コア」＋「ガーネット・クロニクル・コア」＋「オメガ・ドラゴン」
このモンスターは上記のシンクロ召喚、もしくは「ワールド・オブ・クロニクル」の効果でのみ特殊召喚できる。このモンスターは他のカードの効果を受けない。このカードの効果は無効化されない。１ターンに１度、墓地に存在するモンスターを４体選択して、特殊召喚する。自分フィールドに存在するこのモンスター以外のモンスターを全てリリースして、リリースしたモンスターの攻撃力の合計分、このモンスターの攻撃力をアップする。

容姿　デジモンのインペリアルドラモンとデュエマのボルサファを合わせたもの

大きさ　顔だけで街の半分ぐらい　腕はビル４つ分

このカードは、召喚条件がかなり厳しいですが、召喚自体はあまり難しくないと思います。
このカードはブラックホールとかブレインコントロールなどの効果を受け付けません。
蘇生能力は１ターンに１度しか使えませんが、フィールド魔法で補えます。

紫「ほぼ無敵じゃないのか？」

オネストとか魔法の筒とかだと1撃で負けるけどね。

神との決闘（前書き）

今回はゼウスとのデュエルです。

俊「紫藤なら大丈夫じゃないか？」

由紀「あなたなら大丈夫かもしれないけど、神様相手だから気をつけたほうがいいですよ。というか私最近出番が少ないと思うんですけど…。」

ごめんなさい。

神との決闘

深夜０時、俺はベッドの上で、吐血していた。
サロッゴによると、これも呪いの一環なのだとか。
２日目なので、ベッドが血塗れだ。
「・・・洗っとくか…。」

翌日

「準備できた～～～?」
「ああ。」
「じゃあレッツゴ～～!!」

なんでこいつは人の命がかかってるのにこんなに能天気なんだ?

「到着～～～～!!」
「ここがギリシャ・・・。旅行だったらパルテノンとか寄りたかった…。」

「今回の目的地はオリンポス山だからね～～。」

なぜオリンポス山かって?神話で神様たちが住んでいるという山だからだ。

「というわけで目的地到着!」

「早!」

「ゼウス様～～、連れてきましたよ～～～。」

「貴様か。今度のオメガを使うものは。」

「すいませんが、以前にもオメガを使う人間はいたんですか?」

「いたぞ。１５人ぐらいな。その全てがここで死ぬか呪いで死ぬかのどちらかだったがな。」

「それではゼウス様。デュエルを始めさせてもらいます。」

「構わん。」

「こっちもだ。」

「「デュエル!!」」

「我のターン。ターンエンド。」

何もしなかった?手札事故でも起こしたのか?

「俺のターン。オメガ・コアを召喚。１０オーダーを発動。全部表だ。オメガ・フェニックスを特殊召喚。」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

オメガ・フェニックス　ＡＴＫ３０００

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・フェニックスをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「オメガ・ドラゴンでダイレクトアタック！」

普通ならこれで終わるが、絶対なにかある。

「手札から、十二神・アフロディーテを特殊召喚。アフロディーテの効果発動。相手がダイレクトアタックをした時、このモンスターを特殊召喚して、攻撃モンスターの攻撃力分自分のライフを回復する。」

十二神・アフロディーテ　ＤＥＦ４０００

ゼウス　ＬＰ４０００→９０００

「カードを伏せて、ターンエンド。」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「我のターン。我は、神の居城ーヴァルハラを発動。」

「それいいのか！？ヴァルハラはギリシャ神話じゃなくて北欧神話だぞ！？」

「関係ない！我は、聖なる神殿ーパルテノンを発動。」

「今度はちゃんとギリシャ…」

「パルテノンの効果、デッキから、神山ーオリンポスを手札に加える。我は、フィールド魔法、神山ーオリンポスを発動。オリンポスの効果で、手札を全てデッキに戻し、デッキから十二神と名の付くモンスターを6枚手札に加える。オリンポスのもう一つの効果を発動。十二神・アテネを特殊召喚。」

十二神・アテネ　ＡＴＫ４０００

「ターンエンド。」

「俺のターン。」

あのアテネっていうのがどんな効果を持っているのか今のところわからない。とりあえず…

「ステラ・コアを特殊召喚。ステラ・ピースを召喚。効果でステラ・ギャラクシーを手札に加える。ステラ・ギャラクシーを発動して神山ーオリンポスを破壊。」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

ステラ・ピース　ＡＴＫ０

「オリンポスはヴァルハラとパルテノンがフィールドに存在するとき、他のフィールド魔法を発動できない。」

「レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ピースをチューニング！！
シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「ステラ・ドラゴンの効果でオメガ・ドラゴンのレベルを６にする。
レベル６のステラ・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！
アクセルシンクロ！！照らしだせ、ステラ・オメガ・ドラゴン！」

ステラ・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「ステラ・オメガ・ドラゴンでアフロディーテに攻撃！効果で戦闘ダメージを０にして連続攻撃を行う。」

「アテネの効果、相手は１度のバトルフェイズに１度しか攻撃ができない。」

「ターンエンド。」

「我のターン。オリンポスの効果で、十二神・ヘパイストスを召喚。
ヘパイストスの効果で、デッキから、装備魔法を手札に加える。ゼウスの雷を手札に加える。さらに、十二神が２体いる時、このモンスターを特殊召喚できる。十二神・アルテミスを特殊召喚。」

十二神・ヘパイストス　ＡＴＫ４０００

十二神・アルテミス　ＡＴＫ４０００

「ターンエンド。」

「俺のターン。バニシング・コアを召喚。天よりの宝札を発動。互いに手札が６枚になるようにドローする。便乗を発動。バニシング・ギアを特殊召喚。レベル２のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・ギアをチューニング！！シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「バニシング・ドラゴンの効果発動。」

「手札から、十二神・ヘラを特殊召喚してバニシング・ドラゴンの効果を無効にする。」

十二神・ヘラ　ＡＴＫ４０００

「死者蘇生を発動。オメガ・ドラゴンを特殊召喚。バニシング・ドラゴンの効果で、オメガ・ドラゴンのレベルを６にする。レベル６のバニシング・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！アクセルシンクロ！！殲滅せよ、バニシング・オメガ・ドラゴン！」

バニシング・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「バトル！バニシング・オメガ・ドラゴンで、アテネを攻撃！」

「アルテミスの効果で攻撃を無効にする。」

「カードを3枚伏せて、ターンエンド。」

「我のターン。オリンポスの効果で、十二神・アレスを召喚。」

十二神・アレス　ＡＴＫ４０００

「罠発動！強欲な贈り物。あなたは2枚ドロー。便乗の効果で、俺も2枚ドロー。2枚目の便乗を発動！」

「バトル。アレスでステラ・オメガ・ドラゴンに攻撃。アレスは戦闘では破壊されず、このカードが攻撃したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。」

「ぐぉっ！！」

時雨　ＬＰ４０００→１５００

ゼウス　ＬＰ９０００→８０００

「ターンエンド。」

「俺のターン。」

このターンでアレスを除去しないとほぼ負けが確定する。負けるわけにはいかない！！

「俺は、早とちりを発動。今ドローしたカードを伏せ、強欲な贈り物を発動。あなたは2枚。俺は便乗の効果で4枚ドロー。もう一枚伏せ、強欲な贈り物を発動。あなたは2枚、俺は4枚ドロー。ガーネット・コアを特殊召喚。クリムゾン・ビーストを2体特殊召喚。」

ガーネット・コア　ＡＴＫ５００

クリムゾン・ビースト　ＡＴＫ１５００

「レベル2のガーネット・コアに、レベル5のクリムゾン・ビースト2体をチューニング！！
シンクロ召喚！紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コア！」

クリムゾン・コア　ＤＥＦ４０００

「クリムゾン・コアの効果発動。ステラ・オメガ・ドラゴンと、バニシング・オメガ・ドラゴンのレベルを1にして、このモンスターのレベルを2下げる。レベル１０となったクリムゾン・コアに、レベル1となったステラ・オメガ・ドラゴンとバニシング・オメガ・ドラゴンをチューニング！！
光と闇の竜交わりし時、ここに新たな力が誕生する！デルタアクセルシンクロ！！！
重複せよ、オメガ・カオス・ドラゴン！！」

オメガ・カオス・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「オメガ・カオス・ドラゴンで、アテネに攻撃！」

「アルテミスの効果で無効。」

「オメガ・カオス・ドラゴンの攻撃時、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない！」

「ぐっ！！」

ゼウス　ＬＰ８０００→７０００

「オメガ・カオス・ドラゴンは相手モンスターがいる時、連続攻撃ができる。全体に攻撃！！」

「ぐうぁ！！」

ゼウス　ＬＰ７０００→３０００

「ターンエンド。」

「なかなかやるようだな。ならば我も本気を出そう。我のターン。」

今まで本気じゃなかったのか！？

「カードを1枚伏せて、オリンポスの効果で、手札をデッキに戻し、十二神と名の付くモンスターを手札に加える。このカードは、墓地に十二神と名の付くモンスターが5体以上いるときのみ特殊召喚できる。我は我自身を召喚！！」

十二神・ゼウス　ＡＴＫ５０００

「さらに我にゼウスの雷を装備！！バトル！！オメガ・カオス・ドラゴンに攻撃！！」

「相討ち狙いか!?」

「ゼウスの雷の効果発動!!このカードを装備したゼウスが、相手モンスターを攻撃した場合、ゼウスの攻撃力を（ゼウスの攻撃力＋相手モンスターの攻撃力）×２にする!!」

「なんだと!?」

十二神・ゼウス　ＡＴＫ５０００→２００００

「うぁあああああああああああ!!」

時雨　ＬＰ１５００→０

負けちまった。畜生!!

「時雨と言ったな?」

「はい・・・。」

「認めてやる。」

「・・・・・・・・・・・・はい?」

「時の呪いは解いてやる。」

「ちょっと待て、俺は負けたんだぞ?」

「何言ってんの?僕はデュエルして、『認めて』もらえたらって言

ったよ?誰も『勝ったら』なんていってないよ?」

「・・・・・・・・・・確かにそう言ってたな。」

「時雨とやら、お主にオメガのカードを使う許可をくれてやる。」

「俺が強くなったらもう一度デュエルしてくれるか?」

「その時を楽しみにしておるぞ。」

こうして俺の呪いの騒ぎは無事終結した。

~4日後~

「俊、久しぶり。」

「よお、紫藤、無事だったか!!」

「まあな。ところで交流デュエルの申し込みってまだやってるか?」

「いや、それは先週終わったから・・・」

「・・・そうか・・・」

神との決闘（後書き）

1話でデュエル終わってしまいました。
ゼウスのデッキ、それほどチートじゃない気がしてきました。

オリカ紹介　ほぼチート2（前書き）

今回は前回の話に出てきた十二神（未公開も含む）を中心に紹介していきます。

オリカ紹介　ほぼチート２

聖なる神殿ーパルテノン
永続魔法
１ターンに１度、デッキから「神山ーオリンポス」を手札に加える。

神山ーオリンポス
フィールド魔法
このカードは「神の居城ーヴァルハラ」と「聖なる神殿ーパルテノン」が存在するとき、フィールドを離れない。１ターンに１度、手札を全てデッキに戻し、「十二神」と名の付くカードを６枚まで手札に加える。１ターンに１度、「十二神」と名の付くモンスターを特殊召喚する。

十二神・アフロディーテ
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、光属性としても扱う。相手モンスターがダイレクトアタックしてきた時、このモンスターを特殊召喚してその攻撃を無効にし、その攻撃力分のライフを回復することができる。このカードがフィールドに存在するとき、相手のライフが回復する効果をダメージを与える効果に変える。

十二神・アテネ
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、地属性としても扱う。このカードがフィールドに存在するとき、相手は１度のバトルフェイズに１度しか攻撃宣言ができない。相手モンスターがフィールドにいる時、このモンスタ

ーをリリースして、十二神と名の付くモンスターはもう一度攻撃ができる。

十二神・ヘパイストス
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、炎属性としても扱う。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから装備魔法を手札に加える。このカードが効果で墓地に送られた時、相手の手札を全て墓地に送る。

十二神・アルテミス
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、風属性としても扱う。フィールドに、「十二神」と名の付くモンスターが2体以上存在するとき、特殊召喚できる。バトルフェイズ時、１度だけ攻撃を無効にできる。

十二神・ヘラ
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、光属性・炎属性としても扱う。モンスター効果の発動時、その効果を無効にして、このモンスターを特殊召喚できる。十二神・ゼウスがフィールドに存在するとき、このモンスターの攻撃力を2倍にする。

十二神・アレス
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、地属性・炎属性としても扱う。このモンスター

の攻撃時、このモンスターは戦闘で破壊されず、相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手の地属性モンスターは、効果を発動できない。

十二神・ゼウス
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ５００
このモンスターは通常召喚できない。墓地に「十二神」と名の付くモンスターが５体以上存在するとき、特殊召喚できる。このモンスターは、全ての属性、全ての種族として扱うことができる。

十二神・アポロン（未公開）
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４００
このモンスターは、闇属性・炎属性としても扱う。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手の闇・炎属性モンスターの効果を無効にする。このモンスターが、闇・炎属性モンスターを攻撃した時、相手のデッキから、攻撃したモンスターのレベル分の枚数を墓地に送る。

十二神・ヘルメス（未公開）
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４００
このモンスターは、光属性・風属性としても扱う。相手が魔法を発動した時、その効果を無効にして、このモンスターを特殊召喚することができる。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手は魔法を発動できない。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手は効果でドローできない。

十二神・デメテル（未公開）

神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、地属性・水属性としても扱う。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手は罠を発動できない。

十二神・ヘスティア（未公開）
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、炎属性・風属性としても扱う。このモンスターがフィールドに存在するとき、自分のモンスターは効果では破壊されない。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手の風属性モンスターの効果は無効になる。

十二神・ポセイドン（未公開）
神属性　天使族　効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターは、水属性としても扱う。このモンスターがフィールドに存在するとき、相手の水属性モンスターの効果は無効になる。
このカードは「海」としても扱う。

ゼウスの雷
装備魔法
十二神・ゼウスにのみ装備可能。ゼウスが攻撃した時、ゼウスの攻撃力を、（ゼウスの攻撃力＋相手モンスターの攻撃力）×２にする。
このカードを装備したゼウスの攻撃は無効にできない。

オメガ・カオス・ドラゴン
炎属性　ドラゴン族　デルタアクセルシンクロ・効果　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ４０００
「クリムゾン・コア」＋「ステラ・オメガ・ドラゴン」＋「バニシ

ング・オメガ・ドラゴン」
このモンスターは、光属性・闇属性としても扱う。このモンスターの攻撃宣言時、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。相手モンスターが存在するとき、続けて攻撃ができる。このカードがフィールドを離れた時、墓地から「オメガ・ドラゴン」を特殊召喚する。

嵐の後の静けさ（前書き）

ダークシグナー編が終わってしまったので、暫くは特に事件みたいなものは起きないと思います。

嵐の後の静けさ

この前の騒ぎが終わった頃…とくにあの事を覚えている人物はおらず、俺は平穏な日々を送っていた。

ちなみに最近留学生が来たらしい。らしいというのは俺がそいつの名前も顔も知らないからだ。

まあ、そんなことは置いといていつものように始まる。

~午前7時~

「ふわぁ~~~あっと。ねむい・・・。」

俺は今、いつも通り散歩中。

ドンッ!

「ん?」

「きゃっ!」

え~~~っと、女子生徒にぶつかったらしい。

「あんた大丈夫か?」

「あ、ありがとうございます・・・」

「お気になさらず…それじゃ。」

「ちょっと待ってください！」

「なんだ？」

「お名前は？」

・・・なんかいやな予感がしてきた・・・・何か死亡フラグでも立ったんではないか？

「遠慮しておく…」

「いえ、教えてください！」

「・・・紫藤時雨だ。」

本当に嫌な予感がしてきた…

「紫藤時雨さんですか…覚えておきます。」

そう言って女子生徒は走り去って行った。なんだったんだ？

～昼休み～

「それ、東雲さんよ。」

「誰それ？」

「知らない？東雲玲、隠れた人気がある女の子。陰でかなり告白さ

れてるらしくてファンクラブまであるらしいわよ？」

「はあ、それでか。」

「「何が？」」

ビュッ！！

「「・・・・。」」

「これがだ。」

「何がこれがだ、だよ！何で矢が飛んでくるの！？」

「多分そのファンクラブっていうやつらだろ。朝から１５発飛んできてる。」

「そんなに！？」

「まあ、おもちゃだから大丈夫だろ。」

「おもちゃでも痛くねえか？」

「時雨さーん！」

「その原因が来てるけど…」

「あなたたちは時雨さんの友達ですか？」

「そうだけど？」

「そうですか～。」

ビュッ！！

「…なんですか、今の？」

「気にするな。」

「そこの貴様！！」

「ん？だれだ？」

なんか六人の集団が来た・・・

「われわれは玲さま親衛隊！玲さまにそれ以上近づくな！！」

「さもなくば・・・」

「さもなくば？」

「こうだ！！」

六人一斉にかかってきた。

～２０秒後～

「うっ・・・」

「つよ・・・」

「・・・・。」

全員返り討ちにしてやった。

「紫藤って喧嘩も強いのか？」

「まあな。」

「時雨さん強いんですね！」

ビュッ！！

どこに矢を持ってんだ？

「「「「「「もう我慢ならぬ！！貴様、俺たちとデュエルだ！！」

「・・・まあいいけど。俺が勝ったらもう矢は飛ばさないでくれ。」

「「「「「「「「「デュエル！！」」」」」」」」」

「って六人同時かよ！？」

「これなら貴様に勝ち目はあるまい！！」

「さっさと負けてしまえ！！」

「まあいい。新作デッキで片を付ける。俺のターン。」

誰でもわかると思うが、俺の新作デッキはコイントスだ。

「モンスターをセット。カードを二枚伏せて、ターンエンド。」

「オレのターン！ブラッド・ヴォルスを召喚！裏守備モンスターを攻撃！」

「魂を削る死霊は戦闘では破壊されない。」

ブラッド・ヴォルス　ＡＴＫ１９００

魂を削る死霊　ＤＥＦ２００

「くそ！カードを伏せて、ターンエンド！」

「オレのターン！モンスターをセット。カードをセット。ターンエンド！」

その後もファンクラブたちは何もせずターンを終了した。

「俺のターン。このデュエル、俺の勝ちだ。」

「「「「「「なんだと！？」」」」」」

（バカが・・・オレの伏せたカードはミラーフォース。攻撃したら自滅するぜ。）

（オレたちの勝ちだ・・・俺が伏せたのは魔法の筒。攻撃したらダメージを食らうぜ。）

（オレが伏せたのは炸裂装甲・・・攻撃したら自滅するぜ。）

（オレが伏せたのはミラーフォース。）

（オレが伏せたのは不協和音・・・シンクロはさせねえ。）

（オレが伏せたのはミラーフォース。）

「「「「「「フッフッフ…」」」」」」

なんか笑ってるが・・・気にしないでいいか。

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

「オレのターン！」

「永続罠、シモッチによる副作用。さらに罠、運命の別れ道2枚発動。」

「ちょっと待て、表を出したらシモッチでダメージに変わる。裏を出したらそのままダメージ・・・どっちみちダメージじゃねえか！」

「俺は表。お前は？」

「表だけど関係ねえーーー！！」

時雨　ＬＰ４０００→８０００

ファンＡ　ＬＰ４０００→０

「まず一人。」

「オレのターン！」

「永続罠、使いまわし。１ターンに１度、墓地の罠を任意の数だけ選択して、デッキから同じ枚数墓地に送り、選択した罠を発動する。２枚墓地に送り再び運命の分かれ道２枚発動。」

「オレもかーーーー！！」

時雨　ＬＰ８０００→１２０００

ファンＢ　ＬＰ４０００→０

「オレのターン！」

「使いまわしの効果で２枚墓地に送り、再び発動！！」

「うわああ！！」

時雨　ＬＰ１２０００→１６０００

ファンＣ　ＬＰ４０００→０

「オレの・・・」

「使いまわしの効果！！」

「まだ始めてねえ！！」

時雨　ＬＰ１６０００→２００００

ファンD　LP4000→0

「オ・・・」

「使いまわし!!」

「おおおおおおおおおおおい!!!!!!!!!」

時雨　LP20000→24000

ファンE　LP4000→0

「まさか…オレも?」

「使いまわし!!」

「つなげるとひどくね!?」

時雨　LP24000→28000

ファンF　LP4000→0

「「「・・・・なんかひどいような気がする。」」」

「「「「「くそっ!!覚えていろ!!」」」」」

「誰だっけ?」

「「「「「「早っ!?」」」」」」

なんだかよくわからん奴らは、泣きながらどこかへ走り去って行った。

「時雨さんってやっぱり強いんですね！」

「そうか？」

「そうですよ！」

「んじゃ、これからもよろしくな。」

「こちらこそ、東雲玲です！よろしくお願いします！」

「俺は川田俊！俺のほうもよろしく！」

「私は吉野由紀。よろしく、東雲さん。」

まあそんなこんなで東雲と仲良くなった。

嵐の後の静けさ（後書き）

何か新キャラ出してしまいました…。
これからつらくなりそうです。

出番（前書き）

今回は出番の少なかった由紀さんのデュエルです。

出番

「ところで最近、吉野ってデュエルしてなくないか？」

「言われてみればしてないよね。」

「そうね。」

現在、昼休みの雑談中。

「時雨さ～ん！」

「よお、東雲。ちょうどよかった。吉野とデュエルしてくれないか？」

「いいですよ♪」

「じゃあはじめましょ。」

「「デュエル！！」」

「私のターン！私は、神獣王バルバロスをリリースなしで通常召喚。この方法で召喚した場合、バルバロスの元々の攻撃力は、１９００となる。さらにニ重召喚を発動し、２体目のバルバロスを召喚。」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００

「命削りの宝札を発動。手札が５枚になるようドローし、５ターン後のスタンバイフェイズに全て捨てる。カードを２枚伏せてターン

エンド。」

「わたしのターン！」

「永続罠、スキルドレイン！ライフを１０００払い、フィールド上の全てのモンスターの効果を無効にする。これによりバルバロスの攻撃力は元に戻る！」

由紀　ＬＰ４０００→３０００

神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００→３０００

「わたしはサイクロンを発動！スキルドレインを破壊します！」

「カウンター罠、魔宮の賄賂！サイクロンを無効にして破壊！」

「くっ、わたしはモンスターをセットして、カードを3枚セット。ターンエンドです！」

「私のターン！手札の神機王ウルと、神獣王バルバロスを除外して、獣神機王バルバロスＵｒを特殊召喚！」

獣神機王バルバロスＵｒ　ＡＴＫ３８００

「私はハリケーンを発動！フィールドの魔法・罠を全て手札に戻す！」

「えっ！？でもそれじゃあ・・・」

「そう、スキルドレインが手札に戻りバルバロスＵｒは戦闘ダメー

ジを与えられない。だから速攻魔法、禁じられた聖杯を発動してバルバロスＵｒの効果を無効にして、攻撃力を４００ポイントアップ！」

獣神機王バルバロスＵｒ　ＡＴＫ３８００→４２００

「さらに手札から、抹殺の使徒を発動！裏側モンスターを除外！」

除外されたモンスターはマシュマロンだった。なんかごめんね。

「バルバロスＵｒでダイレクトアタック！」

「きゃあああああ！！」

玲　ＬＰ４０００→０

「「・・・・。」」

「やりすぎじゃないか？」

「そうね・・・」

結局、玲のデッキは何だったのかわからずにデュエルは終わってしまった。

「ところで・・・」

ヒュッ！！

ガン！！

「さっきからのそれは何？」

「見ての通り岩だが？」

「じゃなくて、なんで岩が飛んできてるの？」

「この前の奴が投げてきてるんだろ。矢は飛んでこなくなったが、今度は岩が飛んできた。」

「・・・ちなみに何回目？」

「6回目ぐらいだ。」

「おい貴様。よけるな！！」

「いや、よけなきゃダメだろ。」

「ならデュエルだ！オレが勝ったらおとなしくよけずに当たれ！」

「それは簡単にいえば死ねってか？んじゃ、オレが勝ったらもうなんかするのはやめてくれ。」

「いいだろう！！」

「「デュエル！！」」

「俺のターン。モンスターをセット。ターンエンド。」

「手札事故でも起こしたか！！オレのターン！光神機ー桜火を召喚

！」

光神機ー桜火　ＡＴＫ２４００

「バトル！桜火でモンスターを攻撃！」

「ダイス・ポットの効果発動。効果はわかっているよな？」

「今度はサイコロ！？」

「さすがにサイコロは無理じゃないの？」

「コイントスもサイコロも変わらないだろ？おら！」

時雨は空にサイコロを投げた。５秒後サイコロが落ちてきて出た目は…

「６だ。お前の番だ。」

「えっ？」

「分かっていると思うが、６以外の目を出したらお前の負けだからな？」

「ち、チクショーーーーー！！」

結局、そいつの出した目は１だった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

岩投げてきたやつ　ＬＰ４０００→０

「・・・お前もひどくね？」

「まあ、気にするな。」

その後、その岩を投げてきたやつは泣きながら走り去って行った。

「紫藤、おまえサイコロまで操作できんの？」

「だからさっきも言っただろ。サイコロもコイントスも両方とも力の加え加減でできんだよ。」

「やっぱお前すげえよ。」

「そうか？」

出番（後書き）

短かったです。

助っ人（前書き）

今回はなぜか部活の助っ人から始まります。

助っ人

「ボール！フォアボール！」

「・・・で何で時雨野球やってるんだ？」

「言ってなかったっけ？昨日うちの野球部の人に明日練習試合あるから助っ人にきてくれってせがまれたのよ。」

「んで、なんで今敬遠されたんだ？」

「それは・・・」

～約1時間前～

「1番、ライト、紫藤君。」

「助っ人で1番打者か…どんだけ頼りないんだうちの野球部は。」

「プレイ！」

ピッチャーが渾身のストレートを投げてきた。

カキィィィン！！

「ホームラン！！」

「～というわけで1回表の1球目で相手のエースが場外ホームラン打たれて、そのあと全部敬遠されてるの。」

「だからうちの野球部は10対1で負けてるのか。」

「ゲームセット!!」

「ありがとうございました!!」

「お前なんでもありだな。」

「球筋見えてるからな。」

「紫藤君!!」

「ああ、鈴木先輩。」

「この人は?」

「野球部のキャプテン。」

「紫藤君。君、才能あるよ。よければこのままうちの野球部に入ってくれないか?」

「残念ですがお断りします。」

「なんでだい!?」

「オレ部活はいる気ないので。」

「ならデュエルで勝負だ!!デュエルで僕が勝ったら野球部に入部してもらう!!」

「なんか最近こういうやつばかりのような気がするんだが?」

「オレが代わりにやってもいいか?」

「べつにいいが・・・」

「よし決まり!鈴木先輩!紫藤の代わりに俺がデュエルやります!オレが負けたら、紫藤を好き勝手に使ってやってください!」

「いいだろう!!」

「おいおい。」

「「デュエル!!」」

「僕のターン!!」

鈴木先輩の先攻で始まった。

「僕は、野球少年ーピッチを召喚!!」

野球少年ーピッチ　ＡＴＫ５００

「ピッチの効果、召喚時、相手に５００ポイントのダメージを与える!」

「うぉ！ボール投げてきた！」

俊　ＬＰ４０００→３５００

「さらにピッチがフィールドにいる時、野球少年ーキャッチを特殊召喚！！」

野球少年ーキャッチ　ＤＥＦ１０００

「キャッチの効果でピッチをリリースし、高校球児ーピッチをデッキから特殊召喚！！」

高校球児ーピッチ　ＡＴＫ１５００

「高校球児ーピッチの効果発動！野球少年ーキャッチをリリースし、高校球児ーキャッチを特殊召喚して、相手に１０００ポイントのダメージを与える！！」

「またかよ！」

俊　ＬＰ３５００→２５００

「さらに魔法カード、剛速球を発動！ピッチと名の付くモンスターがいる時、相手に１０００ポイントのダメージを与える！！」

「何回投げてくるんだよ！！痛！」

俊　ＬＰ２５００→１５００

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

「珍しく俊のライフが削られてる。まあ今までは俊が先攻ですぐに終わってたからな。」

てか、相手もバーンか。

「オレのターン！！ショット・ガンナーを召喚！」

ショット・ガンナー　ＡＴＫ１０００

「ショット・ガンナーの効果発動！相手に５００ポイントのダメージを与えて、デッキからチューナーモンスターを特殊召喚する！チューナーモンスター、バスター・シンクロンを特殊召喚！」

バスター・シンクロン　ＡＴＫ１５００

鈴木　ＬＰ４０００→３５００

「罠発動、牽制球！相手によって効果ダメージを受けた場合、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

「あぶね！後頭部狙うなよ！」

俊　ＬＰ１５００→５００

「レベル４のショット・ガンナーに、レベル４のバスター・シンクロンをチューニング！！

シンクロ召喚！！撃ち抜け、アトミック・フルバスター！」

アトミック・フルバスター　ＡＴＫ２８００

「あれが俊のエースか・・・」

「俺は、火炎地獄を発動！！お前に１０００ポイント、俺に５００ポイントのダメージを与える！！」

「なっ！？自滅する気か！？」

「フルバスターの効果発動！オレが受ける効果ダメージは全てお前に移る！！」

「そんな！？うぁ！！」

鈴木　ＬＰ３５００→２０００

「もう１枚、火炎地獄を発動！」

「うわ！！」

鈴木　ＬＰ２０００→５００

「フルバスターで、ピッチに攻撃！」

「キャッチの効果で攻撃を無効にする！！」

「フルバスターの効果、攻撃を無効にされた時、相手に６００ポイントのダメージを与える！」

「う、うぁあああああ！！」

鈴木　ＬＰ５００→０

「・・・・・・。」

「慰めてあげたら？」

「あのー、鈴木先輩？たまになら助っ人しますからそんなに落ち込まないでください。」

「・・・その時はよろしくたのむよ・・・・。」

「あー、久しぶりにデュエルした！！気持ちいい～～～！！」

初めて俊のモンスターを見た気がする。てか、１ターンキル・・・。

助っ人（後書き）

なんとなくオリカ新しいの出してしまいました。

オリカ紹介7（前書き）

前回までのオリカの紹介です。

オリカ紹介7

使いまわし
永続罠
1ターンに1度、自分の墓地に存在する罠を任意の数選択し、選択した枚数デッキから墓地へ送る。その後、選択した罠を発動する。このカードは、発動してから2回目の自分のスタンバイフェイズに破壊される。

野球少年ーピッチ
炎属性　戦士族　効果　レベル３　ＡＴＫ５００　ＤＥＦ３００
このカードの召喚時、相手に５００ポイントのダメージを与える。

野球少年ーキャッチ
炎属性　戦士族　効果　レベル３　ＡＴＫ３００　ＤＥＦ１０００
このカードは「野球少年ーピッチ」が自分フィールド上に存在するとき、特殊召喚できる。1ターンに1度、「野球少年ーピッチ」をリリースしてデッキから、「高校球児ーピッチ」を特殊召喚できる。

高校球児ーピッチ
炎属性　戦士族　効果　レベル５　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１０００
1ターンに1度、「野球少年ーキャッチ」をリリースしてデッキから、「高校球児ーキャッチ」を特殊召喚して、相手に１０００ポイントのダメージを与えることができる。

高校球児ーキャッチ
炎属性　戦士族　効果　レベル５　ＡＴＫ８００　ＤＥＦ２０００
1ターンに1度、相手の攻撃を無効にすることができる。フィールドに「バッチ」と名の付くモンスターいる時、「高校球児ーピッチ」

をリリースして、「プロ野球投手ーピッチ」をデッキから特殊召喚することができる。

剛速球
通常魔法
「ピッチ」と名の付くモンスターがいる時、相手に１０００ポイントのダメージを与える。

ショット・ガンナー
風属性　戦士族　効果　レベル４　ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ０
１ターンに１度、相手に５００ポイントのダメージを与えて、デッキからチューナーモンスターを特殊召喚できる。

牽制球
通常罠
相手から効果ダメージを受けた時、相手に１０００ポイントのダメージを与える。

バスター・シンクロン
地属性　機械族　チューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ８００
相手が効果ダメージを発動した時、墓地のこのカードを除外して、そのダメージを無効にする。

アトミック・フルバスター
風属性　戦士族　シンクロ・効果　レベル８　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ１０００
「バスター・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがフィールドに存在する限り、自分が受ける効果ダメージは相手が受ける。このカードの攻撃が無効にされた時、相手に６

００ポイントのダメージを与える。

オリカ紹介7（後書き）

多分鈴木先輩はもう出てこないと思います。

トリッキー（前書き）

今回は玲さんのデュエルです。やっとデッキを思いつきました。
タイトルを思いつくのに2時間かかりました。

トリッキー

今日も野球部の助っ人をやっているんだが…

カキィーーーーーーーン!!

「ホームラン!!」

という感じにウチが負けている。

ちなみに今はまだ1回だ。

～2時間後～

「ゲームセット!!」

「ありがとうございました!」

「よお、紫藤!今日もすげえ負けっぷりだったな!!」

「なんでうちの野球部はここまで弱いんだ?」

「さあ?でもすごいよな～、34対3って。」

「その3点は俺のだけどな。」

「て言うか、今日の試合の相手って甲子園の常連校じゃないですか。

」

「紫藤さ～ん！！」

「よう、東雲。」

「東雲さ～～ん！！」

また誰か来た。

「1年の桜木と言います！！東雲さん！！好きです！！付き合ってください！！」

「お断りします！！」

告白から玉砕まで1秒もかからなかった。

「わたし、まだ恋愛とかする気はないんだ～。」

「ならデュエルをしてください！！もし僕が勝ったら付き合ってください！！」

桜木はまだ諦めないつもりだ。

「お願いします！！」

「う～ん、わかったよ。もしわたしに勝てたら付き合ってあげる！！」

「ありがとうございます！！」

「「デュエル！！」」

「私のターン！！」

東雲のターンから始まった。そういえばこの前は、結局何もできずに吉野に負けたからデッキの内容が全然わからない。

「わたしは、未来融合ーフューチャー・フュージョンを発動！！アルカナ　ナイトジョーカーを選択して、デッキから「クィーンズ・ナイト」・「ジャックス・ナイト」・「キングス・ナイト」を墓地に送ります！！私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

「僕のターン！！」

「罠発動、８切り！！手札またはフィールドからレベル８のモンスターを墓地に送り、相手のターンを終了させる！！」

「えぇ！？」

桜木は何もできずターンを終了させられた。なんかかわいそうだな。

「今捨てた「伝説の魔術師　ジョーカー」の効果発動！！手札またはゲームから除外されているこのカードが墓地に送られた時、墓地から特殊召喚できる！！」

伝説の魔術師　ジョーカー　ＡＴＫ０

「私のターン！！ターンエンド！！」

何もしないで終わった。それともなにかあるのか？

「僕のターン！！」

「罠発動、８切り！！」

またか！！

「今捨てた「伝説の奇術師　エース」の効果発動！！フィールドに「伝説の魔術師　ジョーカー」が存在するときに墓地に送られた場合、墓地から特殊召喚できる！！」

伝説の奇術師　エース　ＡＴＫ？

「私のターン！！フューチャー・フュージョンの効果で、アルカナナイトジョーカーを特殊召喚！」

アルカナ　ナイトジョーカー　ＡＴＫ３８００

「エースの効果発動！！自分のターン中、このモンスターの攻撃力は自分フィールドの戦士または魔法使い族モンスター１体と同じになる！そしてジョーカーの効果、このカードの攻撃力は「伝説の奇術師　エース」と同じになる！」

伝説の奇術師　エース　ＡＴＫ？→３８００

伝説の魔術師　ジョーカー　ＡＴＫ０→３８００

攻撃力３８００が３体・・・

「3体で攻撃！！」

「うぁーーーーーーーーー！！」

桜木　LP4000→0

「いまいち東雲のデッキの内容がわからないんだが…」

「わたしのデッキは、トランプデッキです！」

「だから8切りか…」

「結局、桜木君のデッキってなんだったんでしょうか？」

「桜木君、自分のターン全部スキップされたからね。というかその8切りって禁止カード級じゃないの？」

「大丈夫ですよ、多分♪」

「多分って・・・」

トリッキー（後書き）

多分次の話でまた新しいキャラが出てきます。

キャラ&オリカ紹介

名前　東雲玲

身長　１５７ｃｍ

容姿　黒髪のロング

性格　明るい

陰ながらアカデミアで人気のある女子生徒。非公式であまり知られていないが、ファンクラブが存在する。（人数１７人）トランプは強いほうでとくに大富豪が得意。恋愛をする気は毛頭なく、夢は手品師。

使用デッキ　トランプデッキ

オリカ紹介

８切り
通常罠（禁止）
手札またはフィールドからレベル８のモンスターを１枚捨てて、相手のターンを終了する。

伝説の魔術師　ジョーカー
闇属性　魔法使い族　効果　レベル８　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
手札または除外されているこのカードが墓地に送られた時、墓地から特殊召喚できる。「伝説の奇術師　エース」が自分フィールド上に存在するとき、このカードの攻撃力は「伝説の奇術師　エース」

と同じになる。このカードが効果で破壊された時、このカードを除外する。

伝説の奇術師　エース
光属性　戦士族　効果　レベル８　ＡＴＫ？　ＤＥＦ０
自分フィールド上に「伝説の魔術師　ジョーカー」が存在するときにこのカードが墓地に送られる場合、墓地から特殊召喚できる。自分のターン中、このカードは自分フィールドの戦士族または魔法使い族モンスター１体の攻撃力と同じになる。

財布（前書き）

タイトルが思いつかずなぜかこんなタイトルになってしまいました。
新キャラの名字これでいいのか？

財布

今日は休日、街を散歩している。

「さて、どこに行こうか。」

という感じで、小一時間ほっつき歩いていたわけだが、

ぐぅ～～～。

「・・・・・。」

なぜかどこかから腹の鳴る音が聞こえてきた。音の鳴るほうを向いてみると…

「・・・・。」

なぜか人が倒れていた。

「あーー、大丈夫か?」

「め、飯・・・」

なんかベタな台詞のようだが・・・

～３０分後～

「くったくった～～～！！」

これまたベタな台詞・・・

「ありがとな！！腹が減ったから何か買って食べようとしたら、部屋に財布を忘れててさっきのところで限界が来てな～～。」

「そんな事態が起こるものなのか？」

「パフェ３つ追加！！」

「かしこまりました。」

「いくら喰うつもりだよ。」

「いくらでも！」

「俺の財布がもたん。」

「わかったよ、次ので最後にするよ。」

「４７３６円になります。」

大出費だな。

「そういえば自己紹介してなかったな。オレは木原尚ってんだ！おまえは？」

「紫藤時雨だ。」

「じゃあな！」

「ああ。」

そうして俺たちは別れた。

～後日～

「よぉ、紫藤！」

「木原、お前アカデミアの生徒だったのか。」

「言ってなかったっけ？」

「言ってねえよ。」

「まあ、それは置いといてデュエルしねえか？」

「唐突だな。まあいい。」

「デュエ・・・」」

「おーい、紫藤ーーー！！」

「俊か？」

「おっ、木原じゃん！」

「あっ、俊！！」

「いつものあれやっていいか？」

「言いぞ面白いし！！」

「では、ゴホン。・・・木ィィィィィィ原クゥゥゥゥゥゥン！！」

「・・・。」

「何がしたいんでしょう？」

「さあ？わかりません。」

「何なんだこの二人？」

「ん？中学からの知り合いだけど？」

「あー、そー・・・」

「改めてデュエルはじめてもいいか？」

「いいけど？」

「「デュエル！！」」

「俺のターン。オメガ・コアを召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「手札から１０オーダーを発動！・・・全部表！オメガ・パラディンを特殊召喚！」

オメガ・パラディン　ＡＴＫ３２００

「オメガ・パラディンの効果発動！このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、相手のデッキから１枚墓地へ送る！」

「デッキ破壊！？」

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・パラディンをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「攻撃力５０００！？」

「カードを２枚伏せて、ターンエンド。」

「オレのターン！」

どんな奴を出してくるか…

「オレは、ＭＳ－ティガーを召喚！」

ＭＳティガー　ＡＴＫ２００

「ＭＳ!?何だそれは?」

「マッド・サイエンティストの略だけど?」

「そうなのか・・・」

「ティガーの効果で、手札からＭＳ－フレッドを特殊召喚!」

ＭＳ－フレッド　ＡＴＫ１００

「レベル3のＭＳ－ティガーに、レベル2のＭＳ－フレッドをチューニング!!
シンクロ召喚!解析しろ、ＭＳ－マッド・ブレイン!!」

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２１００

「マッド・ブレインの効果で、デッキから、「ＭＳ」と名の付くモンスターを2体特殊召喚することができる!デッキから、ＭＳ－フィーテとＭＳ－ガーヅを特殊召喚!」

ＭＳ－フィーテ　ＡＴＫ３００

ＭＳ－ガーヅ　ＡＴＫ４００

「フィーテが特殊召喚された場合、自分フィールドに存在する「ＭＳ」と名の付くモンスターはダイレクトアタックできる!ガーヅが特殊召喚された場合、「ＭＳ」と名の付くモンスターの攻撃力を、このモンスターの攻撃力分アップする!」

ＭＳ－フィーテ　ＡＴＫ３００→７００

ＭＳ－ガーヅ　ＡＴＫ４００→８００

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２１００→２５００

「攻撃力アップにダイレクト付加だと！？」

「バトル！マッド・ブレインでダイレクトアタック！」

「うっ！」

時雨　ＬＰ４０００→１５００

「ガーヅでダイレクトアタック！」

「くっ！」

時雨　ＬＰ１５００→７００

「フィーテで止め！」

「罠発動、オメガ・ウォール！自分のライフが１０００より下の時、墓地の「オメガ」と名の付くモンスターを除外して、相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「くそっ！カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「俺のターン。オメガ・ドラゴンの効果発動！攻撃力を１０００ポイント下げて、このターン相手は罠を発動できない。そして魔法カード、協奏曲を発動！自分フィールドのシンクロモンスターを選択して、そのモンスターと同じレベルのシンクロモンスターを自分のエクストラデッキから特殊召喚する！ただしこの効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効化され、攻撃力が半分になる。オメガ・バニシング・ドラゴンを特殊召喚！」

オメガ・バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

「オメガ・バニシング・ドラゴンで、ガーヅを攻撃！」

「くっ！」

木原　ＬＰ４０００→２３００

ＭＳ－フィーテ　ＡＴＫ７００→３００

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２５００→２１００

「オメガ・ドラゴンで、フィーテに攻撃！」

「ぐぅぅぅっ！！」

木原　ＬＰ２３００→０

「負けた～～～～！！」

「結構強かったぞ。」

「そうか？」

「最後にマッド・ブレインで攻撃されてたらオメガ・ウォールは発動できなかったしな。」

「そうか・・・」

「ところで、さっきの木ィィィィィィ原クゥゥゥゥゥゥン！って何だ？」

「ある小説のキャラだよ。」

「そうなのか？」

「そうだよ。」

「まあ、そういうことだからこれからもよろしくな！紫藤！」

「こちらこそ！」

財布（後書き）

ネタが尽きそうです…

オリカ紹介9

オメガ・パラディン
光属性　戦士族　効果　レベル１０　ＡＴＫ３２００　ＤＥＦ２５００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、相手のデッキから1枚墓地へ送る。

ＭＳ－ティガー
闇属性　サイキック族　チューナー・効果　レベル３　ＡＴＫ２００　ＤＥＦ１５００
このカードは機械族としても扱う。このカードが召喚に成功した時、手札から「ＭＳ」と名の付くモンスターを特殊召喚できる。

ＭＳ－フレッド
闇属性　サイキック族　効果　レベル２　ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１７００
このカードは機械族としても扱う。このカードが召喚に成功した時、フィールド上の表側の罠を持ち主の手札に戻す。

ＭＳ－マッド・ブレイン
闇属性　サイキック族　シンクロ・効果　レベル５　ＡＴＫ２１００　ＤＥＦ２７００
「ＭＳ」と名の付くチューナー＋「ＭＳ」と名の付くチューナー以外のモンスター1体以上
このカードは機械族としても扱う。このカードのシンクロ召喚に成功した時、デッキまたは手札から「ＭＳ」と名の付くモンスター2体を特殊召喚する。

ＭＳ－フィーテ
闇属性　サイキック族　効果　レベル４　ＡＴＫ３００　ＤＥＦ１６００
このカードは機械族としても扱う。特殊召喚されたこのカードがフィールド上に存在する限り、「ＭＳ」と名の付くモンスターは直接攻撃ができる。

ＭＳ－ガーヅ
闇属性　サイキック族　効果　レベル３　ＡＴＫ４００　ＤＥＦ１２００
このカードは機械族としても扱う。特殊召喚されたこのカードがフィールド上に存在する限り、「ＭＳ」と名の付くモンスターの攻撃力は、このカードの攻撃力分アップする。

オメガ・ウォール
通常罠
ライフポイントが１０００以下の時に相手が攻撃宣言した場合のみ発動できる。墓地の「オメガ」と名の付くモンスターを1体ゲームから除外して、その攻撃を無効にする。

協奏曲
通常魔法
自分フィールドのシンクロモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターと同じレベルのシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚する。このカードの効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効となり、攻撃力が半分になる。

闇の復活（前書き）

今回、久々の闇のデュエルです。

闇の復活

俺は今、建設中のネオダイダロスブリッジの近くにいる。これが完成すれば、シティとサテライトは一つになり、街は急速な発展を遂げるだろう。

「・・・そろそろ帰るか。」

「待て…」

「？」

どこからか声がしたような・・・

「貴様から強いエネルギーを感じる・・・我とデュエルせよ・・・」

振り返るとそこには、黒い塊みたいなものが浮かんでいた。

「お前は誰だ？」

「我は地縛神・・・我が復活するための生贄となれ…」

「待った。まず地縛神の説明から頼む。」

「する必要はない・・・お前は我の生贄となるのだからな…」

「説明しないんなら、デュエルはしない。」

「・・・・・分かった。説明してやろう・・・」

それから約１０分、地縛神に地縛神についての説明をしてもらった。
まず、この前のトカゲと鳥はその地縛神というものらしい。さらにあの時の眼が黒い連中はダークシグナーというやつらで、不動遊星らシグナーとそのダークシグナーが５０００年周期で戦っているということなどを説明してもらった。

「なるほど…つまり、この前の騒ぎは、お前らの仕業だったのか。」

「そうだ・・・説明は済んだデュエルだ。」

「そうだったな。確か５０００年周期だったっけ？」

「そうだが？」

「なら暫く休暇をくれてやる。・・・２億年ほどな！！」

「なんだと！？」

「闇の決闘だろ？こっちにも神の力みたいなものがあるからな。」

そう、この前、呪いを解いてもらうためにゼウスと戦って呪いを解いてもらった後に、オメガ・クロニクル・ドラゴンを使用したから、なんか特殊能力みたいな物がついたらしい。

「その龍の力は時空の力をもっていて闇の力をはるか未来まで封印することができる。あとついでに壊れたものも修理できるようにな

っている。」

「修理って・・・ところでその封印できる期間ってどのぐらいなんだ？」

「２億年だ。」

「長っ！！」

「まあ、そういうことだから俺が勝ったら、４００００回くらいの戦いにお前参加できないから。」

「なるほどそこまでの力を持っているというわけか…面白い！！その力を持っている貴様を倒せば、それほどのエネルギーを我は手に入れられるわけだな！！」

「それじゃ、始めるか。」

「「デュエル！！」」

「俺のターン。あ。」

「どうした？手札事故でも起こしたか？」

「いや、事故じゃない。」

「では何だというのだ？」

「デッキを間違えた。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・ふはははははははははは!!!これはもはや我の勝ちは見えたな!!!!」

「いや、お前は何もせずに終わる。」

「なんだと?」

「俺はカードを3枚伏せて、ターンエンド。」

「どんなデッキかは知らんが、我のターン!」

「永続罠、シモッチによる副作用。お前のライフが回復する効果は全てダメージに変わる。そして罠発動、運命の分かれ道2枚。」

「そんなばかなぁぁぁぁぁ!!!??????」

「デッキ間違えたことは悪いけど、とりあえずじゃあな。」

「ちょっと待て!!今のはナシだ!!本気でデュエルS」

あ、消えた・・・

「敵だったけど、悪いことしたな・・・・。」

結局、地縛神と言う物の効果が全く分からず倒してしまった。とりあえず合掌しておこう…

闇の復活（後書き）

やっちゃいましたよ…

木ィィィィィィィ原クゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン紹介（前書き）

タイトルふざけました。
次の話のタイトルが決まらなかったので、キャラ紹介とさせていただきます。

木ィィィィィィィ原クゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン紹介

名前　木原尚

身長　１８５ｃｍ

容姿　顔に刺青ナシの優しい顔のあの人

性格　優しい

俊の中学からの親友。その名字から、あの人気小説のあの人のような呼ばれ方をする。ちなみに科学の勉強はかなり苦手。（水素の原素記号を間違える位）得意科目は家庭科。特に料理がうまい。とにかく大食いで、街の大食い大会でほとんど優勝している。

ニックネーム　木ィィィィィィィ原クゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン

使用デッキ　ＭＳデッキ（使用している理由は不明）

木「ちょっと待て。俺だって原素記号くらい間違えずに言えるぞ？」

それじゃあ酸素の元素記号は？」

木「・・・

師匠（前書き）

更新遅れました。

師匠

今日は休日だから、久しぶりに師匠に会いに行こう。

師匠と言うのは、俺にデュエルを教えてくれた人で、プロデュエリストの世界大会で優勝したことのある人だ。当然のことだが、その人には1度も勝てたことはない。俺の見解だが、あのゼウスとも互角にやりあえるんじゃないか？

というわけで、シティのあるところにあるその人の家に着いた。

「失礼します、師匠。」

「おー、よく来たな。」

「・・・・・・・・。」

「どうしたんだ？」

「師匠は俺が『師匠』というのをかなり嫌がる。お前は何者だ！」

「ち！ならデュエルで黙らせてやる！！」

「「デュエル！！」」

「俺のターン！！師匠のふりをしたことが気に食わねえ！！このターンで決めてやる！！ＦＩＮＡＬ・ＣＯＲＥを召喚！！」

ＦＩＮＡＬ・ＣＯＲＥ　ＡＴＫ０

このモンスターも一応オメガ・ドラゴンの進化形態の一つに必要なモンスターなんだが、その進化形態の効果が凶悪すぎて、いつもデッキから外しているが、今はそんなことを気にしていられるほどこのいらだちを抑えてられねえ。

「なんなんだ、そのモンスターは！？」

「説明する必要はねえ！！ＦＩＮＡＬ・ＣＯＲＥの効果発動！！デッキから『ＦＩＮＡＬ』と名の付くモンスター１体と、『オメガ』と名の付くモンスター２体を特殊召喚する！！ＦＩＮＡＬ・ＢＬＡＤＥとオメガ・コアとオメガ・パラディンを特殊召喚！！」

ＦＩＮＡＬ・ＢＬＡＤＥ　ＡＴＫ４０００

オメガ・コア　ＡＴＫ０

オメガ・パラディン　ＡＴＫ３２００

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・パラディンをチューニング！！
シンクロ召喚！！現れろ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「レベル２のＦＩＮＡＬ・ＣＯＲＥに、レベル１０のＦＩＮＡＬ・ＢＬＡＤＥをチューニング！！
シンクロ召喚！！ＴＨＥ・ＥＮＤ、シンクロチューナー、ＦＩＮＡＬ・ＤＲＡＧＯＮ！！」

ＦＩＮＡＬ・ＤＲＡＧＯＮ　ＡＴＫ５０００

「魔法カード、強制調整!!自分フィールドにシンクロモンスターが２体以上存在する場合、自分フィールドのシンクロモンスターのレベルの合計を１２にする!オメガ・ドラゴンとＦＩＮＡＬ・ＤＲＡＧＯＮのレベルを６にする!!
レベル６となったオメガ・ドラゴンに、ＦＩＮＡＬ・ＤＲＡＧＯＮをチューニング!!
アクセルシンクロ!!破滅させろ!!ＦＩＮＡＬ・Ω・ＤＲＡＧＯＮ!!」

ＦＩＮＡＬ・Ω・ＤＲＡＧＯＮ　ＡＴＫ０

「ＦＩＮＡＬ・Ω・ＤＲＡＧＯＮの効果発動!!墓地に存在するモンスター全て除外して、攻撃力の合計分相手にダメージを与える!!１７２００のダメージを食らってきえうせろぉぉぉぉぉぉぉ!!」

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!!!!!」

偽物　ＬＰ４０００→０

「おー、来てたのか時雨!!ところでそいつ誰だ!!」

「気にしないでください。今ぼろくそにやっつけた只の糞野郎です。」

「人に糞野郎とかはないだろ。まあでも、通報しとくか。」

結局あの男は空巣でそのまま警察に連れて行かれた。

「時雨、ここに来たってことは、久しぶりにデュエルしに来たのか？」

「はい！！」

「んじゃ、やるか！！」

真・師匠（前書き）

今回は師匠との対戦です。

1戦目はある意味すごい方法で時雨が負けます。

「師匠って言うな！！」

真・師匠

俺の師匠こと暮空神羅は元プロデュエリストだ。今日は神羅さんと戦う。

「今日こそは勝たせてもらいますよ、神羅さん！！」

「どれほど成長したか、俺に見せてみろ！！」

「「デュエル！！」」

「俺の・・・」

「悪い時雨。終了だ。」

「えっ？まさか・・・」

「ああ、エクゾディアだ…」

・・・そう、この人のデッキにはエクゾディアが入ってる。この人は公式戦で何度もエクゾディアを揃えている。ちなみにちゃんと機械のオートシャッフルで発生している。

現役時代は1ターン目にエクゾディアが揃ったことが21回もあって、幾度かデュエルディスクに細工している疑惑をもたれていた。

だが結局その疑惑は神羅さんの異常なほどのドロー力によって引き起こされたものだということで幕を閉じた。

そしてプロになってからたった1年で世界王者に輝いた。そしてまともにやりあえる相手がいなかったことで、プロを辞めてしまった。今はシティで近所の子供たちにデュエルを教えている。

エクゾディアも十分脅威だが、この人の切り札はエクゾディアじゃない。

「もう一度お願いします。」

「ああ。」

「「デュエル!!」」

「俺のターン!!早とちりを発動!!さらに罠収集を発動して便乗を3枚手札に加える!カードを4枚伏せて、天よりの宝札を発動し、お互いの手札が6枚になるようにドローする!!永続罠、便乗を3枚発動!!強欲な贈り物を発動して神羅さんは2枚ドロー、俺は6枚ドロー!カードを1枚伏せて、強欲な贈り物を発動して神羅さんは2枚、俺は6枚ドロー!!もう1枚強欲な贈り物を発動して神羅さんは2枚、俺は6枚ドロー。マジック・プランターを3枚発動して、6枚ドロー!!」

「もう手札が25枚か。相変わらずお前のドローは早いな。」

「あなたがくれたカードのおかげですよ。」

そう、早とちりも罠収集も、便乗も強欲な贈り物も神羅さんがくれたカードだ。

「でもそれじゃ、山札が残り3枚だぞ?」

「大丈夫ですよ。オメガ・コアを特殊召喚！効果でオメガ・パラディンを特殊召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

オメガ・パラディン　ＡＴＫ３２００→０

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・パラディンをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「久しぶりに見たな！そいつ。」

「アスタリスク・コアを特殊召喚！！アスタリスク・ソルジャーを２体特殊召喚！」

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００

「レベル２のアスタリスク・コアに、レベル３のアスタリスク・ソルジャー２体をチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、アスタリスク・ドラゴン！」

※ここから先、途中まで消えてしまったので攻撃力・守備力等は暫くスキップさせていただきます。
誠に申し訳ございません。

「ガーネット・コアを特殊召喚！クリムゾン・ビーストを特殊召喚！
レベル２のガーネット・コアに、レベル５のクリムゾン・ビースト
をチューニング！！
シンクロ召喚！紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コ
ア！」

「クリムゾン・コアの効果、（中略）
レベル１０となったクリムゾン・コアに、レベル１となったオメガ・
ドラゴンとアスタリスク・ドラゴンをチューニング！！小さな真紅
の星が、今ここに力を示す！デルタアクセルシンクロ！！！
紅く輝け、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊！！！」

「ステラ・コアを特殊召喚！ステラピースを召喚！
レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ピースをチューニ
ング！！
シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

「ニ重召喚を発動！バニシング・コアを召喚！バニシング・ギアを
特殊召喚！
レベル２のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・ギアをチ
ューニング！！
シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴ
ン！」

「死者蘇生を発動して、オメガ・ドラゴンを特殊召喚！ステラ・ド
ラゴンの効果（中略）
レベル６のステラ・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴ
ンをチューニング！！
アクセルシンクロ！！照らし出せ、ステラ・オメガ・ドラゴン！」

「カードをセットして、伏せカードオープン！リビングデッドの呼び声！オメガ・ドラゴンを特殊召喚！バニシング・ドラゴンの効果（中略）
レベル６のバニシング・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！
アクセルシンクロ！！殲滅せよ、バニシング・オメガ・ドラゴン！」

「魔法石の採掘を発動して、死者蘇生を回収。死者蘇生を発動して、クリムゾン・コアを特殊召喚！
クリムゾン・コアの効果（中略）
レベル１０となったクリムゾン・コアに、レベル１となったステラ・ドラゴンとバニシング・ドラゴンをチューニング！！光と闇の竜交わりし時、ここに新たな力が誕生する！デルタアクセルシンクロ！！！重複せよ、オメガ・カオス・ドラゴン！！」

「カードを４枚伏せて、罠発動、局地的大ハリケーン！手札と墓地のカードを全てデッキに戻しシャッフルする！ターンエンド！」

「やっと俺のターンか…結構強くなったみたいだな。でも、まだまだだな。」

「今日こそあなたに勝たせてもらいます！」

「いや、俺の勝ちは決まった。俺は魔法カード、神樹　セフィロトを発動！」

「（あのカードは！）クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊の効果で発動を無効にする！」

「やはりそう来たか。だが甘い！フィールド魔法、エデンの園を発動！そして魔法カード、聖書を発動！チューナーモンスター、楽園の使者を召喚！そして聖書の効果を発動！発動したターンにチューナーモンスターを召喚・特殊召喚に成功した場合、聖職者トークンを空いているモンスターゾーンに特殊召喚する！聖職者トークン４体を特殊召喚！」

※ここから攻守等を加えます。

楽園の使者　ＡＴＫ１０００

聖職者トークン　ＡＴＫ２００

「レベル４の楽園の使者に、レベル２の聖職者トークン４体をチューニング！！
シンクロ召喚！愛を語れ、アダム！！」

アダム　ＡＴＫ１０００

「まずい・・・あのカードが来たら…」

「手札から魔法カード、楽園の鍵を発動！墓地に存在するチューナーモンスターを除外して、同名カードを手札に加える！楽園の使者を除外して楽園の使者をデッキから手札に加える！そして楽園の使者の効果、カードの効果によってデッキから手札に加えられた時、手札から特殊召喚する！そして聖書の効果で、聖職者トークン３体を特殊召喚！」

「やばい・・・終わった・・・・」

「楽園の使者をリリースして、チューナーモンスター、楽園の輝きを特殊召喚！」

楽園の輝き　ＡＴＫ０

「レベル６の楽園の輝きに、レベル２の聖職者トークン３体をチューニング！！

シンクロ召喚！愛を紡げ、イヴ！」

イヴ　ＡＴＫ１０００

「この瞬間、エデンの園の効果発動！このカードを発動したターン内にアダムとイヴが破壊されずシンクロ召喚の成功して、２体そろった場合、この勝負に勝利する！」

言い忘れていたが、神羅さんの公式戦計１０３５試合全ての試合は、１ターン以内に終わっている。

「結局勝てなかった。」

「まあ、まだまだってことだな！もっと強くなってもう一度挑んで来い！」

「はい！」

真・師匠（後書き）

強すぎると思うのは自分だけでしょうか？

神羅さん紹介（前書き）

今回は師匠こと、神羅さんの紹介とさせていただきます。

神羅さん紹介

名前　暮空神羅

身長１８０ｃｍ

容姿　白と金のセミロングで顔形が整っている。

性格　気さく

時雨の師匠。元プロデュエリストで出た試合は必ず勝利する、元世界チャンピオン。スタンディング・デュエル、ライディングデュエルともに負けたことがなく、全てのデュエルに１ターンで勝利し、生まれてから受けたダメージ（戦闘・効果）を全て足しても０ダメージの世界記録がある。（更新中）師匠と呼ばれることは嫌いだが、先生や先輩などはいいらしい。ちなみにプロを辞めた理由は、「いつまでたっても俺にダメージを与えることができるやつが現れねえんなら、世界の頂点に居てもつまんねえや。」とのこと。今は近所の子供にデュエルの仕方などを教えている。なお、プロ復帰を望む声は未だ世界各地から聞こえてくる。

使用デッキ　ストーリーデッキ（聖書などの話をモデルにしたカードばかり）

Ｄホイール　ワールド・ホープ　白と金の色のＤホイール

オリカ紹介１０（前書き）

ついに１０回目を迎えました。

オリカ紹介１０

ＦＩＮＡＬ・ＣＯＲＥ
闇属性　機械族　チューナー・効果　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このモンスターが召喚に成功した時、デッキから「ＦＩＮＡＬ」と名の付くモンスター１体と「オメガ」と名の付くモンスター２体を特殊召喚できる。

ＦＩＮＡＬ・ＢＬＡＤＥ
闇属性　戦士族　効果　レベル１０　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ０
このカードが相手モンスターを破壊した時、相手は破壊されたモンスターを除外することで、そのターンのダメージを０にする。

ＦＩＮＡＬ・ＤＲＡＧＯＮ
闇属性　ドラゴン族　シンクロ・チューナー・効果　ＡＴＫ５００　０　ＤＥＦ０
「ＦＩＮＡＬ・ＣＯＲＥ」＋「ＦＩＮＡＬ」と名の付くモンスター１体以上
このカードはシンクロ召喚でのみ特殊召喚できる。相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をすることができる。

強制調整
通常魔法
自分フィールド上にシンクロモンスターが２体以上存在する場合のみ発動できる。自分フィールド上のシンクロモンスターのレベルの合計を１２にする。このカードを発動したプレイヤーは、このカードを発動したターンのエンドフェイズに、効果の対象となったシンクロモンスターの攻撃力の合計分のダメージを受ける。

ＦＩＮＡＬ・Ω・ＤＲＡＧＯＮ
闇属性　ドラゴン族　アクセルシンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
「ＦＩＮＡＬ・ＤＲＡＧＯＮ」＋「オメガ・ドラゴン」
１ターンに１度、墓地に存在するモンスターを全てゲームから除外して、除外したモンスターの攻撃力の合計分のダメージを相手に与える。

神樹　セフィロト
通常魔法
このカードを発動したターンに自分のデッキが０枚になった場合、自分はこのゲームに勝利する。

エデンの園
フィールド魔法
このカードがフィールドに存在する限り、相手は効果ダメージを発動できない。このカードを発動したターンに「アダム」と「イヴ」をシンクロ召喚に成功して破壊されず、２体そろった場合、このゲームに勝利する。

聖書
永続魔法
自分フィールド上にチューナーモンスターが召喚・特殊召喚された時、空いている自分フィールド全てに「聖職者トークン」（光属性・天使族・攻守２００）を特殊召喚する。

楽園の使者
光属性　天使族　チューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ０

このカードがデッキから手札に加わった時、手札から特殊召喚する。

アダム
光属性　天使族　シンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ１０００
ＤＥＦ４０００
光属性・天使族チューナー１体＋光属性・天使族モンスター４体
自分フィールド上に「イヴ」が存在する場合、このカードの元々の攻撃力・守備力は４０００となり、効果では破壊されない。自分フィールドの「イヴ」が破壊された時、フィールドのカードを全て破壊する。

楽園の鍵
通常魔法
墓地のチューナーを除外して、デッキから同名モンスターを手札に加える。

楽園の輝き
光属性　天使族　チューナー・効果　レベル６　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分フィールドの光属性・天使族チューナーをリリースして特殊召喚することができる。このカードを素材としたシンクロモンスターの特殊召喚は無効にされない。

イヴ
光属性　天使族　シンクロ・効果　レベル１２　ＡＴＫ１０００
ＤＥＦ１０００
光属性・天使族チューナー１体＋光属性・天使族モンスター３体
自分フィールド上に「アダム」が存在する場合、このカードの元々の攻撃力・守備力は４０００となり効果では破壊されない。自分フィールドの「アダム」がフィールドを離れた時、相手の手札を全て墓地に送る。

特別講師（前書き）

今回、あの人がアカデミアに来ます。

・・・大丈夫か？

特別講師

今日は授業があり、なんでも先生が急に体調崩して、知り合いに頼んだらしい。大丈夫か？この学校？

「・・・というわけで、今日は臨時教師がきてるのでありマス。入りなさい。」

そう言われて出てきたのは、

「どーも。臨時で呼ばれた暮空です。」

「！！！！！！！？？？？？？？」

「ん？どうしたんだ？紫藤？」

「なんであの人がここに来たんだ？」

「あの人と知り合いなのか？」

「俺にデュエル教えてくれた人だ…」

「へえ～～～、でもあの人元プロデュエリストの暮空神羅って人にそっくりだな～～。」

「いや、あれは本人だ。」

「へえ～～～～、・・・・・・・はあ！？」

「神羅さん!!なんでこんなところに来たんですか!!?」

「あ、時雨、いたのか。え～と、まあ、それはだなあ・・・」

～昨夜深夜0時～

神羅の家の電話が鳴り響いていた。

「こんな時間に誰だよ…ああ、真田か。もしもし、さなだ、こんな夜中に何の用だ?」

「ああ神羅か、いや今日ちょっと体調崩してな、代わりに明日学校に行ってくれないか?」

「俺は教師じゃないんだが…」

「校長に『元世界チャンピオンに頼んでもいいですか?』って頼んでみたら許可もらえたから。じゃ、あとはよろしく♪」

「おいちょっと…あいつ切りやがった・・・しかたない、いくか・・・」

「っていうことがあってだな…」

「・・・・ご苦労様です。」

「いやいいよ。」

「そうゆうわけで、今日の実技の時間はこの暮空神羅さんに挑戦することができマス。」

クラス中からなんか歓声みたいな声が聞こえてきた。

そんなわけで放課後まで学校中の生徒がデュエルを申し込んだわけなんだが・・・

当然のように、挑んだ生徒全員がダメージを与えることができず1キルされた。

「いや～～、最近の子供たちのデッキはいろんなのが多くて面白いな～～。」

「神羅さん、もう少し手加減してあげてください。」

「全力でやらないと相手に失礼だろ。」

「そうですけど…。」

「神羅さん、次は俺とお願いします。」

「おお、おまえはさっき時雨と一緒にいた・・・」

「川田俊です。よろしくお願いします。」

俊と神羅さんのデュエル・・・俊はどこまでやれるか・・・・

「んじゃ、お互い楽しもうぜ！」

「はい！」

特別講師（後書き）

次回、俊対神羅さんです。

激突！！（前書き）

今回はフルバーン使いの俊ＶＳ元世界チャンプの神羅さんの対決です！！
はたして、俊は勝つことができるのだろうか？

紫「おまえがそんなこと言ってもだれも興味をそそらないと思うが？」

まあね。

激突！！

ついに俊と神羅さんのデュエルが始まる。

「神羅さん、このデュエルであなたの無敗記録とノーダメージの記録を破らせてもらいます。」

「おー、最近の若い子は元気がいいね。でもどんなデッキでも全力で勝負するだけだ。」

「「デュエル！！」」

「俺のターン！！」

俊のターンから始まった。

「フィールドにカードが存在しない場合、このモンスターは特殊召喚できる。グロック・シンクロンを特殊召喚！」

グロック・シンクロン　ＡＴＫ８００

「そしてグロック・シンクロンがフィールドに存在するとき、このモンスターは特殊召喚できる！ベレッタ・シンクロンを特殊召喚！」

ベレッタ・シンクロン　ＡＴＫ７００

「レベル１のベレッタ・シンクロンに、レベル１のグロック・シンクロンをチューニング！！

シンクロ召喚！！銃弾装填、シンクロチューナー、ガトリング・Ｘ・

シンクロン！！」

ガトリング・Ｘ・シンクロン　ＡＴＫ１４００

「ガトリング・Ｘ・シンクロンの効果発動！デッキから1枚ドローして、チューナーだった場合、特殊召喚できる！俺がひいたのは、バスター・シンクロン！バスター・シンクロンを特殊召喚！」

バスター・シンクロン　ＡＴＫ１５００

「ショット・ガンナーを召喚！」

ショット・ガンナー　ＡＴＫ１０００

「レベル４のショット・ガンナーに、レベル４のバスター・シンクロンをチューニング！！
シンクロ召喚！！撃ち抜け、アトミック・フルバスター！！」

アトミック・フルバスター　ＡＴＫ２８００

「手札から魔法カード、火炎地獄発動！！アトミック・フルバスターの効果で自分が受けるダメージは相手が受ける！！」

いつも通り早く効果ダメージを発動した俊。神羅さんのノーダメージ記録が終わりを告げるのかと誰もが思ったその時・・・

「手札から罠発動！信者の祈り！！」

「手札から罠！？」

「信者の祈りは、相手フィールドにのみカードが存在して、相手が効果ダメージを発生させる効果を発動したときのみ手札から発動できる!!このターン相手が発動した効果ダメージは相手が受けなければならない!!」

「強制だと!?うわああ!!」

俊　ＬＰ４０００→２５００

「でもまだまだ!!レベル２のガトリング・シンクロンに、レベル８のアトミック・フルバスターをチューニング!!アクセルシンクロ!!全てを打ち抜け、ブレイブ・クロスブラスター!!」

ブレイブ・クロスブラスター　ＡＴＫ３６００

「俊がアクセルシンクロモンスターを!?」

「カードを２枚伏せて、ターンエンド!!」

「俺のターン!!」

「罠カード、仕込みマシンガンを２枚発動!!相手の手札とフィールドの合計×２００ポイントのダメージを与える!さらにブレイブ・クロスブラスターの効果で相手が受ける効果ダメージは２倍になり、無効にすることはできない!!よって、手札の枚数５枚×２００×２×２で合計４０００ダメージを与える!」

仕込みマシンガンがブレイブ・クロスブラスターの効果で強化され、神羅さんに全て当たった。

誰もが俊の勝利を確信したその時、

「・・・嘘だろ？」

神羅　ＬＰ４０００→８０００

「手札から罠、救いの光を発動させてもらった。」

「ばかな!?ダメージは無効にはできないはず!?」

「救いの光は自分フィールドにカードが存在せず、相手が効果ダメージを発動したときのみ手札から発動できる。そしてこのターン発生する効果ダメージを、回復に変換する。」

やっぱり無茶苦茶だ、この人のデッキは・・・。

「手札から魔法カード、神樹　セフィロトを発動!!そしてカードを2枚伏せて、天よりの宝札を発動!!お互いに手札が6枚になるようドローする!!そして楽園の使者が手札に加わった時、手札から特殊召喚できる!!楽園の使者を特殊召喚!!」

楽園の使者　ＡＴＫ１０００

「そしてモンスターをセットして、さっき伏せた太陽の書を発動!!メタモル・ポッドの効果発動!!
お互いに手札を全て捨てて、５枚ドローする!!さらに伏せてあった手札抹殺を発動!!手札を全て捨ててデッキから捨てた枚数ドローする!!手札から魔法石の採掘を発動!!手札を2枚捨てて、墓地の天よりの宝札を手札に加える!!カードを1枚伏せて、天よりの宝札をを発動!!再び6枚ドロー!!手札から月の書を発動!!

メタモル・ポッドを裏に!!」

メタモル・ポッド　ＡＴＫ７００

「なあ紫藤？もしかしてこれって・・・」

「多分お前が考えていることはあってる。」

「さらに手札から魔法石の採掘を発動!!手札を2枚捨てて、墓地の天よりの宝札を手札に加える!!
カードを1枚伏せて、天よりの宝札を発動!!再び6枚ドロー!!
速攻魔法、手札断殺!!お互いに手札を2枚捨てて、2枚ドローする!!さらに手札断殺を2枚発動!!神樹　セフィロトの効果発動!!このカードを発動したターン内に、自分のデッキが0になった場合、この勝負に勝利する!!俺の勝ちだ!!」

「・・・強すぎだよ…ありがとうございました!!」

結局この日、神羅さんに挑んだ生徒は全員1キルされて、教師陣まで全員1キルされた。当然神羅さんはダメージを受けてない。東雲も吉野も木原も全員1キルされた。

「強すぎません？」

「それがあの人だから・・・ところで俊、どうしてお前シンクロチューナーを持ってたんだ？」

「ああ、この前父さんに渡されてさ…」

「父さん？」

「俊よ、お前に渡すものがある。お前は完全にそのデッキを使いこなせている。だからこのカードを渡そう。」

「ってことがあってな。」

「そうなのか・・・」

その日、なんで俊の父親はシンクロチューナーを持っていたんだろうって疑問を思いながら帰った。

オリカ紹介　チート軍団（前書き）

今回は、前回の話に出てきたオリカを紹介していきたいと思います。

オリカ紹介　チート軍団

グロック・シンクロン
風属性　機械族　チューナー・効果　レベル１　ＡＴＫ８００　ＤＥＦ３００
フィールドにカードが存在しない場合、このカードは特殊召喚できる。

ベレッタ・シンクロン
炎属性　機械族　チューナー・効果　レベル１　ＡＴＫ７００　ＤＥＦ４００
このカードは自分フィールドに「グロック・シンクロン」が存在するとき、特殊召喚できる。

ガトリング・Ｘ・シンクロン
炎属性　機械族　シンクロ・チューナー・効果　レベル２　ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ８００
レベル１チューナー＋レベル１チューナー
１ターンに１度、デッキから１枚ドローする。そのカードがチューナーだった場合、そのモンスターを特殊召喚できる。他の場合、デッキの１番下に戻す。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

信者の祈り
通常罠
相手フィールド上にのみカードが存在し、相手が効果ダメージを発生させる効果を発動したときのみ手札から発動できる。このターン、相手が発生させた効果ダメージは全て相手が受けなければならない。

ブレイブ・クロスブラスター
炎属性　戦士族　アクセルシンクロ・効果　レベル１０　ＡＴＫ３６００　ＤＥＦ２７００
シンクロモンスターのチューナー１体＋「アトミック・フルバスター」
自分が効果ダメージを発生させた時、その効果ダメージは２倍になり、無効にできない。相手モンスターの効果発動時、または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードを除外することでそのターンの相手モンスター１体の攻撃を無効にし、相手に１０００ポイントのダメージを与える。エンドフェイズ時、この効果で除外されたこのカードを特殊召喚する。

救いの光
通常罠
自分フィールドにカードが存在しない時に相手が効果ダメージを発動させた場合のみ、手札から発動できる。このターン、自分が受ける効果ダメージは、ライフを回復する効果に変わる。

闇の使い手（前書き）

今回、最近よく見るようになったアレを出してみたいと思います。

闇の使い手

「フッフッフ・・・ついに、ついにオレは闇の力を手に入れたぞ！！フッハハハハハハハハハハハハハハハハハハ・・・」

「はいそこうるさい。」

「げぼっ！？」

今俺はアカデミアの中を歩いていて、変な奴と遭遇した。どこら辺が変かと言うと、とりあえず今『闇の力を手に入れた』とか言っていたことと、笑い方があまりにも古臭い初期の悪の親玉っぽい所とかだ。

「お前、いきなり何をする！？」

「何って、どこか頭でも打ったのかと思って、思いっきり叩いてみたわけなんだが？」

「叩くなよ！！普通叩くか！？なんか画面があまり映らないテレビみたいに叩くか！？」

「以外に細かい奴だな…」

「どうでもいいさ！そうだ、お前で今手に入れた闇の力を試してやる！！」

「どうでもいいのかよ・・・それより闇の力を手に入れたって、一体何のことだ？」

「フッフッフ…聞いて驚け！！見て驚け！！このカードのことだぁぁぁぁぁ！！」

言い方まで古いような・・・

「えーっと・・・邪神アバターに邪神イレイザー、邪神ドレッドルート？」

「その通り！！オレはついに、邪神の力を手に入れたんだ！！ヒャッハーーーーーー！！」

・・・今度は変な笑い方を始めやがった。

「このカードはなぁ、本来この世界に存在するはずのないカード。しかし俺は手に入れた！この最強の力をォォォォォォ！！」

しゃべり方まで変になってる…

「で、その邪神の力を手に入れて、お前は何をしたいわけ？」

「世界征服だ！！」

・・・こいつ頭大丈夫か？一度病院に行って診察してもらったほうがいいんじゃねえのか？それにしても何とも子供じみた目的だ。世界征服なんて今どき考えているのは単なる厨二病患者か、まだ世の中を知らない小さい子供たちぐらいなもんだぞ？

「まずは手始めに、お前から叩き伏せてくれるわぁぁアぁぁぁぁぁアぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

本当に変だよこいつ・・・

「なんで俺から？」

「今、俺のことを叩いたからに決まってるダロォォォォがァァァァァァ！！」

めちゃくちゃしょぼい理由で目を付けられた。

「まあいいか、んじゃ、俺が勝ったらそのカードはとりあえず没収ということで。」

「いいだろう！どうせお前は俺に勝てるはずがないのだからなァァァ！！」

「ついに言葉まで変になったのか…」

「なんだとォ！」

「さっさと始めよう。」

「「デュエル！！」」

「俺のターン。１０オーダーを発動。・・・全部表だ。デッキから、オメガ・パラディンを特殊召喚！！」

オメガ・パラディン　ＡＴＫ３２００

「オメガ・パラディンが特殊召喚された時、相手のデッキから１枚

墓地に送る。」

「くそっ！！・・・ってああ！！邪神アバターがァァ！？」

ああ、さっきの邪神って言ってた奴か。なんか悪いことしたか。

「オメガ・コアを召喚。」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・パラディンをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「カードを３枚伏せて、天よりの宝札を発動。お互い手札が６枚になるようにドローする。ターンエンド。」

「オレのターン！フハハハハハハハ…」

「もうその笑い方はやめてくれ。」

「チッ！わかったよ！オレは手札から魔法カード、闇の宴を発動！！手札を３枚捨てることで、
暗闇の化身トークン３体を特殊召喚！！」

暗闇の化身トークン　ＡＴＫ０

「そして暗闇の化身トークン３体をリリースして、現れろ、邪神ド

レッドルート！！」

邪神ドレッドルート　ＡＴＫ４０００

攻撃力４０００か・・・邪神と言うからどんなものかと思ったが・・・

「ドレッドルートの効果発動！このカードがフィールド上に存在する限り、このカード以外のモンスターの攻撃力と守備力は半分になる！！」

「マジかよ！？」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

「バトル！！ドレッドルートで、オメガ・ドラゴンに攻撃！！」

「罠発動、ハーフｏｒストップ！相手はバトルフェイズ終了時まで自分のモンスターの攻撃力を半分にするか、バトルフェイズを終了させるかどちらかを選ぶ！！」

「くそ！！バトルフェイズを終了し、カードを2枚セット！ターンエンド！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ２５００→１５００

「俺のターン！アスタリスク・コアを特殊召喚！アスタリスク・ソルジャー2体を特殊召喚！！」

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００→６００

「レベル２のアスタリスク・コアに、レベル３のアスタリスク・ソルジャーをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、アスタリスク・ドラゴン！！」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００→１５００

「そして自分フィールド上のモンスターの攻撃力を半分にすることで、このモンスターは特殊召喚できる！ディバイド・コアを特殊召喚！」

ディバイド・コア　ＡＴＫ６００→３００

「ディバイド・コアの効果発動！このカードの攻撃力が半分になった時、デッキから「ディバイド」と名の付いたモンスターを特殊召喚できる！ディバイド・フィストを特殊召喚！」

ディバイド・フィスト　ＡＴＫ７００→３５０

「ディバイド・フィストの効果発動！このモンスターの攻撃力が半分になった時、フィールドのモンスター１体の攻撃力を１０００ポイントダウンさせる！」

「ドレッドルートの効果を逆手に取ったってか！？しかしそんなことをしても、ドレッドルートを倒すことはできねえゾォォォ！！」

邪神ドレッドルート　ＡＴＫ４０００→３０００

「レベル2のディバイド・コアに、レベル2のディバイド・フィストをチューニング!!
シンクロ召喚!分けろ、シンクロチューナー、ディバイドラゴン!」

ディバイドラゴン　ＡＴＫ１８００↓９００

「ディバイドラゴンの効果発動!1ターンに1度、自分フィールドの全てのモンスターのレベルを半分にする!」

「今更そんな事をしたところで何になる?ハハハハハハハハアハハアハハハアハッハアハハ・・・」

「途中の笑い方が変になってるぞ!?」

「何が変だとォ!?」

「そんなことは無視させてもらう!!レベル2となったディバイドラゴンに、レベル4となったアスタリスク・ドラゴンと、レベル6となったオメガ・ドラゴンをチューニング!!光の竜よ、今ここに交錯せよ!デルタアクセルシンクロ!!!分断せよ、オメガ・ディバイド・ドラゴン!!!」

オメガ・ディバイド・ドラゴン　ＡＴＫ５０００↓２５００

「せっかく攻撃力５０００のモンスターを出してもドレッドルートの前では何の役にもたたぬわあ!!」

もはや北斗の拳のラオウみたいな口調になってる・・・

「オメガ・ディバイド・ドラゴンの効果発動!このモンスターの攻

撃力が半分になった時、このモンスターの攻撃力を倍にする!!」

オメガ・ディバイド・ドラゴン　ＡＴＫ２５００→５０００

「ドレッドルートの攻撃力を上回っただと!?」

やっと口調が元に戻ったか…

「さらにハリケーンを発動!!」

「チッ!!」

「そして、命削りの宝札を発動!!手札が5枚になるようドローする!!・・・このターンで終わりだ!速攻魔法、禁じられた聖杯を発動!!ドレッドルートの攻撃力を４００ポイントアップさせ、効果を無効にする!!」

「何ィ!!??」

邪神ドレッドルート　ＡＴＫ３０００→３４００

オメガ・ディバイド・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→１００００

「攻撃力１００００だとォ!!??」

また口調が変になった・・・

「バトル!!オメガ・ディバイド・ドラゴンで、ドレッドルートを攻撃!!」

変人　ＬＰ４０００→０

「んじゃ、これはオレが回収しておく。じゃあな。」

「邪神が～～～～。」

この邪神っていうカードは何か危険な雰囲気がする。とりあえず今のところ問題はなさそうだが、厳重に保管しておかなくてはいけない。

闇の使い手（後書き）

日を跨いでしまいました。とりあえず邪神3枚を保管しておくことになった主人公。このあとどうなってしまうのか？

紫「だからお前が言っても誰も興味をそそらないから。」

申し訳ございません。

オリカ紹介１２（前書き）

以外にオリカが大量に登場しました。

今回でちょうど１００枚目のオリカでした。地味にうれしいです。

オリカ紹介１２

闇の宴
通常魔法
手札を３枚捨てて、暗闇の化身トークン（闇属性・悪魔族・レベル１・攻／守０）を３体特殊召喚する。

ディバイド・コア
光属性　機械族　チューナー・効果　レベル２　ＡＴＫ６００　ＤＥＦ１０００
このモンスターの攻撃力が半分になった時、デッキから「ディバイド」と名の付いたモンスターを特殊召喚できる。

ディバイド・フィスト
光属性　戦士族　効果　レベル２　ＡＴＫ７００　ＤＥＦ１００
このモンスターの攻撃力が半分になった時、フィールドのモンスター１体の攻撃力を１０００ポイント下げる。

ディバイドラゴン
光属性　ドラゴン族　シンクロ・チューナー・効果　レベル４　ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ１２００
「ディバイド・コア」＋チューナー以外の「ディバイド」と名の付いたモンスター１体
１ターンに１度、自分フィールド上の全てのモンスターのレベルを半分にする。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールドに表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

オメガ・ディバイド・ドラゴン

光属性　ドラゴン族　デルタアクセルシンクロ・効果　レベル１２
ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ２５００
「ディバイドラゴン」＋「オメガ・ドラゴン」＋「アスタリスク・ドラゴン」
このモンスターは効果では破壊されない。このモンスターの攻撃力が半分になった時、このモンスターの攻撃力を倍にする。１ターンに１度、相手がモンスターを特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力を半分にすることができる。このモンスターが破壊された時、墓地から「オメガ・ドラゴン」を特殊召喚する。

オリカ紹介１２（後書き）

シンクロモンスターで１００枚目を迎えるとは思いませんでした。

これからも精進していきます！よろしくお願いします！

番外編　邪神のカードの処分について（前書き）

今回の話は前回の話に出てきた邪神のカードについてです。

番外編　邪神のカードの処分について

「・・・・どうするか・・・」

現在、邪神のカード3枚はゼウスにもらった額縁に入れてある。

なんでも、『闇封じの額縁』とか言って、闇の力を封じる効果があるらしく、額縁に何か入れたもの以外には破壊することも分解することもできないという何とも便利（？）な一品だ。

とはいえ、このまま持っているのも何なので、番外編だからという理由でまあこんなことをやるのも気が引けるが一応邪神の処分についてアンケートを取ってみたいと思う。

A，シュレッダーにかける

B，焼却炉に入れる

C，河に流す

D，手で破り捨てる

E，申し訳ないと思いつつ、誰かの小説に送りこむ

F，このまま保管しておく

・・・Eはないだろ。

「いいんじゃない？」

「いやだめだろ・・・それではアンケートよろしくお願いします。

番外編　神羅さんの不安の前触れかもしれない（前書き）

前回のアンケートのEが1番多かった時にダーツを投げることになってしまった神羅さん。彼がそんな重役を任された時にやっていたことが今回の話です。

アンケートの参加お願いします。

番外編　神羅さんの不安の前触れかもしれない

・・・ヒュッ!!

「・・・こんなことやっててていいのか?俺?」

Eが多かった時にダーツを投げることになった神羅さん。そんな彼が今やっていたことは…、

「やっぱ難しいな、ダーツは…」

ダーツだった。実は神羅さん、生まれてこのかたダーツをやったことがない。

「もう一度!!」

また的から外れた。

ヒュッ!!

「くそ!!何で決まらないんだよ!?」

デュエルでは無敗記録（更新中）を保持する神羅さん。しかし、ダーツに対しては無力だった。

「・・・まあいいか。本番にうまくいく場合だってあるかもしれないし…。」

そう言って神羅さんはダーツの練習を途中でやめて眠りについた。

時雨、時を超える（前書き）

ちょっとやってしまいました。

今回はＺＥＸＡＬの世界に飛んでみます。

時雨、時を超える

「なんでこんなことをしなくちゃいけない。」

俺はネオドミノシティのある道路でDホイールに乗って構えている。

なんでかと言うと…

～今朝～

「もしもし～。起きてる～？」

「・・・なんで無断でアカデミアの寮の部屋に入ってんだよ。通報するぞ？」

「ちょっとやめて！？神様が通報されるなんてことがあったら他の神様たちにバカにされるし降格処分まで受けるんだよ！？」

「冗談はここまでにしておいて、何の用だ？」

「特にないよ。」

「・・・・・。」

「冗談冗談！！だから通報しようとするのやめて！？」

「さっさと言え。」

「え～と、ゴホン。今から君には少し未来に行ってもらいます。」

「・・・は？」

「この時間にここにきてね～♪」

「おいちょっと待て・・・くそ、逃げやがった。」

というわけで現在に至る。

「ヤッホ～♪準備できた～？」

「んで、今回のタイプスリップみたいなのをやるのはなんか理由でもあるのか？」

「あるよ～。キミに新しい召喚方法を身につけてほしくてね。それじゃ、フルスピードで走ってね！」

「ちょっと待て、この道路は設計途中で途中から道がないぞ？俺を殺す気か？」

「まっさか～～！大丈夫だからｌｅｔｓ　ｇｏ！」

「・・・はあ、仕方ない、やるか。」

俺は思い切り、アクセルを踏んだ。

「おい、もう道がないんだが・・・。・・・何だあれ？」

道が作られなかったところに大きな穴が出現していた。

「あれのことか…」

俺はその穴の中に入って行った。

「遊馬！」

「なんだよ今度は！？」

遊馬と呼ばれた少年がとっさに反応した。

「何か強い力を感じる・・・」

「まさか、ナンバーズ！？」

「！こっちに近づいてきている・・・気をつけろ遊馬。」

「一体どこから…」

二人が会話していると、空間に穴が開いた。

「「！！」」

キィィィィィッ！！

「ここか？あいつが言ってたのは。」

「Dホイールだ！すげぇ～！！」

「？だれだお前は。」

「遊馬気をつけろ。こいつからとてつもない力を感じる。」

「そこのトサカ頭は何を言ってるんだ？」

「私はトサカ頭ではない。アストラルだ。お前私が見えるのか？」

「お前、アストラルが見えんのか？」

「見えるも見えないもそこに居るじゃないか。」

「遊馬～～～！！」

声のするほうを振り向くと少女と少し太っている少年が歩いてきた。

「小鳥、どうしたんだよ？」

「遊馬、その人いったい誰？」

「あ、そういえばお前誰だっけ？」

「自己紹介がまだだったな。俺は紫藤時雨だ。」

「俺は九十九遊馬だ！じゃあ時雨！！俺とデュエルしようぜ！！」

「そうか。いいだろう。」

「「デュエル！！」」

～３０分後～

「オメガ・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「うわあああああ！！」

遊馬　ＬＰ４０００→０

・・・何なんだこいつは？もう３０分も経ってるのに１度もまともなデュエルができていない。いや、それどころか全部１キルで終わるってどんだけ弱いんだこいつは…。

「チクショーー！！もう１回勝負だ！！」

「はあ、もういい。お前じゃ俺の相手にはならない。」

「なら私と勝負だ。」

アストラルはそう言った。

「お前が？」

「そうだ。私なら貴様の相手になれるだろう。」

「あの人遊馬と同じものが見えてるの？」

なるほど、さっき見えるのかと聞いていたのはそういうことか。

「ちょっと待て～！勝手に話を進めるな～～～！！！」

「「デュエル！！」」

「俺のターン！オメガ・コアを召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「またそいつか！」

「さらに魔法カード、１０オーダーを発動！！・・・全部表だ。デッキから、オメガ・フェニックスを特殊召喚！」

オメガ・フェニックス　ＡＴＫ３０００

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・フェニックスをチューニング！！
シンクロ召喚！！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「カードを３枚伏せて、手札から天よりの宝札を発動する！！お互いに手札が６枚になるようにドローする！！ターンエンド。」

「私のターン！」

「オレのターンだって！」

「私は、ゴブリンドバーグを召喚。」

ゴブリンドバーグ　ＡＴＫ１４００

「ゴブリンドバーグの効果を発動！このカードの召喚に成功した時、手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚できる！俺はガンバラナイトを特殊召喚する！」

ガンバラナイト　ＡＴＫ０

「レベル４のゴブリンドバーグに、ガンバラナイトをオーバーレイ！！」

これがサロッゴの言っていた新しい召喚方法か！

「２体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！！エクシーズ召喚！！
現れろ、Ｎｏ．３９　希望皇ホープ！！」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ　ＡＴＫ２５００

「なるほど、つまりエクシーズ召喚というものは同じレベルのモンスターで行う召喚方法というものなんだな？」

「お前、エクシーズ召喚見るのはじめてなのか？」

太っている少年がそう言った。

「オレは過去からきたからな。」

「「「過去!?」」」

「ということは、お前昔の人ーー!?」

「そういうことになる。」

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ!」

「だから勝手に進めるな~!!カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

「俺のターン。俺は速攻魔法、サイクロンを発動!伏せてあるカードを破壊する!」

破壊されたのは油断大敵という罠だった。

「アスタリスク・コアを特殊召喚!さらにアスタリスク・ソルジャーを特殊召喚!そしてアスタリスク・ウォリアーを召喚!」

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００

アスタリスク・ウォリアー　ＡＴＫ１０００

「レベル2のアスタリスク・コアに、レベル3のアスタリスク・ソルジャーと、アスタリスク・ウォリアーをチューニング！！シンクロ召喚！！現れろ、アスタリスク・ドラゴン！」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「バトル！オメガ・ドラゴンでホープに攻撃！」

「ホープの効果発動！オーバーレイユニットを１つ取り除くことで、モンスター１体の攻撃を無効にする！ムーンバリア！！」

「ならアスタリスク・ドラゴンで攻撃！！」

「ぐぅ！！」

遊馬　ＬＰ４０００→３５００

「何でホープが破壊されない！？」

「ナンバーズはナンバーズじゃないと倒せない！」

「そういう効果もあるのか。ターンエンド。」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「かっとビングだ！オレぇ！！」

「かっとビング？」

「挑戦することだ！いっけぇ！ホープーーーー！！」

「何をする気だ！？」

「ホープの効果発動！！オーバーレイユニットを１つ取り除くことで、ホープの攻撃を無効にする！！
速攻魔法、ダブル・アップ・チャンスを発動！ホープの攻撃力を倍にして、もう一度バトルを行う！！
かっとべぇ！！ホープー！！ホープ剣スラッシュ！！」

Ｎｏ，３９　希望皇ホープ　ＡＴＫ２５００→５０００

「くっ！」

時雨　ＬＰ４０００→３０００

Ｎｏ，３９希望皇ホープ　ＡＴＫ５０００→２５００

「オレはカードを１枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺のターン。伏せカードオープン、リビングデッドの呼び声！蘇れ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「ガーネット・コアを特殊召喚！！」

ガーネット・コア　ＡＴＫ５００

「クリムゾン・ビーストを特殊召喚！」

クリムゾン・ビースト　ＡＴＫ１５００

「カードを1枚伏せて、命削りの宝札を発動！手札が5枚になるようにドローする！そして2体目のクリムゾン・ビーストを特殊召喚！レベル2のガーネット・コアに、レベル5のクリムゾン・ビースト2体をチューニング！シンクロ召喚！紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コア！！」

クリムゾン・コア　ＤＥＦ４０００

「たしかこうやるんだったか？レベル12のオメガ・ドラゴンと、クリムゾン・コアをオーバーレイ！
2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築！！」

「なっ！？エクシーズ召喚だと！？」

「ばかな！？過去にはモンスター・エクシーズは存在しないはず！？」

「エクシーズ召喚！！現れろ、オメガ・ブラッド・ドラゴン！！」

オメガ・ブラッド・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「バトル！オメガ・ブラッド・ドラゴンで、希望皇ホープを攻撃！」

遊馬　ＬＰ３５００→２０００

「だが、ナンバーズはナンバーズでしか倒せない！」

「それは戦闘だけの話だろ？オメガ・ブラッド・ドラゴンの効果発

動！オーバーレイユニットを１つ取り除くことで、このターンこのカードと戦闘を行ったモンスターはダメージステップ終了時に破壊される！」

「ホープが！！」

「アスタリスク・ドラゴンでダイレクトアタック！！」

「うわあああああ！！」

遊馬　ＬＰ２０００→０

「次に会うときは絶対勝つからな！！」

「会えるかどうかはわからないが、次はもっと強くなれよ！じゃあな！」

そして俺は再び穴の中に入っていた。

「・・・戻ってきたか。」

「どうだった？」

「変わった召喚方法だったよ。しかもナンバーズなんてナンバーズを持ってないと効果破壊でしか破壊できないし。」

「まあ、今日はごくろうさん！！お疲れさん！！」

時雨、時を超える（後書き）

いきなりオーバーレイをやっちゃいましたよ…

憂さ晴らし（前書き）

今回は作者のせいで出番があまりない吉野の出番です。

「ところで尚。さっきからその着信音は何だ?」

「ん?この曲はカ○ジのOPだけど?」

「歌詞の意味が全く分からないんだが?」

「気にしない気にしない♪」

「あ、木ィィィィ原クゥゥゥゥゥゥゥン!!」

「俊、ふざけるのはやめろ。」

「ところで紫藤って着信音何にしてんだ?」

「ないが?」

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・紫藤、着メロがあったほうが楽しいと思うぞ?」

「とはいっても、俺はアニメ見ないし…」

「アニメじゃなくてもいいから。」

「そうか・・・。」

というわけで、今回はここで終了と・・・

「なるかーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

「吉野いたのか。」

「一体いつからそこに？」

「最初からいましたよ！？何ですか今の扱いは！？私は空気ですか！？空気扱いですか！？」

「落ち着け。」

「最近作者をバルバロス３体とバルバロスＵｒ３体でフルボッコにして感想のほうで出番もらえたのにすぐに忘れられてるんですけど！？この扱いは何ですか！？」

「だから落ち着け。」

「ハァ、ハァ……すいません、取りみだしました。」

「大丈夫さ！キミなら大丈夫！」

「モブキャラのあなたに言われたくありませんよ！！」

「グフッ!!?」

もう出番がないと思われていた鈴木先輩。犠牲者になるためだけに呼ばれたのか。

「・・・すいません。」

「落ち着いたならいいだろ。」

「そうですよ、私だって最近出番がなくなってるんですよ!?」

「お前もか!?」

「玲ちゃんのほうは作者がデッキの内容をあまり考えてないからしいよ?」

「吉野さん。」

「なに?東雲さん?」

「これから作者をしばきに行きませんか?」

「いいかもね。」

「とりあえず、今回は吉野の出番だから落ち着け。」

「分かりました。で、私の相手は誰ですか?」

「俺だけど?」

俊が手を挙げた。

「ＣＨＡＮＧＥ！！！」

「いきなり否定！？しかもめちゃくちゃ発音がいい！！」

「英語の成績はいいですからね。」

「成績と発音は関係ないと思うが？」

「あなたとやったら自分のターンが始まる前に終わるので却下します！！」

「ならいったい誰が・・・」

「なら俺っちが相手だ！！」

ファッションから髪型、性格まで全てがチャラそうな奴が出てきた。

・・・誰だこいつ？

「「「「「・・・・・・。」」」」」

「え？まさか俺っちのこと覚えてない？」

「誰に聞いてるんだ？」

「さあ？」

「あの服装はやめてほしいですね。」

「私近づきたくないです。」

「そのほうがいい。」

「後半ヒドクね！？」

「そういうことだから、結局誰だ？」

「う～～ん？」

「どうした俊？」

「あともう少しで思い出せそうな気がする…」

「あの時のことを忘れたのかよ！？」

「あっ！思い出した！あん時に１キルしたチャラ男！」

「・・・あ、あの時のですか。」

「思い出してくれたところでそこの彼女！俺っちと付き合わない？」

「生理的に無理なのでお断りします。」

「そこまで！？」

チャラ男は次に東雲のほうを見た。

「私もちょっと無理です…」

チャラ男が東雲のほうを向いた瞬間に、周りから無数のどす黒い殺気が込められた視線がチャラ男に向けられた。

そのうちの17人ぐらいは弓道の矢を向けていた。

そのうちその弓矢を向けている男子生徒から微かに、

「クッタバレーーーー!!!」

「「「

「…マジ？」

「では始めましょう。」

「あ、ああ・・・」

「「デュエル！！」」

「私のターン！私はニ重召喚を発動！そしてバルバロスを2体召喚！」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺っちのターン！！」

なおも周りから殺気をこめた視線で睨まれているチャラ男。

「永続罠、スキルドレインを発動！！ライフを１０００払い、フィールドのモンスターの効果を無効にする。」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ１９００→３０００

「うっ・・・俺っちはモンスターをセット。カードを二枚伏せて、ターンエンド。」

「私のターン！私は抹殺の使徒を発動して、裏守備モンスターを除外！」

除外されたカードはデスハムスターだった。

「抹殺の使徒の効果でお互いのデッキにあるデスハムスターを全て除外する！さらに天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようにドローする！そして私は３体目のバルバロスを召喚！さらに装備魔法、執念の剣をバルバロスに装備！魔法カード、拘束解放波、発動！自分フィールドの装備魔法を墓地に送り、相手フィールドにセットされている魔法・罠カードを全て破壊する！」

「嘘っしょ！？」

「バルバロス３体でダイレクトアタック！！！」

「マジかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？？」

チャラ男　ＬＰ４０００→０

「気は晴れたか？」

「はい！すっきりしました！」

番外編　時雨の着メロを決めろ！！（前書き）

今回は前回冒頭の雑談内容の着メロで時雨は着メロを決めてないことが判明したので、とりあえず今回決めることにしました。

デュエルはナシです。

番外編　時雨の着メロを決めろ！！

「・・・・で、結局どうするんだ？着メロ。」

「どうって言われてもな…。」

「じゃあ、神のみぞ知るセカイのＯＰは？」

「いいかもな。」

「それならけいおんのＥＤは？」

「いいかもな。」

「なら禁書目録は？」

「・・・鼈甲雨。」

「いいかもな。」

「時雨！さっきから適当に答えてるじゃねえか！真面目に考えろ！」

「そうかもな。」

「ならこれは。」

「・・・じゃこれにするか。」

「理由は？」

「気に入ったから。」

「それじゃこれに決定ね。」

「まさかクラナドを選ぶとは…」

「タイトルもいいし・・・」

「時を刻む唄ね…」

「なんとなくこのテンポがいい。」

「はあ・・・」

テスト勉強（前書き）

今回は吉野のデュエルはありますが、前半は多分ふざけてると思います。

テスト勉強

現在デュエルアカデミアは6月。もうすぐ夏休み直前のテストがあるわけなのだが…。

「紫藤頼む！勉強教えてくれ！」

「どうしたんだ、尚？」

「もうすぐテストだろ？頼む！」

「同じクラスに俊がいるだろ？」

「俊は『勉強？してないよ？』て言ってた。」

「・・・マジ？」

「それにあいつ、前のテストのとき、テストが始まってから残り5分になるまでずっと寝てた。」

それで8位か…

「というわけで頼む！」

「んじゃあ教えてやる。」

「よっしゃ！んじゃあとで…」

「いや、ここで教える。」

「？どうやって？」

「俺がいつもやっている勉強方法。」

「マジ！？それじゃあ教えてくれ！」

「まず教科書・ノート・プリントの内容を覚える。」

「それで？」

「それだけだ。」

「・・・は？」

「だからそれだけ。」

「・・・それだけ？」

「ああ。」

・・・そんなことできるの頭がいい奴だけだろ。

というわけで次。

「で、私ですか…。」

「勉強法を教えてくれ！」

「見るだけです。」

「うそだろ！？」

「はい、うそです。」

「で、本当は？」

「普通に勉強ですかね。」

「そうですか・・・」

次！

「すいません。私あまり勉強できるほうじゃないので！」

ヒュッ！！

「・・・なんで俺が狙われるわけ？」

どうする・・・もう頼れるやつがいない。

「こうなったらやけくそだーーーーーーー！！」

「それで時雨さん。木原さんはどうするんですか？」

「俺は教えるのは下手だからな。」

「私は一応教えられるほうだと思いますけど…」

「ところで木原って前回何位だったんだ？」

「最下位だよ？」

「俊いたのか。てか、なんでお前そんなこと知ってるんだ？」

「暇だから覚えた。」

「で、ほんとに最下位なのか？」

「うん。確かに最下位だよ。」

「・・・どれ位ヤバい？」

「表現できないくらい。」

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・・・・。」

「・・・ちゃんと教えてやるか。」

「そうしますか。」

「そうだね。」

「そこの女子！」

「はい？」

「いやいや、そんなに僕にみとれないでくれよ？」

この人頭のねじが数本抜けてるんでしょうか？

「はっはっは。君がそこまで言うなら付き合ってあげてもいいよ？」

「丁重にお断りします。」

「はっはっは・・・」

「それじゃ行くか。」

「ちょっと待ちたまえ！」

「はい？」

「きみ、僕と付き合え！！」

「はあ？」

「さっきの一人芝居は済まなかった。だから僕と付き合え！！」

・・・夏になると変質者が増えるって本当だったんだ…。

「お断りします。」

「ならデュエルで僕が勝ったら付き合え！！」

「しつこい人ですね…。なら相手をしてあげましゅよ！」

「・・・かんだな。」

「かんだね。」

「「デュエル！！」」

「僕のターン！！僕は、漆黒の豹戦士パンサーウォリアーを召喚してターンエンド！！」

漆黒の豹戦士パンサーウォリアー　ＡＴＫ２０００

・・・この人は馬鹿なのか？何でモンスターだけ？もしかして罠？

「私のターン！私は俊足のギラザウルスを召喚！俊足のギラザウルスの召喚は特殊召喚扱いすることができる！速攻魔法、地獄の暴走

召喚を発動！！デッキから残りの俊足のギラザウルスを特殊召喚して、
あなたも自分フィールドのモンスターと同じモンスターを全て特殊召喚してください。」

俊足のギラザウルス　ＡＴＫ１４００

「フッ、残念だがパンサーウォリアーは1体しか入れてないんだ。」

「あっそ。ギラザウルス3体をリリースして、神獣王バルバロスをアドバンス召喚！」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００

「モンスター3体をリリースしてバルバロスを召喚した時、相手フィールドのカードを全て破壊する！」

「うそおぉ！？」

「さらにデーモンの斧をバルバロスに装備してダイレクトアタック！」

「あっさり負けたぁぁぁぁ！！」

ナルシスト　ＬＰ４０００→０

「じゃ、尚のとこに行くか。」

「おーい、尚。」

「なんだよ紫藤。」

「勉強教えに来たぞー。」

「マジ!?よっしゃー!!」

えらいテンションの上がりようだな。

それからテストまで俺たちは尚に勉強を教えた。

テスト勉強（後書き）

前回行ったアンケートが、まだ2票しか入ってないんですけどもう締め切ったほうがいいでしょうか？

テスト　結果（前書き）

今回は前回のテスト勉強がいかされるかが本題です。

あと俊が凄いことを…

テスト　結果

テストまでの1週間俺たちは尚に徹底的に教え込んだ。そりゃもうすごいほどに。

そんな中、俊があることを言い出した。

「なあ紫藤。お前の部屋にいってもいいか？」

「なんでそんな話になる？」

「いやさあ？そういえば紫藤のプライベートって見たことないなって思ってさ～。」

「あ、それ私も気になります。」

「私も知りたいです！」

「まあ、確かにな。」

「だからさ！今度遊びにいってもいいだろ？」

「じゃあ条件付けてもいいか？」

「ああ！」

「それじゃあ、今度のテストで1位を獲ったらいいぞ。」

「わかった！」

紫藤は俊が本気でテストに挑んだらどうなるのかと多少興味があった。

あんなことが起きるとも知らずに…

そしてテスト当日・・・

「はい始め～。」

「（おお！わかる！問題が簡単にわかる！ってあれ？ここどうだっけ？）」

「・・・・・。」

「（・・・俊が真面目にテストをやってる。やっぱりこの前の時雨の部屋がどうなってるのか知りたいのか。）」

テスト順位発表日

８３位　木原尚

「よっしゃーーーーーーーー！！！最下位脱出～～！！」

「よかったな尚、さて俺は…」

「やった！！私も上がってる！」

東雲か…

４７位　東雲玲

「今度こそ俺…」

「私は少し下がりましたね。」

８位　吉野由紀

「・・・さて、俺は…」

４位　紫藤時雨

「・・・変わらなかった。前回と同じ。」

「それじゃあ俊の順位を見てみるか。・・・あれ？」

１位　川田俊

「「「「・・・・・（本当にとりやがった。）」」」」

「紫藤～～、これでＯＫだよな！」

「ところで俊、点数は？」

「オール満点＋問題用紙の書き間違いの指摘で５点！」

「・・・嘘だろ？」

・・・というわけで本気の俊は破格にすごいことが分かった。

テスト　結果（後書き）

・・・俊が優等生すぎるような気がしてきました。

時雨の部屋（前書き）

今回は前回の俊との約束で時雨の部屋へ。

主人公としてこの部屋はどうか…

時雨の部屋

前回のあらすじ
俊が1位を獲った。

というわけで・・・

「え～、現在紫藤の部屋の前にいます。」

「何実況みたいな感じでやってるんだ?」

「暇だから♪」

「それで、なんでお前たちも付いてきてるんだ?」

「気になりますから。」

「面白そうだから。」

「私も気になりますから。」

「・・・じゃあ、開けるぞ。」

扉を開けると、そこは・・・

「「「「・・・・・。」」」」

部屋に入ると普通のテーブルと普通の椅子。普通の本棚に普通のベッド。

「・・・普通だ。」

「普通ですね。」

「普通だな。」

「思ったより普通ですね。」

「本棚には……漫画が1冊もねえ。」

「ていうかほとんど参考書とかですね。」

「少し小説があるな。」

「禁書目録は全巻揃ってますね。」

「この前の俊と尚のやり取りであったからな。」

「それ以外は……辞書？」

「特に読む者もないからな。」

「こっちにも本棚があるぞ。」

「えっとこっちは……小説がたくさんありますね。」

「やっぱりこっちにも漫画が一冊もないな。」

「元々漫画なんて読まなかったからな。」

「テレビのほうは・・・ＤＶＤがたくさんありますよ？」

「どんな内容なんだ？」

「ほとんどニュースだ。」

「・・・いくつかみてもいいか？」

「いいが？」

～1時間後～

「本当に全部ニュースだ！」

「ちょっと待て、さっき『ほとんど』って言ってなかったか？」

「ああ、いったぞ。」

「残りは何だ？」

「料理番組。」

「「「「・・・・・。」」」」

「どうした？」

「お前の部屋に娯楽と呼べるものが全然ないことに驚いたよ…。」

「ちなみにアニメとかは？」

「見てないが？」

「バラエティーも？」

「ああ。」

「ドラマも？」

「ああ。」

「何なんだお前の部屋はーーーーーーーーー！！」

「部屋の内容が質素すぎる。」

「つまらないですね。」

「唯一の楽しみは小説だけか。」

「かなりの言われようだな。」

「本当に漫画がないですね。」

「お前もうちょっと漫画とかそういうちゃんと娯楽になるものとか集めろよ。さすがにこれは虚しいぞ？」

「・・・分かった。もうちょっと買っておく。」

時雨の部屋は思っていた以上につまらなかった・・・。なんで料理番組なんか見てるんだ？

時雨の部屋（後書き）

つまらない時雨の部屋。なんでここまでつまらなくなったのか自分にもわかりません…。

混沌邪宗（前書き）

今回から長編っぽい物を始めます。

後々時雨の過去も書いていきます。

混沌邪宗

「時雨の奴、最近昔に戻ったみたいに明るくなってきたな～。」

神羅は自分の家で独り言をつぶやいていた。

「……あいつがいなくなってから感情があまり表現できなくなってたからな、もうちょっとすれば昔みたいになるかな。」

世界のどこかである野望が動き始めようとしていた。

「もうすぐだ。もうすぐ邪神龍が復活する！我らの野望が叶う！」

「よかったっすね、教祖様。巫女の力の封印を解くのに3年かかりましたからね…。」

「あのガキも今頃どうなってるかねぇ～。」

「確かにあの少年この巫女を奪われた時泣き叫んでましたからね。なんて言いましたっけ？」

「たしか・・・時雨じゃなかったか？」

「おもしれぇ。久しぶりにそいつに挨拶でもしてやっか。」

「なら私も付いていきます。あなた1人だとむやみに人を殺してしまいかねない。それだと我らの楽しみが半減してしまいます。」

「うっせーよ葛井。そんなに付いてきたきゃ勝手にこい。」

「そうさせてもらいます。」

「なあ紫藤。」

「なんだ？」

「最近お前よく笑ったりしてるよなぁ～。最初のころ完全に無表情だったのに。」

「そうか？」

「そうですよ。最初はかなり怖かったですよ？」

「悪い。」

確かに最近は俊たちが近くにいて結構楽しく思う。

「まあいいですけど。でも本当に最初とは接しやすくなってきましたよ。」

「時雨さんて最初怖かったんですか？」

「そうなんだよ。最初は常に睨んでるような眼をしててさ～～！」

「それはたしかに接しにくそうだな。」

「だから悪かったって。」

「ところで紫藤、お前今着メロは何にしてる？」

「『一番の宝物～ｙｕｉ　ｆｉｎａｌ　ｖｅｒ．～』だ。」

「なんでその曲を選んだんだ？」

「教える必要はない。（この曲を聴いてるとあいつのことを忘れないからな。）」

「そうか。よ～し、それじゃあ休日だし、街に行くか～！」

「「「おお～！！」」」

「俺もか…」

「なあ。なんか街の様子おかしくね？」

「いつもより空気がよどんでるというか…」

「人が見当たりませんね。」

「（微かに闇の力を感じる…）」

「時雨？」

「あっちか！」

「お、おい紫藤！」

「いきなりどうしたんですか？」

「時雨がいきなり向こうに走って行った。追うぞ！」

「あ、ちょっと待ってください！」

時雨がたどり着いた先に、フードをかぶった男がいた。

「お前か。闇の力を放ってるのは。」

「そうだが？貴様は？」

「名乗る必要はないだろ。」

「ふっ、まあいい。」

「「デュエル！！」」

「もう始まってる！あいつは誰だ？」

「俺のターン！俺は、オメガ・コアを召喚！１０オーダーを発動！・・・全部表だ。オメガ・キャノンを特殊召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

オメガ・キャノン　ＡＴＫ３１００

「オメガ・キャノンの効果発動！このモンスターが特殊召喚に成功した時、デッキからレベル２モンスターを特殊召喚する！バニシング・コアを特殊召喚！」

バニシング・コア　ＡＴＫ０

「レベル2のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・キャノンをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「手札から、バニシング・ギアを特殊召喚！」

バニシング・ギア　ＡＴＫ０

「レベル2のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・ギアをチューニング！！
シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「カードを2枚伏せて、天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようドローする！！ターンエンド！」

「ワタシのターン！ワタシはスナイプストーカーを召喚！」

スナイプストーカー　ＡＴＫ１５００

「スナイプストーカーの効果発動！手札を1枚捨て、オメガ・ドラゴンを選択！サイコロを振り、１・６以外が出た場合、選択したモンスターを破壊する！ははは！！それではいくぞ！」

「永続罠発動！代理サイコロ！」

「なんだそのカードは！？」

「お互いのプレイヤーはサイコロを使用するとき、自分の代わりに相手がサイコロを振る。」

「ちっ！だがお前が振ったところで…」

「ああ～、あの人終わったな。」

「終わりましたね。」

「終わりだな。」

「終わりですね。」

「それじゃ行くぞ。はっ！」

サイコロが空中に投げられた。

「（へっ、どうせ当たるに決まってんだ。当たる確率は3分の2・・・当たる確率のほうが大きい！）」

落ちてきたサイコロの目は…

「1だ。効果は無効だな。」

「へっ、スナイプストーカーの効果は何度でも使える！」

2投目　1

3投目　6
4投目　1
5投目　6

「バカなっ・・・全部はずれだと!?」

「言うの忘れたけど、俺はサイコロの目を操作することができる。」

「そんなのないだろ!?ズr「俺のターン!総攻撃!」

「うわあああああ!!」

フードの男　LP4000→0

「結局こいつなんだったんだ?」

「さあ?」

「はっはははははは」

フードの男が突如笑いだした。

「何がおかしい。」

「俺を倒したところで、混沌邪宗の野望は止められん。」

「！！」

「混沌邪宗？」

「なんですかそれ？」

「さあ？」

その時、時雨がフードの男の襟元を持ち上げ壁に叩きつけた。

「ぐふっ！？」

「紫藤！？」

「お前、今混沌邪宗って言ったな？」

「それがどうした？」

「奴らはどこにいる？」

「へっ、誰が言うか。」

「そうか。」

時雨はその男を殴りはじめた。

「おい紫藤！！」

「やりすぎです！落ち着いてください！」

「邪魔だ、どけ！」

「どうしたんだ時雨！？」

「やめてください！」

「うるさい！！」

「そんなことやっても無駄だぜ？」

後ろから声がした。

「よお、３年ぶりか？ガキ。」

髪の色を赤に染め、ホストのような服装をしている男が話しかけてきた。その隣にモノクルをつけて執事のような服を着ている黒髪の男が立っていた。

「・・・黒涼ーーーーーーーーーーー！！！」

「おおっと待った待った。今日はただの挨拶。それにお前昔俺に挑んだ時、何もできなかったじゃねえか。」

「あ〝ぁ〝！？」

「ま、あの嬢ちゃんのおかげで今お前は生きてるわけだからな。感謝しとけよ？俺の慈悲深さにさ。」

「ふざけんじゃねえええええええええええええ！！！！！

！！！！」

「全く、あなたは人を怒らせるのが得意ですね。おかげで耳が痛くなりますよ。」

「言ってくれんじゃねえか葛井。なんならお前がやるか？」

「あなた自分で言ったでしょ？今日はただの挨拶だと。それにあの少年には何もできませんよ。」

「それもそうだな。帰るか。」

黒涼と葛井はＤホイールに乗ってその場を離れた。

「待ちやがれえええええ！！」

追いつくはずもないのに時雨は走って追いかける。

「紫藤無理だ！！追いつけるはずがねえ！！」

「そうですやめてください！！」

「いったいどうしたんだ！？

「落ち着いてください！！」

「くっそーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

時雨は叫びながらも追い続けた。

暫くして落ち着いたのか時雨はネオドミノシティの外で足をとめた。

「神楽を、返せーーー

混沌邪宗（後書き）

新シリーズ開始です。

新シリーズの鍵となるのは時雨の過去と神楽という人物です。

神楽については登場は遅くなると思います。

復讐（前書き）

今回はデュエル無しです。

神羅さんも今回のシリーズに絡んできます。

バンっ!!

時雨は校長に休学届を出した。

「また休むのか。今度はいつ戻ってくるんだ?」

「すいません、それは俺にもわかりません。もしかするともう戻ってこれないかもしりません。」

「そこまでの覚悟があるなら、私は止めはしない。しかし無事に帰ってきてくれ。君の友達もいるだろ?彼らを悲しませないでくれ。」

「・・・分かりました。」

時雨は校長室を後にした。

「紫藤!!」

「・・・」

時雨は俊に呼び止められた。

「またどこかに行くのか?あの混沌邪宗ってやつらを追うのか?何

がお前をそこまで突き動かすんだ!?」

俊の問いかけに、時雨が振り向いた。

「!!」

俊は驚いた。なぜなら時雨の目は、初めて会った時よりも黒く冷たい、

人殺しの目をしていたから。

「・・・悪い。」

俊は驚きのあまり、返事をすることも忘れ、時雨は一言謝りその場を立ち去った。

俊は吉野、木原、東雲の3人と話をしていた。

「・・・そこまで時雨さんがおかしくなるなんて…一体何があったんでしょうか？」

「分からない。でも俺たちにはそれを知る術がない。」

「一体どうしたら・・・」

4人の空気は成す術がないように重みを増していく。

そんな中、

「・・・いや、知る方法はある。」

「「「！！！」」」

俊が方法があると言った。

「方法って！」

「一体どうやって！？」

「時雨のことを聞こうにも、時雨は口を開かないだろ？」

「もう一人いるだろ。時雨のことを昔から知っている人が。」

「・・・あっ！！神羅さん！！」

「そうか、あの人なら何か知ってるかもしれない！！」

「行きましょう！！神羅さんのところへ！！」

時雨はネオ童美野シティの外に出ていた。

「・・・神楽、今迎えに行く。」

時雨はＤホイールのアクセルを踏み込んだ。

４人は神羅の家を目指していた。

しかし４人は神羅の住所を知らない。まさに雲を掴む様だった。

「神羅さんの家ってどこにあるんだよ!?」

「手掛かりが見つかると思ったら、また別の手がかりが必要になりましたね…。」

「ネオ童美野シティの中にいるのは間違いない!!絶対に見つかる!!」

「そんなこと言ったって…」

そんな４人にある少年が話しかけてきた。

「ねえ、誰か探してるの?」

「ああ、神羅って人を探してる。」

「神羅って、あのお兄ちゃんのこと?」

「神羅さんを知ってるのか!?」

「うん。僕あの人にデュエルを教えてもらったんだ。」

「その人がどこに住んでるか知ってる?」

「うん、知ってるよ。」

「案内してくれるかな?」

「いいよ！」

4人は少年に導かれ、神羅の家にたどり着いた。

「ここだよ。」

「ありがとう。」

「じゃあねー！」

「・・・ここが神羅さんの家か。」

「とりあえず、インターフォンを押しましょう。」

ピーンポーーーン。

ガチャッ。

ドアから神羅が出てきた。

「はーい。」

「神羅さん！」

「おー、時雨の親友か。こんなところによく来たな。」

「神羅さんすいません！混沌邪宗って一体何ですか！？」

その言葉を出した途端、周りの空気が急に重くなった。

「・・・帰れ、これはお前たちが関わっていい問題じゃない。」

「教えてください！時雨に一体何があったんですか！？」

「これはお前たちが考えてるほど簡単な問題じゃない。このことは忘れろ。」

「俺たち、紫藤の力になりたいんです！」

そういうと、神羅は呆れた様にため息をついた。

「・・・はあ。お前たちには参った。・・・1度準備をしてからもう1度此処にこい。」

「「「「・・・・・はい!!」」」」

神羅に言われて、2時間後、4人は準備を済ませて神羅の家に集合した。

そしてドアから神羅が出てきた。

「ついてこい。出発するぞ。」

神羅に言われるままに家の中の地下室に連れてこられた４人。

そこで４人が見たものは、

「これは！！」

「雑誌とかでよく見たことがあるけど、本物を見れる日が来るとは思いませんでした・・・。」

「すごい・・・。」

「綺麗・・・。」

「これが俺のＤホイール、ワールド・ホープだ。」

そこには、白と金の色で美しいフォルムを輝かせるＤホイールがあった。

「ちょっと待ってろよ。」

神羅がＤホイールのボタンを押すと、Ｄホイールが変形し、多人数が乗れる形になった。

「変形した！？」

「元々ワールド・ホープは変形できるように作ってあったんだ。ライディング・デュエルだと使う意味がないし見せることはなかったんだ。早く乗れ。出発するぞ。」

4人は変形したワールド・ホープに乗り、

「行くぞ!!」

ワールド・ホープは5人を乗せて走りだした。

復讐（後書き）

ついに5人も出発しました。神羅さんも神楽という人物と面識があります。

次回はアンケートの結果発表をやらせていただきたいと思います。

番外編　アンケート結果発表（前書き）

今回は前回行った邪神の処分についてのアンケートの結果発表といたします。

感想の欄を見ていただくとすぐに結果がわかります。

番外編　アンケート結果発表

「結果発表～～～～！！」

「はしゃぐな！！」

ゴン！！

「痛！！何するんだよ！」

「はしゃいでいいほど票は集まってないんだよ！！」

「それで、何票集まったの？」

「たった2票だよ！！だからはしゃぐな！！」

「ごめん・・・・」

「わかればいい。それでは発表とさせていただきます。栄えあるのかどうかは読んでる方々次第ですが第1位は…

E，申し訳ないと思いつつ、誰かの小説に送り込む！！」

「・・・まさかこれが選ばれるとはね…僕はシュレッダーだと思ったよ。」

「そんなことは気にせず神羅さん、お願いします！！」↑上を無視

「任せとけ…。はっ！」

ヒュッ！！

「・・・的とは逆の方向に飛ぶって、どうやったらそうなるんですか？」

「俺にもわからない…。」

「ちなみに的に載っている作者の方々は次の方たちです。誠に申し訳ありません！！！」

・通りすがりのデュエリストさん

・アストラルさん

・葦切さん

・流星キラリさん

・ＢＲＡＶＥさん

「それじゃ、２投目お願いします！」

ヒュッ！！

「うお！？」

「また逆の方向に飛んできた…。」

～２時間後～

「・・・全部外れた・・・。」

「しかも全部後ろに飛んでますね…。」

「あの・・・思ったんですけど…」

「ん？」

「後ろに飛ぶなら的を後ろにやればいいんじゃないでしょうか？」

「「「・・・・・。」」」

3人は的を後ろに動かした。

「・・・では１０３６２投目、お願いします！」

ヒュッ！！

ダン！！

「「「・・・・・。」」」

「・・・決まりました！！邪神のカードの送り先は、通りすがりのデュエリストさんに決定しました！！」

「通りすがりのデュエリストさんにはあとでメッセージとともにお送りさせていただきます。とにかく申し訳ございません。」

「・・・それにしても後ろに当たるってどうなんでしょうか？」

意外な情報元（前書き）

今回もデュエルなしです。

次回はデュエルを入れる予定です。

意外な情報元

今俺はあるところに向かっている。あそこなら多少情報はあると思うが、他に当てもない。

神羅たちは時雨を追っていた。

「あいつが向かうとしたらあそこぐらいだろうな。」

「あそこってどこですか？」

「裏カジノ。」

「何故！？」

「昔いろんなところに悪い奴らつぶしまくってな、その時に逃げたやつがどこに行ったのかそこで情報もらってたんだよ。」

「つまり情報屋がいると。」

「とりあえずもう一人に連絡しとく。絶対協力してくれると思うからな。」

「もう一人？」

神羅は誰かに電話をかけ始めた。

「・・・あっ、もしもし？ちょっと時雨が例の奴らを追い始めたからそっちも追いかけてくれ。じゃあな。」

「・・・あの神羅さん？一体誰に電話をかけたんですか？」

俊が神羅に質問する。

「時雨の兄さんだよ。」

「あいつ兄弟いたんですか？」

「いるよ。紫藤紫苑、今休業中のプロデュエリストだよ。」

「なんで休業中なんですか？」

「あいつも混沌邪宗を追いかけてるから。3年間。」

「3年も！？」

「というか、その人もなんか因縁あるんですか？」

「ないけど、弟思いなんだよ。一種のブラコンて奴？」

その時、神羅の携帯が鳴った。

「もしもし？」

「誰がブラコンだ。」

ブツッ

「・・・。」

「・・・この通り地獄耳だから、あまりこういった発言は止したほうがいいよ？」

「・・・はあ・・・」

～4時間後～

俊たちは裏カジノとやらについた。

周りにはガラの悪い人物が沢山いたが、

「し、神羅だ！！」

「全員配置につけぇぇ！！」

そのガラの悪い奴ら全員が、

「神羅さん！！ようこそ御出でなさいました！！！」

「よ、久しぶり。」

「ＶＩＰルームに案内しろぉぉぉ！！」

「はいい！！」

「・・・あの、神羅さん、これは？」

「気にしない気にしない。」

「お久しぶりです、神羅さん。」

「よお、琴塚。」

「時雨君なら2日前にここにきて出ていったよ。」

「で、何処に行ったか分かるか？」

「当然♪」

琴塚という人物は神羅に紙を渡した。

「やっぱり凄いね時雨君は。うちの目玉を1発でクリアしちゃうんだし。」

「あの、目玉って？」

「カ○ジのパチンコ『沼』だよ。あれを忠実に再現するのは結構苦

労したのにね。」

「なんでパチンコを？」

「数日前に神羅さんから電話があってね、足止めしといてって、だから今までだれもクリアできなかった『沼』をクリアすることを条件にしたんだよ。それでもね・・・」

～2日前～

「すいません、琴塚さん。混沌邪宗の情報をお願いします。」

「やっぱり来たんだ。一応神羅さんから足止めしといてって言われてるけど、まあこれをクリアしたら別にいいけど。」

「『沼』ですか。」

「さあ、一体何万かかるんだろうね？言っとくけど、下のパチンコ玉も賞金として扱ってるから、約６億５０００万ぐらいだね。あと一つ、原作通りに仕掛けも用意してあるから。」

「ではやらせていただきます。」

「もはやあれは天賦の才だよ。全部の仕掛けを物ともせずにクリアしちゃうんだから。」

「で、ここに向かったのか。」

「ああ、混沌邪宗の集会が行われるらしいから、そこに行けば何かわかると思うよ。」

「ありがとな、琴塚。」

「いえいえ、神羅さんに助けてもらった恩に比べたら時雨君への賞金6億なんて安いものですよ。」

「・・・時雨、まさかの博打の才能があったなんて。」

「6億って高校生が持ってちゃいけない金額ですよね？」

「そろそろ行くぞ。」

「「「「はい・・・」」」」

怒りと十黒（前書き）

今回やっとデュエルありです。

怒りと十黒

～混沌邪宗・集会場所　通称黒焔～

「ぐっ・・・貴様何者だ?」

複数の人物が倒れている中で、黒いローブを着た男が尋ねた。

「・・・俺は貴様たちに復讐しにきた。ただそれだけだ。」

その頃、神羅たちは、

「もうそろそろ着くころだな。」

「（時雨、お前の過去に何があったのかは知らないけど、俺達はお前に無理をしてほしくない！！）」

〜1時間前〜

「ここが混沌邪宗の溜まり場か？」

「なんだ貴様は？」

「俺か？俺は復讐者だ。」

「面白い！！ならばやって見せろぉぉぉ！！」

「まさか信者６５０人がこんな奴にやられるとは・・・・」

「そこで何をしている？」

上のほうから声がした。

「・・・誰だ？」

そこには厳つい顔をした坊主頭の神官みたいな服を着たやつが立っていた。

「十黒のバズ様だ！！」

「おお！！バズ様！！」

「バズ？」

バズと呼ばれる奴が降りてきた。

「十黒というのは、混沌邪宗の教祖の次の地位に立つ１０人のことだ。そしてその一人がこのバズだ。」

「ということは、お前らの本拠地の場所を、お前は知っているわけだな？」

「いかにも。しかし貴様のような小童にやられるほど、十黒は弱くはない。」

「俺が勝ったら、おとなしくお前らの本拠地の場所を教えてもらお

うか…。」

「よかろう。このバズ、敵との約束を破ることはしない。だが貴様が負けた時は、死んでもらう。」

「俺は負けねえよ。お前らみたいなやつらにはな。」

「「デュエル！！」」

「ワタシのターン！！ワタシはＡ・Ｏ・Ｊ　Ｄ．Ｄチェッカーを召喚！！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　Ｄ．Ｄ．チェッカー　ＡＴＫ１７００

Ａ・Ｏ・Ｊか、いやな相手だな…。

「Ｄ．Ｄチェッカーがフィールドに存在する限り、お互いに光属性モンスターを特殊召喚できない。さらにワタシはニ重召喚を発動し、Ａ・Ｏ・Ｊ　アンノウン・クラッシャーを召喚！！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　アンノウン・クラッシャー　ＡＴＫ１２００

「ワタシはカードを2枚伏せて、ターンエンド。」

「俺のターン。俺のフィールドにカードが存在しない場合、このモンスターは特殊召喚できる。俺はチューナーモンスター、リーガル・コアを特殊召喚！」

リーガル・コア　ＡＴＫ０

「永続罠、ＤＮＡ移植手術を発動！！ワタシはフィールドのモンスターの属性を光に変更する！！」

「俺はチューナーモンスター、アブソーブ・コアを召喚！」

アブソーブ・コア　ＡＴＫ０

「アブソーブ・コアが召喚に成功した時、相手フィールドのモンスター１体の効果をエンドフェイズまで無効にする。俺はＤ．Ｄチェッカーの効果を無効にする！」

「何！？」

「『アブソーブ』と名の付いたモンスターが存在するとき、このモンスターは特殊召喚できる。エクストラ・アブソーバーを特殊召喚！」

エクストラ・アブソーバー　ＡＴＫ０

「レベル２のアブソーブ・コアに、レベル５のエクストラ・アブソーバーをチューニング！！
打ち消す者よ、今敵を抹消せよ！シンクロ召喚！消せ、アブソーバー・ドラゴン！！」

アブソーバー・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「バトル！アブソーバー・ドラゴンで、Ｄ．Ｄチェッカーを攻撃！
リセット・ショット！！」

「ぐう！！」

バズ　ＬＰ４０００→３３００

「自分のモンスターが攻撃に成功した時、このモンスターは特殊召喚できる。リーガル・マジシャンを特殊召喚！」

リーガル・マジシャン　ＡＴＫ１７００

「アブソーバー・ドラゴンの効果発動！！このモンスターが相手モンスターを破壊した時、墓地へは行かず相手のデッキの一番下に送る！」

「ちっ！！」

「カードを1枚伏せて、天よりの宝札を発動！お互いに手札が6枚になるようドローする！！さらにカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「なかなかやるようだな。ワタシのターン！」

流石にこのまま終わるっていうのは、そこら辺に転がってるこいつらと同じじゃないだろうから、ないだろうな。きっと何かある。

怒りと十黒（後書き）

今回からオリカの募集を始めさせてもらいます。

理由はオリカのネタが切れてきそうだからです。

条件としては、

・他作品のカード名などは禁止

・あまりチートすぎないこと（チートカードはかなり湧いてくるので）

・できれば相手が使うカードを所望

というところで、何とも勝手がましいですが、よろしくお願いします。

ＶＳバズ（前書き）

前回の続きです。

VSバズ

「ワタシのターン！！」

一体何を出してくる？

「ワタシの手札を増やしたことは間違いだったな。ワタシは魔法カード、古のルールを発動！さらにチェーンして罠、レベル・リチューナーを発動！そして速攻魔法、サモンチェーンを発動！サモンチェーンの効果でワタシはこのターン、通常召喚を3回行うことができる。そしてレベル・リチューナーの効果でアンノウン・クラッシャーのレベルを2下げる。そして古のルールの効果で、ワタシは手札から
チューナーモンスター、A・マインドを特殊召喚！」

A・マインド　ATK1800

「ワタシはチューナーモンスター、A・O・J　サイクルリーダーを召喚！さらに2度目の召喚権を使い、A・O・J　アンリミッターを召喚！そして3度目の召喚権を使い、A・O・J　ガラドホルグを召喚！」

A・O・J　サイクルリーダー　ATK1000

A・O・J　アンリミッター　ATK600

A・O・J　ガラドホルグ　ATK1600

「レベル5のA・マインドに、レベル1となったA・O・J　アン

ノウン・クラッシャーと、レベル４のＡ・Ｏ・Ｊ　ガラドホルグをチューニング！！シンクロ召喚！！撃破せよ、Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ！！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ　ＡＴＫ３３００

「アンリミッターの効果発動！このモンスターをリリースすることで、自分フィールド上のＡ・Ｏ・Ｊと名の付いたモンスター１体の元々の攻撃力を倍にする！ワタシはディサイシブ・アームズの攻撃力を倍にする！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ　ＡＴＫ３３００→６６００

「攻撃力６６００！？」

「まだだ！ワタシは手札から、天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようにドローする！
少年よ、どうやらこのターンで終わりのようだ。」

「何！？」

「ワタシは永続魔法、前線基地を発動！前線基地の効果で、ユニオンモンスター、オイルメンを特殊召喚！」

オイルメン　ＡＴＫ４００

「速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！デッキから、オイルメンを２体特殊召喚！お前もモンスターを１体選択するがいい。」

「残念だが、こいつらの同名カードは入っていない。」

「そうか、レベル３のＡ・Ｏ・Ｊ　サイクルリーダーに、レベル２のオイルメンをチューニング！！
シンクロ召喚！！破壊しろ、Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル！！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル　ＡＴＫ２２００

「オイルメン２体を、ディサイシブ・アームズとカタストルにそれぞれ装備！速攻魔法、リミッター解除！！」

「なっ！？」

「自分フィールドの機械族モンスター全ての攻撃力を倍にする！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ　ＡＴＫ６６００→１３２００

Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル　ＡＴＫ２２００→４４００

「ディサイシブ・アームズの効果発動！相手フィールドに光属性モンスターがいる時、１ターンに一度、手札を１枚捨てることで相手の魔法・罠を全て破壊する！！」

「くっ！！」

「さらに貪欲な壺を発動！墓地のサイクルリーダー、アンノウン・クラッシャー、アンリミッター、ガラドホルグ、Ａ・マインドをデッキに戻しシャッフル！そして２枚ドロー！！」

「手札を増やしたか。」

「バトル！カタストルで、アブソーバー・ドラゴンを攻撃！カタストルが闇属性モンスター以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず破壊する！」

「アブソーバー・ドラゴンの効果発動！１ターンに一度、相手モンスターの攻撃を無効にする！！」

「ならディサイシブ・アームズで、アブソーバー・ドラゴンを攻撃！！」

「リーガル・コアの効果発動！相手モンスターの攻撃を、このモンスターに移す！」

「攻撃力０のモンスターに移して、自滅をする気か！？」

「手札のイリーガル・コアを捨てて、リーガル・コアを攻撃したモンスターの攻撃を無効にする！」

「チッ！ワタシはカードを２枚伏せて、エンドフェイズ時、ディサイシブ・アームズとカタストルに装備していたオイルメンを代わりに破壊する！ターンエンド！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル　ＡＴＫ４４００↓２２００

Ａ・Ｏ・Ｊ　ディサイシブ・アームズ　ＡＴＫ１３２００↓３３００

「俺のターン！俺は手札から魔法カード、コア・チェンジを発動！フィールドのリーガル・コアを墓地に送り、墓地のイリーガル・コアを特殊召喚！！」

イリーガル・コア　ＡＴＫ０

「俺はイリーガル・ノイズを召喚！」

イリーガル・ノイズ　ＡＴＫ０

「イリーガル・ノイズの効果！１ターンに１度、このモンスターのレベルをフィールドに存在するモンスター１体と同じにする！俺はアブソーバー・ドラゴンのレベル、７にする！」

「シンクロか！」

「レベル２のイリーガル・コアに、レベル７となったイリーガル・ノイズをチューニング！！シンクロ召喚！！理を崩せ、イリーガル・ドラゴン！！」

イリーガル・ドラゴン　ＡＴＫ３１００

「バトル！！イリーガル・ドラゴンで、カタストルを攻撃！」

「バカな！？自滅するぞ！？」

「イリーガル・ドラゴンが攻撃するとき、ダメージステップ終了時までお互いのカードの効果を無効にする！」

「何！？ぐうぉぉぉ！！」

バズ　ＬＰ３３００→２４００

「リーガル・マジシャンの効果活動！自分のモンスターが相手モン

スターを破壊した時、墓地に存在するリーガル・コアとこのカードを除外して、シンクロ召喚を行う！レベル2のリーガル・コアに、レベル４のリーガル・マジシャンをチューニング！！シンクロ召喚！！理を正せ、シンクロチューナー、リーガル・ドラゴン！！」

リーガル・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「リーガル・ドラゴンで、ディサイシブ・アームズに攻撃！」

「今度は何をするつもりだ！」

「リーガル・ドラゴンの効果発動！このカードが戦闘で破壊されるとき、代わりに自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送り、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！俺はアブソーバー・ドラゴンを墓地に送り、２４００ポイントのダメージを与える！」

「なんだその効果は！？ぐうぉおおおおお！！」

バズ　ＬＰ２４００→０

「・・・見事だ、約束通り、場所を教えよう。」

その時、後ろから声がした。

「紫藤！！」

「・・・俊か。」

「そいつは・・・・？」

「お前らが関わるほどのことじゃない。帰れ。」

「いや、俺にも戦わせてくれ！」

「こいつらはお前の心配してここまで来たんだぞ？それを無碍にするのか？」

「・・・しますよ。それでは、俺はこれで。」

時雨は自分のDホイールに乗って走りだした。

「待て紫藤！！神羅さん、早く行きましょう！」

「分かった！」

・・・1時間後、俺達は紫藤を見失った。

「くそっ！なんて速さだ！！」

「まあ、あいつのDホイールに追いつける奴なんて、1人しかいないからな。」

「1人？」

「あいつの兄、紫藤紫苑。世界最速のDホイールを持つ男。」

「最速？」

「ああ、確か時速９００ｋｍだったな。」

「早っ！」

「まあさっきの奴から本拠地の場所を聞いたから、そこに行けば会えるだろ。」

「そうですね・・・急ぎましょう！！」

「もうすぐだ。もうすぐ邪神龍が復活する!!」

「教祖様!!バズがやられました!!」

「一体誰にだ?」

「例の紫藤という者です!!」

「へえ、あのガキ、バズを倒したのか。」

「しかしバズは我々の中で1番弱いですから、負けるのも当然でし

よう。」

「そうよね、あんな坊主より私のほうが断然美しいわ。」

「誰も美しさなんて聞いてねえけど。」

「・・・・。」

「ヒャッヒャッヒャ!!面白くなってきたじゃねえか!!」

「おい、あいつはどこ行った?」

「あいつなら、教祖様に言われてネオ童美野シティに行ったぞ。」

「なんでだ?」

「あそこには、シグナー達がいる。その他にも計画の邪魔になる者が多数存在する。ゲルファならその街ごと破滅させられるからな。」

「確かに、あの人は十黒の中で最強ですからね、勝てるものと言えば教祖様と、元プロデュエリストの暮空神羅ぐらいでしょうか。」

「まあ、あのガキが戻った時に自分たちのいた街が丸ごと滅んでるのを見ているのを想像すると、笑いが止まんねえなあ?まあ、あのガキが戻れたらの話だけどよ?」

「もう少し慎んでください。」

「なんだあ葛井?やんのか?」

「あなたの頭にはそれしかないんですか？」

「そこまでにしておけ。邪神龍が復活すれば全てが終わる。この世界の全てがな。」

「楽しみだなー、教祖様。ヒャッヒャッヒャ！！」

「その笑い方は気持ち悪いのでやめてください。」

「もうすぐだ。待っていろ、神楽！！」

ＶＳバズ（後書き）

前回、オリカとともに募集しようとしていたものを忘れていたので、ここでシンクロ召喚の時のセリフを募集してみます。

敵でも味方でも構わないので、出来たらお願いします。

オリカ紹介１３（前書き）

ついに１３回目を迎えたオリカ紹介。

オリカがたまらずやれなかったので、久しぶりにやります！！

オリカ紹介１３

オメガ・ブラッド・ドラゴン
炎属性　ドラゴン族・エクシーズ／効果　ランク１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ２５００
レベル１２モンスター×２
１ターンに１度、このモンスターのエクシーズ素材を１つ取り除くことで、このターンこのモンスターと戦闘を行ったモンスターを破壊する。

オメガ・キャノン
光属性　機械族・効果　レベル１０　ＡＴＫ３１００　ＤＥＦ２６００
このモンスターが特殊召喚に成功した時、デッキからレベル２以下のモンスターを特殊召喚することができる。

代理サイコロ
永続罠
お互いのプレイヤーは、自分がサイコロを振る時、代わりに相手が振る。

リーガル・コア
闇属性　機械族・チューナー　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分フィールドにカードが存在しない場合、このモンスターを手札から特殊召喚することができる。１ターンに１度、相手モンスターの攻撃対象をこのモンスターに変更する。

アブソーブ・コア
光属性　機械族・チューナー　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０

このカードが召喚に成功した時、相手フィールドのモンスター1体の効果を無効にする。

エクストラ・アブソーバー
光属性　魔法使い族・効果　レベル５　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードは、自分フィールドに『アブソーブ』と名の付くモンスターが存在するとき、手札から特殊召喚できる。

アブソーバー・ドラゴン
光属性　ドラゴン族・シンクロ／効果　レベル７　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ２４００
「アブソーブ・コア」＋チューナー以外のモンスター1体以上
1ターンに1度、このモンスターが攻撃対象にされた時、その攻撃を無効にすることができる。

リーガル・マジシャン
闇属性　魔法使い族・効果　レベル４　ＡＴＫ１７００　ＤＥＦ１５００
自分のモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、手札から特殊召喚できる。自分のモンスターが相手モンスターを破壊した時、自分の墓地に存在する『リーガル・コア』と自分フィールドに存在するこのカードを除外してシンクロ召喚を行うことができる。

イリーガル・コア
闇属性　機械族・チューナー　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
『リーガル・コア』が攻撃対象になった時、手札のこのカードを墓地に送ることでその攻撃を無効にする。

コア・チェンジ

通常魔法
自分フィールドに存在する『コア』と名の付いたモンスターを墓地に送り、墓地に存在する『コア』と名の付いたモンスターを特殊召喚する。

イリーガル・ノイズ
闇属性　雷族・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
１ターンに１度、このモンスターのレベルをフィールドに存在するモンスター１体のレベルに変更する。

イリーガル・ドラゴン
闇属性　ドラゴン族・シンクロ／効果　レベル９　ＡＴＫ３１００　ＤＥＦ３１００
『イリーガル・コア』＋チューナー以外の雷族モンスター１体以上
このモンスターが攻撃するとき、お互いのプレイヤーのカードの効果は無効になる。このモンスターが効果によって破壊されたターンのエンドフェイズ時、このカードを墓地から特殊召喚する。

リーガル・ドラゴン
光属性　ドラゴン族・シンクロ／効果　レベル６　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ２５００
『リーガル・コア』＋チューナー以外のモンスター１体以上
このモンスターが戦闘によって破壊されるとき、代わりに自分フィールドのモンスター１体を墓地へ送り、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

皇帝（前書き）

今回は十黒の一人黒谷と、時雨のお兄さん、紫苑のデュエルです。

十黒のデッキを考えてみたらほとんど聖なるあかりに弱い気が…

皇帝

～混沌邪宗本部・闇教会～

時雨は混沌邪宗の本部である教会に着いていた。

「ここか。」

「貴様か、バズを倒したのは。」

「誰だ？」

そこには・・・なぜか肉球の柄が入ったパジャマを着ている右脇に枕を持った緊張感のない男がいた。

「・・・・・。」

「？どうした。」

「・・・なんでパジャマなんだ？」

「？何を言って・・・・・・」

男は自分の服を見直した。

「・・・少し時間をくれ・・・。」

「あ、ああ・・・」

男は急いで教会の中に入っていった。

～３０分後～

「悪かった・・・」

「いや、気にするな…」

男はちゃんと着替えて出てきた。

「改めて自己紹介しよう。俺は黒谷だ、十黒の一人だ。」

「お前もか、ならデュエ・・・」

「俺はちゃんと礼はする男だ。だからお前をここから先に通す。」

「はっ？」

「さすがにあのままやってたらこれから先恥ずかし過ぎて人前に出れなくなるところだった。だからその礼だ。」

「いや、それでいいのか？」

「いい、さっさといけ。」

「あ、ああ・・・」

時雨は黒谷に言われるままに中に入っていった。

「・・・ここか・・・」

～再び混沌邪宗本部・黒教会～

ある男がDホイールに乗ってやってきた。

「誰だ貴様は？」

そこには先ほど時雨があった男、黒谷がいた。

「・・・相手に名を尋ねる時は自分から名乗るのが筋じゃないのか？」

「そうか。俺は黒谷だ。混沌邪宗の十黒の一人だ。」

「俺は紫藤紫苑だ。」

「ここから先は通すわけにはいかない。（まあ、さっき通しちゃったけど…。）」

「ならデュエルで勝負だ。」

「いいだろう。」

「「デュエル！！」」

一方その頃・・・

「ところで神羅さん。」

「なんだ？」

木原が神羅に質問をしていた。

「時雨のお兄さんって、どんなデッキを使うんですか？」

「帝。」

「・・・次元ですか？」

「さあ？」

「俺のターン！」

黒谷のターンから始まった。

「俺は魔法カード、手札抹殺を発動！！お互いに手札を全部捨てて、同じ枚数ドローする！！墓地に送られた『暗黒界の軍神　シルバ』２枚と『暗黒界の武神　ゴルド』２枚と『暗黒界の尖兵　ベージ』の効果発動！！カードの効果によって手札から墓地へ捨てられた場合、墓地から特殊召喚する！！」

暗黒界か…。

暗黒界の軍神　シルバ　ＡＴＫ２３００

暗黒界の武神　ゴルド　ＡＴＫ２３００

暗黒界の尖兵　ベージ　ＡＴＫ１６００

「手札からフィールド魔法、暗黒界の門を発動!!フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターの攻撃力・守備力を３００ポイントアップする!!」

巨大な白い門が現れた。

暗黒界の軍神　シルバ　ＡＴＫ２３００→２６００

暗黒界の武神　ゴルド　ＡＴＫ２３００→２６００

暗黒界の尖兵　ベージ　ＡＴＫ１６００→１９００

「カードを3枚伏せて、ターンエンド!」

「俺のターン。俺は魔法カード、テラ・フォーミングを発動。デッキからフィールド魔法を1枚手札に加える。俺は帝王の領域を手札に加える。フィールド魔法、帝王の領域を発動。新しいフィールド魔法が発動したことにより、暗黒界の門は破壊され、モンスターの攻撃力は元に戻る。」

「カウンター罠、マジック・ジャマー!!手札を1枚捨てて、魔法カードの発動を無効にする!!」

「帝王の領域の発動は無効にすることはできない。」

「そんなのありか!?」

暗黒界の軍神　シルバ　ＡＴＫ２６００→２３００

暗黒界の武神　ゴルド　ＡＴＫ２６００→２３００

暗黒界の尖兵　ベージ　ＡＴＫ１９００→１６００

門が崩れると、玉座が５つ現れた。

「・・・椅子？」

「帝王の領域の効果発動。下僕トークンを特殊召喚する。」

下僕トークン　ＡＴＫ０

「下僕トークンをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚。」

邪帝ガイウス　ＡＴＫ２４００

「ガイウスがアドバンス召喚に成功した時、フィールドのカードを１枚除外する。俺はベージを除外。闇属性モンスターを除外した場合、相手に１０００ポイントのダメージを与える。」

「くっ！！」

黒谷　ＬＰ４０００→３０００

「俺はカードを3枚伏せて、ターンエンド。」

「俺のターン！」

「永続罠、マクロコスモスを発動。そして速攻魔法、グランドクロスを発動。相手に３００ポイントのダメージを与え、フィールドのモンスターを全て破壊する。」

「うわあ！」

黒谷　ＬＰ３０００→２７００

「さらに罠発動、帝王の憤怒。『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたいずれかのモンスターが除外された時、このターン除外されたモンスターの攻撃力の合計の半分のダメージを与える。つまり（２３００×４）÷２＝４６００のダメージを与える。」

「うわあああああ！！」

黒谷　ＬＰ２７００→０

「よー紫苑、速かったな～！」

「神羅か…。」

「この人が、紫藤のお兄さん？」

「気にするな。」

「じゃ、いくか。」

皇帝（後書き）

・・・なんかダメな気がしてきました。

次回あたりで時雨の過去をやってみようと思います。

因縁・・・そして過去（前書き）

今回の話から時雨の過去の話を始めます。

ちゃんとできるか自信ないです・・・

因縁・・・そして過去

～黒教会・地下1階～

俺は今、下に降りている。ここに入ってから急に闇の力が強くなっている。この先に何かがあるのか？

「よお、ガキ。よくここまでこれたなあ？さすがにここまで来ちゃったら帰すわけにはいかねえよお。あの子に申し訳立たねえなあおい？」

そこには奴、黒涼がいた。

「・・・お前が神楽のことを語るな…。殺すぞ。」

時雨の目がさらに冷たくなる。

「そおかいそおかい、殺すか～、こわいね～？お兄さん勢い余って殺しちゃうかもしれねえなあ？」

「構えろ・・・お前はデュエルで倒す。」

「そおかよ、3年前お前俺に何もできなかったのになあ？随分とえらい口きけるようになったじゃねえかあ？」

「さっさと構えろ。」

「わーったよ。今度はきっちり跡形もなく・・・殺してやるよ！！」

「「デュエル！！」」

～黒教会・1階～地下1階階段～

「ところで神羅さん。」

俊が神羅に話しかけた。

「なんだ？」

「なんで紫藤はあんなに怒ってるんですか？」

「あいつはな、3年前に大切な人を奪われてるんだよ。」

「大切な人？」

「ああ、椎名神楽、あいつの彼女だ。」

「「「「彼女！？」」」」

「神羅、この小僧たちを黙らせろ・・・。」

「落ち着け紫苑。」

「あいつ彼女いたんですか！？」

「いやそれ以前に、なんでその子を奪われたんですか？」

「それは俺にもわからない。ただ、なにかあることは確かだ。あの時の時雨はすごい荒れてたからなあ…。」

～3年前～

「時雨～、そんなに不貞腐れんなって。」

「・・・いいですよ。」

この時の時雨（12歳）は、両親を亡くし、神羅が傷心にとでも思ってとある山奥の神社に向かっていた。

「なんで神社なんですか？」

「お前と同年代の子がいるから、その子と仲良くなってもうちょっと気を取り直せ。」

「・・・・・。」

そんな話をしながら1時間後、時雨と神羅は目的地に着いた。

「ここだ。特に何かを祭ってるわけじゃないんだが、一応神社だ。」

「一応ってつけるなーー！！」

神社に続く長い階段の上のほうから、巫女の服を着た茶髪の少女が走ってきて神羅にドロップキックをした。

「ぐへ！？」

「！？」

神羅は蹴り飛ばされ、１m位飛ばされた。

「？？？？？」

「・・・ひ、久しぶりだね、神楽ちゃん。久しぶりなんだから、もうちょっと加減してくれないと。」

「神羅さん、この子誰？」

神楽と呼ばれる少女は神羅の話を無視して時雨を指差した。

「人を指でさすな。」

「ああ～ごめんね？」

「こいつは紫藤時雨、親がなくなったから傷心にって思って連れてきた。」

「うちは傷心旅行の為にあるんじゃない！！」

「ぐはっ！！」

再び蹴り飛ばされる神羅。

「とりあえず『し』が多いから、しー君でいいよね？」

「勝手にき」

「よろしくね、しー君！！」

「・・・・。」

「お、俺は無視？」

「ね～しー君。遊ぼう♪」

「・・・一人で遊んでろ。」

「そんなこと言わないで、ほら！」

「引っ張るな。」

「一緒に遊ぼう♪」

「・・・・。」

時雨は神楽に引っ張られていった。

「ねえー、しー君！遊ぼう♪」

時雨は神社の階段の上で項垂れていた。

「うるさい。」

「・・・・・。」

すると神楽は時雨の後ろに小走りで向かい、

「とうっ！！」

「！？」

後ろからドロップキックで飛ばされた。

当然、階段（かなり段数ある）に座っていたので、

「うわあああああおおおおおあああああ！！」

という感じに転がり落ちていった。

５分後、時雨は猛スピードで階段を駆け登り、

「殺す気かあああ！！？」

「あはははははは！！！綺麗に転がってった！！面白ーーい！！」

「笑い事じゃねーだろ！！」

「あっはっは！！ごめんごめん！！」

「たくっ・・・死ぬかと思ったぞ…。」

「そんな表情もできるんだね。」

「？」

神楽は急に話のトーンを下げる。

「しー君てさ、会ったときからずっと無表情だったから、ちょっと心配だったんだよ。少し安心した。」

「何が『安心した』だ！人を蹴飛ばすな！！」

「だからそのことは悪かったって。それに安心したのは本当だよ？」

「うっ・・・もういい。」

「それじゃあとでねー♪」

「うるせー！！」

この時の時雨の顔は、少し微笑んでいた。

因縁・・・そして過去（後書き）

時雨の過去は何話かかるか分かりませんが、はやくて次回で終わります。

神楽の紹介は、この混沌邪宗編が終了してからにします。

過去　（前書き）

前回に続き、過去の話です。

過去

「うまい！！もう一杯！！」

「食い過ぎ！！」

「ぐはっ！！」

「またか・・・」

今は神羅さん、神楽と3人で食事をしてる。ちなみにさっきのは神羅さんがご飯を5杯目に突入したので、神楽が裏拳を当てたということだ。

「しー君はもうちょっと食べなよ？」

「俺はもう十分に食べた。」

「私の作った料理、うまくなかった？」

という感じで、神楽が涙目になりながらこっちを見つめてきた。

「これは俺が作ったものだ。お前は一切手をつけてないだろ。」

「ちぇー。」

「まあまあ、残すのはもったいないだろ？だからもっと食べろ。」

「・・・分かりました。」

「そういうわけで俺も・・・」

「神羅さんは食べすぎ。」

「はい・・・。」

「・・・。」

昼、俺はいつも通り階段に座っている。

「しー君♪」

「なんだ。」

もう呼ばれ方は諦めた。

「呼んでみただけ♪」

「なんだそれ？」

神楽は時雨の隣に座った。

「しー君、初めてきた時より表情柔らかくなったよね？」

「そうか？」

「そうだよ。はじめてきた時はものすごく暗かったよ？それはもう夜より暗く・・・」

「なんだその例え・・・。」

時雨は少し微笑みながらそう返した。

「そういえば、どうしてお前は一人なんだ？親は？」

「・・・。」

「？」

急に空気が重くなった。すると神楽は口を開いた。

「私ね？生まれた時にお母さんが死んじゃって、６年くらい前にお父さんが死んじゃったんだ。」

「・・・。」

なんだかいけないことを聞いてしまったかのように思えてきた時雨。

「でもね、人生まだまだ長いんだし、こんなことでしょげてちゃ駄目だと思って・・・」

少し微笑む神楽。

「それと同じくらい悲しいことがあるかもしれないし、それ以上のこともあるかもしれない。でもね？それにぶつかる度に暗くなってたらいつか自分が真っ暗になって消えちゃうと思うんだ。だから悲しいことが起きても前向きに生きなくちゃ！」

笑顔でガッツポーズをする神楽。

「・・・。」

「・・・てなわけなんだけど、それでもやっぱり、寂しい時は寂しいんだよね。」

急に悲しそうな顔になる神楽。

「・・・も・・・・だから。」

時雨が何か呟いた。

「えっ？なに？」

「・・・俺も同じだから。」

「？」

「俺も親、いないから・・・だから・・・」

「だから、何？」

「だから・・・・」

「ねえ何？」

「だから・・・もうそんな悲しそうな顔するな！！別にお前だけ世界で独りぼっちなわけじゃないんだから、天涯孤独な奴なんてこの世界にごまんといる。俺もお前もその中のほんの一部に過ぎないんだし。それにお前には俺や神羅さんがいるだろ？」

「う、うん・・・。」

「だから笑ってろ。笑ってるほうがお前は・・・・・」

時雨は頬を赤める。

「何？」

「・・・笑ってるほうが・・・お前は・・・綺麗なんだから・・・
ああ～もう！！だから、悲しそうな顔より笑ってる顔のほうがいい
から笑ってろ！！分かったか！？」

「・・・・・。」

呆然とする神楽。

「（・・・あれ？）」

「・・・ぷっ！！」

「！？」

急に笑い出す神楽。

「あはははははははは！！なにそれ？意味分かんない！！あはは
はははははは！！」

「わ、笑うな！！」

「ご、ごめん！！ぷっ・・・・・！！」

「・・・・もういい！！」

「・・・ありがとね。」

「？」

「そういうことを言ってくれるだけでも嬉しいよ。ありがとうしー

君！！」

神楽は今までにないくらいの笑顔で時雨に感謝した。

「・・・・・・」

時雨は無言のままその場を離れた。その時の顔は真っ赤だった。

「な～に話してたのかな？」

「！！」

何処からか神羅が現れた。

「べ、別に何も…」

「ふ～～ん？・・・なるほど、若いっていいねー！！」

「それ以上言うな！！」

「うおっ！？あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・」

神楽は照れながら神羅を蹴り飛ばした。

過去　（後書き）

もうそろそろ過去も終わると思います。

喪失（前書き）

今回で過去終了です。

喪失

「もうすぐお別れだね～。」

「・・・。」

「あと3日だけど、よろしくね？」

そう、時雨はあと3日で帰ることになっている。

「・・・なあ。」

「何？」

「お前も、一緒に来ないか？」

「え？」

「お前もさ？ここで一人でいるより一緒にネオ童美野シティに住まないか？」

「それってどういうこと？」

唖然とする神楽。

「・・・つまりだなあ、俺と一緒に来てくれ！！」

時雨は顔を赤くしながら言った。

「・・・」

少しの沈黙が流れる。

「それって・・・プロポーズということで受け取ってもいいのかな？」

神楽が聞き返す。

「・・・ああ。」

顔を真っ赤にしながら答える時雨。

「それで、どうなんだ？」

「・・・うん！いいよ！私もしー君のこと好きだよ！！」

「なっ！？」

唐突なお返しに慌てふためく時雨。

「ふふふ！！」

それを見て今までになく嬉しそうに笑う神楽。

どこからどう見ても、誰がどんな角度から見ようとも、その二人には幸せな未来が待っているとしか思えない、微笑ましい光景だった。

そして翌日、誰もあんなことが起きるとは予想すらしていなかった。

その日の夜、

「そうかそうか！！神楽も一緒に来ることになったのか！！それじゃ神楽も出発する準備はしておけ？時雨の家で暮らすんだから、頑張れよ？というか、カップル成立おめでとう！！お幸せにーー♪」

「「なっ！？」」

「だってそうだろ？時雨、お前が言い出したんだから当然神楽が住むのはお前の家だろ？」

二人揃って顔を赤くする。

「ま、神楽の生活に必要な物とかの準備とかは俺のポケットマネーを使ってやるから安心しとけ！！」

「「・・・。」」

「ところでお二人さん？もうキスとかした？」

「「できるかーーー！！」」

「ぐは！！」

神楽のドロップキックと時雨の回し蹴りが同時に神羅に決まった。

翌日・・・

「しー君!!遊ぼう?」

「ああ!!」

いつも通りの微笑ましい光景。

それをぶち壊すかのように、奴は現れた。

「おや〜?ガキんちょ同士でいちゃいちゃですかあ?全くお熱いねえ?見てるだけでむかついてくるよ?」

その男は、ホストのような服を着た赤い髪をした男だ。

神楽は時雨の後ろに隠れた。

「お前は誰だ?」

「答える義理がねえなあ？いいからその嬢ちゃんをこっちに渡せよガキ。」

「ヒャッヒャッヒャ！！そうだぜ坊主？怪我したくなかったらさっさとその嬢ちゃんを渡しな！！ヒャッヒャッヒャ！！」

あの男の仲間だろうか、パンク系のファッションを着た白黒の髪の男がいた。

「うっせえぞ鬼ヶ崎。」

「ヒャッヒャッヒャ！！だぁまってろ黒涼。？3のお前が、？2の俺に指図してんじゃねえよ！！ヒャッヒャッヒャ！！」

「言っとくけどなあ？俺はお前に負けてるなんて微塵も思っちゃいねえ。」

「勝手にいってろ、ヒャッヒャッヒャ！！」

「しー君…。」

「安心しろ神楽。俺が守ってやる。」

「ああ？守ってやるってえ？なんだそのふりいセリフは？漫画の主人公気取りですかあ？かあっこいいねえ？めちゃくちゃにしたくなっちまうよおい？」

「デュエルだ。俺が勝ったらお前らはさっさと消え失せろ。」

「デュエルかあ？わあかったよお。ただし、普通のデュエルじゃあ

面白くねえ。闇のデュエルでやろうぜえ？」

「いいだろう。俺は時雨だ。」

「どうでもいいっつうの。」

「「デュエル！！」」

「俺からいかせてもらうぜえ？俺のターン！！」

二度目の時雨のターン、

黒涼　ＬＰ４０００

時雨　ＬＰ１００

「がはっ！？」

時雨の体はボロボロになっていた。

「なあんだこの程度かあ？よわっちいなあおい？第一？なあにがこの神社の愛を知った巫女が必要だあ？愛なんてくっだらねえよお。それで？さっきまで威勢のよかったあの口はどこにいったんだか？」

「しー君!!」

「なんだこれ?ダメージが本物になってる?」

「闇のデュエルってのはなあ?ライフがそのままプレイヤーの命なんだよお?つまりい、ライフが0になったら、分かるよなあ?」

「そんな・・・」

「くっ・・・ターン・・・エンド。」

「止めを刺してやるよおガキい!!俺のターン!!」

「やめてください!」

「!?」

神楽が叫んだ。

「私が・・・私が付いていきますから!!しー君を傷つけないでください!!」

「やめろ神楽!!」

「ほおう?利口だなあ嬢ちゃん?最初からそうしてればよかったんだよ?」

「チッ、面白いものが見れなかったぜ…。」

「よかったなあガキ?この嬢ちゃんのおかげで命拾いしたなあ?俺

の慈悲深さに感謝しろよ?そんじゃあな、ガキ。」

「待て!!神楽!!」

黒涼と呼ばれる男と鬼ヶ崎という男と一緒に、神楽が連れて行かれる。

神楽は連れて行かれる前に、小声でこういった。

「・・・・・ごめんね、しー君・・・・・」

神楽の目には、涙が見えた。

「くっそおおおおおおおおおおお!!」

時雨は連れて行かれる神楽を見ながら叫び続けた。

追おうともした。しかし先ほどのダメージで体が思うように動かない。

「畜生!!神楽あああああああああああ!!」

時雨の悲痛な叫びが響いた。

数時間後、帰ってきた神羅が神社でボロボロになった時雨を見つけて、病院に連れていった。

病院に連れて行かれた翌日、時雨は目を覚ました。

「・・・起きたか時雨!!昨日はいったい何があったんだ?」

「・・・・・・。」

「おい、時雨?」

「・・・・・・。」

時雨の心は、大切なものを奪われたショックで、ほぼ完全に壊れていた。

それも当然かもしれない。大切なものを失った後に、さらに大切なものを奪われたのだから・・・。

「時雨・・・。」

時雨はそのまま、何に対しても無反応になり、常に空ばかり見上げていた。

そんなある日、時雨の所持品を神羅が持ってきた日、

「・・・。」

時雨が反応した。それは、神楽と一緒にいた時に、神楽にもらったものだった。

神楽と一緒に行った夏祭りの出来事。

『しー君、これあげる!!』

『・・・ペンダント?』

『これ!私からの贈り物!!大切にしてね!』

『・・・分かったよ。大切にする。』

「神楽…。」

時雨の目から、涙がこぼれた。

「うわあああああああああああああ！！」

喪失（後書き）

これにて過去は終了です。

次回、時雨と黒涼のデュエルです。

狂戦士（前書き）

今回は、時雨と黒涼の因縁の対決です。

正直、自分で考えたのに黒涼は嫌いです・・・。

狂戦士

「俺のターン！！」

黒涼のターンから始まった。

「俺は愚かな埋葬を発動！！デッキからダーク・シムルグを墓地に送る！！そして手札の疾風鳥人ジョーと、異次元の偵察機を除外し、墓地からダーク・シムルグを特殊召喚！！」

ダーク・シムルグ　ＡＴＫ２７００

「さらにい、ビッグバンシュートをダーク・シムルグに装備！！」

ダーク・シムルグ　ＡＴＫ２７００→３１００

「手札から、命削りの宝札を発動！！俺は手札が５枚になるようにドロー！！俺は、コスト・イーターを召喚！！」

コスト・イーター　ＡＴＫ０

「カードを３枚セットして、エンドフェイズ、除外された異次元の偵察機を攻撃表示で特殊召喚する！ターンエンド！！」

異次元の偵察機　ＡＴＫ８００

「俺のターン。」

「永続罠！！魔封じの芳香、王宮の弾圧！！」

「3年前と同じだな、黒涼。」

「テメエにはこの程度で十分なんだよ、ガキ。コスト・イーターの効果は分かってるよなあ?」

「自分のライフを払う代わりに、その数値分だけ攻撃力を上げる効果だろ?」

「よおく覚えてたねえ?関心関心。まあ?これでお前ができるのは?通常召喚だけなわけなんだが?気に食わねえなあ…俺にはこおんな力があるのに、なんでゲルファが?1で、鬼ヶ崎が?2で、俺が?3なんだあ?ああむかつく。というわけで、さっさと死に晒せクソガキぃ!!」

「3年前と同じ戦略で、いつまでも通用すると思うな。」

「なあら証明してみろよガキ。」

「俺はオメガ・コアを召喚。」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「カウンター罠、昇天の角笛!!異次元の偵察機をリリースして、オメガ・コアの召喚を無効にし破壊する!!」

「やはり変わらないな、手札から罠発動、バニシング・ブレイク!!」

「手札から罠だと!?」

「ダーク・シムルグの効果はセットできなくする効果、つまり罠が使えなくなる効果というわけじゃない。バニシング・ブレイクの効果！モンスターの召喚が無効にされた時、デッキから『バニシング』と名の付いたモンスターを任意の数除外することで、同じ数だけ相手フィールド上のカードを破壊する！俺はデッキから、バニシング・コアと、バニシング・ギアと、バニシング・チェーンを除外し、魔封じの芳香と王宮の弾圧とダーク・シムルグを破壊する！！」

「何い！？」

「同じ方法が通じるわけがないだろ。手札から魔法カード、ニ重召喚を発動！俺は、アスタリスク・コアを召喚！さらに天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようにドローする！アスタリスク・ソルジャーを２体特殊召喚！」

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００

「レベル２のアスタリスク・コアに、レベル３のアスタリスク・ソルジャー２体をチューニング！！
星の光よ、全てを守り抜け！シンクロ召喚！現れろ、アスタリスク・ドラゴン！！」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「バトル！アスタリスク・ドラゴンで、コスト・イーターを攻撃！スターライト！！」

「ぐお！？」

黒涼　ＬＰ４０００→１０００

「カードを２枚伏せて、ターンエンド！」

「やってくれたなあ、クソガキ！！俺のターン！！」

「どうする？お前の切り札は墓地に行った。勝負は見えてると思うが？」

「だあれがダーク・シムルグが切り札なんつった？死者蘇生を発動してダーク・シムルグを特殊召喚！」

ダーク・シムルグ　ＡＴＫ２７００

「魔法カード、ダークウェーブを発動！ダーク・シムルグのレベルを－７にする！ＤＴヘルウィンドを召喚！」

ＤＴヘルウィンド　ＡＴＫ０

「ＤＴ！？なんでお前が！？」

「だあれがＤＴもってるのはダークシグナーだけって決め付けたあ？レベル－７となったダーク・シムルグに、レベル４のＤＴヘルウィンドをダークチューニング！！

魔風よ、今全てを消し飛ばせ！！ダークシンクロ！！切り刻め、邪神鳥ダーク・シムルグ！！」

邪神鳥ダーク・シムルグ　ＡＴＫ３１００

「邪神鳥ダーク・シムルグの効果発動！このカードのダークシンクロに成功した時、相手フィールドのカードを全て裏にする！」

「くっ！！」

「さらに邪神鳥ダーク・シムルグがフィールドに存在する限り、相手はセットされているカードを表にすることができない！邪神鳥ダーク・シムルグで、モンスターを攻撃！邪神鳥ダーク・シムルグが裏側モンスターを攻撃した時、モンスターを裏側のまま墓地に送り、このモンスターの攻撃力分のダメージを与える！！」

「ぐっ！！」

時雨　ＬＰ４０００→９００

「俺はカードを二枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺のターン！俺は死者蘇生を発動！墓地からオメガ・コアを特殊召喚！そして１０オーダーを発動！

・・・全部表だ！デッキから、オメガ・キャノンを特殊召喚！」

オメガ・キャノン　ＡＴＫ３１００

「オメガ・キャノンが特殊召喚された時、デッキからレベル２モンスターを特殊召喚する！ステラ・コアを特殊召喚！」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

「レベル2のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・キャノンをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「オメガ・ドラゴンの効果発動！攻撃力を１０００ポイント下げて、このターン相手は罠を発動できない！！」

「なんだあ？そんなちんけな効果は？」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「さらにオメガ・ドラゴンとステラ・コアをリリースして、オメガ・ベルセルクをアドバンス召喚！」

オメガ・ベルセルク　ＡＴＫ？

「オメガ・ベルセルクの攻撃力は、リリースしたモンスターの攻撃力の合計になる！」

オメガ・ベルセルク　ＡＴＫ？→４０００

「バトル！オメガ・ベルセルクで、邪神鳥ダーク・シムルグに攻撃！ベルセルクブレード！！」

「ぐうぉ！！？」

黒涼　ＬＰ１０００→１００

「だが、俺のライフはまだ残ってる！」

「わざと残したんだよ。オメガ・ベルセルクの効果発動！手札を全て捨てて、モンスターカードが出た場合、続けて攻撃ができる！この効果は魔法か罠が出るまで続く。」

「なんだその効果！？」

「1枚目！モンスターカード！」

「ぐは！！」

黒涼　ＬＰ１００→０

「2枚目！モンスターカード！」

「がは！！」

「3枚目！モンスターカード！」

「ごほ！！」

「4枚目！モンスターカード！」

「がっ！！」

「5枚目！モンスター・・・」

「紫藤！！」

「？」

後ろから、俊の声が聞こえた。

「時雨、もう充分だろ…」

「神羅さん・・・」

そういうと、時雨は攻撃をやめた。黒涼はすでにボロボロだった。

「・・・すいません、大分落ち着きました。」

「お前には俺達もいるんだから、俺達に頼ってもいいだろ？」

「いや、しかし・・・」

「そうだ、時雨！！」

尚が叫んだ。

「尚…。」

「私達もいるんですから・・・。」

「そうですよ！！」

「吉野、東雲…。」

「時雨、あまり感情に身を任せるな。」

「ごめん、兄さん・・・皆も悪かった。」

「へっ・・・仲睦まじいこった。」

黒涼は馬鹿にした感じに言った。

「何がおかしい？」

「いいことを教えてやるよ…教祖のところに行くには他の５人の十黒を倒すか、持ってる鍵を奪わねえといけねえのさ。」

「なんでそんなことを？」

「テメエらが潰されるのを見るのが面白そうだからだよ。いって潰されてこい。」

黒涼はそこまで言って意識を失った。

「・・・時雨、神羅、お前らは教祖とかいうやつのところに行って来い。残りの十黒とかは、俺達がやる。」

紫苑はそう言った。

「そうだぜ紫藤？お前は先に行け。」

「俺たちだって、やる時はやるさ。」

「私も負けるつもりはないですから。」

「私だって、力になりたいんです！！」

「そういうことだ。さっさと行け。」

「・・・分かった、皆任せた！」

時雨と神羅は先に進んだ。

「俺達もいくぞ。」

「「「「はい！！」」」」

狂戦士（後書き）

十黒の一人はネタに使おうと思います。

今、時の跳躍で未来融合のターンを進められるのか疑問に思ってます。

オリカ紹介１４（前書き）

オリカ紹介です。

今回は数が少ないと思います。

オリカ紹介１４

帝王の憤怒
通常罠
自分フィールド上の「氷帝」「雷帝」「地帝」「風帝」「炎帝」「邪帝」「光帝」「闇帝」のいずれかの名の付いたモンスターが除外された時、このターン除外されたモンスターの攻撃力の合計の半分のダメージを相手に与える。

コスト・イーター
闇属性　悪魔族・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分のライフを払う効果が発動した時、代わりにその数値分だけこのカードの攻撃力をアップする。

バニシング・ブレイク
通常罠
モンスターの召喚が無効にされた時、このカードは手札から発動できる。デッキから「バニシング」と名の付いたモンスターを任意の数だけ除外することで、同じ数だけ相手フィールドのカードを破壊する。

バニシング・チェーン
闇属性　機械族・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードが除外された時、相手フィールドのモンスター1体の表示形式を変更できる。

ＤＴヘルウィンド
闇属性　悪魔族・ダークチューナー　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
墓地に存在するこのカードを除外することで、手札のレベル7以上

の闇または風属性モンスターを2体まで特殊召喚する。

邪神鳥ダーク・シムルグ
闇属性　鳥獣族・ダークシンクロ／効果　レベル－１１　ＡＴＫ３１００　ＤＥＦ３０００
「ダーク・シムルグ」－「ＤＴ」と名の付いたモンスター
このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを全て裏側にする。このカードがフィールドに存在する限り、相手は裏側でセットされているカードを表側にすることができない。このカードが裏側守備表示モンスターを攻撃した場合、そのモンスターを裏側のまま墓地に送り、相手にこのモンスターの攻撃力分のダメージを与える。

オメガ・ベルセルク
光属性　戦士族・効果　レベル１１　ＡＴＫ？　ＤＥＦ０
このモンスターは特殊召喚できない。このモンスターの攻撃力は、リリースしたモンスター2体の攻撃力の合計になる。このモンスターが相手ライフにダメージを与えた場合、手札を捨ててデッキからドローする。そのカードがモンスターカードだった場合、ドローするカードが魔法・罠カードになるまで攻撃する。

オリカ紹介１４（後書き）

ターンジャンプで未来融合のターンを進められるんでしょうか？

俊対牙城（前書き）

今回は俊対十黒の一人、牙城の対決です。

結構嫌なデッキだと思います。

皆と別れてから、部屋の扉みたいなところに着いた。

「・・・とりあえず、開けてみるか。」

俊が扉を開けた先にあったものは…

「・・・マニアなのか?」

その部屋に広がっていたものは、岩、岩、岩、岩そしてレンガ、レンガ、レンガ、レンガ、レンガ…

「……固いものが好きなのか?」

その時、誰かがやってきた。

「あの、すいません…。」

「?」

そこには普通としか言いようがない青年が立っていた。

「ここ、僕の部屋なんですよね…。」

「ああ、そうなんですか。」

「ところで、君が例の侵入者さん?」

「多分、はい…。」

「それじゃあ自己紹介をさせていただきます。十黒の牙城と言います。」

「・・・ところであれは趣味なんですか?」

俊は周りに置いてある岩やレンガを指差した。

「はい、僕は建物とかの素材になる物とかが好きなんですよね。」

「あと、本当にあなた十黒なんですか?」

「はい、十黒の皆が皆、性格がぶっ飛んでるわけじゃないんで・・・まあ、まともと言えるのは僕と黒谷さんと葛井さんくらいしかいないんですけどね。」

「そうなんですか…。」

「雑談もここまでにしておいて、デュエルでもやりましょうか。もちろん、普通のデュエルで。」

「闇のデュエルじゃないんですか?」

「だって危ないじゃないですか!それにデュエルで人の命をかけるなんてしたくないんですよ!!」

「そ、そうですか…」

俊はかすかに、この人本当に十黒なのか?と思った。

「「デュエル！！」」

「俺のターン！ショット・ガンナーを召喚！」

ショット・ガンナー　ＡＴＫ１０００

「ショット・ガンナーの効果発動！相手に５００ポイントのダメージを与えて、デッキからバスター・シンクロンを特殊召喚する！！」

「うわ！！」

牙城　ＬＰ４０００→３５００

バスター・シンクロン　ＡＴＫ１５００

「レベル４のバスター・シンクロンに、レベル４のショット・ガンナーをチューニング！！
風の銃士が、敵を狙い撃つ！シンクロ召喚！撃ち抜け、アトミック・フルバスター！」

アトミック・フルバスター　ＡＴＫ２８００

「俺は火炎地獄を２枚発動！フルバスターの効果で、俺の分のダメージも受けてもらう！！」

「うわあああ！！」

牙城　ＬＰ３５００→５００

……こいつ本当に十黒なのか？あまりにも弱すぎる気が……

「1ターン以内に3000以上のダメージを受けた時、このモンスターは特殊召喚できる！僕は鉄壁の牙城を特殊召喚します！！」

牙城がそういうと地面から巨大な城が出てきた。

「なんだこれは！？」

鉄壁の牙城　DEF4000

「鉄壁の牙城がフィールドにいる限り、僕は戦闘ダメージおよび効果ダメージを受けません。」

「な、なんだよその効果！？」

「あと、効果では破壊されず、相手はこのモンスターしか攻撃できません。」

「何その効果！？」

「ついでにこのモンスターが攻撃表示になった時、守備表示になります。」

無茶苦茶なような気が……

「俺はカードを2枚セットして、ターンエンド！」

「僕のターン！僕は永続魔法、魔力倹約術を発動！そして終焉のカウントダウンを発動！！魔力倹約術の効果でライフは払いません！」

「終焉のカウントダウンデッキか！！」

「さらに速攻魔法、時の飛躍ーターンジャンプを発動！終焉のカウントダウンのターンを3ターン進めます！！カードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺のターン！！」

「罠発動！運命の火時計！終焉のカウントダウンのカウントを1つ進めます！！」

「残り15ターンか…」

あのモンスターを破壊しない限り、俺には勝ちは巡ってこない…どうすればいい！？

俊対牙城（後書き）

なんかこれもチートな気が……というわけで、次回に続きます！！

俊対牙城　決着＋玲対葛井？（前書き）

前回の続きです。

牙城の切り札を思いついたところまでは良かったんですが、俊にどうやって勝たせればいいのかが分からなくなってきました。

葛井はネタです。デュエルはありません。

俊対牙城　決着＋玲対葛井？

「どうにかして攻撃表示にすれば、守備力が高い分攻撃力は……」

「あ、いい忘れてましたけど、攻撃力も４０００です。」

「たけえよ！？」

「ひっ！！すみません。」

と言っても、どこかに弱点はあるはず…。

「俺は魔法カード、火炎地獄を発動！！俺の分も合わせて１５００ポイントのダメージを与える！！」

「鉄壁の牙城の効果でダメージは受けません！！」

火の玉が城壁に当たったが、傷一つ付いていなかった。

「本当にダメージがないのかよ…。俺は、天よりの宝札を発動して、お互いに６枚ドローする！！
ターンエンド。」

まだ俺には７ターン残ってる…。それまでに逆転できるカードを引ければ！！

「僕のターン！速攻魔法、時の飛躍ーターンジャンプを発動して、さらに３ターン進めます！！」

「また減らされた!?」

「さらに僕はカードを2枚伏せて、ターンエンド!!」

「俺のターン!!」

「罠発動、運命の火時計!さらに速攻魔法、時の飛躍ーターンジャンプを発動します!!」

残りの俺のターン、3ターンかよ!?

「俺は、グロック・シンクロンを召喚してベレッタ・シンクロンを特殊召喚!!」

グロック・シンクロン　ＡＴＫ８００

ベレッタ・シンクロン　ＡＴＫ７００

「レベル1のグロック・シンクロンに、レベル1のベレッタ・シンクロンをチューニング!!
シンクロ召喚!銃弾装填、シンクロチューナー、ガトリング・X・シンクロン!!」

ガトリング・X・シンクロン　ＡＴＫ１４００

「ガトリング・X・シンクロンの効果でデッキから1枚ドロー!それがチューナーモンスターだった場合、特殊召喚することができる!!俺がひいたのは、チューナーモンスター、コルト・シンクロン!!コルト・シンクロンを特殊召喚!!」

コルト・シンクロン　ＡＴＫ２００

「伏せカードオープン！！トリガー・ＭＡＸ！！墓地にチューナーモンスターが3体以上ある時に発動できて、次のターン、墓地のチューナーモンスター1体を特殊召喚する！！俺はベレッタ・シンクロンを選択！！ターンエンド！」

「僕のターン！！」

これで俺の残りのターンは2ターンか…これなら！！

「魔法カード、魔法石の採掘を発動！！手札を2枚捨てて、墓地のターンジャンプを手札に加えます！そして再びターンジャンプをはつどう！3ターン進めます！！」

「……まさか、次が最後？」

「そういうことになりますね。」

早いよ！！次でもう最後！？

「僕はこのままターンエンド。」

「一つ聞いて良いか？」

「なんですか？」

「なんでお前は十黒の一人なんだ？」

「……僕は、教祖様に拾われたんですよ。それでそのまま育てられ

たのでせめて何か恩を返そうかな～、なんて思ったのが始まりで、デュエルモンスターズを学びながら建築などを学んで何かお返ししようと思ったんですよ。」

「……それだけか？」

「はい、それだけです。」

こいついい奴だな～、と思った俊だった。

「さあどうします？あなたのターンは残り1ターン、僕の鉄壁の牙城を倒さない限り、あなたに勝ち目はありませんよ？」

「心配するなよ。もう前のターンに準備は済ませたからな。」

「準備？」

「いくぞ！俺のターン！！トリガー・ＭＡＸの効果で、墓地からベレッタ・シンクロンを特殊召喚！
レベル1のベレッタ・シンクロンに、レベル1のコルト・シンクロンをチューニング！！
シンクロ召喚！整備完了、シンクロチューナー、トリガー・Ｘ・シンクロン！！」

トリガー・Ｘ・シンクロン　ＡＴＫ７００

「トリガー・Ｘ・シンクロンの効果！！自分の墓地のモンスターの数まで、墓地から効果ダメージを持った魔法カードを手札に加える！墓地のモンスターは5枚！よって、火炎地獄3枚を手札に加える！」

「今更そんなことをしても無駄ですよ！」

「レベル２のトリガー・Ｘ・シンクロンと、ガトリング・Ｘ・シンクロンに、アトミック・フルバスターをチューニング！！伝説の銃士、今此処にその姿を現せ！！デルタアクセルシンクロ！！！全弾必中、レジェンド・クロム・バレル！！！」

レジェンド・クロム・バレル　ＡＴＫ４０００

「レジェンド・クロム・バレルの効果発動！！手札の魔法カードを全て捨てて、１枚につき５００ポイント攻撃力をアップする！！俺が捨てるのは火炎地獄３枚！！よって、１５００ポイントアップ！！」

レジェンド・クロム・バレル　ＡＴＫ４０００→５５００

「攻撃力５５００！？」

「罠発動、デッド・カートリッジ！！墓地に存在するモンスターを全て除外して、同じ枚数まで相手フィールドのカードを破壊できる！！俺の墓地のモンスター８枚すべてを除外して、お前のフィールドの鉄壁の牙城以外のカードを破壊する！！」

「うわああ！？」

「伏せカードオープン！！貫通弾！このカードを発動したターン、自分のモンスターが相手の守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を超えていればその数値分だけダメージを与える！！行け、レジェンド・クロム・バレル！レジェンドショット！！」

「うわあああああああ！！」

牙城　ＬＰ５００→０

「…負けちゃったなあ、あのまま勝てると思ったのに・・・。」

「結構手強かったですよ？特にあの鉄壁の牙城。」

「まあね。」

一方その頃……

玲は部屋の扉の前に立っていた。

「ここかなあ……。」

玲が扉を開けてみると……

「うわああ！！」

そこにはどこかの金持ちの屋敷の庭みたいな光景が広がっていた。

「綺麗……。」

「お気に召していただけたでしょうか？」

そこには黒涼と一緒にいた執事みたいな男がいた。

「あなたは！！」

「自己紹介をさせて戴きます。私は十黒の葛井と申します。ちなみにフルネームはセバスチャン・A・葛井と言います。」

「……ハーフですか？」

「いえ、クォーターでございます。それでは早速デュエルと参りましょうか。」

「ちょっと待ってください、ここまで来るのにちょっと疲れてしまったので……」

「そうですか。それでは紅茶をお持ちいたしましょう。」

「あ、ありがとうございます。」

そういうと葛井は、綺麗な足取りで紅茶を取りにいった。

「……本当の執事みたい…。」

玲はふとした疑問から、こんなことを言い出した。

「ちょっといいですか?」

「なんでございましょう?」

葛井は紅茶を持ってきて尋ねた。

「ダージリンも頼めます?」

「かしこまりました、お嬢様。」

そういうと葛井はダージリンを取りにいった。

３０秒後、葛井はダージリンを持ってきた。

（もしかすると、これは……）

そう思って、玲はとんでもないことを言った。

「いいですか？」

「なんでございましょうか？」

「鍵とやらを持ってきてもらえないでしょうか？」

流石に玲もこれは無理だろう、と思ったが、

「かしこまりました、只今お持ちいたします。」

了承した。葛井は何の疑いもなく了承した。

実は葛井は実家が執事をやっているので、代々執事として教育を受けているためか、執事としての体質が身に着いていた。

1分後、葛井は鍵を持ってきて、玲に渡した。

「それで、これはどうやって使えばいいんですか？」

「あそこに差し込んで、回すだけでございます。」

玲は言われるままに指摘された鍵穴に鍵を差し込み回した。

ちゃんと回ったのか、ガチャッ！！っという音がした。

（とりあえずこれでいいのかな……）

玲はそのまま優雅なティータイムを続けた。

俊対牙城　決着＋玲対葛井？（後書き）

……というわけで次回は木原、吉野それぞれのデュエルです。

木原の相手は結構前に出てきたあの人です。

木原　対　ベルード　吉野　対　訃術（前書き）

今回は二つのデュエルをお送りしようと思います。

いや～、無茶苦茶になりそうです。（笑）

木原　対　ベルード　吉野　対　訃術

……あれ？もしかして、外れ引いた？

木原　ＬＰ４０００

ベルード　ＬＰ４０９６０００

「一体なんでこうなった！？」

……あれ？もしかして、外れ引いた？

由紀　ＬＰ４０００

訃術　ＬＰ２０００

由紀　フィールド　無し

訃術　フィールド　Ｆ・Ｇ・Ｄ×３　伏せカード３枚　未来融合ーフューチャー・フュージョン

「ちょっと待って、思い返してみましょう…。」

木原３０分前…、

木原は扉の前に立っていた。

「ここか？」

扉をあけると、そこには・・・、

「……地獄？」

なぜか『釜茹で地獄』という張り紙が貼ってある釜や、『血の池地獄』という看板が刺さっている赤い川（？）や、『針山地獄』と書かれた・・・本当に用意されている針山などがあった。

「貴様が侵入者か…。」

そこには上から下まで真っ黒な男がいた。

「私は十黒のベルード。」

「…なんで上から下まで全部真っ黒？」

「こうやっていると、気分がいいのだ。いずれもう一度、冥界の王は復活する。だからここは地獄なのだ。」

？話の内容が全く分からない。

「さあ、デュエルを始めよう。当然、闇のデュエルをな！！」

「ああ、やってやる！！」

「「デュエル！！」」

「俺のターン！！俺はＭＳ－ティガーを召喚！ティガーの効果により、手札からＭＳ－フレッドを特殊召喚！！」

ＭＳ－ティガー　ＡＴＫ２００

ＭＳ－フレッド　ＡＴＫ１００

「レベル３のＭＳ－ティガーに、レベル２のＭＳ－フレッドをチューニング！！
シンクロ召喚！！解析しろ、ＭＳ－マッド・ブレイン！！」

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２１００

「マッド・ブレインのシンクロ召喚に成功した時、デッキから『ＭＳ』と名の付いたモンスターを２体特殊召喚できる！！ＭＳ－フィーテとＭＳ－ガーヅを特殊召喚！ガーヅの効果で、『ＭＳ』と名の付いたモンスターの攻撃力はこのモンスターの攻撃力分アップする！そしてフィーテの効果で、『ＭＳ』と名の付いたモンスターはダイレクトアタックすることができる！！カードを２枚伏せて、ターンエンド！」

ＭＳ－フィーテ　ＡＴＫ３００→７００

ＭＳ－ガーヅ　ＡＴＫ４００→８００

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２１００→２５００

「私のターン！！私は俊足のギラザウルスを召喚！この召喚を特殊召喚扱いにし、お前は墓地からモンスターを特殊召喚するがいい。」

「・・・俺はティガーを特殊召喚して、手札からＭＳ－シルフを特殊召喚する。シルフが特殊召喚された時、デッキから1枚ドローする。」

ＭＳ－シルフ　ＡＴＫ５００→９００

「私は魔法カード、ダーク・ウェーブを発動し、俊足のギラザウルスのレベルを－３にする！さらにレベルが－のモンスターがフィールドにいる時、このモンスターは特殊召喚ができる！ＤＴダーティ・ヘルを特殊召喚！」

ＤＴダーティ・ヘル　ＡＴＫ０

「レベル－３となった俊足のギラザウルスに、レベル９のＤＴダーティ・ヘルをダークチューニング！！

冥府よりいでし化物、光を闇で塗りつぶせ！！ダークシンクロ！冥界のデグバルダ！！」

冥界のデグバルダ　ＡＴＫ０

「私は命削りの宝札を発動して、手札が5枚になるようにドローす

る！！魔法カード、冥府崩裂！！ダークシンクロモンスターがフィールドに存在するとき、手札の罠を発動することができる！！私は、ダーク・バスター・モードを発動！！フィールドの冥界のデグバルダをリリースし、デッキから冥界のデグバルダ／バスターを特殊召喚！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ０

「デグバルダ／バスターで、マッド・ブレインを攻撃！！」

「自滅する気か！？」

「デグバルダ／バスターの効果発動！！このモンスターの攻撃を無効にし、攻撃対象にしたモンスターの攻撃力の倍になる！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ０→５０００

「さらにデグバルダ／バスターの効果で、フェイズ終了毎に、攻撃力が倍になる！！」

「おおすぎだろ！？」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ５０００→１００００

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ１００００→４００００

「俺のターン！！」

「永続罠、冥府の命綱！！このカードは発動後、自分フィールドのモンスター1体の装備カードとなり、そのモンスターがフィールドを離れること以外では破壊されない！！そして自分のライフは装備したモンスターの攻撃力と同じになる！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ４０００００→１６００００

ベルード　ＬＰ４０００→１６０００

「俺はモンスターを全て守備表示にして、ターンエンド。」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ１６０００００→６４０００

ベルード　ＬＰ１６０００００→６４０００

「私のターン！！バトルフェイズ！！冥界のデグバルダ／バスターで、フィーテに攻撃！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ６４０００００→５１２０００

ベルード　ＬＰ６４０００００→５１２０００

「ぐおおおお！！」

衝撃波だけでなんつう威力だ！？

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ５１２０００００→４０９６０００

ベルード　ＬＰ５１２０００００→４０９６００００

「高すぎるだろーーー！？」

……あれ？もしかして、外れ引いた？

由紀３０分前・・・、

「ここですか？」

扉をあけると、なぜか中華みたいな部屋が広がっていた。

「おや～？可愛い子が来たね～。」

そこには大人びた格好をした女の人がいた。

「あたしは十黒の計術・・・十黒の中で1番美しい女さ。」

そこに由紀は爆弾を投げてしまった。

「・・・ケバッ・・・」

「・・・キィィィィィィィィィィ！！！！！小娘！！いってはならないことを言ってしまったねえ！！」

「あ、えっと、ごめんなさい・・・」

「今更もう手遅れだよ！！！！！さっさと闇のデュエルを始めようじゃないか！！！！！！」

「キレたぁぁぁぁぁぁ！？」

「「デュエル！！」」

「あたしのターン！！！！！！！あたしは永続魔法、未来融合ーフューチャー・フュージョンを発動！！

デッキからドラゴン族モンスターを5体墓地に送り、F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を選択！！さらに魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動！！墓地のドラゴン族モ

ンスター5体を除外して、F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を融合召喚！！」

「いきなり！？」

F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ５０００

「速攻魔法、次元回収を発動！！ライフを半分払い、除外されているモンスターを全て手札に加える！！」

計術　ＬＰ４０００→２０００

「そして融合を発動！！もう1体のF・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を融合召喚！！速攻魔法、時の飛躍ーターンジャンプを発動！！3ターン進めて、フューチャー・フュージョンの効果で3体目のF・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を融合召喚！！」

「3体も！？」

「命削りの宝札を発動！！5枚ドローして、カードを3枚伏せて、ターンエンド！！」

……あれ？もしかして、外れ引いた？

木原　対　ベルード　吉野　対　訃術（後書き）

……やりすぎたような気が…

化物ここに降臨してしまいました。

次回に続きます！！

2つの決着（前書き）

前回の続きです。

ベルードの倒し方は以外にあっけないです。

2つの決着

「俺のターン!!」

「お前のメインフェイズになったことで、デグバルダ／バスターの攻撃力がさらに上がる!!」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ４０９６０００００→１６３８４０００００

ベルード　ＬＰ４０９６０００００→１６３８４０００００

攻撃力とライフポイントが1億を超えた…ライフを0にすることはもう無理か…

「俺は魔法カード、ケミストリー・ボムを発動!!自分フィールド上の『ＭＳ』と名の付いたモンスター1体につき、５００ポイントのダメージを与える!!」

ベルード　ＬＰ１６３８４０００００→１６３８３８０００

「さすがに小さすぎるか…」

ベルード　ＬＰ１６３８３８０００→１６３８４０００

「ライフが戻った!?」

「冥府の命綱がある限り、私のライフはデグバルダ／バスターの攻撃力から変わることはない!!」

「くそ！！モンスターをセットして、ターンエンド！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ１６３８４０００００→６５５３６００００

ベルード　ＬＰ１６３８４０００００→６５５３６００００

「私のターン！！デグバルダ／バスターで、ティガーを攻撃！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ６５５３６００００→２６２１４４０００

ベルード　ＬＰ６５５３６００００→２６２１４４０００

「私は永続罠、冥府衝撃を発動！！自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃するとき、その数値を超えていれば貫通ダメージを与える！！」

「させてたまるか！！カウンター罠、分析破壊！！手札を１枚捨てて、相手が発動した魔法、罠、モンスター効果を無効にする！！うおおおおおおお！！」

さっきの衝撃よりはるかに大きい！！これが攻撃力２０億越えの威力なのか！？

「命拾いしたようだな。私はカードを１枚伏せて、ターンエンド。」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ２６２１４４０００００→２０９７５１２０００

ベルード　ＬＰ２６２１４４０００００→２０９７５１２００００

「俺のターン！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ２０９７５１２００００→８３８８６０８００００

ベルード　ＬＰ２０９７５１２００００→８３８８６０８００００

一体どうすればいい！？相手のライフは約１０００億、ライフは減らないむしろ増え続ける。

エクゾディアとかあればライフは関係なく勝てるけど、俺のデッキにそんなカードがあるわけない。

「俺はモンスターをセットして、ターンエンド。」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ８３８８６０８００００→３３５５４４３２００００

ベルード　ＬＰ８３８８６０８００００→３３５５４４３２００００

「私のターン！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ３３５５４４３２００００→１３４２１７７２８００００

ベルード　ＬＰ３３５５４４３２００００→１３４２１７７２８０００

「デグバルダ／バスターで、裏側モンスターを攻撃！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ１３４２１７７２８０００００
↓２６８４３５４５６００００

ベルード　ＬＰ１３４２１７７２８０００００↓２６８４３５４５６
００００

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

守備表示でも衝撃が強すぎて普通にダメージを食らってるみたいだ・
・・

「永続魔法、闇の回路！１ターンに１度、墓地のカード１枚をデッキの１番下に戻す。ターンエンド。」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ２６８４３５４５６００００
↓２１４７４８３６４８００００

ベルード　ＬＰ２６８４３５４５６００００↓２１４７４８３６６４
８００００

「俺のターン！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ２１４７４８３６６４８００
００↓８５８９９３４５９２００００

ベルード　ＬＰ２１４７４８３６６４８００００↓８５８９９３４
５９２００００

あいつのライフはすでに８５兆…もはや絶望的…いっそこのままサレンダーしたほうが…

いや！時雨の為にも負けられない！！きっと何かあるはずだ！！

「ん？」

その時、尚の頭にはベルードのある言葉が出てきた。

『冥府の命綱がある限り、私のライフはデグバルダ／バスターの攻撃力から変わることはない！！』

「……そうか！！分かったぞ！！お前とそのモンスターの弱点が！！」

「弱点などあるわけがない！！」

「いや、ある！！魔法カード、クリアー・ポーションを発動！！フィールドに存在するモンスター１体の効果を無効にし、攻撃力を１００ポイントアップする！！」

「まさか！？やめろおおお！！」

「俺は、デグバルダ／バスターを選択！！」

「うわあああああああ！！」

冥界のデグバルダ／バスター　ＡＴＫ８５８９９３４５９２０００→１００

ベルード　ＬＰ８５８９９３４５９２０００００→１００

「・・・やっぱりか。その冥府の命綱は、攻撃力が下がった場合でも変動するんだな。」

「何故気付いた？」

「お前がヒントをくれたじゃないか・・・」

「一体いつだ？」

「さあな。モンスターを全て攻撃表示！！マッド・ブレインで、デグバルダ／バスターに攻撃！！」

「うおおおおおおおお！！」

ベルード　ＬＰ１００→０

「・・・ふう、なんとか勝った～～～。」

これでここは大丈夫だろ。後は任せた・・・。

一方その頃…、

「私のターン！！」

流石にＦ・Ｇ・Ｄ３体は迂闊に攻撃できない。今の私の手札からだと地獄の暴走召喚が来れば・・・

「・・・あ、きた。」

「あん？なんか言ったかい、小娘？」

「すみません、このターンで終わらせてもらいます。私は俊足のギラザウルスを特殊召喚します！！」

俊足のギラザウルス　ＡＴＫ１３００

「速攻魔法、地獄の暴走召喚！！デッキから俊足のギラザウルスを

２体特殊召喚！！そして俊足のギラザウルス３体をリリースして、神獣王バルバロスを召喚！！」

神獣王バルバロス　ＡＴＫ３０００

「バルバロスが３体のモンスターをリリースして召喚した時、相手フィールドのカードを全て破壊します！！」

「己小娘えええ！！」

「バルバロスで止め！！」

「ぎゃあああああああ！！」

計術　ＬＰ２０００→０

「なんか申し訳ないけど、これでいいですよね。」

頑張ってください、紫藤さん。

2つの決着（後書き）

案外早く終わってしまいました。

次回は紫苑のデュエルです。

オリカ紹介１５（前書き）

更新遅れました。

ダンボールに夢中でした、すみません。

オリカ紹介１５

鉄壁の牙城
地属性　岩石族・効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このモンスターはモンスター3体をリリースしてアドバンス召喚する。１ターン以内に３０００以上のダメージを受けた場合、手札から特殊召喚できる。このカードが自分フィールド上に存在する限り、自分は戦闘ダメージおよび効果ダメージを受けない。このカードは魔法・罠・モンスター効果では破壊されない。このカードがフィールドに存在する限り、相手はこのモンスターしか攻撃できない。このカードが攻撃表示になった時、守備表示に変更する。

コルト・シンクロン
風属性　戦士族・チューナー　レベル１　ＡＴＫ２００　ＤＥＦ０
墓地に存在するこのモンスターを除外して、相手に２００ポイントのダメージを与える。

トリガー・ＭＡＸ
通常罠
自分の墓地にチューナーが3体以上存在する場合のみ発動できる。次のターン、自分の墓地のチューナー1体を特殊召喚する。

トリガー・Ｘ・シンクロン
風属性　機械族・シンクロ／チューナー　レベル２　ＡＴＫ７００　ＤＥＦ６００
レベル1チューナー＋レベル1チューナー
このカードのシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在するモンスターの数まで墓地の魔法カードを手札に加える。また、相手のメイン

フェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をすることができる。

レジェンド・クロム・バレル
光属性　戦士族・デルタアクセルシンクロ／効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ３８００
シンクロモンスターのチューナー２体＋「アトミック・フルバスター」
１ターンに１度、手札の魔法カードを全て墓地に送ることで、１枚につき５００ポイント攻撃力を上げる。相手が効果ダメージを発生させる効果を発動した場合、その発動を無効にし２倍のダメージを与える。このカードが破壊された場合、墓地に存在する「アトミック・フルバスター」を特殊召喚する。

デッド・カートリッジ
通常罠
墓地に存在するモンスターを全て除外することで、同じ枚数まで相手フィールドのカードを破壊する。

貫通弾
通常罠
このターン、自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を超えていればその数値分だけ相手にダメージを与える。

ＭＳ－シルフ
闇属性　サイキック族・効果　レベル１　ＡＴＫ５００　ＤＥＦ１３００
このカードが特殊召喚された時、カードを１枚ドローする。

冥府崩裂
通常魔法
自分フィールド上にダークシンクロモンスターが存在するとき、手札の通常罠を発動できる。

ダーク・バスター・モード
通常罠
自分フィールドのダークシンクロモンスターをリリースして発動する。リリースしたダークシンクロモンスターのカード名が含まれる「／バスター」と名の付いたモンスターをデッキから特殊召喚する。

冥界のデグバルダ／バスター
悪魔族・効果　レベル－１２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードは「ダーク・バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚できる。このカードが相手モンスターを攻撃した時、その攻撃を無効にしてこのモンスターの攻撃力を攻撃対象にしたモンスターの攻撃力の倍にする。このカードの攻撃力はフェイズ終了毎に倍になる。このカードはカードの効果では破壊されない。このカードが破壊された時、墓地に存在する「冥界のデグバルダ」を攻撃力５０００で特殊召喚する。

冥府の命綱
永続罠
このカードは発動後、自分フィールドに存在するモンスター１体の装備カードになる。このカードは装備モンスターがフィールドを離れない限り、破壊されない。自分のライフはこのカードを装備したモンスターの攻撃力と同じになる。

次元回収
速攻魔法

ライフを半分払い、除外されている自分のモンスターを全て手札に戻す。

ケミストリー・ボム
通常魔法
自分フィールドの「ＭＳ」と名の付いたモンスター１体につき、５００ポイントのダメージを与える。

冥府衝撃
永続罠
自分フィールドのモンスターが相手の守備表示モンスターを攻撃する時、その数値を超えていればその数値分だけダメージを与える。

分析破壊
カウンター罠
手札を１枚捨てて、相手が発動した魔法・罠・モンスター効果の発動を無効にし破壊する。

闇の回路
永続魔法
１ターンに１度、自分フィールドに闇属性モンスターが存在するとき、墓地のカードをデッキの１番下に戻す。

クリアー・ポーション
通常魔法
フィールド上のモンスター１体の効果を無効にし、攻撃力を１００ポイントアップする。

オリカ紹介１５（後書き）

久しぶりに更新できた～～～。

これからも今まで通りに更新していくのでよろしくお願いします。

紫苑　対　フェイジュ（前書き）

今回は1話で終わると思います。

長編にしようと思いましたが、意外と早く終わりそうです。

紫苑　対　フェイジュ

紫苑はある部屋の前に立っていた。

「・・・ここか。」

扉を開けた先には・・・何もなかった。

真っ白な空間が部屋いっぱいに広がっており、そこに一人佇んでいた。

「・・・お前が相手か？」

「ああ、俺は十黒のフェイジュ。お前なんか返り討ちにしてやる。」

「・・・お前は俺に切り札を使わせることができるか？」

「・・・ああ、そういえばお前、未だ自分の切り札を出す前に相手を倒してしまうんだったか？安心しな、お前が切り札を出す前に倒してやるからよ。」

「「デュエル！！」」

「俺のターン！俺はダブルコストンを召喚！」

ダブルコストン　ＡＴＫ１７００

「さらにニ重召喚を発動！！ダブルコストンをリリースし、ダーク・レーサーをアドバンス召喚！！」

ダーク・レーサー　ＡＴＫ２９００

「ダーク・レーサーがデュエル開始１ターン目にアドバンス召喚された時、攻撃することができる！！
ダーク・レーサーでダイレクトアタック！！」

紫苑　ＬＰ４０００→１１００

「カードを２枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺のターン。テラ・フォーミングを発動。デッキから帝王の領域を手札に加える。フィールド魔法、帝王の領域を発動。下僕トークンを特殊召喚する。」

下僕トークン　ＡＴＫ２００

「下僕トークンをリリースして、雷帝ザボルグをアドバンス召喚。」

雷帝ザボルグ　ＡＴＫ２４００

「効果発動、フィールドのモンスター１体を破壊する。ダーク・レーサーを破壊。」

「うお！？」

「速攻魔法、シーザー・フォース。『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターがアドバンス召喚に成功した時、もう一度通常召喚を行うことができる。俺はもう一度下僕トークンを特殊召喚し、下僕トークンをリリ

ース、氷帝メビウスをアドバンス召喚。」

氷帝メビウス　ＡＴＫ２４００

「氷帝メビウスの効果発動。お前の魔法・罠を2枚破壊する。」

「なっ！？」

「メビウスでダイレクトアタック。」

「手札のバトルフェーダーを特殊召喚してバトルフェイズを終了させる！！」

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド。」

「俺のターン！！魔法カード、天よりの宝札を発動！お互いに手札が6枚になるようにドローする！！俺は魔法カード、死者蘇生を発動！蘇れ！！ダーク・レーサー！！」

「またか・・・」

「ダーク・レーサーはダイレクトアタックすることができる！！ダーク・レーサーでトドメ！！」

「罠発動、帝王の威圧。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、デッキまたは手札から『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターを特殊召喚する。俺はデッキから、地帝グランマーグを特殊召喚。」

地帝グランマーグ　ＡＴＫ２４００

「ちっ！俺はカードを3枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺のターン、下僕トークンを特殊召喚しリリース、風帝ライザーをアドバンス召喚。」

風帝ライザー　ＡＴＫ２４００

「ライザーの効果発動。フィールドのカード1枚を持ち主のデッキの1番上に置く。俺はお前の真中の伏せカードをデッキに戻す。」

「くそっ！！」

「さらに魔法カード、ニ重召喚を発動。再び下僕トークンを特殊召喚しリリース、光帝クライスをアドバンス召喚。」

光帝クライス　ＡＴＫ２４００

「クライスの効果で、俺は俺のフィールドにセットしてあるカード1枚を破壊する。そして1枚ドローする。破壊されたエンペラー・マントを発動。このカードが破壊された時、デッキからカードを1枚ドローする。・・・久しぶりに揃ったな。」

「何がだ？」

「帝王の領域の効果発動。自分フィールドに『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターが5体そろった時、自分の魔法・罠ゾーンの1つをモンスターカードゾーンとして扱い、デッキから聖帝ジャスティスを特殊召喚。」

聖帝ジャスティス　ＡＴＫ２４００

「ジャスティスの効果発動、このカードの特殊召喚に成功したターン、相手は魔法・罠を発動することができない。」

「なっ！？」

「このカードが手札に来るのは初めてだ。初めて切り札を出せる。」

「切り札だと！？」

「魔法カード、インペリアル・アブリースト。自分フィールドの『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』『聖帝』と名の付いたモンスターのレベルを全て２にする。レベル２となったチューナーモンスター聖帝ジャスティスに、レベル２となった氷帝メビウス、風帝ライザー、雷帝ザボルグ、地帝グランマーグ、光帝クライスをチューニング！！！森羅万象を司る皇帝よ、逆らう者をねじ伏せろ！！シンクロ召喚！支配しろ、神帝サーガ！！」

神帝サーガ　ＡＴＫ４０００

「何なんだこのモンスターは！？」

「このモンスターを初めて見ることができたお前に、出し惜しみをするのは失礼だろう。サーガの効果発動！！１ターンに１度、相手の手札を全て、次の相手のスタンバイフェイズ終了時まで除外する！！」

「なっ！？」

「サーガのもう一つの効果発動！！墓地に存在する『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターを可能な限り特殊召喚する！！蘇れ、メビウス、ライザー、ザボルグ、グランマーグ！！」

「何なんだよこの状況！？」

「神帝サーガでダイレクトアタック！ジ・エンド・オブ・サーガ！！」

「うわあああああ！！」

フェイジュ　ＬＰ４０００→０

「・・・お前のおかげで初めてサーガを出すことができた、感謝する。」

紫苑　対　フェイジュ（後書き）

次回、神羅の本気のデッキが登場します。

神羅　対　鬼ヶ崎　神羅の怒り、究極の裁きデッキ（前書き）

今回は本気の神羅さんと十黒の？2、鬼ヶ崎の対決です。

神羅の本当のデッキが登場します。

神羅　対　鬼ヶ崎　神羅の怒り、究極の裁きデッキ

時雨と神羅はある扉の前で立ち止まっていた。

「くそっ!!何なんだこの扉は!?」

「開かないな…」

その時、扉からガチャッという音がした。

「「!!」」

時雨は扉を押してみた。すると先ほどまで開かなかった扉が開いた。

「これで進める!!」

「ヒャッヒャッヒャ!!させると思うか?」

「この声は…」

扉を開けた先には、十黒の鬼ヶ崎がいた。

「鬼ヶ崎・・・」

「鬼ヶ崎・・・だと?」

なぜか神羅が反応した。

「神羅さん、こいつを知ってるんですか?」

「ああ、こいつとデュエルした奴は全員生きた屍になる。そしてついたあだ名が『魂狩りの鬼ヶ崎。』」

「おお？俺のことを知ってる奴がいたのか？」

「まあな。」

「ならなんで俺とデュエルした奴が生きた屍になるか、分かるか？」

「・・・。」

「分かるわけねえよな？ヒャッヒャッヒャ！！正解は、俺とのデュエルに負けたやつの魂を、カードの中に封じ込めてるからだよ！！」

「！！」

「ヒャッヒャッヒャ！！愉快だったな！！負けそうになった奴が決まって最後に言う言葉！！『助けてくれ』だの『死にたくない』だの『許してくれ』とか全く笑えるぜ！！ヒャッヒャッヒャ！！」

「・・・時雨、お前は先に行け。」

「えっ？でも・・・」

「こいつは俺の本気のデッキで叩き潰さなくちゃいけない。」

「ヒャッヒャッヒャ！！暮空神羅か！！おもしれえ！！お前もカードの中に封印してやるよ！！」

「・・・神羅さん、俺は…」

「さっさと行け。神楽が待ってるだろ?」

「・・・ありがとうございます。」

そう言って時雨は先に進んだ。

「さっさと始めようぜ?」

「言われなくても。」

「「デュエル!!」」

「ヒャッヒャッヒャ!!俺のターン!!」

こいつが人をカードに封印した方法はどんなものだ?

「俺はフィールド魔法、オレイカルコスの結界を発動!!このカードを破壊することはできない!!そしてこのカードを使用したデュエルで敗北したプレイヤーは、このカードに封印される!!」

「それが人を封印した方法か!!」

「ヒャッヒャッヒャ!!そうだよ正解!!正解した褒美に、このデュエルでお前が勝てたら、今まで封印された奴らの魂を元に戻してやるよ!!」

「・・・言ったな?」

「俺はオレイカルコス・ギガースを召喚!!さらにライフを５００ポイント払い、オレイカルコス・キュトラを特殊召喚!!」

鬼ヶ崎　ＬＰ４０００→３５００

オレイカルコス・ギガース　ＡＴＫ４００→９００

オレイカルコス・キュトラ　ＡＴＫ５００→５００

「オレイカルコスの結界が存在する限り、俺のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする!!俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド!!」

「俺のターン!!」

「カウンター罠、強烈なはたき落とし!!相手がドローしたカードを墓地に送る!!」

「お前は罪を償わなければならない。俺は永続魔法、裁きの十字架を発動!!」

鬼ヶ崎の後ろに巨大な十字架が現れて、鬼ヶ崎を拘束した。

「なんだこれは!?」

「そして俺は聖天使降臨の儀式を発動!!手札のモンスターのレベルの合計が１２以上になるように捨て、聖天使テラを特殊召喚!!」

聖天使テラ　ＡＴＫ４０００

「聖天使テラの効果発動!!裁きの十字架が存在するときに特殊召喚した時、相手フィールドのモンスター全てを除外する!!」

「なんだと!?」

「さらに聖天使テラの効果発動!!デッキから、聖天使ギガを特殊召喚!!」

聖天使ギガ　ＡＴＫ３０００

「特殊召喚された聖天使ギガの効果発動!!デッキから、聖天使メガを特殊召喚!!」

聖天使メガ　ＡＴＫ２０００

「聖天使メガの効果発動!!自分フィールドの『聖天使』と名の付いたモンスター1体に、他の『聖天使』と名の付いたモンスターの攻撃力をプラスする!!」

聖天使テラ　ＡＴＫ４０００→９０００

「聖天使テラでダイレクトアタック!!ザ・ヘヴン・オブ・ジャッジメント!!」

「ヒャッヒャッヒャ!!引っかかりやがったな!!罠カード、万能地雷グレイモヤ!!

・・・!?何故発動しない!?」

「裁きの十字架は『聖天使』が攻撃するとき、相手は魔法・罠・モ

ンスター効果を発動できなくする。」

「畜生！！離せえええええええぐうぁあああああああああ！！」

鬼ヶ崎　ＬＰ３５００→０

木が先に封印されていた魂たちが、カードを飛び出し、各々の体に戻っていき、鬼ヶ崎は自分のオレイカルコスの結界に封印されて、体の方は闇のデュエルを行っていたようで闇に飲み込まれ、消え失せた。

「これでよし。時雨…頑張れよ。」

その頃の時雨は、一番奥の部屋についた。

その部屋には巨大な祭壇があり、

その祭壇の下には、

「！！」

神楽は倒れていた。

「神楽！！」

神羅　対　鬼ヶ崎　神羅の怒り、究極の裁きデッキ（後書き）

次回、時雨対混沌邪宗教祖の対決です！！

その対決で、本物の化物が登場します。

時雨　対　混沌邪宗教祖　イヴィルド（前書き）

最終決戦の最初です。

邪神龍が出てくるのは次回になると思います。

時雨　対　混沌邪宗教祖　イヴィルド

「神楽ーーーー！！」

時雨は神楽に走り寄った。

神楽はその声に反応して、

「・・・しー君？」

「神楽…」

「やっぱりしー君だ、よかった・・・」

そこまで言って、神楽は気を失った。

「おい、神楽！！しっかりしろ！！」

「案ずるな、ただ気を失っておるだけだ。」

「誰だ！！」

時雨は祭壇の頂点を見た。そこには黒と紫の神父のような服を着た白髪の男が立っていた。

「我は混沌邪宗教祖、イヴィルド。お前がここに来たということは、十黒で残っているのはゲルファだけということか・・・。」

「お前か・・・、混沌邪宗のボスは！！」

「そういうことになるな、そこの娘にはもう用はない。既に邪神龍は復活した。これから世界は邪神龍によって滅ぼされるのだ。」

「させるかよ！！」

「そう言うと思っていたぞ。では、始めようか。」

「「デュエル！！」」

デュエルが始まった時、時雨とイヴィルドの間に青い炎が現れた。

「なんだあれは？」

「あれは闇のデュエルの範囲を現すものだ。」

「意外と小さいんだな。」

「何を言っている？範囲はこの星全てだ。」

「なんだと！？」

「つまりお前の勝敗で世界の命運が決まるということだ。我のターン。我は魔法カード、邪道精神を発動。我のフィールドに暗黒トークンを３体特殊召喚する。」

暗黒トークン　ＡＴＫ０

「暗黒トークン３体をリリースし、邪神ドレッド・ルートをアドバンス召喚！」

邪神ドレッド・ルート　ＡＴＫ４０００

「そのモンスターは！」

「どうやら知っているようだな。なら説明は省かせてもらおう。我はカードを二枚伏せて、ターンエンド。」

「俺のターン！俺は、オメガ・コアを召喚！そして魔法カード、１０オーダーを発動！・・・全部表だ。デッキから、ディバイド・ギロチンを特殊召喚！！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

ディバイド・ギロチン　ＡＴＫ３１００→１５５０

「ギロチンの効果発動！このカードの攻撃力が半分になった時、相手モンスターの攻撃力を半分にする！」

邪神ドレッド・ルート　ＡＴＫ４０００→２０００

「レベル２のオメガ・コアに、レベル１０のディバイド・ギロチンをチューニング！！
シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

「オメガ・ドラゴンで、ドレッド・ルートを攻撃！！」

「罠発動、邪神再臨！自分のフィールドの『邪神』と名の付いたモ

ンスターがフィールドを離れた時、
デッキから『邪神』と名の付いたモンスターを手札に加える。」

イヴィルド　ＬＰ４０００→３５００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ２５００→５０００→４０００

「俺はカードを3枚伏せて、魔法カード、天よりの宝札を発動！お互いに手札が6枚になるようドローする！ターンエンド！！」

「我のターン。我は再び魔法カード、邪道精神を発動。暗黒トークンを3体特殊召喚し、3体をリリース、出でよ、邪神イレイザー！」

邪神イレイザー　ＡＴＫ？

「邪神イレイザーの攻撃力・守備力は相手フィールド上のカードの数×１０００になる。お前のフィールドのカードの枚数は4枚。よって、イレイザーの攻撃力は４０００になる。」

邪神イレイザー　ＡＴＫ？→４０００

「我はフィールド魔法、邪神殿を発動。我のフィールドの邪神と名の付いたモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。」

邪神イレイザー　ＡＴＫ４０００→５０００

「バトル。イレイザーで、オメガドラゴンを攻撃。ダイジェスティブ・ブレス！」

「罠発動、ブレイクスルー！このターン、自分のモンスターは破壊

されない！ぐうううう！！」

時雨　ＬＰ４０００→３０００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→３０００

邪神イレイザー　ＡＴＫ５０００→４０００

「我はカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

「俺のターン！手札のアスタリスク・コアを特殊召喚！そしてアスタリスク・ソルジャーを2体特殊召喚！」

アスタリスク・コア　ＡＴＫ０

アスタリスク・ソルジャー　ＡＴＫ１２００

邪神イレイザー　ＡＴＫ４０００→７０００

「レベル2のアスタリスク・コアに、レベル3のアスタリスク・ソルジャー2体をチューニング！！
星の光よ、全てを守り抜け！シンクロ召喚！現れろ、アスタリスク・ドラゴン！」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

邪神イレイザー　ＡＴＫ７０００→５０００

「魔法カード、ハリケーンを発動！お互いの魔法・罠を全て手札に戻す！」

邪神イレイザー　ＡＴＫ５０００→２０００

「バトル！アスタリスク・ドラゴンで、イレイザーに攻撃！スターライト！」

「くぅ！」

イヴィルド　ＬＰ３５００→２５００

「イレイザーの効果発動！イレイザーが破壊され墓地に送られた時、フィールド上のカードを全て破壊する！」

「アスタリスク・ドラゴンの効果で破壊する効果は発動しない！」

「そう来るか…」

「これで終わりだ！オメガ・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「手札の邪神護身像を墓地に送り、相手の攻撃を１度無効にする！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ３０００→２０００

「くそっ！カードを３枚伏せて、ターンエンド！」

「我のターン！我は３枚目の邪道精神を発動。暗黒トークンを３体特殊召喚し、３体をリリース、出でよ、邪神アバター！」

邪神アバター　ＡＴＫ？

「邪神アバターの攻撃力・守備力はフィールド上に表側表示で存在する1番攻撃力の高いモンスターの攻撃力＋１００になる！そして相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法・罠を発動することができない！」

「なんだと！？」

邪神アバター　ＡＴＫ？→３１００

「バトル！邪神アバターで、アスタリスク・ドラゴンを攻撃！ダークネス・スターライト！」

「くっ！」

時雨　ＬＰ３０００→２９００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００→１０００

邪神アバター　ＡＴＫ３１００→１１００

「我はこのままターンエンド。」

「俺のターン！」

魔法と罠を封じられている今、俺に出来ることは何もない。

こいつ、かなり強い！

時雨　対　混沌邪宗教祖　イヴィルド（後書き）

次回、邪神龍が召喚されます。

邪神龍（前書き）

前回の続きです。

遂に邪神龍が姿を現します。

邪神龍

「俺はオメガ・ドラゴンを守備表示にして、ターンエンド！」

オメガ・ドラゴン　ＤＥＦ１０００

「我のターン。バトル。邪神アバターで、オメガ・ドラゴンを攻撃！」

「手札のオメガ・ガードナーを墓地に送り、このターン俺のモンスターは戦闘では破壊されない！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ１０００→０

邪神アバター　ＡＴＫ１１００→１００

遂に攻撃力が０になったか…

「我はターンを終了する。」

「俺のターン！」

よし、これなら！

「俺はガーネット・コアを召喚！そしてクリムゾン・ビーストを２体特殊召喚！」

ガーネット・コア　ＡＴＫ５００

クリムゾン・ビースト　ＡＴＫ１５００

邪神アバター　ＡＴＫ１００→１６００

「レベル２のガーネット・コアに、レベル５のクリムゾン・ビースト２体をチューニング！！
真紅の炎よ、今その姿を現せ！シンクロ召喚！紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コア！！」

クリムゾン・コア　ＤＥＦ４０００

邪神アバター　ＡＴＫ１６００→１００

「レベル１２のオメガ・ドラゴンと、クリムゾン・コアを、オーバーレイ！！」

「なんだそれは？」

「２体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！！エクシーズ召喚！！
現れろ、オメガ・ブラッド・ドラゴン！！」

オメガ・ブラッド・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

邪神アバター　ＡＴＫ１００→４１００

「オメガ・ブラッド・ドラゴンの効果発動！オーバーレイ・ユニットを１つ取り除くことで、このターンこのモンスターと戦闘を行ったモンスターを破壊する！」

「なに！？」

「バトル！オメガ・ブラッド・ドラゴンで、アバターに攻撃！ブラッド・レイン！」

「叩き潰せ！アバター！」

「ぐっ！！」

時雨　ＬＰ２９００→２８００

「オメガ・ブラッド・ドラゴンの効果で、アバターは破壊される！！」

「くっ！」

「俺はこのままターンエンド！そしてアバターの効果も切れる！！」

「我のターン。なかなかやるようだな。これこそ世界の命運をかけるデュエルにふさわしい…」

「何を言っている？」

「貴様に見せてやろう。我ら混沌邪宗の、神を！！」

「！！」

「私の墓地に『邪神アバター』『邪神ドレッド・ルート』『邪神イレイザー』が存在する場合、このカードは特殊召喚ができる！！出でよ！！邪神龍アビス！！」

邪神龍アビス　ＡＴＫ５０００

邪神イレイザーをベースにした体に、邪神ドレッド・ルートの鎧、それらを全て漆黒に染め上げた巨大な龍が現れた。

これが邪神龍…こんな物の為に神楽を！！

「邪神龍アビスの効果発動！！１ターンに１度、相手フィールドのカードを全て破壊する！！」

「させてたまるか！！永続罠、リビングデッドの呼び声！！俺が蘇らせるのは、アスタリスク・ドラゴン！！」

アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ３０００

「ならばバトル！！邪神龍アビスで、アスタリスク・ドラゴンを攻撃！！アビス・オブ・ディスペア！！」

「罠発動！パワー・プレッシャー！！相手モンスターが攻撃宣言した時、攻撃対象より攻撃力が上回っていた場合、攻撃宣言を行ったモンスターを破壊する！！」

これで奴の切り札は消えた！

「メインフェイズ２、墓地の邪神龍アビスを特殊召喚！」

「墓地からも来るのか！！」

「我はこれでターンエンド！！」

「俺のターン！魔法カード、天よりの宝札を発動し、お互いに手札が６枚になるようドローする！俺は死者蘇生を発動！蘇れ、クリムゾン・コア！」

「今更そんなモンスターを出した所で何になる？」

「魔法カード、リバイブ・コイントス！！墓地のモンスターを１体選択し、そのモンスターのレベルの数だけコイントスを行い、全て表だった場合、そのモンスターを特殊召喚する！１回でも失敗した場合、俺のフィールドのカード全てを墓地に送る！！俺はオメガ・ドラゴンを選択し、コイントスを１２回行う！！・・・全て表だ！！蘇れ！！オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「クリムゾン・コアの効果発動！！オメガ・ドラゴンとアスタリスク・ドラゴンのレベルを１にして、このモンスターのレベルを２つ下げる！！レベル１となったオメガ・ドラゴンとアスタリスク・ドラゴンに、レベル１０のクリムゾン・コアをチューニング！！小さな真紅の星が、今ここに力を示す！！デルタアクセルシンクロ！！紅く輝け、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊！！！」

クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊　ＡＴＫ５０００

「俺はカードを２枚伏せて、ターンエンド！」

こいつがいれば大抵の相手なら大丈夫だろ。だがこいつは今までの奴らとは桁が違う！！

気を抜くわけにはいかない！！

邪神龍（後書き）

次回、化物が登場します。

真の邪神龍（前書き）

前回の続きです。

今回は正真正銘の化物が出てきます。

真の邪神龍

「我のターン！アビスの効果で、お前のフィールドのカードを全て破壊する！」

「クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊の効果で無効にし墓地に送る！！」

「無駄だ！邪神龍アビスを墓地から特殊召喚！」

「罠発動、リボーン・チェーン！相手が墓地からモンスターを特殊召喚した時、そのモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする！」

「ならばバトル！邪神龍アビスで、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊を攻撃！」

「罠発動、作用反転！相手モンスターが攻撃してきた時、その攻撃を無効にしてそのモンスターの攻撃力分ライフを回復する！」

時雨　ＬＰ２８００→７８００

「我はカードを1枚伏せてターンエンド！！」

「俺のターン！！」

奴のライフは残り２５００。これで終わらせる！

「俺は、バニシング・カタパルトを召喚！」

バニシング・カタパルト　ＡＴＫ１２００

「バニシング・カタパルトの効果発動！１ターンに１度、デッキの『バニシング』と名の付いたモンスター１体の効果を無効にして、特殊召喚する！俺はバニシング・ギアを特殊召喚！」

バニシング・ギア　ＡＴＫ０

「レベル２のバニシング・ギアに、レベル４のバニシング・カタパルトをチューニング！！
滅びの龍よ、立ちはだかる敵を葬り去れ！シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「バトル！クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊で、邪神龍アビスを攻撃！コズミック・クリムゾン！！」

「わざと相討ちにして、壁がいなくなった我に止めを刺すと言ったところか。その程度で我を倒せると思ったか？」

「思わねえよ。クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊の効果発動！！このカードが破壊され墓地へ送られた時、墓地のオメガ・ドラゴンを特殊召喚する！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「バニシング・ドラゴンでダイレクトアタック！！バニシング・ブレス！！」

「罠発動、ダーク・ライフ！墓地に存在する闇属性モンスターを１体除外することで、そのモンスターの攻撃力分ライフを回復する。我は邪神龍アビスを除外！！」

イヴィルド　ＬＰ２５００→７５００→５０００

「邪神龍アビスが除外された場合、除外された邪神龍アビスを特殊召喚する！！」

邪神龍アビス　ＡＴＫ５０００

「除外されても戻ってくるのか…俺はカードを１枚伏せて、ターンエンド！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「我のターン！アビスの効果を受けてまだ倒れんとは・・・少々貴様を見縊っていたようだ。見せてやろう、邪神龍の真の姿を！！」

「何！？」

「我は速攻魔法、リロードを発動！手札を全てデッキに戻し、戻した枚数デッキから新たにドローする！！我は魔法カード、融合を発動！！」

「融合だと！？」

「我のフィールドの邪神龍アビスと、手札の蛇神ゲーと混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）一

終焉の使者ーを融合！！出でよ！！混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）！！」

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ？

３体のモンスターが渦に飲み込まれると、混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）の体にイレイザーの頭を細長くし、ドレッド・ルートの鎧を着た漆黒の龍が現れた。

「混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）は禁止だろ！？」

「そんなこと、知れたことか！！混沌邪神龍（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）の効果、このカードは魔法・罠・モンスター効果を受けない！！」

「何！？」

「さらにこのモンスターがフィールドに存在する限り、相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になり、このモンスターの攻撃力はフィールドで最も攻撃力の高いモンスターの攻撃力＋１００になる！！そしてこのカードが破壊され墓地へ送られた時、相手フィールドのカードを全て破壊する！！」

「今までの邪神の効果か！！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００↓１２５０

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００↓２０００

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ？↓２１００

「混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）の効果で、混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）が自分フィールドに存在する限り、我はいかなる場合でも敗北はしない！！」

「なんだその効果は!?」

「バトル!!混沌邪神龍アビス(カオス・ダークゴッド・ドラゴン)で、バニシング・ドラゴンを攻撃!ディスペア・オブ・デス!!」

「罠発動、ダメージ・バニシング!!自分フィールドの『バニシング』と名の付いたモンスターが攻撃対象に選択された時、その攻撃を無効にする!!」

罠カードの効果で攻撃は消えると思ったが、攻撃は消えず、狙いを反れて近くにあった巨大な山に当たった。攻撃が山に当たった瞬間、ものすごい爆音とともに山が跡形もなく消え去っていた。

「たった２１００であれかよ…」

「運が良かったな…だがそれも時間の問題、我はターンを終了する!!」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００→１０００

混沌邪神龍アビス(カオス・ダークゴッド・ドラゴン)　ＡＴＫ２１００→１３５０

「俺のターン!」

あれに勝つには、手段は1つしかないな、それまでもっていられるか?

真の邪神龍（後書き）

次回、決着です。

読者の皆さん、処刑の準備をどうぞ。

邪神龍　対　神龍（前書き）

今回で混沌邪宗編終了です。

ある意味超次元の対決です。

邪神龍　対　神龍

「俺のターン！俺は、ステラ・コアを特殊召喚！」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

「そして魔法カード、星の瞬きを発動！！自分フィールドのモンスター１体を選択し、そのモンスターのレベルの枚数までドローする！そしてエンドフェイズに手札を全て除外する！！俺はオメガ・ドラゴンを選択し、デッキから１２枚ドロー！！」

これで俺のデッキは残り２枚、そして手札にはまだあのカードはない、後２ターンで確実にあいつを出せる！！

「俺はフィールド魔法、ワールド・オブ・クロニクルを発動！そしてバニシング・ドラゴンの効果で、オメガ・ドラゴンのレベルを６にする！
レベル６のバニシング・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！
破滅の力よ、その力をもって敵を滅ぼせ！！アクセルシンクロ！！
殲滅せよ、バニシング・オメガ・ドラゴン！！」

バニシング・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００↓２５００

混沌邪神龍（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）アビス　ＡＴＫ１３５０↓２６００

「魔法カード、リバイブ・コイントス！オメガドラゴンを選択！・・・全部表だ、墓地のオメガ・ドラゴンを特殊召喚！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

「手札から、ステラ・ブライトを召喚！」

ステラ・ブライト　ＡＴＫ１６００→８００

「レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ブライトをチューニング！！

星の光よ、今全てを輝き照らせ！シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００→１０００

「ステラ・ドラゴンの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルを６にする！

レベル６のステラ・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！

星の光よ、さらなる光を得て闇をも照らせ！アクセルシンクロ！！

照らし出せ、ステラ・オメガ・ドラゴン！！」

ステラ・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

「罠発動、ドラゴニック・ヴァイオレンス！！このターン、俺のドラゴン族モンスターはダイレクトアタックすることができる！ステラ・オメガ・ドラゴンとバニシング・オメガ・ドラゴンでお前にダイレクトアタック！」

イヴィルド　ＬＰ５０００→１

「無駄だ！アビスがいる限り、我の勝利は絶対なり！！」

「魔法カード、バニシング・ソニック！自分フィールド上に『バニシング』と名の付いたモンスターが存在するとき、自分フィールドの永続罠を1枚墓地に送り、相手フィールドの伏せカード1枚を破壊する！リビングデッドの呼び声を墓地に送り、お前の伏せカードを破壊する！魔法カード、ステラ・ホログラフィー！！このカードを発動した次のターンのメインフェイズ時に、『ステラ』と名の付いたモンスターが特殊召喚された場合、自分の墓地に存在する魔法カードを発動する！さらに魔法カード、オメガ・スコープ！自分フィールドに『オメガ』と名の付いたモンスターが2体存在する場合、相手のデッキの上から3枚を確認することができる！！俺はカードを5枚伏せて、ターンエンド！エンドフェイズ時、星の瞬きの効果は手札が存在しないことにより発動しない！」

「我のターン！我は命削りの宝札を発動！手札が5枚になるようにドローする！我は魔法カード、0ブレイクを発動！相手フィールドのモンスターの効果を全て無効にし、相手フィールドのカードを1枚破壊する！我はステラ・オメガ・ドラゴンを破壊！」

「くっ！」

「バトル！アビスでバニシング・オメガ・ドラゴンを攻撃！ディスペア・オブ・デス！！」

「がああああああああ！！」

時雨　ＬＰ７８００→７７００

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ２６００→１００

「速攻魔法、邪神暴虐!!このターン破壊された貴様のモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けてもらう!!」

「あああああああああああああ!!」

時雨　ＬＰ７７００→２７００

「もう虫の息だな?もうサレンダーするがいい。一人で死ぬのは淋しかろう?」

「何を言っている・・・ここから逆転をするんだよ。」

「そうか…ならばそのまま死ぬがいい!!魔法カード、死波滅殺!!相手フィールドに存在するカード１枚につき、１０００ポイントのダメージを与える!!貴様のフィールドのカードは６枚、よって、６０００ポイントのダメージを与える!!そのまま朽ち果てるがいい!!」

「罠発動、未来予知!!デッキの一番上をめくり、そのカードがモンスターカードなら手札に加え、それ以外なら墓地に送る!!デッキの一番上のカードは、モンスターカード!!よってデッキから手札に加える!!これによりダメージは１０００ポイント下がる!!」

「それがどうした!!」

「さらに罠発動、思い出のペンダント!!相手が効果ダメージを発生させる効果を発動した場合、デッキの１番上のカードの種類を宣言し、カードをめくる。そのカードが宣言した種類のカードの場合、効果ダメージを半減させる!!俺が宣言するのは・・・罠カード!!デッキの１番上のカードは・・・

罠カード!!つまりダメージは半分の２５００となる!!うおおおおおおお!!」

時雨　ＬＰ２７００→２００

「生き延びたか…だがそれも時間の問題。次のターンで、世界諸共消し去ってくれる!!」

「させねえよ・・・」

「なに？」

「そんなこと・・・させねえって言ってんだ。」

「まだ意識が残っていたのか…ならばやってみるがいい!!邪神龍を倒せるものならな!!カードを２枚伏せ、ターンエンド!!」

「倒すさ!!俺のターン!!俺は、手札のクロニクル・コアともう１枚を墓地に送る!!クロニクル・コアの効果を発動!!このカードと墓地のモンスター１体を手札に戻し、シンクロ召喚を行う!!レベル２のクロニクル・コアに、レベル２のステラ・コアをチューニング!!

時と光、今ここに交錯する!シンクロ召喚!照明せよ、シンクロチューナー、ステラ・クロニクル・コア!!」

ステラ・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「ステラ・ホログラフィーの効果発動!『ステラ』と名の付いたモンスターが特殊召喚されたことにより、墓地の魔法カードを発動する!俺が発動するのは、死者蘇生!蘇れ!オメガ・ドラゴン!!

ステラ・クロニクル・コアの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルを１つ下げ、このモンスターのレベルを１にする！クロニクル・コアと手札のステラ・コアを墓地に送る！そしてクロニクル・コアの効果で、このカードとアスタリスク・コアを手札に戻し、シンクロを行う！
レベル２のクロニクル・コアに、レベル２のアスタリスク・コアをチューニング！！
時と星、今ここに交錯する！シンクロ召喚！守護せよ、シンクロチューナー、アスタリスク・クロニクル・コア！！」

アスタリスク・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「アスタリスク・クロニクル・コアの効果発動！！オメガ・ドラゴンのレベルを１つ下げ、このモンスターのレベルを１にする！再びクロニクル・コアとアスタリスク・コアを墓地に送り、クロニクル・コアとバニシング・コアを手札に戻し、シンクロを行う！
レベル２のクロニクル・コアに、レベル２のバニシング・コアをチューニング！！
時と破壊、今ここに交錯する！シンクロ召喚！破壊せよ、シンクロチューナー、バニシング・クロニクル・コア！」

バニシング・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「バニシング・クロニクル・コアの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルを１つ下げ、このカードのレベルを１にする！クロニクル・コアとバニシング・コアを墓地に送り、このカードとガーネット・コアを手札に戻し、シンクロを行う！レベル２のクロニクル・コアに、レベル２のガーネット・コアをチューニング！！時と紅、今ここに交錯する！シンクロ召喚！炎上せよ、シンクロチューナー、ガーネット・クロニクル・コア！！」

ガーネット・クロニクル・コア　ＡＴＫ０

「ガーネット・クロニクル・コアの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルをを１つ下げ、このモンスターのレベルを１にする！いくぞ！レベル１となったシンクロチューナー、ステラ・クロニクル・コア、アスタリスク・クロニクル・コア、バニシング・クロニクル・コア、ガーネット・クロニクル・コアに、レベル８となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！時空の力を得た神龍よ、今無限の力をここに解き放て！！オメガアクセルシンクロ！！！！！超越せよ、オメガ・クロニクル・ドラゴン！！」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「攻撃力が下がらないだと！？」

「オメガ・クロニクル・ドラゴンは魔法・罠・モンスター効果を受けない！！」

「そうか、だがそれによりアビスの攻撃力も上がる！！」

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ１００→５１００

「オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果発動！！１ターンに１度、墓地に存在するモンスターを可能な限り特殊召喚する！！蘇れ、オメガ・ドラゴン、クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊、バニシング・オメガ・ドラゴン、ステラ・オメガ・ドラゴン！！」

クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊　ＡＴＫ５０００→２５００

バニシング・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

ステラ・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→２５００

「オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果発動！自分フィールドのこのモンスター以外のモンスターを全てリリースし、リリースしたモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力をアップする！！」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→１５０００

邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ５１００→１５１００

「そんなことをしても無駄だということが、まだわからぬのか！！」

「ワールド・オブ・クロニクルの効果で、オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果でリリースされたモンスターを特殊召喚する！！」

「何！？」

「オメガ・クロニクル・ドラゴンの効果と、ワールド・オブ・クロニクルの効果を繰り返し発動！！」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ１５０００→２５０００→３５０００・・・

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ１５１００→２５１００→３５１００・・・

「もうこれ以上にはできないだろ？」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ∞

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）　ＡＴＫ∞

「攻撃力∞だと！？」

「オメガ・クロニクル・ドラゴンで、アビスに攻撃！！クロニクル・ブレイザー！！」

「迎え撃て！！アビス！！」

それぞれの龍が放った光線がお互いに当たり、両方破壊された。

それと同時に、大地震が起きた。

「うわっ！？」

「大丈夫ですか！？お嬢様！！」

「なんだこの揺れ！？」

「とりあえず外に出ましょう！！」

「うお！！なんなんだこの揺れ！？」

「・・・こういうときは慌てないようにしましょうか…。」

「・・・地震か…。」

「・・・まさかあいつらか？」

「これでアビスは破壊された！！」

「だがアビスの効果で、貴様のフィールドのカードは全て破壊される！」

「カウンター罠、アスタリスク・レイ！相手が「カードを破壊する効果を発動した時、墓地の罠を3枚除外してこのターン、自分のフィールドのカードは破壊されない！！」

「なら、罠発動、邪神拘束！！自分のモンスターが破壊された時、相手フィールドのモンスターを4体まで守備表示にする！！」

「クリムゾン・オメガ・ドラゴン＊の効果で無効にする！！」

「ならばもう1枚の邪神拘束を発動！これで貴様のモンスターは攻撃ができない！！我の勝ちだ！！」

「ワールド・オブ・クロニクルの効果発動！このカードを墓地に送り、墓地のオメガ・クロニクル・ドラゴンを特殊召喚する！！」

「なんだと！？」

オメガ・クロニクル・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「止めだ！！オメガ・クロニクル・ドラゴンでダイレクトアタック！クロニクル・ブレイザー！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

イヴィルド　ＬＰ１→０

「・・・勝った・・・か…」

時雨はその場で倒れ、意識を失った。

笑顔で神楽の方を向いて・・・

邪神龍　対　神龍（後書き）

執筆していたら遅くなりました。

イ「なんだここは？」

え～～っと、あなたにはこれから感想欄に行ってもらいます。一応アビスのカードは破らせてもらうので悪しからず。それじゃあ行ってらっしゃ～～～い！！

イ「待てえええええええええええええ……・」

入院（前書き）

前回の話の後です。

アビスを倒したあとどうなったのか、というのが今回です。

入院

「……ここは？」

目を覚ますと、白い天井が見えた。

「……体が動かない…」

体の方を見てみると、ギャグアニメのように全身包帯で巻かれていた。

「よお、起きたか！」

扉の方から神羅さんが来た。

「神羅さん、神楽は…？」

「まず自分の心配しろ。全身打撲に複雑骨折で全治1カ月らしいぞ？どんなことやったんだ？」

「俺のことより神楽は…」

「…分かったよ、神楽は隣の病室だ。栄養失調だが、命に別状はないらしい。」

「そうですか…。」

「あー、言い忘れ得たけど、お前が琴塚のところのパチンコで当てた賞金、後でお前のところにくるそうだ。」

「あれですか…」

「確か6億だったな。有効的に使えよ?じゃあな。」

そう言って神羅は病室を出て言った。

「よー紫藤!!元気にやってるか〜〜?」

「し、失礼します。」

病室の扉から俊と、誰かがやってきた。

「・・・俊、そいつは誰だ?」

「ああ、こいつは・・・」

「あ、あの、初めまして。元十黒の牙城優と言います。」

「十黒!?」

「ああ大丈夫大丈夫、こいつ単に拾われた恩でやってただけで、実際すごい優しい奴だから。」

「・・・。」

「あの・・・なんかすいません。悪いことしたなら謝ります。」

「・・・俊、こいつ本当に元十黒なのか?」

「やっぱお前もそう思うか。」

「ひどいです〜〜!」

俊達が退室してから、数分後、

「おっす、大丈夫・・・じゃねえだろうな時雨～～。」

木原が来た。

「なんだそれ？」

「いや、特に意味はねえよ。それより・・・やっぱ大丈夫じゃねえな。」

「まあな。」

「それより土産だ。ほら、果物一式。」

「普通だな。」

「ほっとけ。」

「起きてますか？」

「失礼します。」

「失礼させていただきます。」

吉野と東雲と元十黒の葛井がやってきた。

「お前は…！！」

「大丈夫ですよ。この人意外と扱いやすいですし。」

「確かに扱いやすいですね…。」

「私はこの面会が終わりましたら、新しい主を求めて旅に出ようと思います。」

「そうなのか・・。」

「・・・起きているか？」

紫苑がやってきた。

「ああ、兄さん。起きてるよ。」

「そうか・・・。俺はプロに復帰する。またしばらく会うことはないだろう。」

「ああ、それじゃあな。」

「元気に過ごせ・・・。」

入院してから１５日たったある日の夜、病室の扉が開く音がした。

「・・・しー君。」

神楽が病室に入ってきた。

「もう動いて大丈夫なのか？」

「うん・・・それよりもごめんね？私のせいで、そんな・・・」

「気にするな。」

「でも…！」

「これは俺が自分で選んだ結果だ。後悔はしてないし、する気もない。」

「しー君…」

「だから、そんな顔するな。お前の悲しそうにしてる顔を見ている

ほうが、俺はつらい。」

「・・・うん！」

そして入院から1カ月、俺と神楽は退院した。

「おーい、さっさと行くぞー？」

「分かりました！行こう、神楽。」

「うん！」

入院（後書き）

今回の話は結構間が開きすぎました。

新キャラ紹介（前書き）

今回は神楽と紫苑と牙城と葛井の紹介をします。

新キャラ紹介

名前　椎名神楽

身長　１５７ｃｍ

容姿　（３年前）茶髪のショート　（現在）茶髪のロング

性格　穏やか

時雨の彼女。３年前から髪は切っていない。本人曰く切る気はないらしい。デュエルはあまりしないが、実力は普通より上の部類。３年前に連れ去られてから食料はあまり与えられていなかったが、十黒の中で比較的まともな牙城と葛井と黒谷が隠れて食べ物を与えていたため、餓死しなかった。年齢は時雨達より１つ下。趣味はお手玉。得意技はドロップキック。

使用デッキ　スピリット

名前　紫藤紫苑

身長　１８２ｃｍ

容姿　黒髪のセミロング

性格　物静か

時雨の兄で、プロデュエリスト。自分のことを影が薄いと思ってお

り、言葉数が少ない。静かなところが好き。世界一速いＤホイールの持ち主。Ｄホイールのスピードにはだれも追いつけない。３年前から時雨の心配をして混沌邪宗を追い、プロを休業していた。身体能力はもはや常人の比ではないらしく、野球の１６０キロの変化球を場外まで打ち返すことができる。趣味はＤホイール磨き。

使用デッキ　帝

Ｄホイール　セイントカイザー

名前　牙城優

身長　１６７ｃｍ

容姿　薄い茶髪・平均的体型

性格　優しくて気弱

元十黒の一人。捨て子だったところを教祖のイヴィルドに拾われる。本人はその恩で建築やデュエルを学んでいた。１級建築士免許を所持している。勉強もしっかりやっており有名校に普通に受かるほど。混沌邪宗がなくなった後はネオ童美野シティのデュエルアカデミアに入学する予定。３年前から黒谷と葛井と一緒に神楽の世話をしていた。

使用デッキ　終焉のカウントダウン

名前　葛井・Ａ・セバスチャン

身長　１７６ｃｍ

容姿　黒髪のオールバック

性格　礼儀正しい

元十黒の一人。母親が日本人とフランス人のハーフで、葛井はクォーター。執事になる修行のために世界を股にかけ、たまたま混沌邪宗の十黒になった。混沌邪宗の目的には興味を示しておらず、自分の主になる人物を求めていた。俊と同じくらい頭がいい。現在は主を求めて旅に出ている。

使用デッキ　バトラーデッキ

Ｄホイール　バトラーズ

新キャラ紹介（後書き）

次回はかなりたまったオリカ紹介です。

オリカ紹介１６（前書き）

今回だけで２０枚以上のオリカが・・・

流石に出し過ぎた気が・・・・

オリカ紹介１６

ダーク・レーサー
闇属性　悪魔族・効果　レベル８　ＡＴＫ２９００　ＤＥＦ１９００
このカードがデュエル開始１ターン目に召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、相手に攻撃することができる。このカードは相手プレイヤーにダイレクトアタックができる。

帝王の領域
フィールド魔法
このカードの発動を無効にはできない。メインフェイズ時、下僕トークン（地・戦士族・ＡＴＫ／ＤＥＦ２００）を特殊召喚する。このトークンはフィールドに１体しか存在できない。自分のフィールドに『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターが５体存在する場合、自分の魔法・罠ゾーンの１箇所をモンスターカードゾーンとして扱い、デッキから『聖帝ジャスティス』を特殊召喚する。

シーザー・フォース
速攻魔法
『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターがアドバンス召喚に成功した時、もう一度通常召喚を行うことができる。

帝王の威圧
通常罠
相手モンスター１体の攻撃を無効にし、デッキまたは手札から『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスター１体を特殊召喚する。

エンペラー・マント
通常罠
このカードがカードの効果で破壊された時、デッキから1枚ドローする。

聖帝ジャスティス
光属性　天使族・チューナー　レベル６　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ１０００
このカードは通常召喚ができない。このカードは「帝王の領域」の効果でのみ特殊召喚ができる。このカードの特殊召喚に成功したターン、相手は魔法・罠を発動することができない。

インペリアル・アブリースト
通常魔法
このカードを発動したターンのエンドフェイズ終了時まで、自分フィールドの『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』『聖帝』と名の付いたモンスター全てのレベルを２にする。

神帝サーガ
神属性　幻神獣族・シンクロ／効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
「聖帝ジャスティス」＋『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスター・罠の効果を受けない。魔法カードの効果はこのカードはモンスター5体
は1ターンのみ受け付ける。1ターンに1度、相手の手札を次の相手のスタンバイフェイズ終了時まで除外する。墓地に存在する『氷帝』『雷帝』『地帝』『風帝』『炎帝』『邪帝』『光帝』『闇帝』と名の付いたモンスターを可能な限り特殊召喚する。

裁きの十字架
永続魔法
自分フィールドの「聖天使」と名の付いたモンスターが攻撃するとき、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動することができない。

聖天使降臨の儀式
儀式魔法
「聖天使テラ」の降臨に必要。手札からレベルの合計が１２以上になるようにカードをリリースしなければならない。

聖天使テラ
光属性　天使族・儀式／効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ２４００
「聖天使降臨の儀式」により降臨。「裁きに十字架」が発動してるときに儀式召喚した場合、相手フィールドのモンスターを全て除外する。１ターンに１度、デッキから「聖天使ギガ」を特殊召喚する。

聖天使ギガ
光属性　天使族・効果　レベル９　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ１４００
このカードが特殊召喚された時、デッキから「聖天使メガ」を特殊召喚する。１ターンに１度、相手の墓地のカードの枚数×２００ポイントのダメージを与える。

聖天使メガ
光属性　天使族・効果　レベル６　ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ４００
１ターンに１度、自分フィールドの「聖天使」と名の付いたモンスター１体に、他の「聖天使」と名の付いたモンスターの攻撃力を加える。この効果を発動したターン、他のモンスターは攻撃宣言を行えない。

邪道精神
通常魔法
自分フィールドに、暗黒トークン（闇・悪魔族ＡＴＫ／ＤＥＦ０）を３体特殊召喚する。このトークンは「邪神」と名の付いたモンスター以外のリリースには使えない。

ディバイド・ギロチン
光属性　機械族・効果　レベル１０　ＡＴＫ３１００　ＤＥＦ２１００
このカードの攻撃力が半分になった時、相手モンスター１体の攻撃力を半分にする。

邪神再臨
永続罠
自分フィールドの「邪神」と名の付いたモンスターがフィールドを離れた時、デッキから「邪神」と名の付いたカードを１枚手札に加える。

邪神殿
フィールド魔法
自分フィールドの「邪神」と名の付いたモンスターの攻撃力を１００ポイントアップする。「邪神」と名の付いたモンスターが破壊される時、代わりにこのカードを破壊することができる。

ブレイクスルー
通常罠
このカードを発動したターン、自分フィールドのモンスターは戦闘では破壊されない。

邪神護身像
闇属性　岩石族・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ２０００
手札のこのカードを墓地に送り、相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

オメガ・ガードナー
光属性　戦士族・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ１８００
手札のこのカードを墓地に送り、このターン自分フィールドのモンスターは戦闘では破壊されない。

邪神龍アビス
闇属性　ドラゴン族・効果　レベル１２　ＡＴＫ５０００　ＤＥＦ５０００
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に「邪神アバター」「邪神ドレッド・ルート」「邪神イレイザー」が存在するとき、手札または墓地からこのカードを特殊召喚できる。１ターンに１度、相手フィールドのカードを全て破壊する。このカードが除外された時、除外されたこのカードを特殊召喚できる。

パワー・プレッシャー
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターの攻撃力が攻撃対象より高い場合、そのモンスターを破壊する。

リバイブ・コイントス
通常魔法
墓地のモンスターを１体選択する。そのモンスターのレベル分コイントスを行い、全て表なら選択したモンスターを特殊召喚する。１回でも裏が出た場合、自分フィールドのカードを全て破壊する。

リボーン・チェーン
通常罠
相手が墓地からモンスターを特殊召喚した時、エンドフェイズまでそのモンスターの効果を無効にする。

作用反転
通常罠
相手モンスターの攻撃時、その攻撃を無効にしそのモンスターの攻撃力分ライフを回復する。

バニシング・カタパルト
闇属性　機械族・効果　レベル４　ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ２０００
１ターンに１度、デッキの「バニシング」と名の付いたモンスターを効果を無効にして特殊召喚することができる。

ダーク・ライフ
通常罠
墓地に存在する闇属性モンスターを除外して、そのモンスターの攻撃力分ライフを回復する。

混沌邪神龍アビス（カオス・ダークゴッド・ドラゴン）
闇属性　ドラゴン族・融合／効果　レベル１２　ＡＴＫ？　ＤＥＦ５０００
「邪神龍アビス」＋「蛇神ゲー」＋「混沌帝龍ー混沌の使者（カオス・エンペラー・ドラゴン）ー」
このカードは融合召喚でのみ特殊召喚できる。このカードは魔法・罠・モンスター効果を受けない。このモンスターがフィールドに存在する限り、相手フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。このモンスターの攻撃力はフィールドで最も攻撃力の高いモンスターの攻撃力＋１００の数値になる。このモンスターがフィールドを離れた時、相手フィールドのカードを全て破壊する。こ

のカードが自分フィールドに存在する限り、自分は如何なる場合でも敗北しない。

ダメージ・バニシング
通常罠
自分フィールド上の「バニシング」と名の付いたモンスターが攻撃対象に選択された時、その攻撃を無効にする。

星の瞬き
通常魔法
自分フィールドのモンスターを1体選択する。選択したモンスターのレベル分デッキからドローする。そのターンのエンドフェイズに、手札を全て除外する。

ステラ・ブライト
光属性　機械族・効果　レベル４　ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ２０００
手札の光属性モンスターを墓地に送り、このカードを特殊召喚できる。

ドラゴニック・ヴァイオレンス
通常罠
このターン、自分のドラゴン族モンスターはダイレクトアタックすることができる。

バニシング・ソニック
通常魔法
自分フィールドに「バニシング」と名の付いたモンスターが存在する時、自分フィールドの永続罠を墓地に送り、相手フィールドにセットされているカードを破壊する。

ステラ・ホログラフィー
通常魔法
このカードを発動した次のターンのメインフェイズ時に、「ステラ」と名の付いたモンスターを特殊召喚された場合、墓地に存在する魔法カード1枚を発動することができる。

オメガ・スコープ
通常魔法
自分フィールドに「オメガ」と名の付いたモンスターが2体存在する場合、相手のデッキの上から3枚を確認することができる。

0ブレイク
通常魔法
相手フィールドのモンスターの効果を全て無効にし、相手フィールドのカードを1枚破壊する。

邪神暴虐
速攻魔法
このターン破壊された相手モンスター1体の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

死波滅殺
速攻魔法
相手フィールドに存在するカード1枚につき1000ポイントのダメージを与える。

未来予知
通常罠
デッキの1番上をめくり、そのカードがモンスターカードなら手札に加え、それ以外なら墓地に送る。

思い出のペンダント
通常罠
相手が効果ダメージを発生させるカードを発動した時、デッキの１番上のカードの種類を宣言し、そのカードをめくる。そのカードが宣言した種類と同じのカードの場合、効果ダメージを半分にする。

アスタリスク・レイ
カウンター罠
相手が「カードを破壊する効果」を発動した時、墓地の罠を3枚除外して発動する。このターン、自分のフィールドのカードは効果では破壊されない。

邪神拘束
通常罠
自分のモンスターが破壊された時、相手フィールドのモンスターを４体まで守備表示にする。

一瞬の緊張感（前書き）

気温が上がってくると、結構つらいような気がします。

一瞬の緊張感

～神羅のDホイール・後部～

「う～～～～ん……」

何か思い耽る牙城。

「どうしたんだ、牙城？」

「何か忘れてるような気がするんですけど……」

「一体何を？」

「それを今思い出してるんですよ…」

「へ～～～……」

吉野、玲、神楽は3人でおしゃべり。

「ねえ、神楽ちゃんって何が趣味なの？」

「お手玉です♪」

「神楽ちゃん、時雨さんの方に乗らなくてよかったの？」

「はい、しー君のDホイールって1人乗りなんですよね…それにあのスピードだと振り落とされる気がします。」

神楽が残念そうに話す。

「そう・・・」

「今思ったんですけど、皆が倒した十黒って合わせて何人ですか？」

玲がふいに質問する。

「俺は牙城だけ。」

「俺は変なおっさん。もうあれとはやりたくねえ……」

「私は化粧が濃いおばさんでした。」

「私は倒してないですけど…」

「そんで紫苑さんが2人で、神羅さんが1人。」

「それに紫藤が2人…」

「1人足りなくないですか？」

「あーーーーーーーーーー！！！！！」

牙城が突如として叫んだ。

「どうした？」

「思い出しました！！十黒の1人がネオ童美野シティに行ってました！！」

「「「「えっ！？」」」」

「それってどんな奴？」

「はい、十黒の最強に位置する、ゲルファさんです。」

「最強？それってどのぐらい？」

「はい、葛井さんが言うには教祖様か神羅さんぐらいのレベルじゃないと倒せないって……」

俊が神羅の方に向かう。

「神羅さん！！急いでください！！」

「ん？どうした？」

「ネオ童美野シティに、十黒の１人がいるんです！！」

「そうか…じゃあスピードあげるぞ！！」

神羅はアクセルを踏んだ。

「うお！？」

少し出ていた俊は後部に吹き飛ばされた。

『神羅さん、どうかしたんですか？』

時雨から連絡が入った。

「ネオ童美野シティに十黒の一人が行ったらしい。お前は先に行ってくれ。」

「分かりました！」

近くにいた時雨はアクセルを踏み、スピードを上げた。

１０秒ぐらいして時雨のＤホイールが見えなくなった。

「相変わらず速いな～～～…」

「牙城、そいつはどんな奴なんだ？」

「はい、たしかあの人が闇のデュエルをやると、街が１つ消えるとか……」

「やばすぎるだろ！！？」

「あ、でも性格は結構落ち着いているんですよ？でも落ち着き過ぎていて逆に怖くなってきます……」

「…かなり危ないような…」

時雨は神羅たちより先にネオ童美野シティに着いた。

「……特に変わった様子はないな…」

時雨はネオ童美野シティに入り、周りの人に1か月前変わったことは起きなかったか、と聞いた。

するとある回答が返ってきた。

「あ～、1ヶ月前ね。確かデュエルアカデミアの方ですごいデュエルがあったとか……」

時雨は疑問に思った。混沌邪宗の教祖があの強さなら、十黒の最強の男も相当強いはず。そんな奴を倒せる生徒がデュエルアカデミア

にいるのかと。

時雨の疑問はすぐに解決した。

「ああ、あいつがいたか。あいつなら可能性はある。」

その時、神羅たちが合流した。

「おーい、時雨。どうなってるんだこれは？」

「あまり変わった様子はないですね。」

「ゲルファっていうのを倒した奴がいるらしい。」

「あのゲルファさんを!?そんな人、この街にいるんですか!?」

「さあな。」

後で知ったことだが、そのゲルファっていうやつはデュエルアカデミアに無断で侵入したことで、

セキュリティーに逮捕されたらしい。

一瞬の緊張感（後書き）

イ「馬鹿な!?ゲルファがやられただと!?」

まだいたのか・・・・。

作者はイヴィルドを縛り付け、四角い箱の中に入れた。

イ「なんだこれは!?何をするつもりだ!?」

作者はイヴィルドを入れた箱を地面に埋めた。

これでよしっと。

一段落

「ところで神楽ちゃん？」

「はい？」

吉野が神楽に聞いた。

「これからの生活どうするの？」

「はい、暫くは神羅さんの所に居させてもらいます。」

「デュエルアカデミアには入るの？」

「来年入ろうと思います！」

「来年？なんで？」

「言ってませんでしたっけ？」

「？」

その疑問に時雨が答えた。

「神楽は俺達より１つ下だ。」

「「「「ええ！？」」」」

「でも３年間学校に行ってなかったから、多分勉強が分からなくな

ってると思うけど……」

「そう、だから……」

時雨はどこからか参考書を出してきた。

「俺と神羅さんで神楽が入学するまで徹底的に勉強を叩きこむ。」

「……」

神楽は少しずつ後ろに引いて行った。

「逃げるな。」

「……はい。」

「まあそういうことで、俺達はここで帰る。」

「またな。」

神羅と時雨と神楽と別れた。

「……さて、後は俺達の問題だけ、ということになるな…」

「「「？」」」

「だって俺達、紫藤みたいに休学届出さずに休んだだろ？」

「「「あっ……」」」

「俺と吉野は大丈夫として、木原と東雲はどうする？」

「……とりあえず謝ります。」

「……俺も…。」

玲と尚は肩を落としながら答えた。

一段落（後書き）

すみません、今回短すぎました。

番外編　神楽の変わった1日（前書き）

久々の番外編です。

何が変わっているのかは本編をご覧ください。

番外編　神楽の変わった1日

どうも、椎名神楽です。

今日はしー君はアカデミアに行ってて、神羅さんはシティの子供たちにデュエルを教えてるから、私は夕飯の買い物をしています。

ということで、今街を歩いています。

「そこの彼女、今暇？」

何かチャラチャラした人がこっちに来た。※前に出てきたチャラ男とは別です。

「あ、いえ、今買い物中です。」

「そんなこと言わずにさ、ちょっとお話ししようよ？」

「え、遠慮します……。」

「そんなこと言わずにぐはあああああ！！」

「！？」

チャラチャラした男がいきなり吹っ飛んでいった。

「……もしも～し…。」

「……」

チャラチャラした男は完全にのびていた。

「……。」

神楽はチャラチャラした男は近くにあったベンチに運んだ。

「これでよしっと。」

神楽は買い物を続けた。

「お買いもの終了♪」

神楽は無事買い物を済ませて、帰るところだった。

「さっきの彼女、ちょっといいかい？」

「……。」

先ほどのチャラチャラした男が、今度は人数を増やしてきた。

「なんですか？」

「ちょっと俺達につきあってよ～？悪いようにはしないからさ？」

「先ほども言った通り、遠慮させてもらいます。」

「いいからいいから、ちょっとこっちに来てよ？」

チャラチャラした男達が神楽の腕をつかもうとした瞬間、

「「「「「「「「「ぐはあああああああああ！！」」」」」」」」」

「！？」

再びなぜかチャラチャラした男達が宙に舞った。

「……放っておいて、いいよね？」

神楽はチャラチャラした男たちを放置した。

「ただいま～！」

「「おかえり。」」

神楽が帰ると、時雨と神羅が腕相撲していた。

「……なんで腕相撲してるの？」

「今日の夕食どっちが作るかを決めてる。」

「それなら私が」

「「それは駄目」」

「なんで!?」

「それじゃ始めましょう神羅さん。」

「手加減はしないぞ?時雨。」

「「レディー…」」

「「ゴー!!」」

ダン!!

一瞬にして決着がついた。

「俺の勝ちです。」

「……ちょっとは手加減しろよ。」

「無理です。」

夕飯は神羅が作ることになった。

「なんで私は駄目なの?」

「お前がキッチンに立つのはまだ早い。」

「ええ！？」

～最初の下りの真実～

今日からアカデミアに復帰。神楽のことが心配だが、ちゃんと通っておかないといけない。

心配だから神楽の気配の周辺を気にしながら学校に行っている。

……結構壁にぶつかったが……

…神楽の周辺に邪な気配が近づいてきた。

なんか神楽に近づいてる…出来るか分からないが、殺気で追い払ってみるか。

……これで大丈夫かどうかは分からないが、警戒を続けておこう。

ガン！

……また壁にぶつかった。

～放課後～

またさっきの邪な気配が近づいてる。しかも今度は複数人連れてきている。

さっきの集団が通じるかは分からないが、もう一度殺気を放ってみるか。

……また電柱にぶつかった。

「うっ……なんださっきの寒気は？」

チャラチャラした男達が意識を取り戻した時、近づいてきた人物がいた。

その人物はフードを被っていて顔も見えなかった。

「……そこの集団。」

「なんだテメエは？」

「俺とデュエルしろ。」

「…いいぜ。ただしこっちはここにいる４０人同時でやらせてもらう。」

「……構わない。」

「泣き言行っても手遅れだからな！！デュエル！！」

「……この程度か…。」

フードの人物が立っている中、先ほどの４０人が全員倒れている光景がそこにあった。

「……こんな世界に俺は否定されたのか…。」

フードの人物はそこから立ち去った。

番外編　神楽の変わった1日（後書き）

時雨は神楽のことが心配し過ぎなような気がします。

謎の人物の言葉の意味は何なのか。それはまた別の話で。

木原達の罰則（前書き）

今回の話は俊達が時雨の手助けをして学校を無断で休んだ件の話です。

木原達の罰則

俊達は今教頭に呼び出しをくらってる。この前無断で学校を休んだからだ。

何事もなければいいんだが……

「……であるからシテ、学業をおろそかにしてはいけないのデス

！」

（（（（やっぱこの人の口調面白い……））））

「まあ、川田サンと吉野サンは成績優秀だからいいとシテ、あなた達二人はあまり成績があまりよろしくないようデスネ？」

「「まあ……」」

「デスので、ワタシとデュエルを行い、勝てたら不問とします。」

「負けた場合は？」

「あなた達には退学してもらいマス。」

「「ええっ！？」」

「優秀でナイ生徒はこのアカデミアには必要ないのデス！！」

「横暴すぎないですか？」

「そんなことは関係ないのデス！」

「ちょっといいですか？」

「ナンデスカ？」

「そのデュエルはここでやってもいいですか？」

「？まあいいデスガ……」

「ならすぐやりましょう。こんな問題長引かせたくないんで。」

「イイデショウ。」

「「デュエル！！」」

「ワタシのターーーン！！ワターシは、古代の機械石像（アンティーク・ギアスタチュー）を召喚し、魔法カード、機械複製術を発動！デッキから、古代の機械石像（アンティーク・ギアスタチュー）2体を特殊召喚するでアリマス！」

古代の機械石像（アンティーク・ギアスタチュー）　ＡＴＫ５００

「古代の機械石像（アンティーク・ギアスタチュー）の効果発動！このカードをリリースすることで、手札の古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）を召喚条件を無視シテ、特殊召喚するでアリマス～！」

古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）　ＡＴＫ３０００

「……。」

「どうしたでアリマスか？あまりの威圧感に言葉も出ないでアリマスか？」

（……前に化け物みたいな攻撃力の奴見たから全然怖くねえや……。）

「魔法カード、レベル・サンダーを発動！！ワタシの場のモンスターのレベルの合計×１００ポイントのダメージをくらうでアリマス～！」

「うおっ！」

木原　ＬＰ４０００→１６００

「ワタシはこれでターンエンドでアリマス！！」

「俺のターン！」

「古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）が３体並んでいる時点で、アナタに勝機などアリマセン！！アナタにこの３体の古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）を倒すことなどできないのでアリマス！」

「確かに倒すのは無理そうだ……」

「ソウデス、分かったらさっさとサレンダーを……」

「じゃあ、古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）を倒さないで、あなたを倒します。」

「は？」

「俺はＭＳ－シャッテを召喚！」

ＭＳ－シャッテ　ＡＴＫ３５０

「シャッテの効果発動！このカードの召喚に成功した時、デッキから『ＭＳ』と名の付いたモンスター１体を特殊召喚する！俺はＭＳ－バルッカを特殊召喚！！」

ＭＳ－バルッカ　ＡＴＫ５５０

「バルッカが特殊召喚に成功した時、このモンスターをチューナーとして扱う！
レベル２のＭＳ－シャッテに、レベル３のＭＳ－バルッカをチューニング！！
シンクロ召喚！解析しろ、ＭＳ－マッド・ブレイン！！」

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２１００

「マッド・ブレインの効果で、デッキから『ＭＳ』と名の付いたモンスターを２体特殊召喚できる！俺はＭＳ－フィーテとＭＳ－ガーヅを特殊召喚！」

ＭＳ－フィーテ　ＡＴＫ３００

ＭＳ－ガーヅ　ＡＴＫ４００

「そんな雑魚を揃えたところデ、一体何ができるというのデスカ？」

「フィーテの効果、このモンスターが特殊召喚された場合、自分の『ＭＳ』と名の付いたモンスターは直接攻撃ができる！そしてガーヅが特殊召喚された場合、『ＭＳ』と名の付いたモンスターはこのモンスターの攻撃力分攻撃力を上げる！」

ＭＳ－フィーテ　ＡＴＫ３００→７００

ＭＳ－ガーヅ　ＡＴＫ４００→８００

ＭＳ－マッド・ブレイン　ＡＴＫ２１００→２５００

「なんでスト！？」

「モンスター全てでダイレクトアタック！」

「ふぎゃあああ！！」

ハイトマン　ＬＰ４０００→０

「そんな私が負けるトハ……」

「次は私ですね…」

木原達の罰則（後書き）

今回は中途半端に終わってしまった気が……

罰終了（前書き）

前回の続きで、久しぶりに玲がデュエルします。

全然使ってなかった……おそらくまたお仕置きが来るんだろうな……（遠い目）

罰終了

「それじゃあ次は私ですね！」

「ヌヌヌ！奇跡は二度も続かないのでアリマス！！」

「「デュエル！！」」

「私のターン！私は魔法カード、ブラック・ジャックを発動します！手札のモンスターのレベルの合計が２１の時、デッキからカードを２枚ドローします！私の手札のモンスターは、レベル８の『伝説の魔術師　ジョーカー』とレベル８の『伝説の奇術師　エース』とレベル２の『セカンド・ハート』とレベル３の『サード・ダイヤ』、８＋８＋２＋３で合計２１！よってデッキから２枚ドローします！私はモンスターをセットして、カードをセットして、ターンを終了します！」

「ワタシのターーン！！ワタシは魔法カード、磁力の召喚円（マグネット・サークル）　ＬＶ（レベル）２を発動シテ、手札の古代の歯車（アンティーク・ギア）を特殊召喚シマス！！」

古代の歯車（アンティーク・ギア）　ＡＴＫ１００

「更に、ワタシのフィールドに古代の歯車（アンティーク・ギア）が存在することデ、手札の古代の歯車（アンティーク・ギア）を特殊召喚！！２体の古代の歯車（アンティーク・ギア）をリリースシテ、古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）をアドバンス召喚するでアリマス！！」

古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）　ＡＴＫ３０００

「古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）でモンスターに攻撃！アルティメット・パウンド

！！」

「破壊されたモンスターは、サード・ダイヤ！サード・ダイヤが戦闘によって破壊された場合、相手の次のドローフェイズをスキップします！」

サード・ダイヤ　ＤＥＦ１５００

玲　ＬＰ４０００→２５００

「うっ！」

「ワタシはカードを2枚伏せて、ターンエンドでアリマス！！」

「私のターン！私は魔法カード、スペード１３を発動！自分の手札のモンスターのレベルの合計が１３になるよう手札のモンスターを捨てます！私は『伝説の魔術師　ジョーカー』を墓地に送ります！そしてジョーカーが手札から墓地に送られた時、このカードを特殊召喚します！」

伝説の魔術師　ジョーカー　ＡＴＫ？

「そんな雑魚モンスターを出したトコロデ、なんだっていうんデスカ？」

ブチッ

玲の怒りのレベルが５になった。（上限１０）

「……ちょっと頭に来ました。私は手札のセカンド・ハートの効

果を発動！このターン私のモンスター1体は1度だけ戦闘では破壊されません！さらに魔法カード、8チェンジを発動！手札のレベル8のモンスターを墓地に送り、デッキからレベル8のモンスターを特殊召喚します！私は『伝説の奇術師　エース』を墓地に送り、デッキから『幻の武道師　ブリッジ』を特殊召喚します！」

幻の武道師　ブリッジ　ＡＴＫ０

「墓地に送られたエースの効果発動！『伝説の魔術師　ジョーカー』がフィールドに存在するとお気に墓地に送られた場合、墓地から特殊召喚します！」

伝説の奇術師　エース　ＡＴＫ０

「バトルフェイズ！ブリッジで古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）を攻撃！！」

「血迷いマシタカ？」

「ブリッジの効果発動！このカードの攻撃時、攻撃対象に選択したモンスターの攻撃力が３０００以上だった場合、このモンスターの攻撃力を３５００にする！！」

幻の武道師　ブリッジ　ＡＴＫ０→３５００

「ナンデスト！？ヌオオオオ！！」

ハイトマン　ＬＰ４０００→３５００

「さらにエースの効果発動！このモンスターの攻撃力を自分フィールドに存在する戦士族または魔法使い族モンスターの攻撃力と同じ

にする！エースの攻撃力をブリッジと同じにする！そしてジョーカーの効果発動！このカードの攻撃力はエースと同じになる！」

伝説の魔術師　ジョーカー　ＡＴＫ？→３５００

伝説の奇術師　エース　ＡＴＫ０→３５００

「ジョーカーとエースでダイレクトアタック！！」

「させませんヨ！！罠発動、聖なるバリアーミラーフォースー！！相手フィールドに存在する攻撃表示モンスターを全て破壊するでアリマス！！」

「カウンター罠、トラップ・ジャマー！ミラーフォースの発動を無効にして破壊します！」

「フギャワアアアアアア！！！」

ハイトマン　ＬＰ３５００→０

放課後……

「……てことがあってな～～。」

「それはある意味すごいな……」

「私は自分が馬鹿にされるのはいいんですけどこのデッキを馬鹿にされるのは嫌なんですよ！私はトランプが好きなので！！」

「？」

その時、時雨達に近づいてくる者がいた。

「そこのお前ら。」

「「「「「？」」」」」

その人物はフードを被っていて顔を見ようにもフードの下に仮面を着けていた。

「なんですか？」

「俺とデュエルしろ…。」

「あ～、別にいいです。」

「戦え！！」

フードの人物はいきなり襲いかかってきた。

「うお！？」

俊達が驚いた時、時雨はフードの人物の蹴りを蹴りで止めた。

「……何この状況！？」

俊達が時雨とフードの人物の方を見てみると、激しい戦いが始まっていた。

先ほどの状態からフードの人物が逆の足で回し蹴りをして時雨がそれを腕で受け止める。それに合わせて時雨がフードの顎に目掛けて蹴りを出したところ、フードは後ろに飛び蹴りを回避した。

時雨はその動作についていき今度は踵落としを放つものの、フードは両腕を楯にして防いだ。

「これはバトル物じゃないんだけど！！？？」

木原の突っ込みを無視して、フードが時雨を空に飛ばした後、腹に目掛けてひざ蹴り、時雨はその膝に靴の底面をあてひざ蹴りの勢いを利用して回避した。

「お前、なかなか強いな。」

「お前こそ。」

「ストーーーーーーーーップ!!!」

「「？」」

木原が大声で叫んだ。

「何やってんのお前ら!?ここはなんかのバトルフィールドですか!?ただの街中じゃねえか!!!」

「……悪い……」

「……」

その後、木原が怒鳴り続けること5分……

「分かったか!!」

「あ、ああ……」

木原達は少し落ち着いた。

「ところで、なんでお前は急に襲ってきたんだ?」

「お前たちに答える必要ない!」

「それじゃあそのフードと仮面を取ってみようか。」

「触るな！！」

時雨が伸ばした手をフードは弾いた。

「……やっぱりなんかあるんだな。」

「……」

フードはこう言った。

「俺とデュエルするなら教えてやる。」

「……分かった。やってやる。」

「ならすぐ始めよう。」

罰終了（後書き）

玲「なんで私の出番が少ないんですか！ブリッジとジョーカーとエースで作者に攻撃！！」

ぐはあああああああああああ！！

謎の人物（前書き）

前回の続きで、謎のフードとの対決です。

謎の人物

「準備はできたか？」

フードが聞いてきた。

「ああ、そっちは？」

時雨が聞き返す。

「こっちも大丈夫だ。それじゃあ始めるか。」

「「デュエル！！」」

「俺のターン！」

フードのターンから始まった。

「俺は異端者　？０１を召喚！！」

異端者　？０１　ＡＴＫ１６００

「異端者？」

「そう、異端者。こいつらは俺の心、肉体、つまり俺自身だ。」

「どういうことだ？」

「俺にダメージを与えることが出来たら教えてやる。」

「……分かった。」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！！」

「俺のターン！」

まずはあの異端者と言うカードの効果が気になるな。

「俺は魔法カード、ストリーム・リターンを発動！俺の手札のカードを任意の数だけデッキに戻すことで、同じ枚数相手フィールドのカードをデッキに戻す！俺は手札を2枚デッキに戻し、お前のフィールドのカード全てをデッキに戻す！！」

「その魔法にチェーンして罠発動！異端法則！自分フィールドの『異端』と名の付いたモンスター1体は、このターンのエンドフェイズまでカードの効果を受けない！」

そう来るか…。だけどこれで十分！

「俺はバニシング・コアを召喚！」

バニシング・コア　ＡＴＫ０

「そして魔法カード、バニシング・４を発動！コイントスを４回行い全て表だった場合、デッキの『バニシング』と名の付いたレベル４のモンスターを特殊召喚する！……全部表だ！！デッキから、バニシング・メタルを特殊召喚！！」

バニシング・メタル　ＡＴＫ０

「レベル２のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・メタルをチューニング！！
滅びの龍よ、立ちはだかる敵を葬り去れ！シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「バトル！！バニシング・ドラゴンで、異端者　？０１を攻撃！！
バニシング・ブレス！！」

「手札の異端者　？０２を墓地に送ることで、このターン自分への戦闘ダメージを０にする！」

「ならバニシング・ドラゴンの効果発動！！墓地のバニシング・メタルを除外して、お前の墓地の異端者　？０１を除外する！」

「……微妙だな、お前。」

「まだだ！バニシング・メタルが墓地から除外された時、このカードをデッキに戻してシャッフルする！魔法カード、天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようにドローする！さらに魔法カード、バニシング・ボム！！デッキの『バニシング』と名の付いたモンスター１体を墓地に送り、そのモンスターの守備力の半分のダメージを与える！バニシング・メタルを墓地に送り、守備力２０００の半分、１０００ダメージをお前に与える！」

「うわっ！！」

フード　ＬＰ４０００→３０００

「さあ、お前の言った通り、ダメージを与えた。教えてもらおうか。」

「ちっ……分かったよ、教えてやる。」

そう言うと、フードは仮面を取った。

「……女？」

フードの素顔は、整った顔立ちで、髪の頭頂部は赤、後頭部が青、前髪が白と言う奇怪な髪の色をしており、右目がオレンジ、左目が緑の女だった。

「その髪と目の色は？」

「どうだ？おかしいだろ？これが原因で、俺は生まれてきた時から否定された！！」

～数年前～

とある村にて、ある女の赤ん坊が生まれた。

「これは！？」

「なんなのこの子は！？」

「気持ち悪い……。」

その赤ん坊の髪は赤、青、白の3色になっており、目がオレンジと緑という奇妙な容姿をしていた。

赤ん坊はすでに意識があるようだ。

「そこを退け！神父様がお通りになられるぞ！！」

一人の男がそう言うと、周りに集まっていた人だかりが道をあけ、その中を1人の神父が通り、赤ん坊に近づいていった。

「この赤子は異端の子だ。この赤子は神に徒名すものだ。捨てるの

だ。名前を付けてはならん。この赤子が15になる直前に処刑をするのだ。そしてこの赤子を神への生贄とするのだ。」

「ではどちらへ捨てるのですか？」

「ここより離れた地に捨てるのだ。そちらの方が神も思召しになるだろう。」

「了解しました。」

その赤子は名前を付けられることなく、神父の言った通りに赤ん坊を遠くの地に捨て、左胸にある呪印を付けられていた。

「あの呪印がある限り、誰もあの赤子に名前を付けることはできん。あの赤子が１４の頃に生贄に捧げるのだ。さすれば神の加護を得られる。」

神父はそう言い残した。

赤ん坊が捨てられたのは、どこかのゴミ捨て場だった。

「この生れながらの異端者が！！」

赤ん坊を連れてきた者は、最後に赤ん坊に罵声を浴びせながらその場を去った。

やがて時が経ち、異端として生まれてすぐ故郷を追い出されたその赤子は7歳の少女になっていた。

少女は服を持っていない為、全身を布で覆っていた。

少女はたまに落ちている物に書いてある文字を覚えながら一人彷徨っていた。

そして少女は力尽き、遂に倒れ意識を失った。

「……うぅ……。」

少女は目を覚ました。

「目を覚ましたかい？」

少女が目覚めたのはあるおばあさんの家だった。

「……あなたは？」

少女は尋ねる。

「私かい？私はここに住んでるモノ好きなおばあさんだよ。あなたは？」

「……。」

少女は口篭る。

「？どうしたんだい？」

「……名前ない……。」

「え？」

「名前、付けられる前に捨てらた。だから名前、ない。」

「そうなのかい。」

するとおばあさんは何やら考え始めた。

「それじゃあ私がつけてあげよう。」

「本当か!?」

「それじゃあね～……」

おばあさんが少女に名前をつけようとした瞬間、ある奇妙なことが起きた。

「あなたの名前は、　　にしよう。」

「?」

「おや?」

奇妙なことが起きたとしか言いようがない。おばあさんが少女に付けようとしていた名前が、何度やっても口から出てこないのだ。

「おかしいねえ。それならこの紙に書いてみるね?」

そう言っておばあさんが少女に付ける名前を紙に書き始める。そして再び奇妙なことが起きた。

「おかしいねえ?このペンまだインクが入ってるのに……」

今度は名前を書くことができないのだ。

「それなら、これはどうかね?」

おばあさんは名前を書こうとした紙を部屋の暖炉の中に着けた。
筆跡を煤で浮かばせようとしたのだろう。
「これなら出てくるはずだよ……あれ？」
おばあさんが紙を取ると、そこにはただ煤が付いただけの紙があっただけだった。
「おっかしいねえ？……あれ？お嬢ちゃん？」
そこにはもう少女の姿はなかった。

「はあ……はあ……。」
少女は全力で走った。怖かったのだ。あの奇妙な現象が。
「どうして……名前を付けてもらえない？この世界が否定しているのか？」

少女は泣きながらその言葉を呟いた。

「こんな世界に否定されるなら、俺は、この世界に復讐してやる！！」

「これで俺が語れること、全部だ。」

「……。」

時雨達はあまりの衝撃に沈黙をせざるを得なかった。

「俺はこんな世界に否定されて、何なのか分からない神とかいう者の生贄に捧げられる。そんなことが許される世界なら、俺はこの世界を壊す！どんな手を使っても！！」

「……そんなことは許されたりしねえよ。だから、そんなくだらないことはやめろ。」

「だったらこのデュエルで俺に勝って証明して見せろ！！」

「勝ってやるさ！俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

謎の人物（後書き）

ああ、また宗教みたいなものが……

名無しの少女と聖教・ファルサ（前書き）

前回の決着と新たな敵の出現……

また長編に入りそうな気が……

「俺のターン！俺は墓地の異端者　？０２の効果を発動！墓地のこのカードを除外することで、手札の『異端者』と名の付いたモンスター１体を特殊召喚する！俺は異端者　？０３を特殊召喚！！」

異端者　？０３　ＡＴＫ１５００

「異端者　？０３の効果発動！このカードが特殊召喚された時、デッキまたは手札から、『異端者』と名の付いたモンスター１体を特殊召喚する！！異端者　？０４を特殊召喚！！」

異端者　？０４　ＡＴＫ１４００

「そして『異端者』と名の付いたモンスターが２体存在する時、このモンスターを特殊召喚できる！！
俺は異端者　？０５を特殊召喚！！」

異端者　？０５　ＡＴＫ１５００

「そして俺は、チューナーモンスター、異端者　？０６を召喚！」

異端者　？０６　ＡＴＫ１３００

「レベル２の異端者　？０３に、レベル２の異端者　？０４と、レベル３の異端者　？０５、異端者　？０６をチューニング！！忌み嫌われた竜よ、否定した者全てに復讐を！！
シンクロ召喚！！堕ちろ、オール・タブー・ドラゴン！！」

オール・タブー・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「それがお前の切り札か！！」

「オール・タブー・ドラゴンの効果発動！！このカードがフィールドに存在する限り、相手は魔法・罠を発動することができない！！」

「何！？」

「オール・タブー・ドラゴンでバニシング・ドラゴンを攻撃！！禁忌の咆哮！！」

「うおっ！！」

時雨　ＬＰ４０００→２５００

「オール・タブー・ドラゴンが戦闘で破壊したモンスターは、このデュエルが終了するまで召喚、反転召喚、特殊召喚することができない！！」

そんな所まで封じてくるのか。

「俺はこれでターンエンド！！」

「俺のターン！」

この状況は結構きついな……、まあ、対処はできるが。

「このカードは、相手フィールドにのみモンスターが存在する場合のみ、手札から特殊召喚できる！！俺はアナザー・コアを特殊召喚

！」

アナザー・コア　ＡＴＫ０

「そんな雑魚で何ができる！！」

「攻撃力が０だからって雑魚って決め付けるな！！俺はアブソーブ・コアを召喚！」

アブソーブ・コア　ＡＴＫ０

「アブソーブ・コアの召喚に成功した時、相手フィールドのモンスター１体の効果を無効にする！」

「なんだと！？」

「オール・タブー・ドラゴンの効果が無効になったことで、魔法・罠が使用できるようになる！！俺はエクストラ・アブソーバーを特殊召喚！」

エクストラ・アブソーバー　ＡＴＫ０

「魔法カード、１０オーダーを発動！！……全て表だ！！デッキから、オメガ・パラディンを特殊召喚！」

オメガ・パラディン　ＡＴＫ３２００

「はっ、そんなモンスターじゃ俺のオール・タブー・ドラゴンは倒せない！」

「オメガ・パラディンの効果発動！このカードが召喚、特殊召喚された時、相手のデッキの１番上のカードを墓地に送る！！レベル２のアブソーブ・コアに、レベル５のエクストラ・アブソーバーをチューニング！！打ち消す者よ、今敵を抹消せよ！シンクロ召喚！消せ、アブソーバー・ドラゴン！！」

アブソーバー・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「アナザー・コアの効果！このカードは『コア』と名の付いたチューナーの代わりにシンクロ素材とすることができる！レベル２のアナザー・コアに、レベル１０のオメガ・パラディンをチューニング！！

シンクロ召喚！現れろ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「攻撃力５０００だと！？」

「バトル！オメガ・ドラゴンで、オール・タブー・ドラゴンを攻撃！クラッシュ・ブレス！！」

「ぐお！！」

名無しの少女　ＬＰ３０００→２０００

「アブソーバー・ドラゴンでダイレクトアタック！！リセット・シヨット！！」

「うわあああああああ！！」

名無しの少女　ＬＰ２０００→０

「くそっ！！なんでこんな奴なんかに！！」

「とりあえず俺の勝ちだ。少しは考えを改めろ。」

「黙れ！！お前なんかに何が分かる！！」

「分かんねえよ。だけどなあ……」

時雨が何かを言いかけた時、

「見つけたぞ、異端の娘よ。」

「！！」

名無しの少女が振り向くと、そこには白い修道服を着た白人の男がいた。

「あれから１４年経ったな。探すのに苦労したぞ。さあ、着いてこい。我らが神の生贄となれるのだ。光栄に思うがいい。」

「断る！俺の人生は俺の物だ！！誰かにとやかく言われる筋合いはねえ！！」

「仕方ない。ならば実力行使とさせてもらう。」

その男が少女に近づいていく。しかしその間に、

「待てよ。」

時雨が立ち塞がった。

「どけ、これは我らの問題だ。貴様ら部外者には関係ない。」

「いいやあるね。こいつの人生はこいつの物だ、それを邪魔する権利はお前らにも、ましてやお前らが信仰する神様にもねえよ。」

「貴様、今何を言ってるのか分かっているのか?」

「さあな。ただ、俺はこいつの味方だ。こいつをお前らに引き渡すつもりはさらさらない。」

「おい!!」

少女が時雨を呼んだ。

「どうしてお前は俺の為にそんなことを言う?」

「別にお前の為じゃねえよ。単にこいつらが気に食わないだけだ。」

「だからってお前……」

「そのお前ってのはやめろ。俺には紫藤時雨って名前があるんだから。」

「俺には名前がないから、それは不公平だ。」

「……それじゃあこれはどうだ?お前のこの問題が全部終わったら、俺がお前の名前を考えてやる。だから俺のことは名前で呼んで

くれ。」

「さっきも言っただろ？俺に名前を付けることは誰にもできないんだ。」

「こっちも言っただろ？お前の問題が全部終わったらって。この問題が全部終われば、多分大丈夫だろ。」

「そういうことなのか？」

「そういうことじゃね？」

「何やら先程から私が無視されているような気がするのだが。」

「あんたにちょっと聞きたいことがある。」

「なんだ？」

「こいつの呪いってのはどうやったら解ける？」

「呪いのことか…。その呪いは我ら聖教ファルサの８神父の頂点に立つ教祖グロルジャンが付けた印だ。解き方を知っているのは教祖のみだ。解いた者はいないがな。」

「ならもう一つ質問、こいつが１５になったら生贄にならなくていいのか？」

「一応そういうことになる。ファルサの規則では、異端者と判断された者は１５年経過したら異端を不問とする規則がある。だがその娘の場合は別だ。１５になる前、つまり１４の頃に神への生贄とし

て差し出す。これは決定事項だ。さっさとその娘を渡せ。」

「まあ話をまとめると、こいつが１５になれば、その生贄とかにならなくていいんだよな？」

「ああ。」

「おい。」

時雨は少女に聞いた。

「なんだ？」

「お前、あと何日で１５になる？」

「後……４３日だ。」

「ＯＫ。それじゃ、４４日俺達がお前を護ってやる。」

「「「「「「……はっ？」」」」」」

俊達と少女は同時に疑問の声を上げた。

「ちょっと待て、俺達もか？」

「お前はこいつがどうなってもいいっていうのか？」

「いやそんなことは言わねえけど……。」

「分かりました。私も手伝わせていただきます。」

「それじゃあ私もやります！！」

「面白そうだから俺も！！」

「……流れ的に拒否権はねえな～～～……」

「それじゃあ僕も協力します……。」

「よし、後は神楽も入れて8人っと。これで後1人分だが、まあ神羅さんを呼ぼう。」

「……。」

「これで9人だ。神父とかいうのと教祖とかいうやつらと同じ数だ。」

「それで対抗したつもりか？」

「まあな。」

「片腹痛いな。」

「うるせえ。」

「いい加減その娘を渡せ。さもないと。」

「さもないと？」

「実力行使だ。」

「ならデュエルでよくないか？」

「……いいだろう。」

「あ、あの！！」

「？」

牙城がいきなり話しかけてきた。

「そのデュエル、僕がやってもいいですか？」

「？どうしてだ？」

「この前皆さんに迷惑をかけてしまったので、せめてその分の償いをしたいと思って……」

「別にそんなこと…」

時雨が俊の口をふさぐ。

「……行って来い。」

「はい！！」

時雨は少し下がり、代わりに牙城が出てきた。

「お前が相手をするのか？」

「はい！牙城優です！！よろしくお願いします！」

名無しの少女と聖教・ファルサ（後書き）

次回、牙城の新しい切り札の登場です。

牙城のとっておき（前書き）

これまた前回の続きです。

牙城の城が面白いことになります。

牙城のとっておき

「そちらが名乗るのなら、私も名乗ろう。私は聖教ファルサの一信者、ガーラ。」

「よろしくお願いします、ガーラさん。」

「「デュエル！！」」

「僕のターン！」

牙城のターンから始まった。

「僕は永続魔法、建築物設計の心得を発動！自分の岩石族モンスターが破壊されるたびに、このカードにレンガカウンターを1つ乗せます！僕はモンスターをセットして、カードを二枚セット。ターンを終了します！」

（こいつのデッキは岩石族がメインか……。）

ガーラはそんなことを思った。

「牙城のデッキは岩石なのか？」

時雨は俊に聞いた。

「実のところ、俺もよくわからない。だってあいつ俺とやった時、モンスターは一体しか出してねえし。」

「一体だけ？」

「ああ、それだけで俺かなり苦戦したよ。」

俊がモンスター1体だけで苦戦するのか？

「私のターン。私はフィールド魔法、聖天の城を発動。このカードがフィールドに存在する限り、モンスター同士の戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にする。」

なんか聞いたことのある効果だな。

「聖天の城のもう一つの効果を発動。デッキまたは手札から、レベル8以下の天使族モンスターを特殊召喚する。私はデッキから、聖天ーコタルを特殊召喚。」

聖天ーコタル　ＡＴＫ２９００

「聖天ーコタルのモンスター効果を発動。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、デッキから5枚をめくり、その中からレベル8以下の天使族モンスターを4体まで選択し、自分フィールドに特殊召喚する。デッキから5枚をめくる。その中の聖天ーソハレ、聖天ーカーワ、聖天ームビス、聖天ーヤクネを特殊召喚。」

聖天ーソハレ　ＡＴＫ２２００

聖天ーカーワ　ＡＴＫ２７００

聖天ームビス　ＡＴＫ２６００

聖天ーヤクネ　ＡＴＫ２４００

「高レベルモンスターが5体も出てきやがった!!」

「俊、大丈夫なのか?」

「ん～～～……多分大丈夫だと思う。」

「聖天ーソハレの効果発動。自分フィールドに存在する『聖天』と名の付いたモンスター1体につき、デッキからカードを1枚ドローする。私のフィールドには『聖天』と名の付くモンスターは5体、よってデッキから5枚ドローする。カーワの効果を発動。1ターンに1度、相手フィールドの裏側モンスターを表側守備表示に変更できる。この時、リバースモンスターの効果は発動しない。」

牙城の裏側モンスターが敵モンスターが発する光に照らされ、姿を現した。

ブロック・ロック　ＤＥＦ１４００

「ムビスの効果発動。1ターンに1度、相手フィールドの表側守備表示モンスターを攻撃表示に変更する。」

ブロック・ロック　ＡＴＫ１５００

「ヤクネの効果発動。1ターンに1度、相手の手札1枚を確認することができる。私はそちらの真中の手札を確認する。」

牙城の手札の真中は、研磨作業というカードだった。

「……まあいい、バトル。聖天ーヤクネでブロック・ロックに攻撃。セイント・ライン！」

「うわっ！」

牙城　ＬＰ４０００→３１００

「ブロック・ロックの効果発動！このカードが墓地に送られた時、自分フィールドにロックトークンを2体特殊召喚します！」

ロックトークン　ＤＥＦ４００

「ムビスとソハレでロックトークンを攻撃。」

この時、牙城が最初に発動した永続魔法を覚えている者はいなかった。

「聖天ーコタルでダイレクトアタック！」

「わあ！！」

牙城　ＬＰ３１００→２００

「大丈夫なのか！？」

「大丈夫でしょ。」

「カーワで…」

「1ターン以内に３０００以上のダメージを受けた時、このカード

を特殊召喚できる！！僕は鉄壁の牙城を特殊召喚！！」

鉄壁の牙城　ＤＥＦ４０００

「防いだか。まあいい。私はカードを２枚伏せてターンエンド。」

「やっぱり出てきた。」

「俊、まさかあれか？」

「ああ、戦闘以外だと破壊されず、あのカード以外戦闘対象にできず、戦闘および効果ダメージを受けず、攻撃表示にできないモンスター。」

「それは結構きついな。」

「俊さーん。」

牙城が俊に話しかけた。

「なんだー？」

「これから面白い物をお見せします！！」

「「「「「「？」」」」」」

「僕のターン！僕は建築物設計の心得の効果を発動！このカードを墓地に送って、このカードに乗ってるレンガカウンターの数だけレンガトークンを特殊召喚します！！」

レンガトークン　ＤＥＦ２００

「そしてリバースカードオープン！！岩石砲！！自分フィールドの岩石族モンスターを３体リリースして発動！！１ターンに２度まで相手フィールドのカードを破壊します！あなたの聖天の城を破壊します！」

「よくも私の聖天の城を！！」

「罠発動、キャッスル・チェンジ！！自分フィールドの『鉄壁の牙城』をリリースして、デッキから『キャッスル・ジャイアント』を特殊召喚！！」

その罠が発動した瞬間、鉄壁の牙城が姿を変えて、巨人に変形した。

キャッスル・ジャイアント　ＡＴＫ４０００

「ロボットだったの！？」

「ええ、一応…。」

「だがそのモンスターを出したところで…」

「キャッスル・ジャイアントは、相手モンスター全てに攻撃することができます。」

「なんだと！？」

「キャッスル・ジャイアントで、相手モンスター全てに攻撃！！キャッスル・ライトフック！！」

キャッスル・ジャイアントが右フックを繰り出すと、ガーラのフィールドにいたモンスター全てを一斉に殴り飛ばした。

「ぐおおおおおおおおお！！」

ガーラ　ＬＰ４０００→０

「き、貴様…こんなことしてただで済むと思うのか！！」

「えと、その、すみません。」

「よくやった牙城。てか、あれはやりすぎだと思うが……。」

「すみません……。」

牙城のとっておき（後書き）

次回はオリカをまとめて紹介します。

オリカ紹介17（前書き）

今回はオリカ紹介です。

やはり……チートなのか？

オリカ紹介１７

ＭＳ－シャッテ
闇属性　機械族・効果　レベル２　ＡＴＫ３５０　ＤＥＦ１６５０
このカードがフィールドに存在する時、このカードはサイキック族としても扱う。このカードの召喚に成功した時、デッキから「ＭＳ」と名の付いたモンスターを１体特殊召喚することができる。

ＭＳ－バルッカ
闇属性　機械族・効果　レベル３　ＡＴＫ５５０　ＤＥＦ１９５０
このカードがフィールドに存在する時、このカードはサイキック族としても扱う。このカードが特殊召喚された場合、このモンスターはチューナーとして扱う。

ブラック・ジャック
通常魔法
手札のモンスターのレベルの合計が２１だった場合、デッキからカードを２枚ドローする。２１以外だった場合、手札を２枚墓地に送る。

サード・ダイヤ
地属性　戦士族・効果　レベル３　ＡＴＫ３００　ＤＥＦ１５００
このモンスターが戦闘によって破壊された場合、次の相手のドローフェイズをスキップする。

スペード１３
通常魔法
自分の手札のモンスターのレベルの合計が１３になるように手札のモンスターを墓地に送る。１３にならない場合、手札を全て捨てる。

セカンド・ハート
光属性　魔法使い族・効果　レベル２　ＡＴＫ２００　ＤＥＦ３００
手札のこのカードを墓地に送ることで、自分フィールドの表側表示のモンスター１体は１度だけ戦闘では破壊されない。この効果は相手ターンでも発動できる。

８チェンジ
通常魔法
手札のレベル８モンスターを墓地に送り、デッキからレベル８のモンスターを１体特殊召喚する。

幻の武道師　ブリッジ
光属性　戦士族・効果　レベル８　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードが攻撃対象に選択したモンスターの攻撃力が３０００以上の場合、このモンスターの攻撃力を３５００にする。このカードが戦闘以外で破壊された場合、相手フィールドに存在する攻撃力３０００以上のモンスターを破壊する。

異端者　？０１
無属性　戦士族・効果　レベル３　ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ０
このカードが効果によって破壊された時、相手に１６００ポイントのダメージを与える。

ストリーム・リターン
通常魔法
自分の手札を任意の数だけデッキに戻す。そのあと同じ枚数相手フィールドのカードを手札に戻す。

異端法則

通常罠
このターンのエンドフェイズまで、自分の「異端者」と名の付いたモンスターはカードの効果を受けない。

バニシング・４
通常魔法
コイントスを４回行う。その全てが表だった場合、デッキから「バニシング」と名の付いたレベル４のモンスターを特殊召喚する。

異端者　？０２
無属性　戦士族・効果　ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ０
手札のこのカードを墓地に送ることで、このターン自分は戦闘ダメージを受けない。墓地のこのカードを除外することで、手札の「異端者」と名の付いたモンスターを１体特殊召喚する。

バニシング・メタル
闇属性　機械族・効果　レベル４　ＡＴＫ０　ＤＥＦ２０００
墓地のこのカードが除外された時、このカードをデッキに戻し、シャッフルする。

バニシング・ボム
通常魔法
デッキの「バニシング」と名の付いたモンスター１体を墓地に送り、そのモンスターの守備力の半分のダメージを相手に与える。

異端者　？０３
無属性　戦士族・効果　レベル２　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ０
このカードの特殊召喚に成功した時、デッキまたは手札から「異端者」と名の付いたモンスター１体を特殊召喚する。

異端者　？０４
無属性　戦士族・効果　レベル２　ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ０
このカードが破壊されたターン、相手は魔法・罠を発動できない。

異端者　？０５
無属性　戦士族・効果　レベル３　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ０
自分フィールドに「異端者」と名の付いたモンスターが２体以上存在する時、手札からこのカードを特殊召喚できる。

異端者　？０６
無属性　戦士族・チューナー　レベル３　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ０
このカードがフィールドに存在する限り、相手魔法・罠ゾーンを１つ使用不可にする。

オール・タブー・ドラゴン
無属性　ドラゴン族・シンクロ／効果　レベル１０　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ０
「異端者」と名の付いたチューナー＋「異端者」と名の付いたモンスター３体
このカードがフィールドに存在する限り、相手は魔法・罠を発動することができない。このカードが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターはデュエル終了まで召喚、反転召喚、特殊召喚できない。このカードを戦闘で破壊したモンスターは、３ターン後のバトルフェイズ終了時まで表示形式が変更できず、効果を発動することができない。

アナザー・コア
闇属性　機械族・チューナー　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
相手フィールドにのみモンスターが存在する時、このカードを手札から特殊召喚できる。このカードは「コア」と名の付いたチューナ

ーの代わりにシンクロ素材にできる。

建築物設計の心得
永続魔法
自分の岩石族モンスターが破壊されるたびに、このカードにレンガカウンターを1つ乗せる。このカードを墓地に送ることで、このカードに乗っていたレンガカウンターの数だけ自分フィールドにレンガトークン（地・岩石族・星2・攻守２００）を特殊召喚する。

聖天の城
フィールド魔法
このカードがフィールドに存在する限り、モンスター同士での自分への戦闘ダメージは0になる。1ターンに1度、デッキまたは手札からレベル8以下の天使族モンスターを特殊召喚することができる。

聖天ーコタル
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２９００　ＤＥＦ２７００
このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚された時、デッキからカードを5枚めくる。その中からレベル8以下の天使族モンスターを4体まで選択し特殊召喚する。このカードが戦闘以外で墓地に送られた時、このカードをデッキに戻す。

聖天ーソハレ
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２２００　ＤＥＦ２８００
1ターンに1度、自分フィールドに存在する「聖天」と名の付いたモンスター1体につき1枚ドローする。このカードが自分フィールドに存在する限り、自分の手札制限はなくなる。このカードが戦闘以外で墓地に送られた時、このカードをデッキに戻す。

聖天ーカーワ

光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２７００　ＤＥＦ２５００
１ターンに１度、相手フィールドの裏側守備表示モンスターを表側守備表示に変更する。この時、リバース効果は発動しない。このカードが戦闘以外で墓地に送られた時、このカードをデッキに戻す。

聖天ームビス
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２５００
１ターンに１度、相手フィールドの表側守備表示モンスターを攻撃表示に変更する。このカードが戦闘以外で墓地に送られた時、このカードをデッキに戻す。

聖天ーヤクネ
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ２８００
１ターンに１度、相手の手札を１枚確認することができる。このカードが戦闘以外で墓地に送られた時、このカードをデッキに戻す。

研磨作業
通常魔法
自分の岩石族モンスター１体を選択して発動する。そのモンスターの攻撃力を半分にして、そのモンスターはダイレクトアタックが可能になる。

ブロック・ロック
地属性　岩石族・効果　レベル４　ＡＴＫ１５００　ＤＥＦ１４００
このカードが戦闘によって破壊された時、ロックトークン（地・岩石族・星３・攻守４００）を２体特殊召喚する。

岩石砲
永続罠
岩石族モンスター３体をリリースして発動する。１ターンに２度ま

で相手フィールドのカードを破壊することができる。

キャッスル・チェンジ
通常罠
自分フィールドの「鉄壁の牙城」をリリースして、デッキから「キャッスル・ジャイアント」を特殊召喚する。

キャッスル・ジャイアント
地属性　岩石族・効果　レベル１２　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ４０００
このカードは通常召喚できない。このカードは「キャッスル・チェンジ」の効果で特殊召喚できる。このカードは効果では破壊されない。このカードは相手フィールドのモンスター全てに攻撃することができる。この効果を発動したターンのエンドフェイズ、このカードを破壊する。このカードが戦闘で破壊された場合、墓地の「鉄壁の牙城」を特殊召喚する。

まさかの事態（前書き）

今回、あの人が早々にリタイアします。

誰かは多分分かると思います。

まさかの事態

あのガーラという男は、牙城に敗北した後すぐにどこかに消えた。

「とりあえずお前は神羅さんの所に来い。」

時雨は少女に向かって言う。

「なんでお前が決める？」

「とりあえずあの人の所が1番安全だろ？だから。」

「理由になってない。」

「まあいいだろ。それじゃ行くぞ。」

「……。」

時雨が神羅の家の方向に向かって歩き出す。少女は渋々付いて行くことにした。

「神楽、いるか？」

「あっ！しー君！」

神羅の家に入ると、神楽が勉強していた。

「……神楽、神羅さんは？」

「あ～～～、神羅さんは……多分何日か駄目だと思う。」

「まさかあれか？」

「うん……」

「「「「「？」」」」」

俊達が疑問符を浮かべていた。

「紫藤、あれって何だ？」

「……神羅さんは多量のアルコールを飲んだ後、暫く長い眠りに入るんだ。」

「……どういう意味？」

「簡単に言うと、約２カ月の間全く起きないんだ。」

「……。」

対ファルサチーム……１名リタイア

「どうすんだよ！？１人減ったぞ！？」

「落ち着け、誰かが２人分やればいい話だ。」

「こんなんで大丈夫なのか？」

「ところでしー君？」

神楽が時雨に疑問形で聞いた。

「なんだ？」

「さっきから気になってたんだけど、その子誰？」

神楽は少女を指差した。

「ああ、あいつは……」

～事情説明中～

「……というわけで神楽、お前にも手伝ってもらう。」

「分かった！協力する！流石にそんなの許せないよ！！」

「とりあえずあいつはここに泊めておく。」

「ＯＫ！！」

神楽は親指を立ててそう言った。

「ちょっと待て！俺はまだここに泊まるとは……」

「なるべく近くにいたほうがいいだろ？」

「だからって……」

「ところでお前服とかはもってるのか？」

「はっ？」

「さすがにそのフード汚れすぎだろ。神羅さんは寝てるし、風呂に入って着替えてろ。」

「……」

「どうした？」

「俺、他に服持ってない……。」

「「「「「「……。」」」」」」

「……吉野、東雲。」

「「はい？」」

「とりあえず１０万ほど渡しておくからこいつの服とか買ってやってくれ。」

「「分かりました！！」」

由紀と玲は少女の腕を掴んで、ショッピングに行った。

「それじゃ行きましょう！！」

「久しぶりに行きますね。」

「ちょっと待て俺はまだ何も……」

「しー君、私は？」

「お前は勉強。」

「……はい。」

「さて、牙城、俊、尚。」

「「「？」」」

「誰か力になってくれそうな人はいないか？」

「え～～～っと、葛井さんは主探しの旅に出てますし、黒谷さんはフランスら辺を旅してると思いますので、たぶん無理かと……。」

「俺も無理だな。」

「俺も。」

「……神羅さんは今回使い物にならないし、兄さんは仕事が忙しいらしいから、やっぱり誰かが2人分やることになるな。」

「そうだな。」

「そうだよな～。」

「そうですね……。」

番外編　神羅の夢の中（前書き）

今回は神羅さんの夢の中の話です。

久々にあの人が出てきます。

番外編　神羅の夢の中

神羅が酒に酔って寝た後……

「…あー、久々にここに来たなー。」

「久々だな、暮空神羅。５年振りか？やはり今回も精神のみ来たか。」

「ま～な～。」

神羅が酒を飲んで起きない理由。それは何故か神羅の精神がある場所に飛んで行くからだ。

そのある場所とは……

「改めて久しぶり、ゼウス。」

「何故お前は精神のみで来るのだ？」

ギリシャのオリンポス山、神々が住むと言われる山だ。

「正直俺もわかんねー。まあ、来たもんは仕方ないだろ。」

「暮空さん久しぶり。」

神羅に話しかけてきたのは、サロッゴだった。

「よおサロッゴ。元気にしてたか？」

「お陰様で。」

「時雨をアカデミアに通わせるよう言ってくれてありがとな。」

「いやいや、神羅さんにはすごい物を見せてもらいましたから。」

ちなみに神羅は5回ほどここに来たことがある。

「だってゼウス様に1ターンで勝利したんですから!!」

以前、時雨は神羅とゼウスが戦えば互角に渡り合えるんじゃないか？と考えていたことがある。

しかしそれは思い過ごしであって、ゼウスよりも神羅の方が強かったのだ。

「我もあの時は驚いた。まさか我が人間に負けるとは思わなかったからな。」

「はじめてきた時は俺も驚いたよ。最初に来た時は成人式の時だったか？」

「なんで成人式の時に来たんですか？」

「あの時勢い余って酒飲みまくってたんだよ。そしたらここに来たってわけ。」

「そんな事で来れるものなのか？」

ゼウスは少しうろたえる。

「まあ2カ月ほど世話になるから、よろしくな。」

「いいのか？」

「何が？」

「紫藤時雨のことだ。また厄介なことに巻き込まれたらしいぞ？」

「……大丈夫だろ。あいつは結構成長してるし、今は仲間だっている。だから大丈夫だ。」

「それが師弟の絆という物なのか？」

「多分な。」

ファルサの強襲（前書き）

今回、ファルサとの戦闘が始まります。

数が多すぎか？

ファルサの強襲

ネオ童美野シティ周辺に、白い服装の集団がいた。

「ここか……例の異端者を匿っている者がいるのは。」

その中の神父の服を着た男がそう言った。

「では……参る。」

一方その頃時雨達は……

「はい、ではパン作りの工程を説明します。」

パン教室に来ていた。

主な理由は昨日、少女が

『うまいな、これ。』

と言ってパン（時雨作）を食べていたことから始まり、

『それじゃ作ってみるか？』

と時雨が言ったことが理由となっている。

「あれから1週間か……まだ誰も来てないのが気に掛かるな。」

その時、時雨は白い集団に囲まれた。

「こんなときに来たのか。」

「単刀直入に聞こう。異端者の少女を出せ。」

「断る。」

「では質問を変えよう。その者はどこにいる？」

「答える必要はない。」

「そうか。ならば仕方ない。この街をくまなく探せ。」

神父の服を着た男がそういうと白い集団が分散した。

「ちょっと聞いて良いか？」

「なんだ？」

「一体何人いるんだ？」

「軽く３５００人だ。」

「……多すぎねえか？」

「我らファルサの掟は絶対。この程度はまだ温い。」

「後もう一つ、そのファルサっての信者は何人いるんだ？」

「おおよそ１０万人だ。」

「多すぎるだろ！？」

その時、時雨の携帯に電話が掛かってきた。

「もしもし？」

「あ～紫藤？」

「俊か、どうした？」

「いや～明らかに可笑しい集団いたからとりあえず倒しておいたぞ。」

「そうか、白かったか？」

「？ああ白かったぞ？確か１０００人ほど。」

「そうか、じゃあな。」

時雨は電話を切った。

「１０００人ほどやられたらしいぞ？」

「バカな！？全員手練だぞ！？」

「まあ、規格外がいるからな……。」

再び時雨の携帯が鳴った。

「もしもし？」

「こちら木原、不審者発見。捕獲作業に移る。」

「了解。」

「どういうことだ？」

「どうもこうも、最初からあんた達が来ることを予想して張ってた

んだよ。俊の方は俺も驚いたけど。」

「くっ……何故だ?あの異端者と貴様らの間には何もないはずだ?」

「言いたいことはそれだけか?」

「何?」

「確かに俺達はあいつに義理立てする理由もない。だがな、あいつの自由を奪うことを見過ごすわけにもいかねえんだよ。」

「戯言を……。」

「理由としてはそれでいいだろ?後は気持ちの問題さ。あいつを見過ごすことは胸糞悪いんだ。だから俺はあいつの味方なんだよ。」

「我らと争うつもりか?」

「前にもそう言ったんだけどな。」

「ならばデュエルだ。ワタシは8神父の一人、ハージュ。」

「やってやるさ。」

「「デュエル!!」」

ファルサの強襲（後書き）

すいません、デュエルは次回に持ち越しです。

星（前書き）

更新遅れました。

混沌邪宗とファルサは両方マジック・ミラーに弱そうです。

星

「ワタシの……」

ハージュが自分のターンを始めようとしていた時、

「ハージュ様～～！」

下っ端の一人が走り寄ってきた。

「どうした？」

「それが……」

「なに！？数人行方不明になっただと！？」

「流石に多すぎたんじゃないか？」

「ぬう……ワタシのターン！」

気にせず始めたな。

「ワタシは永続魔法、聖天空を発動！１ターンに１度、デッキ、手札、墓地から天使族モンスター１体を召喚条件を無視して特殊召喚する！ワタシはデッキから大天使クリスティアを特殊召喚！」

大天使クリスティア　ＡＴＫ２８００

「早速嫌なモンスターが出てきたな。」

「クリスティアがフィールドに存在する限り、お互いに特殊召喚を行えない！ワタシは魔法カード、天主の導きを発動！自分の手札の天使族モンスターのレベルを４にする！ワタシは手札の聖天ーアンセルのレベルを８から４に変える！聖天ーアンセルを召喚！」

聖天ーアンセル　ＡＴＫ２８００

「上級モンスターが２体…」

まあ、すぐに片付けられるが……

「アンセルの効果発動！このモンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、手札を好きな数デッキに戻し、手札が６枚になるようデッキからドローする！ワタシは手札３枚すべてをデッキに戻し、デッキから新たに６枚ドローする！ワタシはカードを３枚セットして、ターンエンド！」

「俺のターン！魔法カード、バニシング・アウト！相手フィールドのモンスター１体を選択し、デッキの『バニシング』と名の付いたモンスターを選択した相手モンスターのレベルと同じになるよう墓地に送り、選択した相手モンスターを除外する！デッキのバニシング・ギアとバニシング・カタパルトを墓地に送り、大天使クリスティアを除外！」

「ワタシの天使をよくも……！！」

「別にお前だけの物じゃないだろ？俺はオメガ・コアを召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「俺はカードを3枚伏せて、魔法カード、天よりの宝札を発動！お互いに手札が6枚になるようにドローする！俺は１０オーダーを発動！……全部表だ！デッキから、レベル１０のアスタリスク・セイバーを特殊召喚！」

アスタリスク・セイバー　ＡＴＫ２９００

「この瞬間罠発動！激流葬！フィールドのモンスター全てを破壊する！」

「アスタリスク・セイバーの効果発動！手札を1枚捨てて、カードを破壊する効果を無効にする！」

「なんだと！？」

「行くぞ！レベル2のオメガ・コアにレベル１０のアスタリスク・セイバーをチューニング！！
小星の輝きが、新たな力を輝かす！シンクロ召喚！星の力、オメガ・アスタリスク・ドラゴン！！」

オメガ・アスタリスク・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「オメガ・アスタリスク・ドラゴンでアンセルを攻撃！ハイパーノヴァ！！」

「永続罠、天網恢恢！！相手は『聖天』と名の付いたモンスターがフィールドに存在する限り、攻撃宣言を行うことができず、モンスターをリリースできない！」

「オメガ・アスタリスク・ドラゴンの効果発動！相手が罠を発動した場合、１ターンに１度その発動を無効にし破壊する！」

「ぐおおおお！！」

ハージュ　ＬＰ４０００→２８００

「速攻魔法、セカンド・ポイント！自分のシンクロモンスターが相手モンスターを破壊して戦闘ダメージを与えた場合、そのモンスターはもう１度攻撃することができる！オメガ・アスタリスク・ドラゴンで攻撃！ハイパーノヴァ！」

「罠発動、聖天壊光！相手モンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを与える！」

「オメガ・アスタリスク・ドラゴンのもう一つの効果！相手の罠を無効にしたターン、このカードは破壊されない！」

「ぐあああああ！！」

ハージュ　ＬＰ２８００→０

「これがお前らの実力か？」

「……クソッ、ワタシが敗れるなど…」

「どうやら全員捕まえたらしいぞ？」

「くっ……」

ハージュとかいう男はその場で気を失った。

「おーい、パンが出来上がったぞー。」

「そうか。」

「というわけで試食、頼む。」

「ああ、わかった。」

時雨は少女の作ったパンを食べてみた。

「……普通にうまいな。」

「そうか、それはよかった。」

「しー君！私も作ったよ！」

「えっ？」

「だから、食べて！！」

けっして避けられないような状況に陥った。

「……」

そして時雨は神楽作のパンを食べた。

「……」

バタンッ

「しー君！？」

「おい、どうした！？」

「紫藤！？」

「……俺もちょっと食べてみよう。」

そう言って木原も食べた。

バタンッ

「木原さん!?」

「病院に運ぶぞ!!」

「……やっちまったな。」

「まさか2人脱落…」

「木原さんはともかく時雨さんは……」

「……ごめんなさい。」

「神楽ちゃんは気にしなくていいよ！」

残り３５日

星（後書き）

先ほどオリカ紹介の枚数を数えたらいつの間にか２００枚を超えていた事実。

これからも精進していきます。

番外編　紫苑の高校時代（前書き）

今回は本編から離れて紫苑の高校時代をお送りします。

特に面白みはないですが……

番外編　紫苑の高校時代

5年前……

この時からプロとしての才覚を発揮していた紫苑は、普通の高校に通っていた。

「……眠い。」

この時まだ4月、紫苑は高校に入学したばかり。

たまにプロでのデュエルで学校を休み、学校に来る時は授業して終わるという

帰宅部の生活を送っていた。

そんなある日、転機が訪れた。

紫苑の通っている高校のグラウンド、野球部がある問題に悩まされていた。

「どうする？また部員が辞めたぞ？」

「どうするんだよ、キャプテン。」

「残ってる部員は8人か……。」

部員不足である。

そんな中、紫苑はグラウンドが見える渡り廊下を歩いており、野球部を見ていた。

「……」

「どうした紫苑？」

紫苑に話しかけてきたのは友人の鉄だった。

「……野球部。」

「？あー、最近部員がどんどんやめてってるって話か？」

紫苑は無言で頷く。

「もしかして、お前野球やりたいのか？」

再び紫苑が頷く。

「そうか、それじゃ行ってこーーーい！！」

「……」

「って行かねえのかよ！！！」

「……」

「たくっ、しかたねえ。」

そう言って鉄は紫苑を野球部の方へ引きずっていく。

「すいませ～～～ん。」

「なんだ君達？」

「こいつが入部したいそうなんですけど。」

「本当かい！？助かるよ！！」

「ポジションはどこなんだ？」

「……どこでも。」

「そうか、なら今ピッチャーがいないからピッチャー頼んでもいいか？」

「……はい。」

「おい篠山、初心者にピッチャーを任せちゃダメだろ。」

「とりあえず投球の仕方とバッティングを教えておこう。」

その後野球のルールなどを教えてもらうこと３０分、

「……わかりました。」

「よし、それじゃあ投げてみて。全力でいいぞ。」

紫苑は言われたとおり振りかぶって全力で投げた。

シュウウウウウ！！

バン！！

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

紫苑の投げた球はキャッチャーミットを弾き飛ばした。

「……速いじゃないか！！一体何キロ出てた！？」

「測ってねえよ！？」

「もう一度だ！！今度は測るんだ！！」

部員の１人が計測器を持ってきて、再び投げることになった。

バン！！

「何キロだ！？」

「……これもう高校球児が投げる急速じゃねえよ…。」

計測していた部員が突然泣き出した。

「いいから何キロだ！？」

「……１８６キロ。」

「「「「「「「「「はあ！？」」」」」」」」」

「高校球児どころかプロでも出ねえよ！！？」

「と、とりあえずピッチャーとしては採用ということで……いいよな？」

部員全員が無言でうなずいた。

「それじゃバッティングも見てみるか。」

今度はバッターボックスに立った。

「それじゃ、俺が投げるぞー。」

キャプテンがマウンドに立ち、そこからボールを投げた。

バッターボックスに迫ってくるボールにタイミングを合わせてバットを振る紫苑。

しかしバットが当たった音がしなかった。

「……ちょっと待て、ミットにボールがないぞ？」

カキィィィィィィィィィン！！！！！！

「「「「「「「「「！！？？」」」」」」」」」

バットを振ってから5秒後、なぜかミート音が遅れて聞こえてきた。

「こ、これは……」

「思わぬ収穫だな。」

こうして紫苑は野球部に入部することになった。

その夏の甲子園決勝…

『4番、ピッチャー、紫藤君。』

決勝の対戦チームのピッチャーは紫苑の次に注目されているピッチャーで多彩な変化球を持っていた。

そのピッチャーが投げてきたのはナックルボールだった。

紫苑はそれを何事もなく打ち返し、打球は相手選手の真上を通った。

「止めてやる!!」

相手チームのセンターが打球を取った、とおもったが、

グローブごとバックスクリーンに運ばれ、打球はバックスクリーンを貫通した。

「そんな……」

そんな中、9回裏、2アウトで相手チームの4番と一騎打ちになった。

「打ち返してやる!!」

紫苑は何も言わずボールを投げた。

全力でのストレート、

「おら！！」

バッターはボールにタイミングを合わせることに成功した。

だが、

バキッ

バットは折れて、ボールはミットに収まった。

この年の甲子園、および次年度の甲子園も紫苑は野球部を優勝させた。

そして3年の大会の最中、本物語から3年前にあたる。

紫苑は大切な試合を放り出してまでどこかに走り去った。

その年の野球部は紫苑に鍛えられていて、甲子園決勝まで上がっていったが優勝することはなかった。

番外編　紫苑の高校時代（後書き）

完全に野球の話でした。

次回もまた番外編です。

番外編　忘れていた設定（前書き）

今回も番外編です。

使い機会が全くありませんでした……

番外編　忘れていた設定

……ここは……どこだ？

…ああ…そう言えば神楽の料理を食べたんだったか。

それじゃあ死んだか…。

『いや、お前はまだ死んではおらん。』

「？」

瞼を開けると、真っ黒な空間にいた。

「……やっぱり死んだか…。」

『死んでおらんと言っただろう。』

「……」

後ろを見てみると、切り札のオメガ・ドラゴンがいた。

「お前がいるってことは、ここは夢の中か。」

『そうだ、死線を彷徨っていたのは少しあっているが…』

「やっぱり神楽には料理を1から教え直すしか方法はないか…。」

『そうかもしれないが、2つお前に用件がある。』

「用件？」

『そうだ、１つは、これからお前は宿命の相手と戦う。』

「宿命？」

『我を持ったお前の宿命だ。』

「お前が関係してるのか？」

『そうだ。』

「それで、２つ目の用件は？」

『いい加減我に名前をつけぬか。』

「……そんな問題？」

『オメガ・ドラゴンとフルネームで呼ぶのは長かろう。』

「それほどでもないが…。」

『とにかくお前が決めろ。』

「……ならオーガ。」

『我は鬼か！！』

「突っ込み入れるのか。」

『却下だ！！』

「じゃあオルメス。」

『探偵か！！』

「よくわかったな。」

『お前、名前の先に『オ』が付いてる物だけを言うつもりか？』

「駄目か？」

『まあいいが…』

そんなやり取りが約３０分続いたのち、

「それじゃオルフェでいいか？」

『……もうそれでいい……』

「それじゃオルフェ、俺もお前に聞きたいことがある。」

『なんだ？』

「お前は一体何なんだ？」

『どういうことだ？』

「クロニクルの時のお前の属性は神だった。有名な神のカードはキ

ングオブデュエリストの武藤遊戯が所持していたオシリス・オベリスク・ラーの3枚だけだ。それなのにお前は神のカードと同じ属性を持っている。これはいったいどういうことだ?」

『……残念ながら我にも分からん。だが我はそんなことには拘らん。』

「そうか、悪いな。」

『気にするな、我とお前の仲だろう。』

「ありがとな。」

『ああ』

神楽のデュエル（前書き）

更新遅れました。

今回は神楽のデュエルです。

これはどうなのか……

「ここか、ハージュを倒した奴がいるって街は……」

ネオ童美野シティの外側にいる、白い集団を引き連れた青年が呟いた。

「まあいいか、目的は異端者の確保、行くぞ、お前達。」

「はっ」

神楽は時雨と木原の病室にいた。

（しー君と木原さんが原因不明で倒れてからもう3日……どうして倒れたんだろう……）

神楽がそんな事を考えていた最中、

「おい、そろそろ休んだらどうだ？」

少女は唐突に話しかけてきた。

「あ、うん、ありがとう。」

「そんなにこいつのことが大事なのか？」

「うん、私の大事な人だもん。」

「そうか……」

「それじゃ私ちょっと外出てくるね！」

そう言って神楽は病室から出た。

「元気だな、あいつ。」

神楽は病院前に座っていた。

その時、病院の外から白い集団と……

「済まないがそこのお嬢さん、かなり変わった髪の色と眼の色をした少女を見たことはないかい？」

……紳士服を着た男が近づいてきた。

「それなら中にいますよ。」

「ありがとう。お前達、行って来い。」

「はっ」

紳士服の男が命令すると、白い集団が病院の方へ近づいて行った。

その時、

ガタンッ

「？」

病院の入り口の集団がいる所の地面に巨大な落とし穴が現れた。

「あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ，，，，，，，，，」

白い集団は1人残らず落とし穴に落ちていった。

落とし穴はゆっくりと閉じていき、

「川田さん、ありがとうございます。」

『大丈夫大丈夫、父さんには話し付けてあるから。』

神楽は俊と電話していた。

ちなみにこの病院、俊の父親、川田修一が会長の川田グループの系列の病院である。

「お嬢さん！騙したのかね！？」

「ええ、しー君がいない間は私があの子を護るので。それでどうします？このまま引き下がりますか？それともあの子の居場所をめぐ

ってデュエルしますか?それとも、さっきの人たちみたいになりますか?」↑後半は声のトーンがかなり下がった。

「くっ……ならばデュエルだ!!8神父の実力、見せてやる!!」

「そのことで質問なんですけど…なんで紳士服なんですか?」

神楽が唐突に質問する。

「これか?これは今朝ナポリタンを食べていた最中に神父服にソースがはねてしまい、残っていた服がこれだけということでこれを着てきたのさ。」

「そうですか……」

「では改めて、8神父の多湖、いざ尋常に勝負!!」

「「デュエル!!」」

「久しぶりのデュエルなので、私から行かせてもらいます!!」

「いいだろう。」

この後、多湖は先攻を譲ったことを後悔するのだが、現在の彼がそれを知る由はない。

「私のターン!私はコスト・イーターを召喚!」

コスト・イーター　ＡＴＫ０

「あのカードは……」

「あ、紫藤さん起きたんですか？」

やっと起きた時雨と神楽のデュエルを観戦しようとしていた牙城。

「牙城、あのカードは…」

「はい、僕があげました。僕には使えないカードですから。」

「牙城、多分お前はとんでもないことをした。」

「えっ？」

「私はカードを４枚伏せて、ターンエンド！」

神楽のデュエル（後書き）

次回に続きます。

多分、とんでもないです。

神楽のデュエル2（前書き）

前回の続きです。

前回、タイトルが「神楽のデュエル」だったのにデュエルの場面がたった一部分しか入ってないということで今回2を付けました。

神楽のデュエル２

「ワタシのターン！」

「スタンバイフェイズ時、罠発動！覇者の一括！このターン、あなたはバトルフェイズを行えません！」

「それがどうした？ワタシは永続魔法、神の居城ーヴァルハラを発動！手札から、聖天ーアルビューレを特殊召喚！」

聖天ーアルビューレ　ＡＴＫ３０００

「あの聖天ってモンスター、結構種類あるよな。」

「そうですよね。僕とやった時は５体でした。」

病院入口付近で駄弁る２人。

「アルビューレの効果、このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、デッキの１番上をめくり、そのカードが天使族モンスターならば特殊召喚できる！１番上のカードは勝利の導き手フレイヤ！」

勝利の導き手フレイヤ　ＡＴＫ１００

「フレイヤの効果で自分の天使族モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする！！」

勝利の導き手フレイヤ　ＡＴＫ１００→５００

聖天ーアルビューレ　ＡＴＫ３０００↓３４００

「永続魔法、コート・オブ・ジャスティスを発動！レベル１の天使族モンスターがいる時、手札から天使族モンスターを特殊召喚する！ワタシは聖天ーキェールを特殊召喚！」

聖天ーキェール　ＡＴＫ２３００↓２７００

「キェールは特殊召喚された場合、相手のモンスター効果を受けない！さらにフィールド魔法、聖天の城を発動！」

「前にも見ましたね。」

「ああ。」

「聖天の城の効果を発動！デッキまたは手札からレベル８以下の天使族モンスターを特殊召喚する！現れろ、大天使クリスティア！」

大天使クリスティア　ＡＴＫ２８００↓３２００

「また使ってきたか。」

「君達、もしかしてワタシがハージュと同じようなことを考えてるとでも思ってないか？」

「違うのか？」

「あんな自分勝手な奴と一緒にしてほしくないな。ワタシは天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようにドローする！」

「ありがとうございます。手札を増やしてくれて。」

「ワタシはカードを3枚伏せて、モンスターをセット。ターンエンド！」

「それでは行きます！私のターン！」

「牙城、お前が渡したカードが神楽のデッキにどれだけのメリットがあるのかよく見てろ。」

「？分かりました。」

「罠カード発動、レベル変換実験室！私は手札の火之迦具土を見せて、サイコロを振ります！」

「あのカードって、レベルを変えるやつですよね。」

「ああ、あのカードは結構な確率で低レベルになるからって神楽は入れてるんだ。」

「し－君サイコロ持ってる？」

「ああ。」

時雨は神楽にサイコロを渡した。

「それ！」

神楽はサイコロを空に向かって投げた。

「出た目は……2！！よって手札の火之迦具土のレベルは2になります！私は火之迦具土を召喚します！」

火之迦具土　ＡＴＫ２８００

「通常召喚終わりましたね。」

「いや、まだだ。」

「え？」

「永続罠、血の代償を発動します！ライフを５００払うことでモンスターを通常召喚しますけど、コスト・イーターの効果で払う代わりにこのカードの攻撃力を上げます！コスト・イーターの攻撃力を５００ポイント上げて、因幡之白兎を召喚！」

コスト・イーター　ＡＴＫ０→５００

因幡之白兎　ＡＴＫ７００

「えっと……」

「自分のやったことが分かったようだな……」

「さらに５００ポイント上げて、夜叉を召喚！」

コスト・イーター　ＡＴＫ５００→１０００

夜叉　ＡＴＫ１９００

「夜叉が召喚された時、相手フィールドの魔法・罠を1枚手札に戻します！私は聖天の城を手札に戻します！」

「城が！！」

「さらにもう1度５００ポイント上げて、雷帝神（スサノオ）を召喚！」

コスト・イーター　ＡＴＫ１０００→１５００

雷帝神（スサノオ）　ＡＴＫ２０００

「魔法カード、スターブラスト！コスト・イーターの攻撃力を１００ポイント上げて手札の鳳凰のレベルを2下げます！」

コスト・イーター　ＡＴＫ１５００→２５００

「コスト・イーターの攻撃力をさらに５００上げて、鳳凰を召喚！！」

コスト・イーター　２５００→３０００

鳳凰　ＡＴＫ２１００

「鳳凰の効果！このカードが召喚またはリバースに成功した時、相手フィールドのセットされている魔法・罠を全て破壊します！」

「なんだと！！？」

「バトル！！火之迦具土で、キェールを攻撃！！」

「くっ！！」

多湖　ＬＰ４０００→３９００

「因幡之白兎でダイレクトアタック！」

「ぐほっ！？」

多湖　ＬＰ　３９００→３２００

「さらに罠発動！スピリットの誘い！！スピリットモンスターが手札に戻った時、あなたは自分のモンスターを自分で選んで手札に戻してください！」

「何だそんなことか……ってこれは！？」

「お気づきですよね、私のフィールドのスピリットモンスターの数とあなたのフィールドのモンスターの数は同じです！！」

「神楽のデッキはバウンス、いつもコストでライフがなくなるから長持ちしないんだ。だけどお前が渡したコスト・イーターの効果で、長持ちするようになった。しかも神楽のデッキはそこでは終わらない。」

「さらに私は天よりの宝札を発動！お互いに手札が６枚になるようドローします！永続魔法、エレメントの泉！モンスターが手札に戻る度に私はライフを５００回復します！私はカードを１枚伏せて、エンドフェイズに私のスピリットモンスターは手札に戻り、スピリットの誘いの効果であなたのモンスターも全部手札に戻ります！そしてエレメントの泉の効果で合計４０００ポイント回復します！タ

ーンエンド！」

神楽　ＬＰ４０００→８０００

「意外とやるようだねお嬢さん。だけど手札に戻してもまた出せばいいだけのこと！！ワタシのターン！」

「この瞬間、火之迦具土の効果を発動！相手はドロー前に手札を全て捨ててください！」

「何！？だがワタシが上級モンスターを引けば、それで済むだけのこと。ドロー！」

「罠発動！はたき落とし！相手のドローしたカードを墓地に送ります！」

「えっ……？」

「神楽のデッキはデッキ破壊も兼ねてる。これが結構きつかったりするんだ。」

「今あなたの手札は無し、モンスターもいない、あるとすれば使うことのできないヴァルハラとコート・オブ・ジャスティスだけ。もう私のターンでいいですよね？」

「……はい。」

「私のターン。因幡之白兎を召喚。コスト・イーターと因幡之白兎でダイレクトアタック！」

「うわあああああ！！」

多湖　ＬＰ３２００→０

「終わったよ、しー君！！」

デュエルが終わった神楽は時雨に近づいてきた。

「ああ、凄かったな。」

「へへへ、褒めて～～～♪」

「それにしても、８神父って大したことないですよね。」

「確かにそうだな。」

「はっ、そんなことを言ってられるのは今のうちさ。」

「まだ起きてたのか。」

「８神父と言っても、トップ３とそれ以外だと実力のケタが違うのさ。ハージュは８番、俺は７番あたりで、トップと比べたらまだまだ弱いさ。」

「神父なのに格付けがあるのか。」

「そこを突っ込むのか！？」

「まあ大丈夫だろ、何とかなる。」

「川田さ～～ん、この人もお願いします！」

『了解。』

多湖が倒れていた地面が開き、多湖はその中に落ちていった。

「ワタシもかあああああぁぁぁぁぁぁぁ，，，，，，，，，，，，」

「後神父６人と教祖だけか、まだ余裕があるな。」

「ここにいるのか。」

「ああ、異端者とそれを匿う者がいる街というのはここのことだ。」

ネオ童美野シティの外で白い集団を引き連れた二人組がそのような会話をしていた。

「とりあえず2番の俺と3番のお前がいれば十分だろ。」

「そうだな。」

神楽のデュエル２（後書き）

次回はオリカ紹介になると思います。

オリカ紹介１８（前書き）

今回は２１４枚目～２２５枚目のオリカまで紹介します。

今回から数を数えていきます。

オリカ紹介１８

聖天空
永続魔法
１ターンに１度、自分の手札・墓地・デッキから天使族モンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。

天主の導き
通常魔法
自分の手札の天使族モンスターのレベルをこのターンのエンドフェイズまで４にする。

聖天ーアンセル
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２８００　ＤＥＦ２７００
このカードの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の手札を好きな枚数デッキに戻し、手札が６枚になるようドローする。このカードが戦闘によって破壊された時、墓地へは送らず手札に戻る。

バニシング・アウト
通常魔法
相手フィールドのモンスター１体を選択する。選択したモンスターと同じレベルになるようにデッキから「バニシング」と名の付いたモンスターを墓地に送り、選択したモンスターを除外する。

アスタリスク・セイバー
光属性　戦士族・効果　レベル１０　ＡＴＫ２９００　ＤＥＦ３０００
相手が「カードを破壊する効果」を発動した時、手札を１枚捨てることでその発動を無効にし破壊する。

オメガ・アスタリスク・ドラゴン
光属性　ドラゴン族・シンクロ／効果　ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ３０００
「オメガ・コア」または「アスタリスク・コア」＋チューナー以外の「オメガ」または「アスタリスク」と名の付くモンスター１体以上
１ターンに１度、相手が罠を発動した時、その発動を無効にし破壊する。この効果を発動したターン、このカードは効果では破壊されない。

天網恢恢
永続罠
自分フィールドに「聖天」と名の付くモンスターが存在する限り、攻撃宣言を行うことができず、モンスターをリリースすることができない。

セカンド・ポイント
速攻魔法
自分フィールドのシンクロモンスターが相手モンスターを破壊してダメージを与えた時、そのモンスターはもう一度攻撃することができる。

聖天壊光
通常罠
聖天と名の付いたモンスターが破壊されたターン、相手フィールドのモンスター１体を破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

聖天ーアルビューレ
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ３０００

このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、デッキの1番上のカードをめくる。そのカードが天使族モンスターなら特殊召喚できる。それ以外の場合、相手プレイヤーに５００ポイントのダメージを与える。このカードがフィールドから墓地に送られる時、代わりに手札に戻す。

聖天ーキェール
光属性　天使族・効果　レベル８　ＡＴＫ２３００　ＤＥＦ２５００
このカードが特殊召喚された場合、このカードはモンスター効果を受けない。このカードが戦闘以外で破壊される時、代わりに手札に戻す。

2番目の男（前書き）

今回は多分少しは衝撃みたいなものがあると思います。

2番目の男

「お前達、これからの話をよく聞いておけ。」

フードつきの神父服を着た二人のうち、片方が話を始めた。

「ハージュと多湖は正面からいってやられた。よって我々は多方向から奴らを攻める。まずAグループ、俺の部隊は正面からあの街に侵入する。Bグループ、この部隊は反対側からだ。CグループとDグループは横から入り込め。多方向からならば奴らも対応できまい。しかし油断はするな。仮にも奴らはハージュと多湖を退けている。気を引き締めていけ。それでは、各部隊出陣！」

一方、時雨達は……

「ここまで買うか？」

「結構買ったね～。」

「買いすぎじゃないか？」

ショッピングを満喫していた。

「木原、お前よく付いてきたな。」

「ま、暇だからな。」

「吉野さんと東雲さんは忙しくてこれなかったのは残念です…」

「お前、どんなに買うんだ？」

「てか時雨、お前よく片手でその量落とさずに持てるな。」

「まだ軽いさ。」

その時、時雨の携帯が鳴った。

「俊か、どうした？」

『気をつけろ、第1バリケードを突破された。』

「お前いつの間にそんな物を……というか奴らか？」

『ああ、今第2バリケードで押さえてるけど破られるのも時間の問題だ。しかもネオ童美野シティの様々な入り口から入ってきてる。今までと動きが違う。俺と吉野と東雲も守備にまわるからそっちも警戒してくれ。』

「わかった、そっちも気をつけろ。」

「しー君どうしたの？」

「ファルサの奴らが攻めてきた。早く戻るぞ！」

「う、うん！」

「ちょっと待てこの量結構きついんだけど！？」

「俺も持つから急ぐぞ！」

「あ、ありがとう。」

～ネオ童美野シティ北側入り口～

「いきなり呼び出されたかと思うとこれですか……雑魚がいくら増えようとも私には関係ないですけどね。」

由紀はひとり呟いた。

「我らを愚弄するか！小娘！」

「あなたたちでは私には勝てないって言ってるんですよ。」

～南側入り口～

「……あの、別に手伝ってもらわなくても……」

玲は一人うろたえている。その理由は……

「いや、我ら東雲玲ファンクラブ（現在会員３４名・メンバー募集中）！！あなたの為に骨を埋める覚悟です！！」

「だから別に埋めるとかそういうことは……」

「行くぞーーーーー！！」

「「「「「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！」」」」」」」」」

～東側入り口～

「俊様、如何なさいましょう？」

「戦える者は前線へ出ろ。１人の侵入も許すな、そう伝えておいてくれ、じいや。」

「かしこまりました。では私目も……」

時雨達は荷物を神羅の家に置いて、臨戦態勢に入っていた。

「流石に時間がかかったな……」

「俺達は西側の方に行こう」

「その必要はない。」

「「「「「！！」」」」」

時雨達はすぐさま囲まれた。

「残念だが、貴様らの周りは包囲させてもらった。これでもう逃げ場はない。」

近くのビルの上から声がした。そのビルの上を見てみると、神父の服を着た2人の男がいた。

「お前達はこのまま囲んでろ。どうせお前達がどうこうできる相手ではない。」

2人組はビルの上から飛び降り、着地した。

「お前の相手は俺がやろう。」

片方のフードの男がフードを外す。

「！！」

時雨は衝撃を受けた。

その男は赤い髪をした長身の見覚えのある男だった。

「黒……涼……」

2番目の男（後書き）

次回に続きます！！

α（前書き）

更新遅れました。

今回、オメガと関係する相手が出てきます。

α

「お前、何故俺の名前を知っている？」

黒涼と瓜二つの男が聞いてきた。

「何故って…前に戦ったことがあるだろ！！」

時雨は激しく憤怒する。

「残念ながら俺にはお前と戦った覚えはない。」

「ふざけるな！！」

「一つ聞いておく。」

「なんだ！！」

「お前が戦ったというやつはダーク・シムルグを使わなかったか？」

「それがどうした？」

「もし使ってきていたなら、それは俺じゃなく弟だ。」

「「「「……は？」」」」

黒涼と瓜二つの男以外が全員唖然とした。

「俺が戦ったのはお前の弟だというのか！！」

「やはりそうか……俺には双子の弟がいてな、そいつは15年前に自分の親を殺して異端者として追放された。」

「……」

「一応言っておくが、俺の名前は黒涼宗司、弟の名前は黒涼陰人。これからは下の方で呼んでくれ。」

「ちょっと待…」

「全員、撤退だ。他の部隊にも伝えとけ。」

「しかし……」

「責任は俺が取る。」

「……了解しました。」

「どういうことだ?」

「俺の弟と会ったということは、きっとお前はなにか迷惑を受けたに違いない。その償いは兄である俺がしなければならない。」

「こ、宗司……」

「行くぞ、カイル。」

宗司がもう一人の神父服を着た男に手をかけようとした時、

「はあ、使えねえな……」

「！！」

宗司はすかさず後ろに下がった。

「誰だ！カイルはどうした！！」

「質問ばっかだな、まあいいか、答えてやる。」

もう一人の神父服を着た男は神父服を空に投げた。

「俺は麻倉征洋！お前が言うカイルとかいう奴なら、お前らのアジトの所にスマキにしてあるぜ？雑魚過ぎてあくびが出る。」

「カイルを雑魚だと？」

「おい、紫藤時雨！」

「どうして俺の名を！？」

時雨は身構えた。

「知っているさ……お前は『オメガ』の力を持っている。お前が『オメガ』に相応しいか俺が直々に見に来たってわけだ。」

「オメガのことを知っているのか！？」

「まあな、さあデュエルだ、お前の力、俺がはっきり見定めてやる。」

「その前に答えろ！『オメガ』とは何だ！？」

「はあ？お前、今まで知らないで使ってたのか？こいつは傑作だ！！」

「いいから答えろ！」

「まあまあ落ち着け、俺とデュエルして勝てたら教えてやる。」

「いいだろう！」

「「デュエル！！」」

「俺から行くぜ！！ドロー！！俺は、アルファ・シールドを守備表示で召喚！」

アルファ・シールド　ＤＥＦ２４００

「アルファだと！？」

「さらに俺は魔法カード、ストライク・キャノンを発動！デッキから『ストライク』と名の付いたモンスターを１体墓地に送ることで、カードを２枚ドローする！俺はストライク・コアを墓地に送り、デッキからカードを２枚ドローする！カードを３枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン！」

「罠発動！アルファ・ストッパー！デッキから『アルファ』と名の

付いたレベル１０モンスター1体を墓地に送り、このターン相手はモンスター効果の発動およびバトルフェイズを行うことができない！！俺はレベル１０のアルファ・プラントを墓地に送る！！」

あのモンスターを護りたいのか？

「俺はオメガ・コアを召喚！」

オメガ・コア　ＡＴＫ０

「さらに魔法カード、１０オーダーを発動！……全部表だ！！デッキから、オメガ・キャノンを特殊召喚！」

オメガ・キャノン　ＡＴＫ３１００

「レベル2のオメガ・コアに、レベル１０のオメガ・キャノンをチューニング！！

シンクロ召喚！！現れろ、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ。」

「ここでお前に一つ聞いておく。」

「なんだ？」

「今、お前が持ってる中で一番強いカードは何だ？」

「……『オメガ・クロニクル・ドラゴン』だ。」

「やっぱりか……一つ、いいことを教えてやる。」

「？」

「お前は『オメガ』の力を半分も出せちゃいない！」

「なんだと！？」

「俺のターン！俺は墓地のアルファ・プラントをゲームから除外し、シード・トークンを２体特殊召喚する！」

シード・トークン　ＡＴＫ１０００

「アルファ・シールドの効果発動！１ターンに１度、このカードを手札に戻すことができる！そして俺はアルファ・コアを召喚！」

アルファ・コア　ＡＴＫ０

「コア……まさか！！」

「正解！レベル２のアルファ・コアに、レベル５のシード・トークン２体をチューニング！！
始まりの力、今ここに再び君臨せよ！シンクロ召喚！現れろ、アルファ・ドラゴン！！」

アルファ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「これが俺の相棒、アルファ・ドラゴンのアルドだ！！」

「名前……そいつは精霊なのか？」

「やはりお前も精霊が見えるのか、でなければな。」

『オメガ・ドラゴン、久しぶりだな。』

『今はオルフェという名だ、久しいな。』

「知ってたのか？」

『まあな。』

『だが今は対戦中、話はまたいつかしようじゃないか。』

『ああ。』

「行くぞ！！」

α（後書き）

中途半端に終わりましたが、次回に続きます！！

麻倉征洋の力（前書き）

前回の続きです。

今回、アルファの力が発揮されます。

麻倉征洋の力

「俺は永続魔法、騎士道精神を発動！俺のモンスターは同じ攻撃力のモンスターとの戦闘では破壊されない！バトル、アルファ・ドラゴンで、オメガ・ドラゴンを攻撃！アルファ・ソニック！！」

「オメガ・ドラゴンだけを破壊させはしない！速攻魔法、サイクロン！俺が破壊するのは、騎士道精神！これでモンスターはお互い破壊される！」

時雨がサイクロンを発動し、騎士道精神を破壊した時、麻倉は笑みを浮かべた。

「サイクロンの無駄打ちになったな！アルファ・ドラゴンの効果発動！」

「何！？」

「アルファ・ドラゴンの攻撃宣言時、このモンスターの攻撃力を１０００ポイント下げて、攻撃対象に選択した相手モンスターを守備表示に変更する！」

アルファ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→ＤＥＦ０

「アルファ・ドラゴンのもう一つの効果を発動！このモンスターが表側守備表示モンスターと戦闘を行う時、その戦闘を無効にし破壊する！」

アルドが発した衝撃波がオルフェに当たり、爆発を起こした。

「くっ!!オルフェ!!」

「まだだ!この効果でモンスターを破壊した場合、破壊したモンスターの攻撃力とこのカードの攻撃力の差だけ相手にダメージを与える!!」

アルドの放った衝撃波が時雨に当たる。

「うっ!!」

時雨　ＬＰ４０００→３０００

「アルファ・ドラゴンの攻撃力はバトルフェイズ終了時に１０００ポイントダウンする。俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド!!どうした!お前の力はこの程度か!?」

アルファ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→３０００

「この効果で、カイルがやられたわけか。」

宗司は一人、納得する。

「俺のターン!俺は永続罠、リビングデッドの呼び声を発動!」

「させるか!罠発動、トラップ・スタン!このターン、このカード以外の罠カードの効果を無効にする!」

発動したリビングデッドの呼び声が石化した。

「なら、魔法カード、死者蘇生を発動！墓地から、オメガ・ドラゴンを特殊召喚する！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「オメガ・ドラゴンで、アルファ・ドラゴンを攻撃！クラッシュ・ブレス！！」

オルフェの咆哮が、アルドを消し飛ばした。

「くっ！」

麻倉　ＬＰ４０００→２０００

「どうやら、少しはできるようだな。墓地のストライク・コアの効果を発動！自分フィールドのモンスターが戦闘によって破壊された時、墓地に存在するこのモンスターを特殊召喚する！」

ストライク・コア　ＡＴＫ０

「さらにストライク・コアが特殊召喚に成功した時、デッキから『ストライク』と名の付いたモンスターを１体特殊召喚する！俺はストライク・ブースターを特殊召喚！」

ストライク・ブースター　ＡＴＫ１６００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００→４０００

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「あの麻倉って奴も時雨も凄いな……この状況にすぐ対応してる。」

木原は少し唖然としていた。

「それよりもあの『ストライク』ってカードが気になるな…」

少女は麻倉が召喚したモンスターを警戒していた。

「俺のターン！俺は永続罠、リビングデッドの呼び声を発動！戻って来い、アルド！」

アルファ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「俺は、レベル２のストライク・コアに、レベル４のストライク・ブースターをチューニング！！
その機体を持ってして、あらゆる敵を撃ち滅ぼす！シンクロ召喚！
狙え、シンクロチューナー、ストライク・ドラゴン！！」

ストライク・ドラゴン　ＡＴＫ２４００

「ストライク・ドラゴンの効果発動！自分フィールドのシンクロモンスターのレベルをこのモンスターと同じにする！俺はアルファ・ドラゴンを選択！」

「この展開は……まさかアクセルシンクロ！？」

「流石にクロニクルを使うだけあってアクセルシンクロは知ってる

な。だが、それを使えるのはお前だけじゃない！！俺は、レベル６のストライク・ドラゴンに、レベル６となったアルファ・ドラゴンをチューニング！！始まりの力、今新たな力をその身に纏い、立ちはだかる者全てを砕け！！！アクセルシンクロ！！打ち砕け、ストライク・アルファ・ドラゴン！！」

ストライク・アルファ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

「さあ紫藤時雨、お前の力を俺に見せ付けてみろ！！」

麻倉征洋の力（後書き）

また続いてしまった……。

一応次回で決着させます。

超絶（前書き）

アルファ対オメガ、決着です。

かなり強い麻倉、どのような決着がつくのか……

超絶

「バトル！ストライク・アルファ・ドラゴンでオメガ・ドラゴンを攻撃！！ストライクバースト！！」

「いきなり相討ちか！？」

再び麻倉は笑う。

「そんなことするか！！ストライク・アルファ・ドラゴンの効果発動！このモンスターが戦闘を行う時、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力をこのモンスターの攻撃力分ダウンさせる！！」

ストライク・アルファ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ４０００→０

「オメガ・ドラゴンの攻撃力が０になった！」

「これを食らったらお終いだぞ！？」

「罠発動、ガード・ブロック！！戦闘ダメージを０にし、その後カードを１枚ドローする！！」

ストライク・アルファ・ドラゴンが放った巨大な光線がオメガ・ドラゴンを消し去った。

「さすがにこれぐらいでやられちゃ困る。俺はこのままターンエンド！」

「し－君が押されてる……」

「俺のオール・タブー・ドラゴンだったら即負けるな……」

「これがアルファの力……」

「俺のターン！！俺は魔法カード、罠回収を発動！自分フィールドに表側表示で存在する永続罠を手札に戻す！俺はリビングデッドの呼び声を手札に戻す！そしてカードを１枚セットし、魔法カード、天よりの宝札を発動！お互い手札が６枚になるようドローする！俺は魔法カード、早とちりを発動！このターン俺の罠は伏せたターンに発動できる！！」

「どう来る……」

「俺はさっき伏せたリビングデッドの呼び声を発動！来い、オメガ・ドラゴン！！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「この瞬間、罠発動！強制突進！！このターン、相手は攻撃しなければならない！！」

このターンで決着をつけるつもりか……。

「俺はバニシング・コアを召喚！」

バニシング・コア　ＡＴＫ０

「さらにバニシング・ギアを特殊召喚！」

バニシング・ギア　ＡＴＫ０

「レベル２のバニシング・ギアに、レベル４のバニシング・カタパルトをチューニング！！

滅びの龍よ、立ちはだかる敵を葬り去れ！シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「バニシング・ドラゴンの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルを６にする！

レベル６のバニシング・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！

破滅の力よ、その力をもって敵を滅ぼせ！！アクセルシンクロ！！

殲滅せよ、バニシング・オメガ・ドラゴン！！」

バニシング・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「俺は魔法カード、ニ重召喚を発動！このターン、もう１度通常召喚を行うことができる！！俺はステラ・コアを特殊召喚！」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

「さらに俺はステラ・ストーンを召喚！」

ステラ・ストーン　ＡＴＫ１００

「レベル２のステラ・コアに、レベル４のステラ・ストーンをチュ

ーニング！！
星の光よ、今全てを輝き照らせ！シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「ステラ・ストーンの効果発動！このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた時、デッキからカードを１枚ドローする！そしてもう１枚のリビングデッドの呼び声を発動！蘇れ、オメガ・ドラゴン！」

オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「ステラ・ドラゴンの効果発動！オメガ・ドラゴンのレベルを６にする！
レベル６のステラ・ドラゴンに、レベル６となったオメガ・ドラゴンをチューニング！！
星の光よ、さらなる光を得て闇をも照らせ！アクセルシンクロ！！
照らし出せ、ステラ・オメガ・ドラゴン！！」

ステラ・オメガ・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「これが最後の賭けだ！魔法カード、天よりの宝札！お互い手札が６枚になるようにドローする！」

「俺はさっきお前が手札を６枚にしたから手札は増えない。」

「ここで時雨が逆転のカードを引けなかったら、ほぼ確実に負けが決まるな……。」

「紫藤……」

「しー君……」

「……麻倉、どうやらこのデュエル、俺の勝ちだ。」

「何？」

「俺は手札から、ガーネット・コアを特殊召喚！」

ガーネット・コア　ＡＴＫ５００

「さらに手札からクリムゾン・ビーストとクリムゾン・リザードを特殊召喚！」

クリムゾン・ビースト　ＡＴＫ１５００

クリムゾン・リザード　ＡＴＫ１２００

「レベル２のガーネット・コアに、レベル５のクリムゾン・ビーストと、クリムゾン・リザードをチューニング！！真紅の炎よ、今その姿を現せ！シンクロ召喚！紅に染めろ、シンクロチューナー、クリムゾン・コア！！」

クリムゾン・コア　ＤＥＦ４０００

「クリムゾン・コアの効果発動！バニシング・オメガ・ドラゴンと、ステラ・オメガ・ドラゴンのレベルを１にして、このカードのレベルを２つ下げる！！行くぞ！！

レベル１０となったクリムゾン・コアに、レベル１となったステラ・

オメガ・ドラゴンとバニシング・オメガ・ドラゴンをチューニング！！

光と闇の竜交わりし時、ここに新たな力が誕生する！デルタアクセルシンクロ！！！

重複せよ、オメガ・カオス・ドラゴン！！」

オメガ・カオス・ドラゴン　ＡＴＫ５０００

「オメガ・カオス・ドラゴンで、ストライク・アルファ・ドラゴンを攻撃！！カオス・トライアングル・インパクト！！」

「ストライク・アルファ・ドラゴンの効果で、オメガ・カオス・ドラゴンの攻撃力を４０００ポイントダウンさせる！！」

「オメガ・カオス・ドラゴンが攻撃する時、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない！」

ストライク・アルファ・ドラゴンはオメガ・カオス・ドラゴンの発した混沌の波動にかき消された。

「くそっ、ぐうあああああああ！！！」

麻倉　ＬＰ２０００→１０００

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド。」

「……お前の力はよく分かった。お前はオメガの力を持つに値するデュエリストだ。認めてやる。」

麻倉はそう言ってデッキに手を置き、サレンダーした。

「……勝ったのか？」

「ああ、お前の勝ちだ。」

「……強いなあの時雨と言う奴。……戻るぞ。」

「はっ」

宗司は白い集団を引き連れ去っていった。

「約束だ、オメガのことを教えてもらうぞ。」

「わかった、オメガは……」

「それは私が説明いたしましょう。」

麻倉が説明しようとした時、ビルの屋上から一人の男が降りてきた。

「だ、団長！！」

麻倉が団長と呼んだ男は麻倉に近づくなり頭に軽くチョップした。

「いたっ！なにすん……何するんですか！！」

「いつもその突っ走り癖を何とかしろと言っているだろ。」

「す、すみません……。」

麻倉はかなり下手に出ていた。

その時、

「おい、あんたは誰だ?」

「申し遅れました、私はΩ２３星団団長、浮遊島白刃と言います。」

オリカ紹介１９（前書き）

今回は２２６～２３７枚目までを紹介します。

オリカ紹介１９

アルファ・シールド
風属性　戦士族・効果　レベル３　ＡＴＫ０　ＤＥＦ２４００
１ターンに１度、このカードを手札に戻すことができる。この効果は相手ターンにも発動できる。このカードを手札から墓地に送ることで、そのターン自分への戦闘および効果ダメージは０になる。

ストライク・キャノン
通常魔法
デッキから「ストライク」と名の付いたモンスターを１体墓地に送ることで、デッキからカードを２枚ドローする。

アルファ・ストッパー
通常罠
デッキからレベル１０の「アルファ」と名の付いたモンスターを墓地に送ることで、このターン相手はモンスター効果の発動およびバトルフェイズを行うことができない。

アルファ・プラント
風属性　植物族・効果　レベル１０　ＡＴＫ２０００　ＤＥＦ２７００
墓地に存在するこのカードを除外することで、自分または相手のフィールドに「シード・トークン」（植物族・風・星５・攻１０００／守１３５０）２体を特殊召喚する。「シード・トークン」が破壊された時、コントロールしていたプレイヤーは５００ポイントのダメージを受ける。

アルファ・コア

風属性　機械族・チューナー　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
このカードが戦闘を行う場合、相手のモンスターの攻撃力は半分になる。

アルファ・ドラゴン
風属性　ドラゴン族・シンクロ／効果　レベル１２　ＡＴＫ５００　ＤＥＦ０
「アルファ・コア」＋「アルファ」と名の付いたモンスター１体以上
このカードの攻撃宣言時、攻撃力を１０００ポイント下げることで攻撃対象に選択したモンスターの表示形式を守備表示に変更する。
このカードが表側守備表示モンスターを攻撃した時、戦闘を行わずそのモンスターを破壊し、このカードと破壊したモンスターの攻撃力の差の分ダメージを与える。バトルフェイズ終了時、このカードの攻撃力を１０００ポイント下げる。

ストライク・コア
炎属性　機械族・チューナー　レベル２　ＡＴＫ０　ＤＥＦ０
自分フィールドのモンスターが戦闘によって破壊された時、墓地に存在するこのカードを特殊召喚することができる。このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから「ストライク」と名の付いたモンスター１体を特殊召喚する。

ストライク・ブースター
炎属性　機械族・効果　レベル４　ＡＴＫ１６００　ＤＥＦ１４００
自分フィールドのモンスターの攻撃力が変化した時、墓地に存在するこのカードを除外することでそのモンスターの攻撃力を倍にする。

ストライク・ドラゴン
炎属性　ドラゴン族・シンクロ／チューナー　レベル６　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ２０００

「ストライク・コア」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードが戦闘を行う時、このカードの攻撃力を墓地に存在する「ストライク」と名の付いたモンスター1体の攻撃力分アップする。この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。1ターンに1度、自分フィールドに存在するシンクロモンスター1体のレベルをこのモンスターと同じにする。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚することができる。

ストライク・アルファ・ドラゴン
炎属性　ドラゴン族・アクセルシンクロ／効果　レベル12　ATK4000　DEF2000
「ストライク・ドラゴン」＋「アルファ・ドラゴン」
このカードが戦闘を行う時、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力をこのモンスターの攻撃力分ダウンさせる。このカードを破壊する魔法・罠が発動した時、このカードをゲームから除外することでその効果の発動を無効にし破壊する。相手モンスターの攻撃宣言時、この効果で除外されたこのモンスターを特殊召喚する。

罠回収
通常魔法
自分フィールドに存在する永続罠を1枚手札に戻す。

強制突進
通常罠
このカードは相手ターンのみ発動できる。このターン、相手モンスターは全て攻撃宣言しなければならない。

ステラ・ストーン

光属性　岩石族・効果　レベル４　ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１８００
このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた時、デッキからカードを１枚ドローする。

クリムゾン・リザード
炎属性　爬虫類族・効果　レベル５　ＡＴＫ１２００　ＤＥＦ１４００
炎属性モンスターが自分フィールドに存在する時、このカードは手札から特殊召喚できる。このカードが攻撃する時、攻撃力を７００ポイントアップする。

オリカ紹介１９（後書き）

次のオリカ紹介は２０回目……かなり溜めてからやろうと思います。

オメガの正体（前書き）

今回、遂にオメガの正体が明らかになります。

オメガの正体

ビルの上から飛び降りてきた男は、浮遊島と名乗った。

「……それ、本名か？」

時雨は素朴な疑問を述べた。

「そうですが？」

特に気にせず浮遊島は答える。

「そうなのか……」

「それでは、オメガのことについて説明させていただきます。」

「ああ、頼む。」

「……オメガとは、世界の終わりを防ぐ為の力のこと。」

「……ちょっと待て、スケールでかくないか？」

時雨は少しうろたえる。

それを全く気にしない浮遊島。

「遥か昔、この星に巨大隕石が迫り終焉の危機に陥った時のこと、ある者が墜落した隕石の欠片の力を使い、ギリシア文字になぞらえた２４の力を創りました。その者は２４の力の内２３を信じられる

仲間に分け与え、巨大隕石を破壊しようとしました。」

「それで、その隕石を破壊したわけか。」

「いいえ、その者が創った力は、隕石を跳ね返すまでしか行きませんでした。」

「……どうして破壊できなかったんだ?」

時雨は問い質す。

「オメガを始めとした２４の力を創った者は、オメガの力を全て扱うことができなかったのです。」

「……」

「そして隕石を跳ね返した後、その者は命を落とし、死ぬ間際にオメガの力を３つ、そして更に１２の力に分けたのです。」

「その３つの内の１つがクロニクルってことだ。」

麻倉は浮遊島の説明に少しばかり乗っかる。

「半分以下っていうのはそういうことか……」

「そして時が流れるにつれ、偶然にもオメガの力の存在を知る者が現れ、そのたびに世界の終わりを防いできた、ということです。そしてオメガの力に耐えきれない者は皆、死に至りました。」

「それはかなり前に聞いた頃がある。」

「そして、更に時が流れ、オメガの力に耐えきれる者が現れたのです。」

「それが俺っていうのか？」

「ええ、ですがあなた以外にもオメガの力に耐えた者が、1人だけいました。」

浮遊島は人差し指を1本立てた。

「その名は紫藤空蝉。あなたの遠い祖先です。」

「俺の……先祖？」

「しかし紫藤空蝉もオメガの力に耐えましたが、オメガの真の力を発揮することができませんでした。」

「だが、オメガの真の力はもう必要ないんじゃないのか？」

時雨は疑問を投げかける。

「いいえ、遥か昔に跳ね返した巨大隕石はおよそ2年後に再びこの星に接近します。」

「なっ！？」

「2年後！？」

「それはほぼ決定していることで、それまでにオメガの真の力を発

揮することができなければ、恐らくこの星は滅びるでしょう。」

特に慌てる様子も見せず浮遊島は話を続ける。

「たとえ跳ね返すことに成功しても、また未来に持ち越すだけ。その頃にオメガの力に耐えきれるものが現れなければ、それでおしまいです。これで、説明を終わりとさせていただきます。」

「おしまいって……」

「他人事みたいに言うなよ！」

「言ってません、われわれΩ２３星団の目的は、その隕石の破壊そのものなのですから。」

「隕石の破壊……」

「ま、そのためにもまず、紫藤時雨にはオメガの真の力を発揮できるようにしてもらわなきゃな。」

「……俺が……か…。」

その時、麻倉が時雨の肩を叩いた。

「まあそんなに気負わなくてもいいぜ？俺達もお前が力を手に入れられるように手伝うからな。」

「……そう言えば、２３星団っていうから、２３人いるのか？」

「「ギクッ」」

麻倉と浮遊島は顔を顰めた。

「……ゴホン、残念ながら、現在我ら星団のメンバーは7人です。」

「……はっ？」

「アルファを持つ麻倉、プサイを持つ私、あとはベータ・イプシロン・ラムダ・イオタ・カイを持つ者たちだけということです。」

「……それ、大丈夫なのか？」

「正直やばいな。」

麻倉は笑ってごまかす。

「……残りのメンバーは現在われわれが集めている最中です。」

浮遊島は付け足すように言った。

「はあ……。」

時雨は心の奥で大丈夫か？と不安になった。

「それはさておき、我々はメンバー集めの為、これで失礼します。」

「一応連絡先教えとくから、なんかあったら連絡しな。」

麻倉は連絡先を書いた紙を渡して、浮遊島と一緒にどこかに消えた。

「いつの間に……」

「……しー君。」

「……オメガのことは大体分かった……だけど、今はこっちの方が先だ。」

時雨達は今日、ようやく落ち着きを取り戻した。

残り２９日

オメガの正体（後書き）

結構無茶苦茶な設定になってしまった気が……

次回、最強の相手が出てくる……かもしれません。

意外な事実（前書き）

今回は、ほとんどネタな様な気がします。

そして、８神父最強の男が、ついに動き出します……

意外な事実

～聖教ファルサ・アルバー教会～

「……それでのこのこと戻ってきたわけか。宗司。」

「ああ……」

宗司はある人物にこの前のことを話した。

「まあいい、お前は準備の方を手伝ってろ。」

「処罰はなしか？」

「ただでさえ人手が足りてねえんだ。処罰している余裕なんかねえよ。」

「お前はどうするんだ？」

「俺は異端者捕獲と雑魚共の開放に向かう。」

「お前一人でか？」

「お前ら雑魚共が一緒にいたんじゃ、却って邪魔だ。すっ込んでろ。」

宗司と話していた人物はそう言い残し教会を出た。

～ネオ童美野シティ・デュエルアカデミア男子寮・とある少年の部屋～

ある朝、その少年はゆっくりと起きた。

「ふわぁ～～～～あ。よく寝た。」

その少年の部屋には、メイク道具や染髪道具、そしてなぜか小型変声機が置いてあった。

そして少年はあることに気付く。

「あっ、やば！待ち合わせ遅刻じゃん！」

少年は朝食をとり、慌てて部屋を出た。

～ネオ童美野シティ・あるデパート～

時雨達は、この場所で待ち合わせをしていた。

「……木原の奴、何をしてるんだ？」

時雨、神楽、吉野、俊、、玲、牙城と少女はこの場に集まっていた。

唯一、木原だけが遅れていた。

「寝てんじゃないか？」

「そうだと思います。」

「私もそうだと思います…。」

「それかどこかで寄り道してるとか……。」

「きっと来ますよ！」

そんな会話をしている時、

「お～～い！！遅れて悪～～い！！」

「やっぱり遅いな。」

「お～～い！！」

「さすがにここまでとは思わなかった…。」

「おいって！！！」

「それじゃ、木原さんは来なさそうなのでいきましょうか。」

「いい加減にしろお前ら！！！」

「「「「「「「「「「えっ？」」」」」」」」」」

声のするほうを見てみると、見慣れない少年がそこに立っていた。

「なんで気付かないふりをするんだ！？新手のいじめか！？」

「……誰？」

俊は首を傾げた。

「俺だよ！！木原だよ！！」

「……いやいや顔も髪の色も声も全然違うじゃん。」

「くそっ、なんで信じてもらえないんだ！？」

「なら、俺達と木原しか知らないことを言ってみろ。」

時雨は提案する。

「わかった。」

「それじゃ俺からだ。俺が木原と初めて会ったときにおごった金額は？」

「たしか４７３６円。」

「当たりだ。」

「そんじゃ俺な。俺は最初のテストのとき、残り時間何分まで寝てた？」

「5分。」

「当たり！」

「私は特にありませんね……。」

「私も……」

「僕もあまり……」

「私最近知り合ったばかりなので。」

「俺は知らん。」

「後の5人酷ぇ！！？」

「ということは……お前木原なのか！？」

「今頃かよ！？」

「ていうかどうしたんだ？その髪と声と顔？」

「起きた時に慌てて染髪とメイクと変声機を付けるのを忘れたんだよ。」

「なんでそんなことしてたんだ？」

「俺、将来はメイクの仕事やろうと思ってるんだよ。」

「メイクに変声機は使わないと思いますけど……」

「！！！」

ショックを受ける木原。

「いや、そこでショックを受けるのはおかしいと思いますよ？」

「確かにな。」

「まあ、これからはこのままでいいんじゃないか？」

「そうか？」

「そうですよ。」

「……よし、これからはメイクしないことにするぜ！！」

一大決心をした木原。

「大したこと言ってないのに……」

その日は皆で買い物して、普通に終わったという。（ちなみに、会計はすべて時雨が持ったという。）

～ネオ童美野シティ周辺～

ここではある二人の男が遭遇していた。

「おや？君は確か……元混沌邪宗の十黒の葛井君じゃないか？」

「そういうあなたはどちら様で御座いましょう？」

「俺は琴塚木積、あるカジノでオーナーをやってる。」

「そうですか。」

二人は向かい合い、そのまま話を続けた。

残り２２日

意外な事実（後書き）

８神父最強の男のデッキは、完璧にチートというかひどいような感じになります。

裏ランキング（前書き）

今回は番外編に近い内容だと思います。

裏ランキング

今日は何故か、俊の部屋に集まってる。

「で、何の用だ？」

時雨が聞いた。

「そうそう、面白いサイトを見つけたんだ！」

「それ、どっかの悪徳サイトじゃないだろうな？」

木原は不審そうに見た。

「違うから、ちゃんとしたサイト。」

そう言って俊はあるサイトを開いた。

「……デュエリストランキング？」

「プロデュエリストの名前が載ってるな。」

「そうだ！」

「それで、これのどこが面白いんだ？」

「これからこれから！」

俊はランキングの１番上の横にある『裏』と書かれた所を押した。

「裏デュエリストランキング？」

「そう、こっちはプロデュエリスト以外の人物の名前が書いてあるんだ！しかも、俺達の名前も書いてあるんだぜ！」

「は！？」

「たとえば木原、お前は……」

俊は木原の名前を書き込み、検索した。

２８０７９８位　木原　尚

「本当に出た！」

「それにしても、２８０７９８位……」

「私の場合は何位ですか？」

「えっと、吉野由紀だと……」

２０００３１位　吉野　由紀

「２０００３１位……いいのかどうか分かりません……。」

「ちなみに最下位は３３５７３９４２０１だぞ？」

「ならいいです。」

「それじゃあ私は…。」

「東雲玲、だと……。」

２３００１３位　東雲　玲

「……二人の間だな。」

「そうだね。」

「それじゃ今度私お願いします！！」

「神楽ちゃんの場合……」

１４０３４５位　椎名　神楽

「よし！」

神楽はガッツポーズで喜んだ。

「それじゃ次は牙城行ってみるか？」

「あ、はい、お願いします。」

３３２４位　牙城　優

「……なんかすみません。」

「ここに出て一気にずば抜けたな。」

「次は俺だ。」

「紫藤はっと……」

１１０１位　紫藤　時雨

「１０００位台が出ましたね。」

「しー君凄い！！」

時雨がほんの少し頬をあかめらせた。

「それで俊、お前は？」

「ん？俺は……」

１０９３位　川田　俊

「紫藤さんより高い……。」

「それじゃ俊、調べてほしい名前がある。」

「了解！誰を調べるんだ？」

「海条遊騎と真川紅刃と波星月沙の３人だ。」

「それって俺達のデュエルアカデミアの有名人たちじゃないですか？」

「それじゃあまず海条遊騎から……」

９３５位　海条　遊騎

「ちなみにこれ、誰かどこに所属してるのかってのも分かるぜ！」

そう言って俊は、海条遊騎の横の詳細と書かれた所を押した。

海条　遊騎　デュエルアカデミア・ネオ童美野校１年　海軍関係者

ダンッ！！

俊はすぐに『戻る』を押した。

「……海軍？」

「……今のは、見なかったことにしよう。」

俊は落ち着いてそう言った。

「あ、ああ。」

「それじゃ次、真川紅刃で調べてみようか！」

７９８位　真川　紅刃

俊は詳細の部分を押した。

真川　紅刃　デュエルアカデミア・ネオ童美野校１年　使用デッキ

パーミッション

「あまり書かれてないな……」

「そんな事はいいじゃないですか。」

「調べる度に上がってないか?」

「それじゃ次、波星月沙だと……」

８４１位　波星　月沙

俊は詳細の部分を押した。

波星　月沙　デュエルアカデミア・ネオ童美野校１年　使用デッキ
氷結界

ＮＧワード　白髪・お婆さん・ババア等

※注意　上記のＮＧワードは決して本人に向けて言わないでください。本サイトは一切生命の保証は致しません。

「ＮＧワードまで記載されてるのか?」

「ああ、このＮＧワードを本人の前で言って死にかけた人間がいるらしい。」

俊が真剣な表情で言う。

「……助かった。」

時雨は顔を青ざめながら言った。

「？どうしたのしー君？」

「いや、何でもない。」

「ところで１位って誰なんですか？」

「世界チャンピオンじゃないのか？」

「世界チャンピオンは４５位だぞ？」

「マジで？」

「１位は俺達みんな知ってる人だぞ？」

「それってまさか……」

俊はランキングの１番上を出した。

１位タイ　暮空　神羅

「神羅さんか…。」

時雨はあることに気付く。

「ちょっと待て、１位タイ？」

「ああそうなんだ。そしてもう一人が……」

１位タイ　シルヴァス＝フェイル

「誰だこいつ？」

「分からない。ただ……」

俊は神羅の詳細を押した。

暮空　神羅　元プロデュエリスト　１度は戦ってみたい世界最強
使用デッキ　１キルデッキ

「神羅さんは『１度は戦ってみたい世界最強』って書かれてるのに対して……」

俊は今度はシルヴァスの詳細を押した。

シルヴァス＝フェイル　所属不明　戦ってはいけない世界最強　使用デッキ　不明

「『戦ってはいけない』？」

「名前とあだ名以外全く分からない謎の男だ。」

「それで世界最強なのか……」

～ネオ童美野シティに続く道～

「まさか、こんな所で雑魚……もとい異端者の1人を見つけられるとはな。」

白いマントを羽織っていた男はそう言った。

「ちっ、ファルサか！返り討ちにしてやるよ！」

ゴツイ雰囲気の男はそう言ってデュエルディスクを構えた。

「おい雑魚、俺の名前を知ってるか？」

「あ？知るかっつーの。」

「そうか。」

白いマントを羽織った男は不敵な笑みを浮かべた。

「俺の名は、シルヴァス＝フェイル。地獄まで持って行きやがれ、雑魚。」

その夜、時雨は俊達と見ていたサイトを一人で見ていた。

「……あいつらは一体どれくらい強いんだ？」

時雨は、黒涼宗司と麻倉征洋と浮遊島白刃の名前を調べた。

４８２位　黒涼　宗司

３３２位　麻倉　征洋

１１位　浮遊島　白刃

「どいつも俺達より強いのか……。」

「何見てるんだ？」

後ろから少女が話しかけてきた。

「……自分がどのぐらい強いのか調べるサイトだ。」

「そうか。」

少女は画面を見て、少し憂鬱そうな顔をした。

「どうした？」

「いや、皆名前あっていいなって思ったんだ。」

「……」

「俺には名前がないからそんな風に調べることはできない。自分のことも知ることができないんだぞ？それがなんか虚しくてな……。」

「そんなの、お前の問題が解決すれば済む話だろ。」

時雨は少女に背を向けて、一言言った。

「ははっ、そうだな。」

少女は軽く笑った。

「それじゃ、晩御飯の準備でもするか。」

～ネオ童美野シティに続く道～

「たく、余計な荷物が増えちまった。」

シルヴァスは先程の男を抱えてネオ童美野シティに向かっていた。

「そうだ、そういやあいつらあそこに捕まってたんだよな。丁度いい。ついでにあいつらも解放してやるか。」

シルヴァス来襲（前書き）

今回、遂にシルヴァスが攻めてきます。

そして、俊達が……

シルヴァス来襲

～ネオ童美野シティ周辺～

シルヴァスはゴツイ男を肩に背負っていた。

「やっと着いたか。まずは、あいつら解放してこいつを運ばせるか……。」

その頃、時雨達は街をほっつき歩いていた。

「今日はあの子見てなくてもいいのか？」

木原が問いかける。

「神楽が一緒にいるから大丈夫だろ。」

「そういうことなのか？」

「ああ。」

その頃の神楽、

「ねえ！あれとかどう？」

「いいんじゃないかーーー。」（棒読み）

神楽はテンションが上がっていたものの、少女の方はいつもより低かった。

「ねえなんで棒読みなの？」

「だって俺には合わないだろ？」

「女の子なんだから俺って言わない！！」

「……なんか調子狂う。」

その頃の俊達、

「お疲れ様です。」

由紀が差し入れにジュースを買ってきた。

「どうも。」

俊はそれを受けたる。俊達は今日も入り口を監視している。

「最近全く来ないですね。」

「そうだな、なんか嫌な予感までしてきた。」

「平和っていうのもいいですよ。」

その時、

ゾオッ！！

「「「！！」」」

あまりにも強大な威圧感を三人が襲った。

「なんだこの威圧感！？」

「とてつもない気配がします！」

「とても怖いです！」

三人は気配がした方を見ると、

「ん？あー、見つかったか。まあいい雑魚共、ファルサの面汚し共はどこにいる？」

そこには男を抱えたシルヴァスがいた。

「いやな予感が的中したよ？」

「奇遇ですね、私もです。」

「わ、わたしもです……」

三人とも冷や汗が止まらなかった。

「さっさとしろ雑魚共。俺は気が短いんだ。」

「だったら俺達にデュエルで勝ってみろよ？」

「まさか3対1でやるんですか？」

「流石にずるいと思いますよ？」

「相手が相手だからな。」

「俺は別にいいぜ？なんならハンデも付けてやるよ。」

「ハンデだと？」

「最初のライフ、俺は１００でお前らは３００００、これぐらいのハンデがないと話になんねえよ。」

「そっちがそれでいいなら乗ってやる！」

「ええ、私達をなめたことを、後悔させてあげます！！」

「行きましょう。」

「決まりだな！一応俺の名前を教えてやる。俺はシルヴァス、シルヴァス＝フェイルだ！よく覚えておけ雑魚共！！」

「シルヴァス……」

「裏ランキング最強の男……」

「神羅さんと同レベルの人！？」

「なんだ知っていたのか。ならいいか、さっさとやるぞ！！」

「「「「デュエル！！」」」」

シルヴァス　ＬＰ１００　ＶＳ　俊・由紀・玲　ＬＰ３００００

その頃の時雨達、

「あれ？あそこにいるの琴塚さんじゃないか？」

木原が指さした先に確かに琴塚はいた。

「確かにあれ琴塚さんだよな？」

「……ってもう一人いるな？」

「あれは……葛井？」

時雨達は二人の近くに寄ってみた。

「琴塚さーん。」

「おっ、時雨君！久しぶり！……後……そっちは誰？」

「木原です！！」

「いやいや！！木原君はもっと金髪でと○るシリーズの木原みたいな顔してたよ！？」

「あれはメイクです！！」

「お久しぶりです、紫藤さん。」

葛井は紫藤に向かって丁寧にお辞儀をした。

「ああ、ところでなんで二人がここに？」

「ああ。俺は神羅さんにお土産を持ってきたんだ♪」

「神羅さんはお酒を飲んで寝たきりです。」

「そうだったんだ。それで葛井君は……」

「こちらで新たにオープンされる執事喫茶の面接に来たのです。」

「執事喫茶って……（まあ、似合ってるけど）」

その時、

～～～～～♪

「俊からか？」

時雨は電話に出た。

「どうした俊？」

「紫……藤……」

「俊？」

「……に……げろ……」

「俊！？……どうした俊！！」

俊からの返事は返ってこなかった。そのかわりに、

「紫藤さん……ですか？」

「吉野か！？何があった！？」

「さっき……ファルサの男が来たんです。それで……私達３人で挑んだんですけど……全く歯が立たなくて……。」

「それで、どうなったんだ！？」

「その男が…他のメンバーを開放しに行くって言って……その後に……あの子を……」

「そうか……」

「早く…逃げて下さい……」

「分かった……すぐに向かう！」

「お願いします……」

そこで連絡は途切れた。

「琴塚さん、葛井、木原、急ごう！神楽達が危ない！」

「マジで！？」

「そういうことなら行こうか、葛井君。」

「ええ、まだ面接まで3時間ありますし。」

その頃……

「いつまでワタシがここにいなければならないんだ？」

「うるさいハージュ、そろそろ黙っとけ。」

「なんだと！？大体貴様は！！」

「だからうっせーんだよ！！」

ハージュと多湖は牢屋の中で喧嘩していた。そこに、

「ぐちぐちうるせーんだよ雑魚共。殺すぞ？」

「「！！！！シルヴァス様！！！！」」

シルヴァスが来た途端、二人は喧嘩をやめた。

「おらよ。」

シルヴァスは一蹴りで牢屋を破壊した。

「「あ、ありがとうございます！！」」

「いいから、この雑魚をさっさと運んで行け。」

シルヴァスは牢屋から出た二人にゴツイ男を放り投げた。

「「お、重！！」」

「そんじゃさっさと戻れよ？」

シルヴァスは振り返り歩き出す。

「シ、シルヴァス様は……？」

「あ？俺か？決まってんだろ？」

シルヴァスは振り向き不敵な笑みを浮かべた。

「雑魚、もとい異端者を片付けに行くんだよ。」

驚異のシルヴァス（前書き）

前回の続きです。

シルヴァスってけっこう危険人物です……。

驚異のシルヴァス

時雨達は神楽と少女の所に向かっていた。琴塚と葛井は俊達の方へ向かった。

「二人とも、無事でいてくれ……！」

……一方その頃、

「ねえ！あれとかどう？」

「……俺が着ても似合わないと思うけど。」

「似合うって！それと、俺っていうの禁止！」

二人でショッピングを満喫していた。

その頃のシルヴァス……

「とりあえず、ここから探していくか……。」

シルヴァスはデュエルアカデミアの中に入っていった。

「ちょっとそこのアナタ!!ここは関係者以外立ち入りデス!!さっさと出て行きなサイ!!」

ハイトマン教頭が出てきた。

「あ?うっせーよ雑魚。俺の邪魔するな。」

「ザ、雑魚ですトー!?もう許しまセン!!アナタ、私とデュエルしなサイ!!アナタが一体どんな人物を怒らせたカ、思い知らせてやるのでアリマス!!」

ハイトマンがシルヴァスにデュエルを挑んだ時、シルヴァスは笑みを浮かべた。

「へえ?俺とやる気か?自分から挑んでくる奴なんてあんまいねえから楽しみだ。おい。」

「なんでアリマスか?」

「ハンデをやる。俺のライフは１００で、お前のライフは６０００だ。」

「ヌヌヌ、何処まで人を馬鹿にすれば気が済むのデスカ!!イイデショウ、受けて立ちマス!!」

「「デュエル！！」」

その頃、時雨達は……、

「おーい、二人ともーー！！」

「あっ、しー君！！」

神楽達と合流した。

「そんなに急いでどうしたんだ？」

「俊達がやられたんだ。」

「俊さん達が！？」

神楽は俊達がやられたことに驚いた。

「ああ……」

「……」

一方、少女はただ一人黙っていた。

「だから今すぐ逃げたほうがいい。」

そして、街のモニターからニュースが流れ始めた。

『緊急ニュースをお伝えします。先ほどデュエルアカデミアネオ童美野校が、何者かに襲撃された模様です。今回の襲撃事件での被害者は教師と生徒を合わせて１００人ほどだと思われます。なお、犯人は監視カメラなどを破壊し、姿が特定できず……」

「まさか俊達をやった奴がやったのか！？」

「アカデミアは関係ないだろ？なんでだ！？」

そこで少女は口を開いた。

「……ごめん。」

「……どうしたいきなり？」

「俺がここにいるから、お前たちにも、関係ない奴にも迷惑かけた。俺はここにいちゃいけないんだ。」

「おい……」

「俺はこの街から出ていくよ。そうすればお前たちにも迷惑はかからない。俺だけの問題になるんだ。」

「本気で言ってるのか？」

少女は後ろに振り向き、歩き出した。

「おい！！」

「来るな！！」

少女は後ろを向いたまま叫んだ。

「これは元々俺だけの問題だ！！最初から、お前達には関係なかったんだ……！！」

「……」

時雨達は黙り込んだ。

「今までありがとな……、お前達のおかげで、この世界もちょっとマシだと思えるようになった。楽しかった、嬉しかった、面白かった、幸せだった、こんなに……こんなに世界がいいものだとは思ってもみなかった…！全部、お前達のお陰だ。」

「……」

「でももう十分だ……、沢山の物を、お前達からもらった。それだけで、もう十分なんだ。

……本当に……ありがとう。」

少女は最後に一度だけ、時雨達の方を振り返る。

その目には、涙が溢れていた。

「……じゃあな。」

少女はすぐに振り返り走り去っていった。

時雨達はその場で立ち止まっていた。

「……しー君、行こう、あの子の所へ。」

「……ああ。」

「俺も、行くよ。」

そして3人は少女を追いかける。

少女は1人、海を眺めていた。

「……別れがこんなに寂しいのは初めてだな。」

そして少女がネオ童美野シティを出ようとした時、

背後に凄まじい威圧感を感じた。

少女はその場で立ち竦んでしまった。

「見つけたぞ、雑魚、もとい異端者。」

絶大なる力　聖天五重結界（前書き）

シルヴァスのデッキ、正直言って自分は結構嫌です。

絶大なる力　聖天五重結界

……俺は、生まれた時から1人だった。

ただ人より容姿が変わっていただけだった。

それだけで、俺は親から捨てられた。

それだけで、故郷を追い出された。

それだけで、名前すら与えられなかった。

たったそれだけのことだったんだ……

「見つけるのに苦労したぜ？さ、おとなしく付いてきてもらうぜ雑魚。」

ゆっくりと近づいてくるシルヴァス。

「その前に、１つ聞きたい。」

少女が質問すると、シルヴァスは足を止める。

「あ？」

「どうして関係ない人を傷つけたんだ？」

「決まってるだろ？お前を探して、連れていくためだ。」

シルヴァスは頭を掻きながら答える。

「たったそれだけでやったのか！？」

「俺の方針は邪魔する奴は異端者であろうとなかろうと叩き伏せる。今回はその人数が多かっただけの話だ。」

「ふざけるな！！」

「ふざけてるのはどっちだ？」

少女はシルヴァスが言ったことに怒るが、シルヴァスに逆に問われて言葉が詰まる。

「大体、お前がここに来なければ、関係ない奴らは巻き込まれずに済んだ。違うか？」

「う、うるさい！黙れ！！」

少女はデュエルディスクを構える。

「自分からデュエルを挑んでくる奴か、さっきもいたな。全く、ここには珍しい奴らが多い。」

「いいから構えろ！！返り討ちにしてやる！！」

「あー、分かったよ。じゃ、ハンデをくれてやる。」

「ハンデだと？」

「そうだよ、初期ライフ、俺は１００でお前は２０００００だ。」

「そんなこと言って、後で吠え面かくなよ！！」

「決まりだな。」

その頃……、

「所で、なんでシルヴァス＝フェイルのデッキが不明と表記されてるのですか？」

浮遊島は裏ランキング管理人の部屋にいた。

「イヤア、キット見タラ絶対ニヤリタクナイト思ウカラ、パスワードヲ入レルト詳細ガ分カルヨウニシタンダヨ。」

管理人はシルヴァスのデッキの所を押して、パスワードを入力した。

シルヴァス＝フェイル　使用デッキ　完全ロック・無限攻撃

時雨達は、少女を追っていた。

「木原急げ！」

「木原さん早く！」

時雨と神楽に置いて行かれている木原。

「ちょっと待ってくれよ！」

「……いたぞ！」

時雨は橋の途中にいる少女の姿を見た。

「もう一人、誰かいるよ？」

神楽が指さした方に、一人の男が立っていた。

「誰だあいつ？」

そして少女と男はデュエルディスクを構えた。

「……また雑魚が増えやがったか。」

「お前ら、一体なんで来た！？」

少女は追ってきた時雨達に対してそう言った。

「なんでって、お前を連れ戻しに来たに決まってるだろ！！」

「連れ戻しにって……俺はお前達に迷惑かけたんだぞ！？これ以上お前達に迷惑をかけるわけにはいかない！！」

「誰が迷惑だなんて言った！？俺達は仲間だろ！！」

「！！」

時雨の叫びに少女は驚く。

「そうだよ！私達は迷惑だなんて思ったことなんてないよ？」

「それに、迷惑なんて幾らでもかけてもらって結構だ。そっちの方が面白そうだしな。」

「……皆……。」

少女は3人の言葉を聞き、決意を固める。

「……俺、やっぱり此処が好きだ。」

そしてシルヴァスに向け、こう言い放つ。

「だから、俺はおまえを倒す！！」

それに対しシルヴァスの返事は、

「いいから早くやるぞこの雑魚。いつまで待たせんだよ。」

「今からやってやる。覚悟しろ！！」

「「デュエル！！」」

シルヴァス　ＬＰ１００　ＶＳ　少女　ＬＰ２０００００

この時、少女を含め時雨達は僅かな勝機にかけた。

勝機など微塵もなかったというのに。

「俺から行かせてもらうぜ?俺のターン。俺はフィールド魔法、聖天五重結界～拒～を発動!」

少女の周りに謎の魔法陣みたいなものが現れた。

「なんだこのフィールド魔法!?」

「そして手札の聖天ーアブセウルを捨て、魔法カード、聖天の光札を発動!コストとして墓地に送ったアブセウルのレベルと同じ枚数デッキからドローする!!アブセウルのレベルは１０、つまりデッキから１０枚をドローする!」

「１０枚ドローだと!?」

「なんでしー君驚くの?しー君よく１２枚とかドローしてたでしょ?」

「そんなことあったのか?」

「そして墓地に送られたアブセウルの効果発動!手札から墓地の送られた時、墓地から特殊召喚する!
来い、聖天ーアブセウル!!」

聖天ーアブセウル　ＡＴＫ３０００

「さらに俺はフィールド魔法、聖天五重結界～絶～を発動!このカードを発動する時、聖天五重結界と名の付いたフィールド魔法が発動している場合、重ねて発動する!」

先ほどの魔法陣の外に、新たな魔法陣が現れる。

「フィールド魔法を重ねた!?」

「そして俺はフィールド魔法、聖天五重結界～断～を発動!さらに重ねる!!」

3つ目の魔法陣が2つの魔法陣の外側に現れる。

「3枚目……」

「俺は魔法カード、テラ・フォーミングを2枚発動!デッキから、聖天五重結界～封～、聖天五重結界～除～を手札に加え、そのまま発動!」

5つの魔法陣が少女を囲う。

「5個のフィールド魔法が1度に発動するなんて……」

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド。エンドフェイズ時、聖天の光札の効果で手札は全て墓地へ送られる。」

「俺のターン!俺は異端者　?07を召喚!!」

異端者　?07　ATK1900

「異端者　?07の効果!デッキから『異端者』と名の付いたモンスターを1体特殊召喚する!」

少女はモンスターの効果を発動する。しかし、効果が発動する様子

はない。

「……どうなってる？俺は確かに効果を発動したぞ！？」

「まだ気付かねえのか？雑魚。」

その場にいる者全ての視線がシルヴァスに移る。

「どういうことだ？」

「聖天五重結界～拒～が俺のフィールドに存在する限り、お前の召喚・反転召喚したモンスターの効果は無効になる。」

「なんだと！？」

「ついでに教えておいてやる。聖天五重結界～絶～が存在する限り、お前は手札・墓地で発動するモンスター効果を使用できず、～断～が存在する限り、お前は手札・墓地・エクストラデッキからモンスターを特殊召喚することができず、～封～が存在する限り、お前は魔法を発動できず、～除～が存在する限り、お前は罠を発動できない。言ってることが分かるよな？」

「……今の召喚だけで、今俺に出来ることが全部無くなったっていうことか！」

「分かったらさっさとターンエンドしろ、雑魚。」

「……ターンエンド。」

「俺のターン。俺は聖天ーアブセウルで異端者　？０７を攻撃！」

「ううううっ！！」

少女　ＬＰ２０００００→１９８９００

「なんだ？今、実際にダメージが……」

「言い忘れてたが、俺の攻撃は全部実際のダメージになるから、耐える準備、しとけよ？」

「実際のダメージになるって…お前はサイコデュエリストなのか？」

時雨が質問すると、シルヴァスは即座に答えた。

「まあな、７年前にディヴァインとかいう奴が勧誘に来たこともあったな……ま、返り討ちにして病院送りにしてやったがな。」

「そんな事はどうでもいい。次のターンから守備表示にしとけばいいだけの話だろ？」

少女がそういうと、

「お前に次のターンは来ねえよ。」

「なんだと？」

「アブセウルの効果！カード名を１つ宣言し、デッキのカードをめくる。そのカードが宣言したカードなら墓地に送り、アブセウルは続けて攻撃することができる！」

「なっ、でもそれが続くわけ……」

「は？そんな普通の奴と同じように見るんじゃねえよ雑魚。俺にとっちゃ、これぐらい楽なんだよ。」

その言葉通り、少女はこの効果で地獄を見ることになる。

絶望を告げる光

あれから、シルヴァスの攻撃は果てしなく続いていた。

「はぁ……はぁ……」

シルヴァス　ＬＰ１００

少女　ＬＰ８１９００

普通なら既に終わっているはずだった。

しかしシルヴァスの出したハンデのせいで、少女は未だに攻撃を受け続けている。

少女は既に、ボロボロになっていた。

「どうした雑魚？まさか、この程度で音をあげるってことは、ねえよな？」

この状況でなお挑発を続けるシルヴァス。

「３９回も連続でデッキのカードを当て続けてる……。なんて奴だ……。」

時雨達は戦慄していた。

普通、こんな事はあり得ない。

デッキトップのカードの種類を当てることはよくあることかもしれない。

しかしシルヴァスがやっていることはカードの「種類」ではなくカードの「名前」なのだ。

種類は3分の1の確率だが、名前の場合、確率は極端に低くなる。

それをシルヴァスは平然と遣って退けている。

それを39回も。

「次行くぜ？40枚目、次は『聖天譜』だな。……どうやら当たりだ。アブゼウルで攻撃だ。」

「ぐはっ！！！」

少女　LP81900→78900

アブゼウルの攻撃が勢いよく少女に命中する。

少女は立っているだけでもやっとのはずだった。

しかし少女の目はまだ諦めてはいなかった。

「シルヴァスって言ったな……。」

「ああ、なんだ？」

「どうやら、ハンデを付け過ぎたみたいだな。」

アブゼウルの効果は確かに驚異的だ。

だが少女の残りライフは７８９００、アブゼウルの攻撃力が３０００の為、あと２７回の攻撃が必要となる。

しかし、シルヴァスのデッキは残り１枚。どう考えても足りない。

「次に効果を発動した時、お前のデッキは０になる！！俺が何もしなくても、お前は負ける！！」

少女はこれを待っていた。

デッキからカードをできない場合、そのプレイヤーは負けとなる。

基本中の基本だ。

実際のデュエルで、デッキ切れで決着することは多くはない。

だがアブゼウルの効果は自らデッキの枚数を減らす。

よって、このような事態を招いた。

このことで勝利を確信する少女だったが、この確信はまやかしだったことをすぐに知る。

「最後の１枚、『天網恢恢』……当たり、アブゼウルで攻撃だ。」

シルヴァスはそれを気にすることなく攻撃を続ける。

「がっ！！！！」

少女　ＬＰ７８９００→７５９００

「これでお前のデッキは０……、俺の勝ち」

「お前、まさか俺がこうなることを予測してなかったとでも思ったか？やっぱり、雑魚は雑魚だな！」

少女が勝利を宣言しようとした時、シルヴァスは少女を馬鹿にしながら笑った。

「罠発動、局地的大ハリケーン！！」

「なっ！？」

「俺の手札と墓地のカードを全てデッキに戻し、シャッフルする！！」

シルヴァスの手札は１枚、そして墓地に存在するカードは５２枚。

つまりシルヴァスのデッキは、０から５３になる。

アブゼウルの攻撃は続行される。

少女の希望は、一瞬にして絶望に変わる。

それからの攻撃は陰惨なものだった。

シルヴァスがカードを当て、その度にアブゼウルの攻撃が少女を襲う。

少女の意識は朦朧としてようとも、攻撃は収まらない。

そして……、

シルヴァス　ＬＰ１００

少女　ＬＰ９００

幾度に及ぶ攻撃で、少女の頭からは血が流れ、右腕は既に上がらなくなっていた。

「６９回目、『聖天の城』……当たりだ。」

シルヴァスが最後のカードを確認する。

「雑魚にしては頑張ったな。これをくらって、

潰れろ。」

アブセウルは無情にも少女を地面に叩きつける。

決裂

シルヴァスの攻撃で、少女の周りには砂埃がたっていた。

時間が経ち、砂埃が消えると、無残な姿で地面に倒れ伏した少女の姿があった。

シルヴァスは少女に近づいていく。

「やっぱりお前も其処等辺の雑魚と変わんねえな？自分から突っかかってきたから少しはできると思ったが、見当違いか。」

そう言ってシルヴァスは少女の腹を蹴りあげる。

「がはっ！？」

少女の口から声が漏れる。

「大体なぁ、態々俺の手まで煩わせんじゃねえよ！！雑魚のくせに！！」

続けざまに少女を蹴り続けるシルヴァス。

「……いい加減にしろ！！」

時雨がシルヴァスに向かって走り出し、蹴り込む。

しかし、シルヴァスは時雨の蹴りを片手で受け止めた。

「なっ……！？」

「まあまあだな、不意打ちとしては威力は十分だが相手が悪い。海にでも浸かって出直してきやがれ雑魚。」

シルヴァスは掴んだ時雨の足を振りまわし、海に向かって放り投げた。

「うわっ！？」

「しー君！！」

大きな音を立てながら、時雨は海に落ちていった。

「ぐっ……」

少女は這いつくばって移動しようとしていた。

シルヴァスは少女のデュエルディスクに差し込んであったデッキを取り出し、地面に置いた。

「お前、何しやがる！？」

「テメエにはもう、これは必要ねえだろ？だから、処分しといてやる。」

いつの間にかシルヴァスの右手には、マッチの箱が握られていた。

「おい、一体何を……」

シルヴァスはマッチの1本に火を付け、少女のデッキに火を付けた。

「お、俺のデッキが……！！」

「うっせーよ、雑魚が。」

シルヴァスは少女を蹴り、壁にぶつけた。

「がはっ！？」

少女はその後気を失った。

「ようやく静かになったか。それじゃ、この雑魚を連れて戻るか。」

「待ってください。」

シルヴァスを呼びとめたのは、神楽だった。

「なんだ？」

「何でそこまでやるんですか？その子は何も悪いことはやってないじゃないですか。」

神楽の質問に対し、シルヴァスは空を見上げ、一度ため息をついた後に答えた。

「テメエには関係ねえよ。」

次の瞬間、そこにはなかったはずのDホイールが突如として現れ、シルヴァスは少女を抱えたままそれに乗り、去っていった。

数時間後……

時雨は海から上がってきていた。

「……それで、あいつはそのまま去っていったってことか。」

「……うん。」

神楽は気を落としたまま答える。

「そう項垂れるな。あいつは簡単に止められる奴じゃない。お前が落ち込む必要はない。」

「……うん！」

「おい、俊達は無事だってさ。暫く退院は無理らしいけど。」

木原は電話で聞いた話を時雨達に伝えた。

「そうか……それじゃ、あいつを追うか。」

「追うって、今からか！？」

「ああ。」

「無茶だろ！？あんな奴にどうやって戦えっていうんだ！？それにこっちは戦力が不足している。勝ち目なんかないぞ！？」

「なら俺だけでも行く。仲間を傷つけられて、黙っていられるか。」

時雨は自分のDホイールを取りに戻る。

「しー君、私も行く！！」

神楽は時雨の後を追いかける。

「……この流れでのらないってのは、空気読めねえよな…。」

木原も付いていくことを決める。

「残念ですが、そんな危険なことをされては困ります。」

戻ろうとした矢先、目の前からある男が歩いてきた。

その男は、つい最近出会ったばかりの人物だった。

「浮遊島……。」

「名前を覚えていただいて光栄です。」

「そこを退け。俺達は、あいつを助けに行く。」

「行かせません。ここであなたを失うことは、我々としても芳しくはありません。」

浮遊島は断固として動く気配を見せない。

「なんで邪魔をする？」

「先ほども申したでしょう、あなたを失うことは我々にとって一大事なのです。それをみすみす力も未熟なうちに死地へと送り出すのは、馬鹿のすることです。」

「なら、力があることを証明すればいいんだな？」

「……ほう？」

「構えろ浮遊島白刃……、ここでお前を倒して、俺達はあいつを

助けに行く！！」

時雨はデュエルディスクを構えた。

「……なるほど。そういうことですか。いいでしょう。ただし……」

「なんだ？」

浮遊島は表情を変えず、こういった。

「今のあなたが私に勝てる可能性は０，１％もないので、私のフィールドのカードを１枚でも破壊することが出来たら、あなたに力を貸しましょう。」

「フィールドのカードを、１枚だと？」

「そうです。今のあなたには、丁度いいハンデかと。」

「……いいぜ。ならそれで受けてやる。」

「では、始めるとしましょうか。」

シルヴァスもデュエルディスクを構えた。

「ああ。」

「「デュエル！！」」

決裂（後書き）

次回、時雨対浮遊島の戦いです。

前に出てきたあの男も出てきます。

「浮遊島白刃」という男（前書き）

今回は、時雨対浮遊島のデュエルです。

久々（？）に麻倉さんも出てきます。

「浮遊島白刃」という男

「先攻はあなたに譲りましょう。」

浮遊島は掌を時雨に向ける。

「そうさせてもらう、俺のターン！」

時雨の先攻でデュエルが始まる。

「俺はバニシング・コアを召喚！」

バニシング・コア　ＡＴＫ０

「さらに手札のバニシング・クロックを特殊召喚！」

バニシング・クロック　ＡＴＫ０

「レベル２のバニシング・コアに、レベル４のバニシング・クロックをチューニング！！

滅びの龍よ、立ちはだかる敵を葬り去れ！シンクロ召喚！滅ぼせ、シンクロチューナー、バニシング・ドラゴン！！」

バニシング・ドラゴン　ＡＴＫ２５００

「やはりそのデッキはシンクロを行うのが早いですね。それ位やってもらわなければ、デッキは元の場所に戻してもらうほかありませんからね。」

「言ってろ、俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！！」

「私のターン。私はプサイ・ミストを召喚します。」

プサイ・ミスト　ＡＴＫ０

「私はカードを1枚伏せて、ターンを終了します。」

「あの人、攻撃力０のモンスターを召喚してターンエンドしたぞ？」

「それがあの人のやり方なんだよ。」

木原と神楽の後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「あなたは麻倉さん！」

「さんはやめろ、歳近いんだし。」

「あっ、そうなんだ。」

「それよりよく見てろ。あの人のすごさはこれから分かる。」

一同の目線が二人のデュエルに戻る。

「俺のターン！！俺はステラ・コアを特殊召喚！更にステラ・メタルを召喚！」

ステラ・コア　ＡＴＫ０

ステラ・メタル　ＡＴＫ０

「俺はレベル４のステラ・メタルと、レベル２のステラ・コアをチューニング！！
星の光よ、今全てを輝き照らせ！シンクロ召喚！照らせ、シンクロチューナー、ステラ・ドラゴン！」

ステラ・ドラゴン　ＡＴＫ２０００

「浮遊島さんはほぼ無敵と言っても過言じゃないほど無茶苦茶強い。俺でも攻撃を通すことすらできないんだぜ？」

麻倉は木原と神楽に語り始める。

「プサイだけでも十分脅威なのに、あの人はそれをさらに強化したんだ。その結果……、」

「バニシング・ドラゴンで、プサイ・ミストに攻撃！！」

「あの人のカードが破壊された瞬間を、俺は見たことがない。」

「浮遊島白刃」という男（後書き）

今回、結構短めです。

すみませんが、次回に持ち越します。

雲散霧消の永久迷路（前書き）

更新遅れてすみませんでした……

浮遊島のカードはチートな気がします……

雲散霧消の永久迷路

「破壊された事がないって、どういうことなんだ？」

麻倉が言ったことに疑問を浮かべる。

「そのままの意味だ。見てれば分かる。」

「バニシング・ドラゴンで、プサイ・ミストに攻撃！！」

時雨は攻撃を開始していた。

「プサイ・ミストの効果を発動。このカードをゲームから除外し、相手モンスターの攻撃を無効にします。」

プサイ・ミストはフィールドから消え去り、攻撃は中断された。

「ならステラ・ドラゴンでダイレクトアタック！！」

時雨は再び攻撃を再開する。

「永続罠、雲散霧消の永久迷路を発動。」

浮遊島が罠を発動すると、カードから霧が溢れ出してきた。

「霧！？」

「あの人はこのカードが怖いんだよ……。」

「あ、麻倉さん？」

麻倉の顔が青褪めていた。

「相手のバトルフェイズ中に自分の炎属性・水族モンスターがゲームから除外されていた場合、そのバトルフェイズを終了させ、手札から炎属性・水族モンスターを1体特殊召喚します。私はプサイ・スチームを特殊召喚します。」

プサイ・スチーム　ＡＴＫ０

「また攻撃力０……」

「くっ、俺はカードを1枚セットしてターンエンド……」

「私のターン。スタンバイフェイズ時、プサイ・ミストはフィールドに戻ってきます。私はカードを1枚セットしてターンを終了します。」

プサイ・ミスト　ＡＴＫ０

浮遊島はカードを1枚セットしただけでターンを終えた。

「…なんで、何もしないんだ？」

「あの人の決め手は1発が物凄くでかいんだよ。それが来るまであゆう風に守りを固めるんだよ。あの人の戦略も、プサイの特徴も守りが主体なんだよ。」

「防御に特化したデッキか……」

「さあ、あなたのターンですよ？因みに言い忘れてましたが、このデュエルで発生したダメージは実際に受けるようになっています。まあ、死ぬほどではないですが。」

（そんなことできたのかよ……）

麻倉はそんな事を考えながらジト目で浮遊島を見ていた。

「俺のターン！魔法カード、大嵐を発動！フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！！」

「ほう、協力する為の条件は覚えてたんですか。」

「『カードを1枚でも破壊出来たら協力する』って奴だろ？それ以外の場合、何度でも邪魔するんだろ？それならいっそ味方にした方が手っ取り早いさ。」

時雨は真剣な表情で答えた。

浮遊島は時雨がそのことを理解していたことに笑みを浮かべた。

「さすがにそれくらいわかってもらっていないとがっかりだったんですが、どうやら期待通りのようですね。ですが……そんな初歩的なことで私の守りが崩せるとでも思ったんですか？」

浮遊島は冷静な顔で返した。

「プサイ・スチームの効果を発動します。相手が『カードを破壊する効果』を発動した場合、このカードを除外してその効果を無効に

します。」

プサイ・スチームが消えると、大嵐が収まっていった。

「そっちの対策もできてるのか……、だが、もう守るものは何もない！！速攻魔法、サイクロン！！当然、雲散霧消の永久迷路を破壊する！！」

「それも予測済みです。カウンター罠、霧隠。炎属性・水族モンスターが除外されたターン、『カードを破壊する効果』を無効にし、破壊します。」

突如発生した霧によって、サイクロンは掻き消された。

「…ターンエンド。」

「私のターン。除外されたプサイ・スチームとプサイ・ミストはフィールドに戻ってきます。私はこれでターンエンド。」

「一体いつまで続くんだ？」

「浮遊島さんがあのカードを引くまで続くだろうな……」

「あのカードって？」

神楽が疑問を投げかける。

「ああ、それは……」

「麻倉君？」

「はい！！」

浮遊島に呼ばれた麻倉は背筋をピンと伸ばし姿勢を正した。

「これは後でお仕置きが必要ですかね？」

浮遊島は麻倉を鋭い眼光で睨み付けた。

「すみませんでした！！！だから許して下さい！！！！！！」

麻倉は地面に思い切り頭を打ち付け、土下座した。

「後が楽しみですね……」

麻倉の顔は真っ青になり、汗が物凄い勢いで噴き出していた。

（……一体何があるんだろう……）

木原と神楽は不意にそう思った。

「それに君の言おうとしたカードは既に来ています。すぐに分かるから言う必要はないですよ？」

浮遊島は視線を時雨に戻す。

「俺のターン！」

（どうする？どうすればあれを破壊できる？セットしてあるカードはブレイクスルー。相手が戦闘を行わないと意味がない……。手札

は2枚。その両方がカードを破壊する効果じゃない。1枚はディバイド・チェンジ…。自分の『ディバイド』と名の付いたモンスター1体をリリースして、別の『ディバイド』と名の付いたモンスターをデッキから特殊召喚する罠カード。もう1枚はドラゴンダイビング。こっちはドラゴン族モンスター1体を別のドラゴン族モンスターに装備して、攻撃力をあげる魔法カード。攻撃力をあげてもバトルができないと意味がない…。）

「俺はこれで、ターンエンド……。」

「し－君が何もできないなんて……」

「私のターン。カードを1枚セットして、ターンエンド。」

浮遊島は何事もなくターンを終了する。

（このドローに……全てを懸ける！！）

「俺のターン！！」

（……来た！）

「俺は、ディバイド・コアを召喚！！」

ディバイド・コア　ＡＴＫ６００

「俺はカードを1枚セットして、ターンエンド！！」

（…さっきより調子がいいですね。破壊する方法を見つけたんでしょうか？）

「私のターン。」

「罠発動、ディバイド・チェンジ！！ディバイド・コアをリリースして、デッキからディバイド・バキュームを特殊召喚！！」

ディバイド・バキューム　ＡＴＫ２００

体の真中に、掃除機みたいな物が付いたモンスターが現れた。

「ディバイド・バキュームの効果発動！このカードの攻撃力を半分にすることで、相手はこのモンスターを攻撃しなければならない！！」

「そう言うことですか……。」

「そう言うことか…。」

麻倉と浮遊島は何かを理解した。

「なんだよ？一体どうしたんだ？」

「プサイ・ミストは相手の攻撃を無効にする効果は持っているが、自分の攻撃を無効にすることができない。プサイ・ミストに自滅をさせるっていうことだ。」

「それなら破壊できますね！！」

「バトルだ！！バキューム・サイクロン！！」

プサイ・ミストとプサイ・スチームはディバイド・バキュームに吸い込まれた。

浮遊島白刃　ＬＰ４０００→３８００

「これで、条件はいいな？」

「ええ、私達はあなたに協力しましょう。ですが……」

「？」

「このデュエルは、勝たせていただきます。私は魔法カード、暴走蒸気を発動。手札を全てデッキに戻し、蒸気トークンを5体特殊召喚します。」

蒸気トークン　ＡＴＫ０

地面から蒸気が吹き出てきて、モンスターになった。

「来るぞ！！伏せないと俺達も巻き込まれるぞ！！！」

麻倉に言われるがまま、木原と神楽は伏せた。

「リバースカードオープン！水蒸気爆発（フレアチック・エクスプロージョン）！！！自分のデッキ・墓地・エクストラデッキ・フィールドの炎属性・水族モンスターを全て除外して、トークン以外のモンスター1体につき５００ポイント、トークン1体につき１０００ポイントのダメージを受けてもらいます。私のデッキ・墓地・エクストラデッキの炎属性・水族モンスターの数は合計５０体、トークンの数は5体……合計３００００ポイントのダメージを受けてもらいます。」

「さ、３００００！？」

木原はそのダメージ量に驚いた。

時雨の周りに水蒸気が吹き出してきて、突如火山の噴火の様な巨大な爆発が発生した。

「！！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！！

時雨　ＬＰ４０００→０

この爆発音は、ネオ童美野シティ全体に広がったらしい。

「なんつう威力だよ！？」

「しー君！！」

「まだ伏せてろ！！」

やがて、煙ははれて、倒れている時雨の姿が見えた。

「…しー君！！しっかりして！」

神楽は時雨のもとに走り寄る。そんな中、浮遊島は悠然と立っていた。

「……私もまだ甘いですかね。」

「十分やり過ぎだと思いますよ？」

「麻倉君、準備をしておきなさい。協力することになりましたから。」

「了解。」

「…お仕置きを受ける準備もね？」

「そっちは嫌です！！」

麻倉は全力で逃走した。

「逃げ切れると思ってるんですか？」

浮遊島はあっさり追いつき、あっさり捕まえた。

（まあ、これでよかったのでしょうね……。）

浮遊島はそんな事を考えていた。

だがこの時はまだ誰も知らない。

この戦いで、様々な人の思いが交錯することを。

～？？？？～

その男はのんびりと1人で海で釣りを楽しんでいた。

「おっと、大物か！？」

その男は竿が引っ張られたので、思いっきり釣りあげた。

釣れた物は……デュエルモンスターズの海竜神（リバイアサン）だった。

「よっしゃ大物！！」

その男は釣り上げたと同時に飛び上がり、海竜神（リバイアサン）を殴った。

海竜神（リバイアサン）はそのまま絶命した。

「おっおもっのおっおもっの～～～～♪」

その人物は釣り上げた海竜神（リバイアサン）を引き摺っていった。

雲散霧消の永久迷路（後書き）

これからストーリーに関わってくる元十黒の葛井・黒涼・牙城の過去話をやろうと思ってるんですが、誰のが先の方がいいのかアンケートを行わせてもらいます。

A．葛井の経歴話

B．黒涼の例の話

C．牙城がイヴィルドに拾われた時の話とりあえず多かった物から先にやろうと思います。よろしくお願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4047s/

遊戯王　カオス

2012年1月13日02時50分発行